
野いちご

招夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野いちご

【Nコード】

N5974G

【作者名】

招夏

【あらすじ】

雨の降る夜に出会った二人。世界から零れ落ちそうないずみと、世界から逃げ出した青洲。静かに愛を育みながら生きていくこととする二人。

しかし……

やがて二人は、ある陰謀に巻き込まれることに……

過去に起こったある忌まわしい出来事……

島に伝わる四聖獣の言い伝えとは……

今、二人に闇が忍び寄る

「野いちご」登場人物（前書き）

少々込み入ってきたので、登場人物をまとめてみました。この後も、もう少し登場人物は増えます。

「野いちご」登場人物

（登場人物）

（鈴森家）いずみ中心

いずみ（イズミ）（19歳）妊娠中
心（父）死亡（鈴森心↑斎藤心↑名和心）
秋乃（母）（40歳）死亡？

（吉田家）青洲中心

青洲（35歳）吉田家の家督を放棄
赤秀（弟）（32歳）吉田家を実質上率いている
白舟（30）（弟：医師）
薫（妹）五年前死亡（死亡当時20歳）
龍生父（70歳）
朝香母、死亡

（鈴守家：島の神社の宮司の家系）鳴春中心

鳴春（35歳）（宮司、青洲の幼馴染）
多賀子（妻）
春奈死亡
夏生（長男：病氣療養中）
大河（二男：五年前死亡）

朱音^{アカネ}（母）

青子^{セイコ}（伯母）死亡　いずみの祖母、志木仁の愛人

鈴守深冬（30年前失声）　志木保、石守夏紀の友人、鈴守家親戚

（石守家：いずみ奉公先）冬樹中心

冬樹^{フユキ}（22歳）いずみのお腹の子の父親、行方不明

東星^{トウセイ}（父）死亡

昌代^{マサヨ}（44歳）（母）（旧姓　志木昌代）

石守夏紀（30年前失明）　志木保、鈴守深冬の友人、石守家親戚

（名和家）秋子中心

秋子^{シュウコ}（24歳）（志木家の嫁）（志木秋子↑佐藤秋子↑名和秋子）

名和俊秋（田口俊秋）都内在住、死亡

名和心（↓斎藤心↓鈴森心）＊

（志木家）司中心

司^{ツカサ}（32歳）志木家の跡取り

聖^{サトシ}（75歳）（父）志木家当主

正子死亡

＊秋子^{シュウコ}（義母）聖の嫁

＊昌代^{マサヨ}（44歳）（姉）石守家の嫁

華陽^{カヨウ}（35歳）従妹、石守家で、いずみの家政婦仲間、青洲の元妻

仁叔父^{ジン}、三十年前島にやってきた歴史学者、鈴森青子の愛人、秋

乃の父親、いずみと佐川の祖父

美桜司^{ミオ}の産みの母（32年前19歳で死亡）志木家のメイド

サガワ タカシ

佐川 崇（24歳） 従弟の子、元市役所職員（青洲の職場仲間）、

志木 仁の孫、吉田グループ社員

たちつ

保華陽の兄（30年前死亡）、石守夏紀、鈴守深冬の友人

その他

イチタ

一太（35歳） 島と本土を結ぶ連絡船の船頭、青洲の幼馴染

ナカガワ

中川 吉田家有能秘書

* は既出の人物

第一話 黄泉路（たび）は道連れ（1）

『いずみ、逝こう。ずっと……ずっと、この日を待ってたんだ』

その声は、小さい男の子の声で、頭の中の左片隅から響いてくるように聞こえた。

『いずみ、一緒に逝きましようね。怖くなんてないわ……私たちが一緒なんだから』

その声は、小さい女の子の声で、頭の右片隅から歌うように響いてきた。

「誰？」

いずみは、小さな声のする方を見ようと必死で首を回そうとするが、金縛りに遭っているかのように体は重く動かず、瞼さえ重くて持ち上げられない。

『いずみ、早く僕たちをあちら側に連れて行ってよ。僕たち、みんな、いずみを待っていたんだ……いずみには、その義務があるんだって、お兄ちゃんとお姉ちゃんがそう言うんだ……』

もう一人の男の子の声がしたかと思うと、体中に冷水を浴びたように悪寒が走る。肩に首に足に腕に、無数の白い手が絡みつく。

「ああああ……」

いずみは恐怖と苦痛に顔をゆがめた。

しかし、次の瞬間、突然体がフワリと軽くなり、楽になり、自由が利くようになっていくのに気がついた。辺りを見回す。フワリと浮かんだ体の下に、ベッドに横たえられた自分の姿があった。腕に突き刺さる点滴の針、口と鼻を覆う酸素マスク。その顔は土気色で、閉じた瞼が苦渋に歪んでいる。

「私、死んだ……の？」

呆然と呟く。

『死にかけているんだ、もうすぐ死ぬよ？』

最初に聞いた男の子の声だった。

黒い髪に昏い瞳の小さな男の子。彼の体は白い光に縁どられていて、どこか曖昧な姿をしていた。

『いずみは、大人でしょ？ 私たちを連れて逝く義務があるのよ』
やはり曖昧な姿をした小さな女の子が、口角をあげて、昏い瞳で微笑んだ。その瞳は、まるで木の洞のように暗く、瞳を見つめると言うよりも、闇を覗き込んでいるようだ。

『ねえ、早く逝こうよう……僕、もう待ちくたびれちゃったんだ』
もう一人の男の子が、駄々を捏ねるような口調で話しかける。

その小さな二人の男の子と女の子は、どことなくいずみの小さい頃に似ているような気がした。

「あなたたち誰なの？」

本当ならば、怖くて口もきけない状況なのかもしれないが、彼らが、どことなく自分に似ていることが、いずみに勇気を与えた。

『僕は君の兄だよ、この子は姉、そしてもう一人の兄』

「え？ 私、兄妹なんていないよ？」

いずみの言葉に、三人が表情を硬くしたのが分かった。瞳の暗さも増したようだ。

『なんで……なんで、あんただけ、生まれたの？』

『僕らは生まれることさえできなかったのに……なんでお前だけ……』

……

『ずるいぞー、お前だけ、母さんに面倒みてもらえてさー』

「もしかして……水子？」

いずみの家は貧しくて、いずみ一人でさえ育てるのに金がかかる
と、母親がしょっちゅう零していたのをいずみは知っていた。

『そんな呼び方をするな！ 僕らはそんなものじゃない！』

いずみは体中に痺れるような痛みを感じた。

「いった……ちよつとー、酷いことしないでよー。それが死にかけ
てる妹にすること？」

いずみはふくれっ面で抗議する。

『僕らは生きることまでできなかったんだ、少し口を慎め』

「悪かったわよ、んじゃ、なんて呼べばいいの？ 一番最初に……発生した人は？」

――生まれた人、なんて言ったら、また怒られそうだ。

一番怒っていた男の子が手を上げた。

「二番目は？」

女の子が手を上げる。

「じゃあ、あなたが、お兄ちゃん、あなたがお姉ちゃん、あなたはチイ兄ちゃんね？」

いずみがそう言った時の、彼らの表情を、いずみは一生忘れないと思う。昏い瞳が黒い瞳に変わったのだ。彼らを取り巻いていた暗く冷たく凍えていた空気が、少し緩んだのも感じた。

「お兄ちゃんたちも、お姉ちゃんも……そんなにこの世に生まれたかったの？ この世に生まれたって、いいことなんて、なーんにもないの？」

いずみは不思議に思ったことを、ついポロリと口にする。

「……この世に生れたこと自体がいいことなんじゃないのか？ そうだな、生まれた後のことは……あまり考えたことがなかった」

お兄ちゃんが、虚を突かれた様子で呟いた。

「母さんなんて、いつも私が生まれたことを愚痴ってたよ。産むつもりなかったんだって。気づいたら堕ろせない時期になっちゃってたんだって。ふつー、そんなこと本人に言う？」

「父さんは？」

「いずみが小学生の頃に死んだんだよ。病気がちな人だったんだよ……そう言えば、なんで父さんが死んだ時について行かなかったの？」

「……母さんを待ちたかったんだ」

「ああ、あの人は、長生きしそうだよね。もう待たないの？ 待たなくていいの？」

母親は、いずみが中学を卒業すると、いずみに住み込みの家政婦の仕事を探してきた。義務教育が終わったら、とっととトンスラさ、

などといつも言っではいたが、本当にそうするなんて思っていないかった。今頃、どこかの男の家に転がり込んでいるのか、水商売の世界に身を沈めているのか、連絡もとれないまま、ほぼ三年が経ってしまった。

ベッドに横たわる自分の姿をちら見する。若いころの母親に似てきたかもしれない。少し癖のある柔らかい栗毛、すっきりと通った鼻筋に、ふっくりした唇。小さい頃から、この子は母親に似て、男好きのする顔になるだろうと大人達からよく言われた。小さい頃は、それが褒められているんだと思っていた。

——とんでもない誤解……。

「お兄ちゃん達とお姉ちゃんがいたなんて知らなかったな。死んでみるのもいいもんだね？」

いずみは、にっこり笑って三人を見つめた。

『……』

三人は遠い目をしていずみを見つめ返す。

「んじゃ、あの世へレッツゴーだね？ でもさ、ずっと待ってたってことは、大人が同伴してないとあっちに行けないとか、そーいうルールでもあるの？ いずみ、まだ二十歳になってないんだけど……大丈夫かなあ。あー、もしかしてお金がいるとか？ お財布がバッグの中にあるんだよ。とってきた方がいい？」

いずみが再び振り返って自分の姿を見た時、お腹の辺りが、うっすらと光っているのに気がついた。三人ともそれに気づいたらしい。いずみ、あれはなんなの？

お姉ちゃんが厳しい声で問い詰めた。

「光ってる……よね？」

——なんなんだ？ あれ。

『お腹に子供がいるのか？』

お兄ちゃんは、呆然とした顔で言った。

「ああ、そうだ、赤ちゃんがいるんだった。今、いずみが死んじゃうとあの子も死ぬかな？」

『どうかなあ？』

チイ兄ちゃんがクエスチョンマークをつけた頭を傾げた。

『馬鹿か？ お前らは……』

お兄ちゃんはおぼろけで溜息をつき、お姉ちゃんは首を振りながら溜息をついた。

『父親は誰なの？』

「ああ、奉公先のおぼっちゃま。去年、留学先から帰ってきたんだけど、目をつけられちゃってね。でも、お腹に赤ちゃんがいるって分かったら、奥さまカンカンで、追い出されちゃったのよ。現在失業中」

『親がなんて言おうが、愛があれば関係ないじゃない！』

「もう、お姉ちゃんたら、世間知らずのお嬢様なんだからー。子供ができることって、愛がなくてもできるのよ？」

『世間なんて知る訳ないじゃないっ、生まれてさえないのよっ』

お姉ちゃんがマジギレしたようなので、一応項垂れる。

『いゝずゝみゝ、お兄ちゃんはその子に育てた覚えはないゝ』

「いゝずみは……お兄ちゃんに育てられた覚えがないよ。いゝずみが奉公先を追い出された時、おぼっちゃまが、何て言ったか知ってる？」

『赤ん坊だけは産んでくれ……とか？』

「ぶふっ、やつぱり、お兄ちゃんも世間知らずのお坊ちゃまじゃーん」

いゝずみが笑い転げると、三人は揃って嫌そうな顔をして、背中を丸めて顔を突き合わせると、なにやらヒソヒソ話し始めた。

「あー、行けないんだゝ。ヒソヒソ話はしちやいけませんって、幼稚園で教わるんだよ？」

『生憎、俺たちは幼稚園にさえ言っていないからな』

再びお兄ちゃんの逆鱗に触れたと気付き、いゝずみは首を竦めた。

『で？ 何て言ったのよ』

お姉ちゃんが冷たい瞳で言った。

「僕のママを苛めるな！ だってさ、怒る気力も起きなかったよ。」

あんなマザコン男、こつちから願い下げ」

三人は口をポカンと開けて絶句した。

「……後学の為に訊いておきたいのだが、そんな男とどうして子供ができるような行為をするんだ？」

お兄ちゃんが顔を顰めて問う。

「だって……ロイ・トントンのミニボストンをくれたから……」

「で？」

「で？　って……ロイ・トントンだよ？　いくら思うと思ってるの？」

「まさか、それをもらう代わりにそんな行為を？」

「いやいや、いくら私でもそんな簡単にそんなことするわけないでしょ？　ちゃんと最初はただけまんって断ったよ？　でも、もらってくれないなら捨てるって、私に上げるために買ったんだからって……少しグラッてるじゃない？　それに、捨てるのなんてもつたいないじゃん。ロイ・トントンだよ？　それで、もらっちゃったんだけど、その日の夜に、話があるからって、部屋に来たのよ。やっぱ、もらっちゃったからには、入るなとは言えなくてね。そうしたら、そうなっちゃって……」

「たった一度で妊娠しちゃったの？」

「その後、何回か……だってね、ロイ・トントンの財布にパスケースに、あとね、花束をくれたこともあるんだよ？」

「おもいつきし、下心の塊じゃないか」

お兄ちゃんは大きな溜息をついた。

「それにね……その最中だけは、いずみのこと、ギュッて抱きしめてくれて、かわいいとか、愛してるとか言ってくれるんだよ……」

三人は、黙りこんだ。

「そだ、あの子も死ぬまで待つてようか？　いくら父親がマザコンばつちやまだからって、この子まで嫌いになることないもんね？

一人取り残されて、あっちに逝けないんじゃない、可哀そうだし……」

いずみの言葉に、三人とも難しい顔になって黙り込む。

「ねえ、いずみ、今の話が本当なら、あそこでザバザバ泣いてるおじさんは誰なのよ？」

お姉ちゃんが指さした方を見ると、四十代半ば程の、古ぼけた作業服を着たむさ苦しいおじさんが泣いていた。

「ああ、あれね、いずみを拾ってくれたおじさん。奉公先を追いつた後、色々事故が重なっちゃってね……もうどうでもいいやつで道端に蹲ってたなら、おいでって、声をかけてくれたの」

「……いい人じゃない」

「でも、おじさんち、すっごい貧乏なんだよ」

古ぼけた六畳の部屋には万年床、あちこちに本や雑誌が散乱し、隅には更にたくさんの本が積み上げられていた。台所は一応付いていたが、いつ使ったのか、白っぽいステンレスのシンクは乾ききっていた。小さな四角いガスコンロは一つきりで、使われている気配はないのに油っぽい汚れがこびり付いている。そして、トイレ……今の日本で水洗じゃないトイレがあるなんて、いずみは知らなかった。ぽつかりと口を開けたばつとん式のトイレの穴は、地獄に続いているようで不気味だ。

「貧乏なんて関係ないじゃない？」

「関係なくないよ、いずみがいるだけで迷惑かかるでしょ？ お兄ちゃん達もお姉ちゃんも全然気にならないと思うけど、生きてるとお腹はすくし、現に、こうして病院に行けばお金がかかるんだよ？」

三人は初めて気づいたように、はつとした顔をした。

「この部屋は、どのくらいお金がかかるんだろう」

お兄ちゃんが心配そうに言った。

いずみは、言われて病室を見回す。ベッドは二つきり、でも入口側のベッドは空なので、実質一人部屋状態だ。洗面所も付いている。差額をとられるのは確実なようだ。

「やだ、おじさんの部屋よりもキレイだよ。一体いくらかかるのか、いずみ分かんない」

いずみは急に不安になったようで、自分より遥かに小さくて頼り

なげに見える兄の腕につかまった。

その時、突然病室のドアがノックされて、銀色の四角ばったフレームの眼鏡をかけた年配の女の人が入ってきた。

「吉田さん、ですね？」

女の人は、おじさんを見下ろしてそう言った。おじさんは、泣いて真っ赤になった鼻をぐすぐす言わせながら立ち上がり、女の人に向かい合う。

「奥様が大変な時に申し訳ないのですが……」

その女の人は、全然申し訳なさそうには見えない不躰な様子で、おじさんの頭からつま先までを見つめて、少し顔を顰めてから続けた。

「入院費の前金を払っていただきましたのです。明日までで結構ですが……」

そう言つて、女の人は請求書らしい紙をおじさんに渡した。そして、心配そうな顔で続けた。

「この部屋は、差額が発生するのですが大丈夫ですか？」

おじさんは前金の請求書の額に目を見張っていた。自分が住んでいる市営のぼろアパートの五カ月分だ。

「あ、何とかします。この部屋しか空いてないって言われてますし、いずみちゃんが助かるなら、これくらいなんでもないですから……」

おじさんは、その時はそう言っただけ、女の人が出て行ってから、深い深い溜息をついた。

「ねえ、私、さつさと死ななくちゃ。おじさん絶対払えないって。奥様なんかじゃないのに……なんで違うって言わないのかしら？」

いずみはオロオロして言った。

「いずみちゃんが助かるなら、これくらいなんでもない、ですって

……」

お姉ちゃんが、うつとりと言った。

「おねーちゃん……おねーちゃんも、絶対悪い男に引っかかるタイプだと思うよ？」

いずみは溜息をつく。

『あんたは物につられただけでしょ？ 一緒にして欲しくないわ』

にらみ合うお姉ちゃんといずみを、呆れて見ていた兄二人は、おじさんがいきなりフラフラとドアの外に出て行ったのに気がついた。

『おじさんがどこかに行くぞ？』

『ついて行ってみようぜ』

第一話 黄泉路（たび）は道連れ（2）

逢魔が時の夕暮れの中、おじさんはトボトボと歩いていた。

ラッシュアワーで連なった車の排気ガスや、クラクションの音や、帰宅を急ぐサラリーマン達のコートの裾から生じる小さな風や、これから遊びに繰り出す若者たちの賑やかな笑い声が、おじさんの背中の孤独を際立たせているようで、三人といずれも言葉もないまま、おじさんの後を浮遊しながらついて言った。

おじさんは、赤い看板が上がっている店の前でしばらく佇んでいた。

「ねえ、やばいよ。おじさんサラ金に手を出す気だよ」

「サラ金？ 皿うどんとは違うんだよね？」

チイ兄ちゃんが、無邪気な顔をして訊いた。

「お前といずれもは、仲の良い兄妹になっていただろうよ」

兄ちゃんが溜息をつきながら言った。

「いずみ、サラ金くらいは知ってるよ？ 絶対にあんなところでお金借りちゃいけないって、奉公先と一緒に働いてた華陽さんに言われたもん。利息を返すだけで大変なことになるんだって。ところで利息って何？」

お兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒に溜息をついた。

「とにかく、おじさんをやめさせよう」

「何か方法があるの？」

「まあ、見てろって」

お兄ちゃんはニヤリ笑うと、意を決したように店内に入って行ったおじさんの後を追って店内に侵入した。

明るい店内は無人で、キャッシングの機械が二台置かれていた。おじさんは機械の前に立つと、手持ちのカードを機械に入れた。金額を訊かれて、しばらく迷っていたおじさんの目の前で、突然機械が誤作動を起こした。

金額の欄にはアスタリスクの羅列。暗証番号が勝手に入力されて受付不能となり、カードがつき返された。

唖然としたおじさんが、モニターを覗き込むと画面には『たちされ』という赤い文字。そして防犯用のミラーには、にっこり笑った女の子の顔……

おじさんは真っ青になって二、三步後ずさると、あちこちに体をぶつけながら店を後にした。

もちろん、三人の仕業だ。機械に誤作動を起こさせたのがお兄ちゃん、赤い文字を入力したのはチイ兄ちゃん、そして微笑みかけたのは、お姉ちゃんと言う訳。

「すごい、すごい、すごい、こんなこともできるんだねー。三人寄ればマンジュウの知恵ってこのことだね？」

いずみは心からの拍手を三人に送る。

『饅頭の知恵ってなんだ？ 饅頭に知恵なんてあったっけ？』

チイ兄ちゃんが首を傾げる。

「あれ？ 違った？ ニンジャの知恵だったっけ？」

『ああ、なるほど、忍者ならいろんな知恵を持ってそうだもんね？』

チイ兄ちゃんが、うんうんと頷いた。

『……三人寄れば文殊の知恵だ』

お兄ちゃんが、とても怖い顔でそう言ったので、いずみもチイ兄ちゃんも文殊って何？ とは訊けないまま、凍りついた。

慌てて出て行ったおじさんを追いかける。別の店に行かれては意味がないからだ。しかし、おじさんは脱兎のごとく病院に走りかえり、いずみの横の椅子に腰かけた。肩で息をしている。

「大丈夫、いずみちゃん、大丈夫だから、明日にはちゃんとお金を準備するからね」

おじさんは、ぶつぶつといずみに話しかけた。当然いずみからは何の返答もなく、ピッ、ピッと規則正しく鳴る心拍モニターの無機質な音だけが部屋の静寂を破っている。

「……そう言えば、いずみ、お金持ってるよ。ねえ、おじさんにそのことを伝えられないかな？」

『お金？』

三人が声を合わせる。

「うん。ほら、奉公先を追いつけられた時にね、退職金と慰謝料と子供を墮ろす費用を全部合わせて百万ちようだいよって言うてみたの。いかにもって感じていいでしょ？」

三人は眉間に皺を寄せた。

『退職金と慰謝料っていうのは許す』

お兄ちゃんが、しかつめらしく言った。

「そうしたら、奥さま、このアバズレとか怒鳴って、でも本当に百万の束をどこから持ってきて、いずみに投げつけたの。ねっ、ねっ、なんだかドラマみたい？」

『この子、馬鹿なのかしら、ずる賢いのかしら……』

『単なる馬鹿じゃねーの？　ってかドラマの見過ぎ？』

珍しくお姉ちゃんとチイ兄ちゃんが意見一致を見たらしく、頷き合っている。

『じゃあ、その百万がどこにある訳だな？』

お兄ちゃんが、少しほっとした様子で言った。

「ううん、ないの。盗られちゃった……」

『盗られた？』

三人は声を揃えて叫んだ。

「ほら、事故が重なってって、さっき言ったでしょう？　おん出た後、ふと気づいたのよ。あれはちゃんと百万円あったのかしらってそれで、道端で歩きながら数えてたの。そうしたら後ろから誰かがぶつかってきて……」

『道端で金を数えてたのか？』

お兄ちゃんが呆然として言う。

『そんなの盗ってくださって言うてるようなもんじゃない？』

お姉ちゃんは冷たい視線でいずみを見下ろした。

『おまえ、常識つてもんがねーな』

三人は異口同音にいずみを罵倒した。

「だって……」

『じゃあ、お金なんてないじゃないか』

「だからあ、数えてたのは半分で、残りはバッグの中だったから、そっちは残ってるの。だって、いっぺんに数えられなかったんだもん」

いずみが、そう言うと、三人は呆然と安堵が入り混じった表情を浮かべた。

『良かった、お前が馬鹿で……』

『いっぺんに数えられる程賢くなかったのが幸いしたのね』

『お前が三までしか数えられなかったら、もっと良かったのになー』

「私……褒められてない……よね？」

複雑な表情で問い返すいずみに、三人は良かった良かったを繰り返し、ぶら下がって頬ずりをした。

「で、盗られたあと、パンプスのヒールが折れちゃってね、ピンクリ&ライアーのパンプスだったんだよ？ すっごくかっこいいやつ。そうこうしてるうちに、雨まで降ってきてちゃって……もう、何もかも嫌になっちゃったんだよ。で、蹲ってたら、おじさんに拾われたって訳」

『どうせ、そのパンプスもドラぼっちゃまに買ってもらったんでしょ？』

「うっ……どうして分かるの？」

『あんだ、さっさと死んじやった方がいいわ。そうすれば、残りのお金も発見されて、おじさんはあんだから解放される。あんだにはおじさんに迷惑をかけるだけの値打がないわ。おじさんは、あんだのお腹の子供のことを知ってるの？』

お姉ちゃんは、やけに冷たく、そう言った。

「……知ってるよ。おじさん、何を血迷ったのか、その子を産んで

やってくれって。自分とは結婚なんてしないでいいから、産むだけ産んだら、好きなようにしていいからって……。おじさんが育てるからって、言うんだよ。変な人でしょ？」

いずみは泣きそうな顔で言った。

「……だから、放っておけなかったんだよ。おじさん、馬鹿なんだもん。いずみを濡らさないように傘に入れてくれて、自分はいつぱい濡れちゃってさ、風邪ひいて熱だしちゃって……。だから、いずみ、一晩中看病してて、気づいたら、いずみが熱を出してて……。おじさん、いずみのことなんて拾うから、大変な目に遭っちゃったんだよ。いずみは厄病神なんだって、母さん、いつもそう言ってたもん……」

いずみは、子供みたいにしゃくりあげた。

三人は、まるで彫像になってしまったかのように固まって、おじさんを見下ろしていた。

伸び放題の前髪の下からのぞく目は細くて小さい。頬骨が張っていて、唇は厚ぼったい。鼻筋がすっと通っているのだけが取り柄の無骨な顔。女の子には、あまりもてそうにないおじさんの顔が、神々しい光を放っているようで、三人は釘づけになっていた。

お腹のあたりで、光っていた光が明滅してきたように感じて、いずみは涙で曇った目をこすった。

「あの子も、そろそろ限界なのかな。弱ってきたみたい……。私たち、一緒に行けそうだね？」

いずみは、諦めと安堵が混ざった表情で言った。

「あの子、生きたがってる。生きたいって、何度も叫んでる……」

お姉ちゃんが泣きだした。

「生きたがってる、必死に、訴えてる……」

お兄ちゃんも泣き出した。

「あんな小さな子を泣かすいずみは、大嫌いだ！」

チイ兄ちゃんは、わあわあ泣きながら怒った。

「ちよっ、ちよっと待ってよ。一緒に逝こうって言ったのは姉ちゃ

んとお兄ちゃんたちだよ？」

『いずみとは一緒に行かない』

『いずみなんかと一緒にいかないわ』

『いずみなんか仲間に入れてやらない。仲間外れだ！』

三人は小さな手を突き出して、一斉にいずみを押した。何度も何度もドシンドシンと音がするくらい押されて、いずみは顔を顰めた。痛いつ、痛いよ、やめて！ お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

パズルの最後のワンピースをグリツと埋め込むような感覚がして、いずみは目を覚ました。実際に体が痛くて重くて、うめき声しか出せない。

「いずみちゃん？ 気がついたのか？」

おじさんが、いずみの顔を覗き込んだ。

「ごめんよ、ごめん。おじさんのことなんて放っておけばよかったのに……君みたいな優しい子を死なせてしまったら、おじさんどうしたらいいんだろうって……ずっと悔んでたんだよ。良かった、意識が戻って……」

おじさんは、ベッドに横たわるいずみの体をギュツと抱きしめて、髪を何度も優しく撫でた。

いずみは、点滴を刺されていない方の腕を、ゆっくりと持ち上げ、おじさんの頬をパシリとはたく。当然、おじさんはポカンとした。

「おじさん！ サラ金なんかからお金を借りちゃいけないんだよ？ 大人の癖にそんなことも知らないの？」

いずみの言葉に、おじさんは更にポカンとした。

更に、いずみはインターホンを押すと、看護師を呼びつけ、さっさと大部屋に移るように手配をしてもらうことにした。大部屋がないのなら差額を负けるべきだと抗議までして……

* * *

「いずみちゃん、そろそろ時間だよ？」

おじさんと二人で近所のお寺にやってきていた。水子供養をしてくれるお寺をおじさんが探してくれたのだ。

お坊さんがお経を読んでくれている間、いずみはお兄ちゃん二人とお姉ちゃんの顔を思い出そうと努力していた。でも、浮かぶのはどれもこれも自分の幼いころの顔で……あれは本当にあったことなのか、夢だったのか……自信がなくなってくるのだった。

秋晴れの気持ちのいい日で、線香の煙は細く高く、青空に吸い込まれていった。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんとチイ兄ちゃんは、ちゃんとあちら側に行けたかな？」

「大丈夫だよ」

おじさんは細い目を更に細めて言った。

本当にお経が届いたのならば、あの世とこの世を隔てる川のそばで、お兄ちゃんとお姉ちゃんとチイ兄ちゃんは、お地蔵さまに名前を呼ばれているはずだ。

元氣よく返事をしただろうか、仲良く三人で船に乗れただろうか、あちら側できちんと幸せになれただろうか……。いずみは泣きそうになって、おじさんのシャツに顔を埋めた。おじさんは何も言わずに、お地蔵さまみたいに優しく笑って、いずみの頭を何度も撫でてくれた。

来春には、お兄ちゃん達とお姉ちゃんが守ってくれた命が生まれてくるはずだ。

第二話 冬来たりなば春遠からじ（1）

いずみは部屋中を磨きたてていた。三年間も奉公先で仕込まれたので、掃除は得意だ。晩秋の乾燥した空気に埃が舞う。

マスクの代わりにタオルで頭と口を覆って、本をパタパタと打ち合わせる。エプロンだけは長年愛用してきたもので、奉公先を飛び出した時にさえ、ミニボストンに突っ込んで持ってきていたものだ。本を本棚にしまい、脱ぎ散らかされたおじさんの服を畳んで隅にまとめ、万年床を押し入れに入れると、古ぼけた畳に座ることができるようになった。台所もトイレも近くの薬局で買ってきた重曹で磨きたてた。

おじさん……名前は吉田青洲よしだせいしゅうという。なんだか、とても偉そうな名前だ。

でも、青洲さんと呼んだ方がいいかと訊いたら、その名前はあまり好きじゃないんだと眉間に皺を寄せたので、相変わらずおじさんと呼んでいる。吉田さんと呼ぶのも、なんだか寂しいし……。

掃除が一段落した時、ピンポンと呼び鈴の音がした。

「はあい」

いずみは慌ててタオルを外すと、ドアを開けた。そこには、知らない男の人が立っていた。

「はい、どちら様でしょうか？」

いずみの問いかけに男は答えず、黒ぶちの眼鏡のふちをツイツと指で持ち上げて、目を見張った。

「本当に、女の子がいる……」

その男の人は口を開くと、ポカンとした表情で呟いた。

「……はい？」

いずみはきょとんと見つめ返す。

「いやいや、疑っていたわけじゃあないんですがね？ 吉田さんが世帯用の住宅に移りたいって言いだしたもんで、その……」

「モロ疑ってるんだろ？」

突然後ろから、おじさんの声がした。

「よ、吉田さんっ」

男の人は、引きつった笑いを浮かべた。

「最近随分、市の対応が早くなっただんな。ちらっと世間話をした次の日に視察に来るとはね……」

「あの……中でお話します？」

いずみは、険悪な雰囲気のおじさんを促した。

「いずみちゃん、何をしてるの？ 無理しちゃダメだろ？」

おじさんは部屋に入るなり顔を顰めた。

「何って、掃除してたんですよ。だって、すっごい埃だらけで……。ごめんなさいね、お座布団がないんです」

いずみは男の人に謝った。男の人はイエイエと首を振る。

「こいつに座布団なんているもんか、板の間にでも座らせとけよ」

さつき、押入れの中から出てきた湯呑セット（引き出物だったみたい）に、さつき買って来たばかりのほうじ茶を注いだ。

「あ、どうぞお構いなく」

「水で十分なのに……」

なんだか、おじさんは機嫌が良くないみたいだった。

おじさんのアパートは、平屋の小さな戸建てが集まった市営住宅の一つで、一番安くて狭い独り暮らし用の建物だ。

——おじさん、本気でいずみとその子供を引き取るつもりなのかしら……。

いずみが入院している間も、退院してからも、特にそんなことを言っていなかったので、確認しないまま一月ほどが過ぎていた。

「来春には、お子さんがお生まれだとか……」

佐川と名のつたその男の人は、未だに信じられないという風情で問いかけた。

「五か月目に入ったところなんです」

いずみは、まだ、さほど膨らみの目立たないお腹を手でそっと押

さえた。

「信じられない……」

佐川は、お茶をずっと啜った。

「子孫を残せるのは、トキかパンダか吉田か、と言われていたあの吉田さんが……」

「おい、そんな事を今話さなくなっただけいいだろう？　気がすんだら、さっさと帰れよ」

佐川の言葉に、いずみがはっとして、泣きそうになっているのに気づいたおじさんが、慌てた様子で言った。

「はいはい、言われなくなっただけ、もう帰りますよ。こっちだって暇じゃない。わざわざ昼休みを割いて見に来たんですからね。でも、確認が取れた以上、手続きをさせていただきますよ。後で、戸籍謄本とか必要な書類を出しに来てくださいね？」

佐川は、未だにキツネにつままれているとでも思っているような風情でアパートを後にした。

「おじさん、私……」

自分は、おじさんの子孫を残そうとしている訳じゃない。おじさんの優しさに甘えているだけだ。

「気にするな」

「でも……」

——いずみには、そんなおじさんの優しさに甘える権利なんて、少しもないのに……。

「俺が産んで欲しいといずみちゃんにお願いしたんだ。君の優しさに付け込んでいるのは、おじさんの方なんだよ」

おじさんは、いずみの心中を読んだかのようにそう言った。

「でも、世帯用のアパートなんて……ダメだよ。いずみにそんなお金をかけるだけの価値なんてない。それにそんなお金どうするの？」

「いずみちゃんは、おじさんのこと、すごい貧乏だって思ってるだろ？」

おじさんは、大きな溜息をついた。

「え？」

——貧乏なんじゃないの？

「まあ、そう思うのも無理はないよな。こんなアパートだし、こんな格好だし……」

おじさんは苦笑した。

「だって、入院費の前金を払うときも……」

「そうか、そう言うのもあったな」

おじさんは頭をポリポリ掻きながら続けた。

「あの時は、確かにお金がなかったよ。と言うのも、前の月に有り金のほとんどを定期に入れさせられちゃったんだ。凄腕の金融関係の知人がいてね。それでも生活費は残しておいたんだよ？ でも、そういう状態の時に限って、欲しかったパソコンが安売りしててね」
確かに、おじさんの部屋には、最新のノート型パソコンが、卓袱台にぼつりと乗せられている。

それだけが部屋の中で浮いていて、『えーと、僕の場所はここで、オーケーなの？ ホントに？』と呟いているようなのだ。

「次の給料日まで、なんとかすれば、なんとかかなると思って買ってしまったんだよ。入院費の時も定期を解約すれば良かったんだけど、なんだか、色々説明させられそうで面倒くさくてね、君には心配かけちゃって……悪かったね」

「じゃあ、大丈夫なの？ いずみがここにいても、おじさん、困ったり、無理したりしてない？」

「無理なんてしてないさ。贅沢はさせてあげられないかもしれないけど……ね」

「……」

「おじさん、実は、いずみちゃんにお願いしたいことがあるんだ。どうしようかって迷っているんだけど、もし、いずみちゃんが嫌じゃなければ、でいいんだけど……」

おじさんは、かなり躊躇っているようだった。

「なあに？ いずみにできることなら何でもするよ？」

「さつき佐川が言つてたことなんだけど……世帯用のアパートを借りるのに、戸籍謄本がいるんだよ。それで、君に……おじさんの籍に入ってもらえたら、いいなーって……あ、でも嫌ならいいんだ」

「おじさん、本気なの？ 本気で……」

「ああ、ダメだよ。いやいや、聞かなかったことにしてよ。他の方法を考えるよ。あ、そろそろ、仕事に戻らなきゃ」

いずみは、逃げるように部屋を出て行くとして、おじさんの背中に抱きついた。

「おじさん……後悔しない？」

「いずみちゃん……」

おじさんは振り向いて、いずみを抱きしめた。

「いずみちゃんこそ、後悔するかもしれないよ？」

いずみはおじさんの胸に顔を埋めたまま、首を横に振った。

「おじさん」

「いずみちゃん」

二人は見つめあって、微笑みあった。いずみがキスをねだるように、目を閉じる。少したじろいだおじさんの気配が伝わってくる。

「いずみちゃん……」

おじさんが意を決して、口づけようとした、その時、突然音楽が鳴り始めた。

「じゅんせい、らつくありゃ、くもあるさー」

ビクリと二人して飛び上がる。音のする方を見ると、見慣れない黒い携帯がうなっていた。

「……はい」

「あ、その声は、もしかして……吉田さん？」
佐川の声だ。

「もしかしくなくても吉田だ」

「あは、すみません。僕、ケータイを落としちゃったみたいで……」
「……」

「よかったー、吉田さんここで。もう昼休みは終わりですよ？ つ

いでなんで、そのケータイ、届けてもらって構いませんか？』

『構う！』と言いたい気持ちを呑みこんで、青洲は了解と告げた。

その夜、青洲が婚姻届を持って帰った。緑色の枠の薄紙のあれだ。

「これが婚姻届？」

——初めて見た。

しかし、しげしげと見つめていたいずみは、顔を曇らせた。

「おじさん、いずみ、やっぱり結婚できないみたいだよ」

「どうして？」

青洲は、ごくりと唾を飲み込む。

「だって、いずみ、未成年だもん。親の承諾がいるって、ここに…

…」

「いずみちゃん、未成年？」

青洲が、ぎよつとしたのが分かった。

「もうすぐ十九になるよ。父さんは小さい頃に死んじゃったし、母さんなんて、どこにいるんだか分かんない」

「そうだったんだ……たくさん苦労をしたんだね……」

青洲はそう言つと、何度もいずみの頭を撫でて、ずっと抱きしめてくれた。

第二話 冬来たりなば春遠からじ(2)

『なんとかしてあげるから、いずみちゃんは、何も心配しないでいんだよ』

——おじさんはそう言ったけど、何とかするって、何とするんだらう？

青洲は、背の高いオフィスビルを見上げて立っていた。もう二度とここに来ることはないと思っていた。

エレベーターから、スーツを着た集団が下りてきた。彼らのうちの数人が、青洲の埃っぽい作業着を見て顔を顰めたが、ほとんどの人が青洲には目もくれずに歩き去って行く。しかし、その中に一人だけ、目を見張って青洲を見ていた人物がいた。

青洲は、それに気づかぬ様子で、入れ違いにエレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押すと手慣れた様子でドアを閉めた。

あの日の夜、どしゃ降りの雨の中、通りを歩いていたのはオレンジを探していたからだ。薫が好きだったオレンジ。

——どうしてこの日を忘れていたのか……。

愕然とした心持で雨の中を歩き回る。時間は残酷だ。忘れたくないものも、忘れたいものも、冷酷なまでに平等に扱う。

午後十時を過ぎると、さすがにスーパーは閉まっていて、オレンジを売っているようなコンビニは近くになく、それでも諦めきれずに街じゅうを歩き回った。

児童公園の公衆トイレの近くの木の下に、何かが蹲っているのを見つけたのは、そんな時だった。

フードを目深にかぶって、こうしていれば、誰にも気づかれないうちでも思っているかのように丸く縮まっていた。一度目は、浮浪者かと、ちらっと見て通り過ぎた。二度目は、普通の浮浪者ならば、

もつと雨がしのげる駅中などに避難するだろうに、と疑問に思つて通り過ぎた。三度目に通り過ぎた時、もしかしたら、これは子供ではないだろうかと疑問に思った。どんなに縮こまっていたとしても、サイズの小さい気がしたからだ。

「君、どうしたの？ 風邪をひくよ？」

このまま見過ごせそうにないと諦めて、声をかけた。

「……」

カールした長い睫毛に縁どられた大きな瞳が、怯えたように自分に向けられて、青洲はたじろいだ。

「女の子？ 君、こんなところで何をしてるんだい？」

「今日は、すぐくついていないから、ここにこうしていれば簡単に死ぬるんじゃないかしらって思つてたところなのよ」

か細く頼りない、それでいて、どこかしらのんびりとした調子の声に、青洲はぎよつと目を見開いた。

「君、死ぬつもりなの？ 死にたいの？」

「分かんないの…… どうしたらいいか分からないから、とりあえず立ち止まつてるってとこ？」

女の子には、それ程深刻そうな雰囲気はなく、本当にただ途方に暮れているように見えた。

「とりあえず立ち止まっているだけなら、うちにおいで。雨に打たれて考えるよりも、ずっとよく頭が働くと思うよ？」

「おじさんち？」

「狭くて、汚いけどね」

青洲は肩を竦めた。

これが、いずみとの出会いだった。

「青洲様、戻っていらしたのですかっ！」

ドアをノックして開けるなり、ダークスーツを着こなした初老の男がかけよってきた。

「中川、期待に添えなくて悪いんだが、戻ってきた訳ではないよ。」

実は、少しばかり力を貸して欲しくてね」

「青洲様、旦那様がどれほど心配されているか、お考えになってはいただけませんか？」

「俺がいなくなつて、赤秀も白舟せきしゅう はくふねもいる。俺のことはもう忘れてくれと言つておいてくれないか？」

「青洲様っ！」

「この子の母親を探して欲しいんだ。できれば、この子の身元も調べてくれるとなお良い。赤秀には知られないようにしてくれ」

「赤秀様は、今や吉田グループを束ねておられるお方です。隠しだてすることは不可能かと……」

「そうか……そうだな。なら、いい。今の話はなかったことにしてくれ。邪魔したな」

聞き入れてもらえないだろうことは想定内だ。ダメ元で力を借りに来た。自分の甘さに苦笑する。

多少時間はかかるかもしれないが、自分で調べるしかなさそうだし、さつさと踵を返そうとする青洲に、中川が取り縋るように手を伸ばした。

「お待ちください。分かりました、赤秀様のお耳には、なるべく、入れないように致します。それでよろしければ……」

中川は苦渋の選択だとも言いたげに、悲壮感溢れる表情で言った。

「なるべく……ね」

青洲は苦笑する。

——五分五分ぐらいだろうか。甘いか。

「分かり次第ご連絡さしあげます。ご連絡先をお知らせください」

「一週間後にまた来る」

「青洲様っ！」

中川の声をドア越しに聞きながら、青洲は足早に部屋を後にした。

ビルを出てすぐ、青洲は一人の男に、突然背後から腕を掴まれた。

ぐいぐいとひっぱられて、ビルの裏に連れて行かれる。

「おい……白舟、なんでお前がこんなところにいるんだ？ 病院を放っておいていいのか？」

青洲は引つ張られながら顔をしかめる。

「兄さんに職場放棄を責められるとは思わなかったな」

白舟と呼ばれた背の高い男も顔をしかめる。

「なんでばれた？」

「小橋から連絡があつた。兄さんがエレベーターに乗りこんだところを見たつて……」

——さつきエレベーターホールですれ違ったスーツ集団が、うつかりしていた。こんななりをしていたから、誰も気づかないだろうと油断していた。

「……兄さん、いつまで逃げ回っているつもり？」

白舟は鋭く青洲を睨みつけた。

青洲とは違うタイプのクリクリした大きな瞳が非難の色を露わにしている。

「……逃げてなんかないさ」

青洲は苦笑する。

「じゃあ、なんでそんな恰好をして、こそこそ戻ってきてるんだよ？ 連絡先さえ誰にも知らせないで」

「……」

「……おやじがガンなんだ」

白舟の言葉に、青洲は目を見開いた。

「今すぐどうこうという状態じゃないが、おやじも歳だからな、安心させてやることはできないのか？」

「……悪いな、お前らに全部背負わせて……」

「赤秀も良くやってるが、あいつだって、かなり無理をしている」

「そうか……」

「もう五年だぞ？」

「そうだったな。この前気づいて愕然としたよ」

「今、何をしてるんだよ」

「過去を暴く仕事を……ちょっとね」

青洲は苦笑する。

「何だよ、それ……」

「過去はどうやっても変えられない。それを思い知りたいのかもしれないな……」

「兄さん……」

「そのうち、連絡をとるよ。おやじにはそう伝えておいてくれ」

青洲は踵を返すと、雑踏の中に紛れて、消えた。

家に帰ると、食事の支度はできているようなのに、いずみの姿がなかった。

「いずみちゃん？」

青洲は狭い部屋の中を捜す。

「……おじさん？」

部屋の隅の、本の山の中から声がした。

「どうした？ そんな所で……」

いずみは、初めて出会った時のように、ちんまりと膝を抱えて蹲っていた。

「もしかしたら、おじさんが戻ってこないんじゃないかと思って……。全部夢で、いずみ……。また一人ぼっちになっちゃったんじゃないかって思ったら、怖くなって、それで……」

いずみは、顔を覆ってしゃくりあげた。

「ごめんよ。用事があつて、遅くなってしまったんだ。遅くなるって言うっておけばよかったね」

この部屋には電話がない。ケータイを持っているので、今までは少しも不都合を感じなかったからだ。

青洲は、隅っこに蹲って泣きじゃくるいずみを抱きあげて座ると、何度も背中を優しくさすった。震える肩から、いずみの孤独がジンジン伝わってくるようだ。あの雨の日、いずみは世界から零れ落ち

てしまった気分だったのかもしれない。母親から見捨てられ、奉公先から追い出され、行くあてもなく、頼る人もなく……

「いずみちゃん、おじさんは、君の味方だから、君は何も心配しないでいいんだよ。君を一人ぼっちにしないで……」

いずみを落着かせようと言葉を探す。

茶色の髪の間からのぞく白いうなじが、やけに細すぎるような気がしてハラハラする。この涙を止める為ならば、何でもしてあげたいと思っっている自分に驚く。

いずみは青洲の存在を確認するように、髪や背中や頬を指先でぎこちなくなぞっていたが、やがて納得したように濡れた瞳のまま小さく微笑んだ。

青洲はたまらず、軽い口づけを何度も落とした。

「……んっ」

小さく洩れるいずみの吐息に煽られるように、更に深く口づける。「ダメだよ、いずみちゃんがそんなかわいい声で煽るから、おじさん、キスだけで済まなくなっちゃいそうだ」

青洲は溜息をつく、いずみを抱きしめた。

第二話 冬来たりなば春遠からじ（3）

——おじさんは、謎な人だ。

いずみは茶碗を洗いながら考える。

『キスだけで済まなくなっちゃいそうだ……』

などと色っぽく言った後、いきなり台所のシンクで頭から水を浴び始めた時は、正直あつけにとられた。

「いずみちゃんに何かあったら大変だから」とおじさんは、頭から水を滴らせながら言った。

どうやら、妊婦であるいずみの事を思つての行動だったらしいのだが、あまりにも突飛だったので、いずみはオロオロしてしまった。この寒い時期に頭から水なんてかぶったら風邪をひいてしまう。

おじさんの家には風呂がない。近所に遅くまで開いている銭湯があるので、そこに入りに行く。だから、あの後、気分転換も含めて二人で銭湯へ行った。

広い湯船は気持ちがいい。水色の四角いタイルのお風呂で、薬湯と白湯に分かれている。壁面には北斎の絵を真似たような富士山が描かれていた。

おじさんは大体朝八時に家を出ると、六時過ぎには帰ってくる。

雨の日は休みだ。時々、お昼を食べに帰ってくることもある。何の仕事かと聞いたら、市の仕事を手伝っているんだと言っていた。よく日に焼けているところを見ると、外回りの仕事なんだろうか？

雨の日は休みって、一体……。

天気が良かったので、蒲団を干してから掃除機をかけた。明日から天気が悪くなると予報で言っていたので、今日のうちにやってしまわなきゃ。

一とおり家事を終えると、いずみは縁側に出てスケッチブックを広げた。スケッチブックと三十六色の色鉛筆は、おじさんに買ってもらった。何か欲しいものを買ってあげると言われて、つい注文してしまったものだ。色鉛筆も三十六色になるとかなり値が張る、いずみは遠慮がちに言ったのだが、おじさんは気落ちしたようだった。『そんなのでいいの?』と不思議そうな顔をしていたから。

いずみは縁側の下に、忘れもののように転がっていたドングりを拾い上げると、しげしげと見つめてから、スケッチブックに描きこんでいった。

輪郭を薄く書き込んで、色を重ねていく。

おじさんを買ってもらった色鉛筆は茶色だけでも四種類もある。光の当たり具合によって塗り分けて、影を付けていくと、質感や立体感が出てくる。

いずみは絵を描くのが得意だ。まるで写真のように、見たものを紙の中に閉じ込めてしまうことができる。フィクサチーフ（定着剤）を上からスプレーすると色落ちしにくくなるし、更に濃く色を乗せたい時にも有効だ。

いずみは、紙の中に閉じ込められたドングりを満足そうに見つめると、そつとおじさんの本棚に立てかけた。

前の奉公先では、色々な人の顔を描いて上げた。仲良しだった華陽さんは言うまでもなく、運転手の田中さんや、賄いのおばさん達。旦那様の似顔絵を描いてあげたら、すぐく褒められて、その日からいずみは旦那様の身の回りのお世話をすることになった。

顔を早く覚えたいからと、旦那様は新しく入った使用人の顔を描いて欲しいと、いずみによく頼んだものだ。少しでも特徴をデフォルメしたいずみの絵だと、写真よりも良く覚えられるのだと言っていた。旦那様は、いずみが奉公に上がって間もなく脑梗塞で半身不随になった。いずみは旦那様の介護に明け暮れた。

「随分リアルなドングリの絵だね。紙の中から今にも転がり落ちそうだ」

夕飯と一緒に食べながら、おじさんが感心したように言った。

「今度はおじさんの顔を描いてあげようか？ いずみ、絵は得意なんだよ？」

「いや、いいよ」

「どうして？ おじさんがその邪魔つけな前髪を何とかしてくれたら、リアルに描いてあげられるんだけど……」

おじさんの髪は、ぼさぼさに伸びていて、おじさんの目をほとんど隠している。そう言えば……いずみは考える。

——おじさんの目って、いつも髪の毛の隙間越しにしか見てないし、眉毛に至っては、その存在さえ確認したことがないよね。

「おじさん、どうしてそんなに前髪を伸ばしているの？」

「なるべく自分の顔を見たくないから」

おじさんは苦笑した。

「なにそれ？」

「そ、そう言えば、この挽肉の炒めもの美味しいね」

おじさんは慌てたように言った。

「それ、ハンバーグなんだけど……」

いずみは上目づかいで、おじさんを見つめて、がっくりと肩を落とす。

ひっくり返す時に分裂したのだ。それをまたひっくり返したらまた分裂した。分裂を繰り返すハンバーグに、いずみは為す術もなく溜息をついた。

「……」

おじさんは少し身を縮めて、黙々とご飯を食べた。

その日、目覚めるとやけに視界がさわやかなことに気づいて、青洲は目を擦った。

——あれ？……なんか足りないような……

薄明かりが入る窓に目をやる。カーテンはすでに開けられていて、台所でご飯の用意をしている気配が漂っていた。

——雨か……

雨が屋根を打つ音が聞こえていた。昨日の天気予報では、今日の雨はやがて雪に変わるらしいと告げていたのを思い出す。

「おじさん、御飯できたよ。今日は雨だから、まだ寝てる？」

いずみが、白いエプロン姿で台所から顔を出した。

いずみは、若い割に規則正しい生活をする人だ。家事はそれなりにこなす。まだまだ母親に頼り切った生活をしていてもおかしくない年頃なのに。

「もう起きるよ」

体を起こした所で、視界がさわやかな理由に気がついた。

「何だ？ これ」

青洲は頭に手をやる。

「おじさん、前髪切りなさい。目が悪くなっちゃいますよ？」

いずみが母親のような口調で言う。青洲の前髪は、いずみのものと思われるオレンジ色のカラーゴムで結ばれていた。額の中央あたりで真上に一本で結ばれているので、噴水のように先がバラけている。

「……」

青洲は、苦笑してゴムを外した。

「おじさん、目を隠さない方がいいよ。その方がカッコいいのに……」

いずみは、不満そうにゴムを受け取った。

* * *

青洲はたじろいでいた。なんだか自分が、ものすごいことを言ってしまったような気がする。

「本当に？ 本当に電車に乗るの？」

いずみは、呆然としているように見えた。

「いや、あの、その……本当は車があれば良かったんだけど、着いても駅から少し歩かなきゃならないから……今日は寒いし……やっぱり嫌……かな？」

「うつれしい」

いずみは、ぴよんと青洲に抱きついた。まるでヨーロッパ旅行に連れて行ってやる、とでも言われたかのような喜びようだ。

「う、嬉しい？」

青洲は困惑する。

「うん、だって、いずみ、電車に乗ったことがないんだもん」

「え？」

今の時代に冗談みたいな話だった。いずみは電車を見たことはあるが、乗ったことがないのと言う。

小学校も中学校も徒歩で通学だったし、休みにどこかに連れて行ってもらったこともないそうで、病気で寝込んでいた父親の看病と家事で、週末は終わっていたらしい。奉公先でも似たようなものだったと言う。

「でも、課外授業とか、修学旅行とかで電車に乗っただろ？」

「行かせてもらえなかったの」

「……」

いずみは、まるで籠の中の小鳥のような生活を強いられていたらしい。この子の親は、一体何を考えていたのだろうか。青洲は憤りを隠せない。

「おじさん？ どうしたの？ いずみ、何か悪いこと言った？」

いずみのオロオロした声に、眉間のしわを解いて見下ろすと、いずみの泣きそうな瞳と目が合った。

「ああ、ごめん。いずみちゃんは何も悪いことなんて言っていないよ。じゃあ、行こうか」

青洲は、気持ちを切り換えて微笑む。

最寄りの駅から電車に乗って三駅、今青洲が働いている現場に着いた。赤っぽい茶色の土がむき出しになっていて、ところどころに開けられた穴には、保全のためのシートが掛けられている。

「おじさん、ここで働いているの？」

「うん、今はほとんどここだね。あそこの穴からね、箱式石棺が出土したんだ」

青洲は、ひと際嚴重にブルーシートが掛けられている場所を指さした。

「石棺って……遺体が入ってたの？」

「まあ、その為のものだから、入っていたんだろうね。掘り出した時には土が固まって入っているだけだった。この辺りはね、五世紀ごろに大和朝廷が勢力をのばしてきたんだけど、もともとこの地域を治めていた豪族がいてね、その豪族が朝廷から改めてこの地域の支配者として任命されたんだ。それが国造くにのみやつこってやつだ。この地方には十一の国造がいたそうだよ。この石棺に葬られた人もそのような人の一人だったんだろう」

「国造って、社会の時間に聞いたことがあるよ。社会は苦手だったから、あんまり詳しく覚えてないんだけど……」

そう言って、いずみは小さく舌を出した。

「ねえ、おじさん、この石棺を埋めた人とか埋められた人とかは、この石棺が掘り起こされたことを怒っていないかな」

「……そうだね。その人が生きていれば怒っただろうね。こんなに時を隔てていなければ怒ったと思うよ。でも、これは千五百年以上も前のものだから……どうだろうね。後世に自分たちの様子を知らせられるなら、それでいいって思ってくれる心の広い人だったらいいね」

おじさんは少しだけ肩を竦めた。

「……死んだ人の辛さも、葬った人の悲しみも、全部理解してあげられるなら、きっと許してくれるよね」

「その気持ちは大切だね」

この中には千五百年前に起こった悲しい出来事が、涙と一緒に封印されているはずなのだ。青洲は死者と葬った人の無念に思いを馳せ、ぶるりと身震いをした。寒いせいばかりではなかったが、実際、寒いことは寒い。

「さすがに寒いな。疲れただろう？ そろそろ戻ろうか？ 駅前に美味しい手作りケーキの店があるから、そこで休もうか？」

「全然疲れてないよ。妊婦だって適度な運動は必要なんだって。でも手作りケーキには惹かれるなあ」

「じゃあ、すぐに行かなくちゃ」

青洲は、ほほ笑んだ。

第三話 疑心、暗鬼を生ず（1）

「ちゃんと調べてくれたんだろうな？」

情報収集をさせれば右に出るものはいないと言われる有能秘書中川を、青洲は疑わしそうに見つめた。

「私の情報が疑わしいとおっしゃるのですか？」

中川は、心外だと言う風に眉間にしわを寄せた。

差し出された調査資料には、こう書いてあった。

鈴森いずみ（父）鈴森^{しん}心、（母）秋乃^{あきの}、の長女

心は、いずみが小学生の頃病気で他界。秋乃が働いて生計を立てていたらしい。働いていた先は、所謂、夜の仕事というやつだ。現在には行方不明。ここまではよくある話で、特に問題といえるようなものはないのだ。問題は次だ。

三年前、つまり、いずみが中学を卒業した年の春、鈴森いずみは、病死していた。

「……生きているんだよ」

青洲は眉間にしわを寄せた。

「は？」

「鈴森いずみは、生きてる」

「その女性のお母さまを探している、というお話だったのではないのですか？」

「ああ、そうだよ」

首を傾げる中川に青洲は続けた。

「今、その女性、鈴森いずみと暮らしている」

「そんな……」

有能秘書の中川は絶句した。

五か月目に入っただけ同時に、今までのことが嘘みたいになっただけになった。つまりというものは、そう言うものらしい。昨日の自分

と今日の自分が別人みたいだ。

気分の悪さがおさまると、食欲がわく。しかし、妊婦と言うものはあまり食事を余分に食べてはいけないものなのだそう。昔は二人分だからと本能のままに食べていたらしいが、そんなことをしていたら妊娠中毒症になるのだと、本に書いてあると、おじさんが言った。

——おじさんは読書家だ。そんな本読まなくていいのに……。

いずみは保険証を持っていない。それでも今まで困ったことはなかった。子供のころから、医者にも歯医者にもかかることがなかったからだ。母親に口うるさく言われて歯磨きと、うがいと、手洗いをマメにしたせいかもしれない。お金がないんだから、病院にはいけないよというのが、母親の口癖だった。

余ったフランスパンをこんがりトーストして、少し甘めに作ったオレンジソースに浸して冷やしておく。タベ作ったクリームシチューに入れた生クリームを、少しばかり残しておいたのがあるのだ。いずみはニンマリする。今夜はデザート付夕飯だ。

クリームシチューの翌日、必ずと言っていいほど、華陽が作ってくれた賄いデザート。オレンジは安く手に入るし、フランスパンも生クリームも奥様や旦那様の料理に使ったあまりものだ。

いずみは、このオレンジデザートが好物だった。味だけでなく、幸せで甘やかな気分になるからだ。まるで自分が大事にされている子供になったみたい……。華陽は、いずみを甘やかせてくれた初めての大人だった。

呼び鈴の音がした。

「はい」

——今日、おじさんは少し遅くなると言っていた。誰だろう？

扉を開くと、青洲に良く似た人が立っていた。青洲と違うと分かるのは、その人がスーツ姿で、前髪で目を隠していなかったからだ。青洲と違う鋭く険しい瞳。

「こんにちは。あなたが鈴森いずみさんですか？」

その人は、青洲とそっくりな深い良い声で言った。

「はい。さようでございます。失礼ですが、どちら様でしょうか？」

いずみは戸惑いながらも、奉公先で仕込まれた基本の挨拶を返す。

「僕は吉田赤秀、青洲の弟です。あなたが転がり込んでいるこの部屋の主のね」

「……」

いずみは、ごくりと唾を飲み込んだ。

「お邪魔しても構いませんか？ 立ち話で話せるような内容を話に來たわけではないのでね」

赤秀は、いずみの返事を待たずに部屋に上がり込み、部屋の中を不躰なまでにじろじろと見まわした。

「随分狭い所に住んでいるんだな」

赤秀は嘲るでもなく、笑うでもなく、呟くようにそう言った。

「あの、お茶でよろしいですか？」

「よろしいですよ」

赤秀は面白そうに返答した。

いずみは、ぎこちなく部屋の隅の台所へ向かうと、ほうじ茶を入れ始めた。背中に痛いくらいの赤秀の視線を感じる。

いずみは、卓袱台にほうじ茶と、お茶請けがなかったので、先ほど作ったオレンジデザートを添えた。ほうじ茶には合いそうもなかったので生クリームはやめて、粉砂糖を掛けてミントの葉を飾った。「これはあなたが作ったんですか？」

赤秀は、オレンジデザートを見つめて言った。

「はい。本当は生クリームを添える予定だったんですけど、ほうじ茶には合わないかと思って……でも生クリームの方が好きなら、泡立てますけど……」

躊躇いがちにいずみが問うと、

「いいえ、結構です」とそっけない言葉が返ってきた。

赤秀はほうじ茶をすすり、デザートを一口食べて目を細めた。「なるほど、美味しいですよ……」

「ありがとうございます」

いずみが、笑顔で答えたのとほぼ同時に、

「これで兄をたぶらかしている訳だ」と赤秀が言った。

「……はい？」

「何が狙いですか？　やはり吉田グループでの兄の地位ですか？」

「は？」

「それとも財産ですか？」

「あの……」

「兄のことをどこで知ったんですか？　心に深い傷を負って吉田を飛び出した兄をたぶらかすのは、随分簡単だったでしょう？　兄は弱っていた。あなたの魅力的な笑顔や優しい言葉や美味しい料理に引つかからないはずはなかったんだ」

赤秀はフォークを静かに置いて、鋭い瞳でいずみを睨みつけた。

「あの、ごめんなさい。何の事を言っているのか分からないんですけど。私はおじさんのことは何も知らないんですよ？」

「君は、何も知らない、得体の知れない男と暮らしているんですか？」

赤秀は侮蔑の表情を露わにした。

「それは……」

「しかも、こんなデザートを作っておきながら、何も知らないと言う君の態度が気に食わない」

赤秀は吐き捨てるように言い放った。

「……このデザートがどうかしたんですか？」

ほとんど涙ぐみながら、いずみは問い返す。

——吉田グループとか弱っていたとか……さっぱり分からない。

「今日、僕は兄を連れ戻すためにここに来ました。あなたには兄を諦めてもらいたい。その為の手切れ金を用意しました」

いずみは息を止めて、卓袱台の上に置かれた封筒を見つめた。

「そんなもの……受け取れません」

奉公先を出た時にもらった金額の三倍はありそうな分厚さだ。

「あなたのような得体の知れない女性を、兄の身边に置いておきたくないんですよ。その為のお金です。受け取ってください。そしてもう二度と兄の周りをうるつかないでいただきたい」

赤秀は冷酷な瞳でそう言った。

「……そんなものいただかなくても結構です。おじさんが、私に出て行けと言うなら、私はすぐにでも出て行きます。何をいただく気もありません。でも、それはあなたに言われることではないと思います」

いずみは涙を振り払い、毅然とした態度でそう言った。赤秀は片眉をあげてから、顔を顰めた。

「足りないのですか？」

赤秀の言葉に、いずみの中で何かが、ふつりと切れた音がした。

「あなた、サイテー。お金を出せば、何でも思い通りになるって思っているんだわ。おじさんと同じような顔をしているのに、あなたはおじさんと全然ちがう。こんな最低な弟がいるから、おじさんは家を出たんじゃないですか？」

いきなり豹変してまくし立てるいずみに、赤秀が顔を赤らめて応戦する。

「金が目的でないなら何が目的だ？ 君はお金で解決できないものが、この世にたくさんあると思っっている人種のようなだが、じゃあ、金なしにこのお茶が買えたか？ このオレンジが買えたか？ 世の中はきれい事だけでは生きていけない。そんなこと君が一番身にしてみていることなんじゃないのか？ 母親に見捨てられて、この世に存在しない、得体の知れない鈴森いずみさん」

「なに？ なんのことを言っているの？」

——この世に存在しない？ 何のこと？

いずみは呆然とする。

「赤秀、もうやめろ」

突然、ドア口で声がした。

「いずみちゃん、ごめんよ。弟が随分ひどいことを言っただけで

……」

青洲は申し訳なさそうに部屋に上がり込むと、いずみの傍に座り込み、ポンポンといずみの頭を撫でた。

「……いずみちゃん、おじさんと一緒に逃げようか……って言うたらどうする？」

その夜、おじさんがぼつりと呟いた。

「いずみ、おじさんに付いて行くよ。だって、もういずみには、おじさん以外に、一緒に居たい人もいないし、居る場所もないし……」

おじさんとその弟は、あまり仲が良くないようだ。二人してしばらく睨みあった後、弟の赤秀さんは、また来るから、と言いつて去って行った。顔はそっくりなのに、おじさんとその弟は、性格が全く似ていないようだ。

第三話 疑心、暗鬼を生ず（2）

いずみが奉公していた石守家は、都内の高級住宅地にある。古くからある住宅地と言うよりは、比較的新興な住宅街で、一代で成り上がったような金持ちがかなり住んでいる。だから、その羽振りの良さを競って披露しているような、豪華さと、賑やかさと、多少の傲慢さが、街全体を包んでいた。

「はい、見つかりました。それが……少し厄介なところに転がりこんでまして……」

今は亡き大旦那様の書斎で、一人声を潜めて通話中の女がいた。

「吉田グループの……いいえ、長男、青洲の所です……そう、あの青洲ですよ」

女は書斎を掃除するふりをして部屋に入り込んでいた。

「いいえ、そんなことは決して……。ふふふ、冗談はおやめください。はい、承知しております。はい」

その時、階下から呼ぶ声がした。

「華陽ちゃんつ、書斎のお掃除、まだ終わらないの？ もうお昼よ。冬君がお腹がすいたって言うの。華陽ちゃんも一緒に食べましょう」

「はあい、昌代様、ただいまっ」

華陽は階下に叫び返すと、再び声を潜める。

「では、また後ほど……はい、必ず」

華陽は、大旦那様が亡くなる二年程前に住み込みの家政婦として石守家にやってきた。家政婦として、何でもそつなくこなす華陽だが、石守家の末亡人とは縁続きになる女で、そのせいもあって、奥様である昌代の華陽への信は厚い。だから家政婦仲間が陰で新参者のくせになどと悪口を言うことはあっても、彼女に面と向かって意見するものなど皆無なのだった。そもそも家政婦とは名ばかりで、

昌代でさえ、華陽を妹くらいにしか思っていなかった。

——見たいっ、とびきり青い海！

いずみは、東京湾さえ、まともに見たことがないと言う。初めて見るのなら、やはり水のきれいな青い海がいいだろうと言ったら、こう叫んで、青洲に抱きついた。

死亡届について、いずみに確認したが、彼女はうるたえるばかりで、何も知らないと言った。

密かに出されていた死亡届、籠の鳥の生活、何かの陰謀に巻き込まれているとしか考えられない。一体何に？ いつから？ それに『鈴森』という姓……何もかもが引がかかっていた。

電車の窓に顔をくつつけるようにして、流れてゆく景色を眺めているいずみの髪を、青洲は、そっと撫でた。振り返って小さく笑う鳶色の瞳。

逃げるだけでは、彼女を守れないのかもしれない。そう思いつつ、足元の落ち穂を拾うように、小さな幸せを探してしまう。せめて無事子供が生まれるまで、このまま何もなければいい。青洲は願う。

吉田に戻ってしまえば、今よりも格段に高い安全を手に入れることができるだろう。しかし、戻ってしまえば、また、あのしがらみの中に閉じ込められる、そんな気がするのだ。もう、そんなものはすべて自分の人生から消去したはずなのに、何か痕跡のようなものが残っているような気がして、心の奥がざわざわする。

——もう二度と戻らない、戻りたくない。薫を死なせてしまった、あの頃の自分には……

ホテルのフロントで青洲が書きこむ名前を、いずみは食い入るように見つめた。

——吉田青洲。妻、吉田いずみ

青洲は、いずみの視線に気づいて、少し困ったような顔をした。

ホテルはスペイン調のオレンジ色のまだら屋根に白い漆喰の壁、家具や調度品もスペインから取り寄せたというのが売りらしい。眼下にオーシャンビューが開けた気持ちのいい部屋に、いずみは目を見張る。

「どう？ 気に入ったかな？」

「……言葉にならないよ。素晴らしすぎて……」

いずみは窓の外を見ながら、ため息をついた。

「ねえ、いずみちゃん。君は気に入らないかもしれないけど、しばらく、鈴森姓を名乗らない方がいいと思う。おじさん、気がかりだったから、君のことを少し調べさせてもらったんだけど……」

「しばらくじゃなくて、ずっと吉田いずみでいたいな。おじさんは気に入らないかもしれないけど……」

いずみは青洲の言葉を遮った。

「……」

「ねえ、おじさん。私、中学校を卒業した年に死んだことになっていたんでしょ？ 私がいた奉公先の旦那様はそのことを知っていたのかな？ 死人を雇ったことがバレたら、迷惑をかけちゃわない？ あ、でも、もう旦那様も亡くなっちゃってるから、大丈夫かな？」

青洲は悲しげな目でいずみを見つめる。疑うことを知らないいずみ。

仮にも、住み込みの家政婦を何人も雇う力のある家の主人が、死亡届がでている人間をそうだと知らずに雇うことなどあるだろうか。そんなことは考えられない。なんの身分の保証もないまま、いずみはその家に雇われていたに違いない。どんな虐待を受けても、いっそ殺されても、密かに処理されてしまえば、誰も罪を問わない、問われない状況だった……そういうことだ。

「いずみちゃんが心配することじゃないよ。自分とお腹の子の心配

だけしていなさい」

青洲は、いずみを背後から抱きしめた。

「でもねえ、おじさん、いずみもつと心配なことがあるんだけど……」

……

抱きしめられたまま、いずみが青洲を見上げる。

「何だい？」

「この部屋代、大丈夫？」

青洲はかっくんと肩を落とす。あれだけ赤秀に色々言われているから、相変わらず青洲のことを貧乏だと思っているらしい。青洲は苦笑する。

——そう、君は変わらない方がいい。そのままの方が……

「一晩くらい大丈夫だよ。そんなに心配なら、明日からは安い民宿にでもする？」

「民宿！」

当然のことながら、いずみはホテルも民宿も泊ったことがないので、どちらにしても大喜びなのだった。

——あれは、何の音だろう……

規則正しいようで規則正しくない、聞き慣れていない音なのに、なぜか懐かしい、寄せては引き、ひいては寄せる、心をなだめるように、解きほぐすように……。

いずみは、潮騒の音で目を覚ました。隣のおじさんは、まだ良く眠っているようだ。いずみは、カバンの中からスケッチブックを取り出すと、ベランダの椅子に腰かけて絵を描き始めた。もうすぐ、海から生まれたての太陽が昇ってくる。その瞬間を紙の中に閉じ込めたいと、いずみは思ったのだ。

ずず……ずず……ずずずず

そんな重そうな擬音がぴったりの緩慢さで、太陽はゆっくりと現れた。薄ぼんやりした大気の中を、光は、文字通り光の速さで駆け抜け、地上のありとあらゆる物に、深い影を刻み付けていく。その

光と影の表裏一体性を、いずみは一心不乱に紙に書き写していく。

「……これは……」

声に気づいて顔を上げると、後ろに青洲が立っていた。

「おじさん、おはよう」

いずみは振り返ってほほ笑む。

「これは力作だね。鉛筆だけなのに……光が見えるよ」

「実際は、光が当たって影を作るでしょ？ でも、絵だとね、影を描くと、光が現れるんだよ。不思議だよね」

「君、絵を誰かに教わったのかい？」

「正確には教わったわけじゃないの。父が絵描きだったの。死ぬ直前まで描いてたよ。風景画が得意な人でね、よく私に絵の説明をしてくれたの。ここはどこで、夕日がどっちから射してて、だからこうしたんだとか、この地方の海の成分はこうで地形がこうだから、こんな風に海の色が変化しているんだとかね。私、小さい頃、父はすごく有名な絵描きなんだって思ってたの。でも違った。名もない売れない絵描きだったの。そのうち絵具を買うのにも困るようになって、母が夜仕事に行くようになって……」

「そうだったのか……」

青洲は、鈴森心という画家を聞いたことがなかった。確かに売れない画家だったのだろう。

「それはそうと、いずみちゃん、ここはすごく寒いよ。そろそろ中に入ろう」

冬でも温暖な地域ではあるが、さすがに早朝のベランダは寒い。

「本当だ、さむーい」

いずみは、今気づいたように肩を竦めた。

「兄さんにも困ったものだ」

赤秀はオフィスの自分専用の部屋で、ため息をついていた。妹の薫を事故で失って、長男の青洲が失踪してから五年が過ぎていた。居所をようやく突き止めたと思えば、怪しげな得体の知れない女と

一緒に住んでいる。人出を使って強引に連れ戻そうと出向けば、アパートはもぬけの殻。最近、色々不穏な噂が、吉田の家に届いていた。

——もっと早く情報を掴んでいれば……

赤秀は顔を顰める。何かが水面下で蠢いている、そんな予感を赤秀は払拭できないでいるのだった。

第三話 疑心、暗鬼を生ず（3）

五年前の夏

ジリジリと照る太陽の下、真っ黒に焼けたうなじに汗を光らせながら、五人の子供たちは、黙々と草原を歩いていった。子供の背丈ほども伸びたイネ科の植物をかき分けながら、海岸を目指す。

「ねえ、まあだなの？ 兄ちゃん」

一番後ろに付いて来ていた小さな少年が、泣きそうな声を上げた。
「だけん、大河は^{たいが}ついて来んなって行つたとろ？」

一つ前に行く兄が顔を顰めた。

「だばってん、オイげな見たかもんつ、カメさん……」

小学生になつたばかりだろうが、兄を上目づかいに見るその表情には、まだあどけなさが残っている。

「歩けんなら一人で戻れ、こん先から海の中ば歩くんたい。足手まといばい」

拗ねて立ち止まる弟を一瞥すると、兄は大河を置いてずんずん先へ行く。

「えー、やだよお、来るけんお」

大河は半泣きのまま兄の背を追った。

やがて草原は途切れ、海に面した崖に辿りついた。ここからは少しばかり海の中を通らなければならない。引き潮を見計らって来たが、それでも膝上まで海水がくる。暑さでイライラしていた子どもたちは、海の水の冷たさに歓声を上げた。

島民五百人ほどの小さな島だ。島の東側に港があつて、村は、その港を取り囲むように、身を寄せ合うようにして存在する。村人のほとんどが漁をして生計を立てていた。この島には小さいながらも神社がある。海の神を祀る神社だ。その神社を守っているのが、この村の村長で、それは代々世襲制で引き継がれてきた。この島が面

している西の海は、直接大陸につながっている。そのせいか、海流にのって様々なものが漂着する。神社は、この島を守る神を祀っているのだ。

島には古くから言い伝えがあった。

その昔、凶なるもの、西海より流れ着きし

悪しき心満ち溢れ、妬みあい、憎み合い、奪い合った

四聖獣のもとに集まりし三つの神器

すなわち、鈴、縄、石もて

そのものを鎮め、縛り、封印せし、と

そして、その言い伝えを裏打ちするかのように、島の四隅には四聖獣の祠があった。四聖獣とは、すなわち、東に青龍、南に朱雀、西に白虎、北に玄武である。

村から近い青龍は言うまでもなく、歩くことを厭わなければ、海沿いの平坦な道を通って朱雀と白虎を、小さな子どもでも、比較的安易に見に行くことができた。しかし、北の玄武だけは、山に阻まれ、海を通ってしかアクセスできない。だから、子供たちは、度胸試しと、長い夏休みの暇つぶしを兼ねて、子どもたちだけで玄武詣でをすることは良くあることだった。周りを海で囲まれていることだし、ほとんどが漁師の子どもであることだし、泳ぎについてはみんな自信があるのだった。

当初の目的も忘れて、さんざん海で遊んだ後、子供たちは玄武の祠がある岸に上陸した。

「あー、あそこだよ、ほらっ」

一番年上の、健太が指をさして、駆けだす。年かさの彼は、もう五度以上も玄武詣でをしていた。健太につられて、他の子どもたちも駆けだす。

「……」

一番初めに着いた健太が、声にならない悲鳴を上げた。後に続い

た子どもたちも、健太が指し示す先を見て息をのむ。次の瞬間、子どもたちは、

「うわあ——」

と悲鳴をあげて、われ先に逃げだした。

そこには、手足と首を粉々に砕かれた玄武の姿があった。石でできているはずの玄武は、しかし、血を流していた。赤黒くドロリとした液体が、砕かれた手足や首から滴り落ち、固まっている。

兄の夏生^{なつお}が大河の不在に気づいたのは、海を泳いで草原のある岸までたどり着いた時だった。

「大河がいないっ」

慌てた夏生が再び海に飛び込む。それに続こうとしていた少年たちを健太が引き止めた。

「もう潮が満ちてきるとばい。今日は大潮だけん潮の流れが激しいんたい。オイが大人んたちに知らせて、船ば出してもらうちから、おまえらは、ここで待つてろ。夏生と大河が自力で泳いで来とつようなら、みんなで力ば合わせて助けるんだと、よかなっ」

健太はそう言い残すと、走り去った。

結果としては、健太の言ったとおりにして正解だった。子どもたちだけで行動を起こしていれば、二次災害の危険があった。結局、知らせで駆けつけた大人たちが、船で玄武の岸まで辿りつき、祠の前で倒れていた夏生と大河を見つけた。

その日から大河は意識不明のまま高熱にうなされ、本土の病院に向かう船の中で息を引き取った。夏生は熱こそ出さなかったが、その日から一言も口をきけなくなった。何があつたのか、一言も説明できないまま、口を閉ざし、そして心までも閉ざしてしまったのだった。

幼い大河の葬儀に集まった村人たちは、声を潜めて囁き合う。

「……鈴守の二男がとうてう、やられてしもうて……」

「長男は本土の某家に養子に出すことに決めたそうたい。こん先、

神社は、どがんつんやろうか。長男までやられたら鈴守んがたも、もうおしまいやろう？」

鈴守家には、春奈という長女もいたが、これは生まれてすぐ流行病で亡くなっていた。

「あのまま口がきけんなら、鈴守はもう終わったも同然やなか？」

「実は、噂で聞いたとばってん、名和家の秋子ちゃんがおったばい？ あの養子に出した。そいの先が……で、そいでこん先、名和家もどがんなるか分からんて……」

みんなは眉間にしわを寄せて黙り込む。

「そう言えば、石守はどうなつととか？」

ふと、誰かが思い出したように声を上げた

「あそこは……嫁ば取った先が……で、息子は手ばつけられんワルらしかんだと」

「村長は、東京の宗家には、もう連絡ばとつたのかな」

「そいが……ここだけの話なんばいばってん、宗家の薫様が……」

「なんと言うこと！ そがんことが……」

村人たちは、息をのんで黙り込んだ。

「……やっぱい、あがん怪しげな余所者に調査のごたつと許可したとが間違いやつたと」

真っ黒に日に焼けた肌とは対照的に、真っ白な白髪をたくわえた老人が、腕を組んだまま、眉間にしわを寄せて言った。

「なんの話ばしとつとたいか？」

若衆の一人が身を乗り出した。

「そがんの、もう三十年以上も前の話じゃなか？」

もう一人の老人が顔を顰める。

「だばってん、あれ以外に考えられんやろう？ あれ以降じゃなか？ 三家で不審死が増えたとは……」

「そう言えば、そうばい」

数人の老人達が同時に頷いた。

「立ち入りば許可しとらんとくろまでほじくりかやして、今に障り

があるぞで、みんな言っとったと……」

「だばってん、なんも見つからんやっただろう？」

「そいが……本土に渡る船の船頭が、あれがなんかキラキラしたもんば持っとったとば見たって言うんだと」

「まさか……そいは……」

突然の激しい稲光に、その場のみんなが竦み上がって窓の外を見つめた。間をおかずにやってきた雷鳴が大気を震わせる。夕立が迫っていた。

第四話 虎穴に入らずんば、虎児を得ず（1）

三十三年前の夏

島に一人の学者がやってきた。地方の村々に伝わる民話や伝説を集めているのだと言う。最初は胡散臭げに見守っていた村の人々も、学者にしては、気さくに話しかけてくる彼の大らかな性格や、どんな話でも熱心に耳を傾ける態度に、徐々に打ち解けて行った。元々が陽気でおしゃべり好きな人たちなのだ。取り立てて事件などない島での暮らしに倦んでいた村人たちは、自分の知りうる限りの伝説や口承を、喜んで彼に提供した。

だから、彼が四聖獣の言い伝えを知ったのは、かなり早い段階だった。

「へええ、そいはおもしろか伝説ばいねえ。どこで封印したとか、具体的なことは伝わっておらんね？」

彼はあつという間に、その地方の方言を操るようになった。

「さあ……村長なら知つとるんじゃないかな」

「神社の宮司さんだね？ 確か……鈴守さんやったかな？」

学者の顔に小さく快心の笑みが浮かんだが、それに気づいた村人はいなかった。

「いずみちゃん、もう中に入ったら？ 甲板は風が強いよ」

いずみは、船が出港する前から甲板に出たきり、船室に入ろうとしなかった。電車を乗り継いで、各地を転々としながら九州までやってきた。九州北西部に位置する小島に、吉田家の先祖伝来の地があった。

赤秀のことだから、一旦しつぽを捕まえたが最後、どこまでも追いかけてくるという確信が、青洲にはあった。それならば、掴まる前にどうしても確認しておきたいことがある。

「青洲……青洲じゃなかか？」

突然後ろから声がした。

「……一太、船長が持ち場を離れて大丈夫なのか？」

青洲は振り返って、ニヤリと笑う。

「なんばいよつ、こんやろー、ふざけやがって。今までどうしよつたと？ 赤秀から何度も連絡があつたとぞつ。弟ば心配させるなんて、どがん兄貴なんばいよつ」

一太はどら声を張り上げた。上背こそ青洲ほどはないが、赤銅色に焼けた筋骨隆々な体格のいい男だ。一太が繰り出した拳をすばやくかわしたものの、青洲は弾みでよろけてしまった。

「おい、歳などか、なあにば、よろけとるんだと」

一太は、拳を解く様子もなく、再び青洲の隙を窺う。

「ガラが悪いのは相変わらずだなあ」

青洲は苦笑する。

一部始終を横で見たいはずみが、小さな悲鳴を上げて、青洲に縋りついて来た。

「ああ、大丈夫だいはずみちゃん。こいつは、怒ってる訳じゃなくて、いつもこうなんだ」

青洲は、いずみの背中をポンポンと軽く叩きながら説明する。

「オイは、はらかいとるとぞつ。ところで、こんおなこの子はだいだ？」

いずみの怯えた瞳を見て、一太は一旦怒りの鋒を収めたらしかった。

「この子は、いずみちゃん。俺の……その……」

「妻ですつ」

言い淀む青洲の言葉を引き取るように、いずみが一太を睨みつけて言い放った。

「はあ？ 妻げな？」

一太は一瞬呆然とした後、青洲の袖を引っ張って、いずみから遠ざけると、ごしょごしょと耳元で囁いた。

「おまえ、志木の……ほら、あいとは別れたとか？」

「……別れた」

「それで吉田は？ 大丈夫なのか？」

「たぶん、大変だったと思う。赤秀には悪いことをしたと思ってる」
すべてを放棄して吉田を逃げ出したのだ。後始末は赤秀がやったはずだ。

「あん子いくつなんばい？」

一太の視線が、後ろで不安げにこっちを見ているいずみに注がれる。

「……十九だ」

青洲の答えを聞いて、一太は小さく呻いた。

「……オイ、赤秀が気の毒になってきた。おまえ次第では黙っていてやるうて思おとったばってん……」

「赤秀は、もう俺がどこにいるのか分かってるさ。もうしつぽを掴まれてるんだ。それに島に来てしまえば、おまえが黙っていたってすぐにばれるだろ」

小さな島なのだ。全員が通報機だと思って間違いない。

「そろそろ年貢の納め時なのは分かっているんだよ。ただ、最後に島を見ておきたくてね。いずみちゃんも連れてきてやりたかったし

……」

「……そうか」

一太は眉間にしわを寄せて黙り込むと、青洲の肩をポンポンと軽く叩いて、船室へと戻って行った。

「おじさん……」

いずみが心配そうに青洲を見上げる。

「大丈夫、大丈夫だから。もうすぐ島に着くよ。中に入るうか？」
青洲が、いずみの背中にそっと手を回す。

「おじさん、いずみのせいでおじさんに迷惑がかかっているなら、いずみ、おじさんとは別れてもいいよ。遠い親戚が都内にいるって前に聞いたことがあるし……そこに行けば……」

「いずみちゃん、俺はいずみちゃんに傍にいて欲しいんだよ。いず

みちゃんが居れば、今までずっと逃げ回ってた人生にピリオドを打てる、そんな気がするんだ」

「……」

それでも、いずみは不安を払拭できない様子で、青洲を見上げた。
「ああ、そうだ、いずみちゃんにお願いがあるよ。島にいる間は、俺のことをおじさんじゃなくて、名前で呼んでくれるかな？ 前に言ったことと逆で、申し訳ないんだけど……」

島でも、鈴森姓を隠し通すつもりで夫婦を装っている。おじさんと呼ばれるのはまずいだろう。

「……うん、分かった。青洲さんだね？」

気まじめな顔で確認するいずみに、青洲は照れ臭そうに小さく笑った。

第四話 虎穴に入らずんば、虎児を得ず（1）（後書き）

（*）はらかいとるとぞっ ↓ 怒っているんだぞ

第四話 虎穴に入らずんば、虎児を得ず（2）

二十年前、春

富士山の裾野にある温暖な海辺の町に、一人の女が人目を避けるようにやってきた。朝日に輝く富士にふと目をやり、自分でも気づかないうちに手を合わせていた。

——どうか、どうか、この子をお守りください。

大通りから少し奥まった路地に入り込み、何件か小さな民家がごちゃごちゃと軒を並べているうちの一つの家の呼鈴を鳴らす。

「秋乃？ どうしたの。こんな朝早くに……」

女と同じ栗色の癖っ毛に、鳶色の瞳が、驚きで見開かれる。

「お母さん、助けて。もうどうしたらいいのか分からないのよ」

女の縋りつくような声に、家の主は顔を顰めて女を中に入れると、辺りを用意深げに見まわしてから引き戸を閉め、鍵をかけた。

女の名前は鈴森秋乃。一方、家の主は、鈴森青子と言う。秋乃はいずみの母であり、青子はいずみの祖母にあたる。

秋乃は、数年前、斉藤心と結婚した。名もない貧しい画家だ。

当時、OLをしていた秋乃は、仲良しの同僚と行った旅行先で斉藤と出会った。彼は目の前に広がる大自然を、まるで紙の中に閉じ込めようとしているかのように、正確に、精密に、一心不乱に描いていた。

その絵の迫力に、観光客の誰もが足を止めて絵に見入る。

大抵の人は、邪魔をしないように静かに眺めて、静かに立ち去って行くのだけれど、秋乃の同僚は少し違っていた。彼の絵よりも、彼自身に興味を持ったらしいのだ。確かに身なりこそ質素だが、均整のとれた体格に、精悍な顔立ちで、描いている彼自身が絵になる人だった。

五月蠅く絵を褒めちぎり、話しかける秋乃の同僚を、最初は無視

することに決め込んでいた様子の彼だったが、描いている画材に手を出し始めた同僚の一人に、さすがに堪忍袋の緒が切れたらしかった。

「絵に触るな、おまえら五月蠅い」

深い良い声だった、しゃべった内容は別にして……。

たぶん、一目ぼれだったのだと思う。

すっかりへそを曲げて、立ち去った同僚たちを横目に見ながら、秋乃は一人その場から動けずにいた。

——あの絵が完成するところを見たい……でも、邪魔なのよね……。
「……あの、五月蠅くしてすみませんでした。でも、彼女たち悪い人たちじゃないんです。旅行中で、ちよつとはしゃぎ過ぎてたみたいで……素敵な絵だったから……あの、その……絵、頑張ってください」

恐る恐る声をかけた秋乃に、眉間のしわを解いて斉藤が振り返った。その少し驚いたような瞳に、秋乃は弱く笑んで会釈をすると、その場を立ち去った。

その日の宿泊先で、秋乃は再び斉藤と出会うことになる。

斉藤は、秋乃たちが泊った旅館で下働きをしていた。二人が、まもなく恋に落ちたのは、ある意味において運命だったのだろう。

鈴森姓を継ぐという条件で、秋乃の母青子は二人の結婚を承諾した。斉藤には、もう既に両親もなく、継ぐべき家もなく、都内のどこかに叔父がいるはずだが、ずっと連絡をとっていないので、どうなっているのか分からないと言った。天涯孤独な身の上だったのだ。すべて承知の上のことだったとはいえ、結婚生活は決して楽ではなかった。第一に安定して入るのは、秋乃の収入だけだったし、第二に斉藤には借金があった。斉藤の両親が残した負の遺産だと言う。斉藤自身は、基本的には、絵を売っているのだが、いつも絵を買いに来る業者のような人たちは、すこぶる感じが悪かった。しかも、斉藤が丹精込めて描いた絵を二束三文で買いたたいて行くのだ。

「ねえ、心、絵を違う業者さんに見せてみたら？ あんなに丹精込

めて描いたのに、こんな値段じゃ、絵具代にしかないじゃないの」

秋乃の言葉に心は苦笑する。

「ごめん。しかたがないんだ。買ってもらった値段の大半を借金返済にあててるから、これだけしか手元に残らなくて……」

「……そうなの」

そう言われてしまえば、納得するしかない。確かに心の言うとおり、借金を返している様子はないのに、取り立て屋などが家にやってきたことは一度もなかった。

異変に気付いたのは二人目からだ。そして三人目で確信する。病院を何件も変えた。だけど、結果は同じだった。

比較的早くに、秋乃は生命をお腹に授かった。ところが、いつも駄目になってしまうのだ。心音を確認して、これで一安心ですねと言われた次の週に胎児が流れてしまう。あるいは、ほぼ安定期に入ってから胎児が死んでしまう。どれもこれも不自然だった。そして、具合が悪くなるのは、いつも決まって病院に行った次の日なのだ。

三人目の子がお腹の中で死んでしまって、手術で取り出した日の夜、病院のベッドで泣き腫らす秋乃に心が声を潜めて言った。

「秋乃、俺、おまえに黙っていることがあるんだ。もしかしたら、子どもが無事に生まれられないのは、俺のせいかもしれない……」

「何？ 何のせいなの？」

秋乃は驚いて問い詰める。

「……それは……今は話さない方がいいと思う」

心は顎の下をしきりに指先でなぞる。彼が考え込んでいる時にする仕草だ。

そして、四人目を授かった時、心が言った。

「秋乃、その子が無事に産みたいなら、病院で産むことはあきらめる。リスクを覚悟の上で自力で産むか、あきらめるかどちらかしかないと思う。産むつもりなら、今からすぐに静岡のお母さんの所に

行くんだ」

そして心は、無事に生まれられない理由と考えている事情を秋乃に説明した。その内容は、あまりにも物語めいていて、にわかには信じられないものだった。

心の家は、もともと早世の家系で、子どもは病死、無事に大人になれても若いうちに事故死することが多いと言うのだ。呪われた血筋だと陰口を叩かれたこともあると言う。五人兄弟の末っ子だった心は、少しでも長生きして欲しいという親の願いから、幼いうちに養子に出されたのだと言う。

「じゃあ、斉藤って養子に出された家の名字なの？」

「そうなんだ」

「元は何て言う名字だったの？」

「……ごめん、それは、できる限り口にしないようにと、養子に出された時に、実の親にきつく言い渡されているんだ」

「私にも言えないことなの？」

「いつか……その時が来たら話すよ」

「その時って？」

「とりあえず、それは今じゃないと思う」

「……」

心の元を離れられなくてグズグズしていた秋乃に、やはり異変が生じた。つわりがひどくて、受診した産科医院で出された薬に秋乃は見おぼえがあった。二番目の子が死んでしまう前日に飲まされた薬だったからだ。

第四話 虎穴に入らずんば、虎児を得ず（3）

島に着くと迎えの車が来ていた。

「青洲！」

車から降りてきた恰幅のいい男が、青洲の肩をがっちりと掴んだ。
「鳴春、久しぶりだな。変わりはないか？」

青洲も男の手をがっちりと掴む。

「心配しとったぞ……ずっと心配しとった。なして連絡ばくれんやつたとか？」

「心配掛けて悪かったな。すまない」

「こちらは？」

鳴春は、青洲から手を離すと、いずみに目を向けた。

「いずみ、俺の妻だ。いずみ、こちらは鈴守鳴春、ガキの頃からの友人だ」

青洲が二人を紹介する。

「初めまして、吉田いずみと申します」

「……初めまして、鈴守はい……」

鳴春の戸惑ったような瞳に、いずみもまた、戸惑い気味に小さく笑んだ。

船が上陸する前、いずみは、青洲からきつく言い渡されたことがあった。

島では、決して自分が鈴森姓であることを明かさないこと。聞き覚えのある名字の人に会っても、驚くそぶりを見せないこと、その二つだった。

どうしてなのかと問ういずみに、すぐに分かるからという答えが返ってきた。そして、上陸した直後に、その理由を知ることになる。車に乗せられて着いた鈴守家は、神社の奥にあった。駐車場で降りて、徒歩で薬医門を抜ける。朱色の本殿を右に見ながら、奥の石畳を進むと、一軒の民家が現れた。門には、『鈴守』という表札が

上がっている。字は違っているものの、いずみの姓と同じ音だ。いずみは、思わず、隣を歩いていてる青洲の手を握りしめた。青洲もいずみを気遣うように手を握り返してくる。

鈴守家は、まるで息を潜めてでもいるかのように静まり返っていた。小さな子供が遊ぶような玩具が、入り口の脇にひっそりと置かれている。もう何年も使っていないのだろう、少し黒ずんで、プラスチックの部分が色褪せている。

青洲は、怪訝そうにそれらを見ながら玄関をくぐった。

「鳴春、子どもたちは？ 学校か？」

青洲の問いかけに、鳴春は小さくため息をついた。

「せっかく戻って来てくれたおまえに、いきなりこがん報告ばせならんとは、辛かばってん……大河は死んだんたい。夏生は、その時に精神的なショックを受けて……今、本土の病院に入っとる」

「……いつ」

青洲は、呆然と呟くように問う。

「五年前だ」

「五年前……」

鳴春は、五年前の出来事を、まるで昨日のことにように語った。

夏生が回復し次第、某家に養子に出すつもりにしていたが、いっこうに回復の兆しはなく、ほぼ諦めていること。三年前には、心労から、妻、多賀子も体調を崩してしまったので、本土の実家に帰していることなどを、疲れきった表情でぼつりぼつりと話した。

「そんな大変なことになっていたなんて……知らなかったとはいえ、すまなかったな……何の力にもなれなくて……」

青洲は、沈痛な表情で鳴春に深々と頭を下げた。

「大変やったとはお互い様たい。そいに、こん件は、つい最近まで宗家にも知らせとらんやったと。薫様の件で、宗家も大変やったとは知っとなし、こっちは、事件とも事故とも判別できんやったけんな」

鳴春は、小さくため息をついた。

「警察がそう言ったのか？」

青洲は、眉間にしわを寄せる。

「本土の病院の見立てでは、大河の死因は肺炎による呼吸困難だったと言いたい。風邪ばこじらせたとうて。肺炎なら事件じゃないか。そうばってんか、そがんの信じらるつか？ 前日までピンピンしとったとぞ？ 夏生に関しては、なんがあつたかも話せん状況だけん、原因不明ときたもんたい。精神的なもんやろうて……」

鳴春は、吐き捨てるように言葉を投げ出した。

「……玄武のことは？」

「当初は、本土から警察もしてきたばってん、所詮単なる器物損壊たい。そんな程度の扱いで終わった」

「赤い液体は？ 血じゃなかったのか？」

「あいは、血じゃなかった。木イチゴか野イチゴの類やろうて、警察は言つとった。単なる性質の悪か悪戯やろうて……」

鳴春は、悔しそうに言葉を途切れさせた。

「……」

居心地の悪い沈黙が支配する。

いずみは、突然、頭から血の気がすーっと引いて行くを感じた。気分が悪くなつて口を押えて屈みこむいずみを、青洲が抱き起す。

「いずみちゃん？」

「ごめんなさい、少し気分が悪くて……」

鳴春は、既に客間を準備していてくれたらしく、いずみと青洲は、奥庭に面した更に際立つて静かな一室に案内された。

「まっと（＊１）前から知つとつたら、窓ば開けて空気を入れ替えておいたとが、さつき、一太から無線で連絡が入って慌てて準備したけん、ちよつと空気が悪かな」

そう言いながら、鳴春が部屋の窓を全開にしていく。

「さむうなつたら窓ば閉めろ。布団は、押し入れの中にあっけん、

すいとつこと（＊２）使こうてくれ。勝手知つたる離ればい？」

鳴春は、小さく笑んだ。

「悪いな、気を遣わせてしまつて……」

「悪かと思うなら、鎮守様にきちんと手ば合わせて、五年間も放つたらかした今までん行いば詫びておけ。賽銭も忘るんなよ」

鳴春は、悪戯つぽく笑うと戻つて行つた。

「おじ……青洲さん、ここつて……」

手早く延べられた床に横たわらせられながら、いずみは、不安げに青洲を見上げる。

「ここは、俺の……というよりも、吉田の家と縁の深い神社なんだ。代々鈴守の家が守つてきた。俺や俺の兄弟は、みんな東京生まれなんだけど、神事や祭とか、何事がある度に、この島に戻つてくるもんだから、幼馴染の友達がたくさんいるんだ。いつも、この離れを使わせてもらつてね。小さい島だから、たぶん、もう君のことも知れ渡つてることだと思う。色々聞きたいことがあるとは思つけど、しばらくは胸の中にとめておいて、この島ではゆっくりしておいてほしい。俺は、少し調べたいことがあるから、いずみちゃんを置いて出かけることがあるかもしれないけど、心配いらないから……」

「おじさんつ、どこかへ行くの？」

いずみが慌てて起き上る。

「おじさんじゃないだろ？ 大丈夫、どこかに行く時には、ちゃんと君に言つてからにするから」

「やだ、いずみを一人にしないで、なんだか怖い。おじ……青洲さんがどこかに行くなら、いずみも付いていく」

この島に着いてから、なんだか落ち着かないのだ。胸の奥がざわざわする。いつもはお腹の中でぐりんぐりと元気に動き回っているマメ太が、島に着いてからは、息を潜めているかのように小さくしか動かない。まるで獲物をねらう肉食獣に出くわしてしまったかのように……。

「……分かつた。君を置いて行かない。だから心配しないで、少し

眠りなさい」

母屋に戻ると、鳴春が待ちかねていた。

「青洲、奥さんは、病気なとか？ 医者に連れて行かんでよかとか？」

鳴春が、まくしたてる。

「いや、たぶん疲れているだけだ。心配ないと思う。彼女、妊娠しているから、疲れやすいんだろう」

青洲の言葉に、鳴春は、我が意を得たりと目を輝かせた。

「やつぱいかつ、そりゃ、めでたい！ んにやろ、一太め！ ロクでんない噂話ばっかい持ち帰りやがって」

「ロクでもない噂？」

青洲は、首を傾げる。

「ああ、気にせんでくれ。あいつ適当な噂話ば聞きこんじゃ、オイの所にしてくるんたい（＊３）。酒は飲みにくる口実にしとるのさ。おまえが五年前に失踪したとは、薫様のことも、もちろんあったやろつが、本当は、奥方とうまいいかんやったとが原因げな言っんたい。そんうまく行かんやった理由が、おまえが……そん……不能やったとか、そん……実はシスコンやったとか……」

鳴春は、ゴニョゴニョと言葉を濁した。

「……」

青洲は、黙り込む。

「全く、馬鹿な噂話ったい。不能なやつが、なして子どもば作れるかよ、なあ。今度、一太ばとっちめてやらな。そーだ、今夜呼びつけよう。久しぶりに、一緒に飲もうっ」

鳴春は、嬉しそうに連絡を取りに出て行った。一人残された青洲は、深いため息をついた。

(* 1) まつと ↓ もつと

(* 2) すいとつごと ↓ 好きなように

(* 3) してくるんたい ↓ やってくるんだ

第五話 瑠璃も玻璃も照らせば光る（1）（前書き）

瑠璃^{るり} 青色の宝石（ふつつは、ラピスラズリをさす）
玻璃^{はり} 水晶

第五話 瑠璃も玻璃も照らせば光る（1）

鈴守家には、百人を超えるだろうと思われる島民たちが集まっていた。神事がある度に人が集まる家なので、宴会の場所には困らないし、料理もそれぞれの家からの持ち寄りで、溢れるほどの量が集まりつつあつて問題はないのだが……広間に集まっている人数を見て、青洲は顔を顰めた。

「おいっ、一太と飲むって話だったんじゃないのか？」
途方に暮れる思いで、鳴春を見つめる。

「そんつもりやったとばってん、一太のやつが、おまえの帰郷ば島内放送で流しとったとよ、船から無線で……」

鳴春が困ったように眉を下げた。

「なんで島内放送なんか流すとぞ……」

青洲は、めまいを覚えながら、ついつい方言で文句を言ってしまう。
う。

「ま、よかじゃなかか。ここ数年、辛気臭い空気が島中に蔓延しとったから、みんな陽気に騒ぎたかじゃ。めでたい話もあることだし……」

鳴春は、笑いながら青洲の背中をバンバン叩いた。青洲は顔を顰める。

いずみは、一人、青い海が広がる砂浜に佇んでいた。

まるで絵具でも溶かしこんだような青い海だ。海岸には人っ子一人いない。時折ぬるい風が、穏やかな海面を吹きわたってくる。

「きれいな海……」

汀を歩きながら生き物の影を探す。

小さくてすばしっこいカニが隠れていないだろうか、きれいな貝殻が落ちていないだろうか……好奇心に満ちた瞳で辺りを見回す。
でも、あるのは果てしなく広がる砂浜ばかり。沖に目をやるが、魚

影一つ、海藻一つ見当たらない。

「変ねえ」

いずみは首を傾げる。

せめて海水に触れてみようかと、手を伸ばしかけて、ふと思いとどまった。

——嫌だ。この海水に触れてはいけない……だって、私、知ってる。この海は……毒の海だ。

慌てて引っこめようとしたいずみの手首を、突然、何か白いものが海から突き出して引き止めた。

「！」

声も出せずに、息をのむ。

それは、真つ白な骨だった。上腕から先の白い骨が、次々と海から突き出してくる。振りほどこうとするいずみの腕に、無数の白い骨の腕が絡みつく。絡みついた骨は、凄まじい力で、いずみをじりじりと海へ引き込み始めた。

「いやっ、いやあ」

素足のつま先に海水が触れる。

「いやあ——」

指先に鈍い痛みが走って、皮膚が紫色に変色する。骨の髄に染み込むような鋭い痛みでめまいがした。

「いやあ、助けて、青洲さん、青洲さんっ」

様子を見に、離れへ戻って来ていた青洲は、いずみの悲鳴に驚いて部屋の障子を開けた。

「いずみちゃん！ いずみちゃん、起きなさい、夢だよ。いずみちゃん！」

いずみは、悲鳴を上げながら目を覚ました。

「青洲さんっ、青洲さん、骨がつ、骨がつ！」

「いずみちゃん、大丈夫、夢だから。骨なんてどこにもないよ。大丈夫だよ」

青洲は、未だに硬直して震えているいずみを抱きしめた。

「夢じゃないっ、だって、夢じゃないよ……」

「夢だよ。ほら、周りを見てごらん、骨なんてどこにもないだろ？」
いずみは、こわごわと周りを見回す。さっき青洲に寝かしつけられた離れの部屋だ。

——海じゃない。

少し落ち着いて来る。

「ほらね、夢だったろ？」

いずみが青洲の目を見つめて、少し気まり悪げにほほ笑んだ次の瞬間、いずみの表情が凍りつく。

「せ、青洲さん……」

いずみの視線を青洲が辿る。いずみの右腕には、強く指で圧迫されてできたような青あざが無数に刻まれていた。

「……」

ガタガタ震えるいずみを、青洲は強く抱き寄せた。

「……さっき船に乗っていた時に、君が船から落っこちないか心配だったから、俺が強く握り過ぎたんだよ、きつと……」

青洲は、そう言ったが、いずみは全然納得できないでいた。確かにずっと右手を青洲と繋いでいたけれど、腕を掴まれて痛かったという記憶はなかった。

「それよりも、いずみちゃん、ちょっと厄介なことになっているんだ」

青洲は、困ったように眉を下げた。

聞けば、青洲といずみの為に島中の人たちが集まっているという。いずみは、たじろいだ。迎えの車が来ていた時点で、少し落ち着かない気分になっていたのだ。赤秀に色々言われた時に薄々気づいてはいたが、赤秀は青洲によく似ていたので、何を言われても、逆にあまり実感がわかなかった。でも、ここの人たちの、青洲に対する態度を見ていれば分かる。ここは、自分が居ていい場所じゃない。

いずみは、そんな気がしてならない。

「えと、君の旧姓は何にしようか？　きつと根掘り葉掘り聞かれると思うんだ……話を合わせておかないと……」

「おじ……青洲さん、私……きつと青洲さんの妻になんてなれない人間だよ。身分違いなんでしょ？　一時的にとは言え、私、きつと青洲さんに迷惑をかけるよ。やつぱり、嘘はいけないよ。私には無理だよ。だつて私、馬鹿だし……」

いずみは、途方に暮れたように言つて、うなだれる。

「いずみちゃん、さっき言つたことを忘れちゃった？　俺は君が必要なんだよ。確かに俺は吉田の家の長男で、家督を継ぐ立場にいた人間だった。だけど訳あつてすべてを放り出した人間だ。島の人たちは、俺のことを吉田の長男だからって、たてってくれるけれど、それは形だけのものだと思つてくれて構わない。俺には、もうなんの力もないんだよ。だから、ずるいようだけど、好意だけを受け取つて、それを返すことができない。こんな不甲斐ない俺こそ、君に相応しくないんだろうけど……もし、いずみちゃんさえ嫌じゃなければ、一時的にじゃなくて、ずっと俺の妻でいて欲しいって、思っているんだけどね……」

そう言つて、青洲は、うなだれているいずみの耳元に軽く唇を寄せた。

「……」

いずみも、切なげに青洲の頬に口づける。

「とにかく、今夜は我慢して付き合つてくれるかな？」

青洲の言葉に、いずみは小さく肯いた。

「じゃあ、旧姓は斉藤で……」

いずみは小さな声で、呟くように言う。

「それは、お母さんの旧姓？」

「いえ、父の旧姓です。父は養子だったの」

「え？　鈴森姓だったのはお母さんの方？　確か……秋乃さんだったよね？」

いずみの説明に、青洲は少し驚いたようだった。

「そうだけど……」

いずみが怪訝そうに青洲を見上げる。青洲は、突然、はつとした様子で目を見開いた。

「いずみちゃん、俺、うつかりしていた。色々注文をつけて申し訳ないんだけど、鈴森のことだけじゃなくて、奉公先の家のことも口にしないって約束してくれる？」

「うん、分かった……けど、どうかしたの？」

「今度、島を出てから話すよ。君のお母さんが鈴森姓なら、まず間違いないだろう。俺、鈴森姓だったのは、お父さんの方だと思ってたから……。それなら、わざわざ島に来るまでもなかったかもしれないな……」

「なんだか気になるなあ、なんの話なの？」

「……それはね……」

青洲が少しでも説明しておいたほうが良いかと、重い口を開いた時、突然ドカドカと廊下を歩く音が近づいてきた。

「おい、青洲、ボチボチ始めるぞ。いずみちゃんの具合はどがんか？」

一太が、一升瓶を肩にしょいながら、どら声を張り上げた。

第五話 瑠璃も玻璃も照らせば光る（2）

卓上の豪華絢爛な料理に、いずみはすっかり委縮してしまった。

大皿に盛られた新鮮な魚介類の造り、豚の角煮、南蛮漬けや、様々な野菜の煮物、しんじょ、ウニをふんだんに乗せた押し寿司。銘々の席には、小餅や白身のお魚、海老、玉はんぺん、鶏肉、シイタケ、三葉などが彩りよく入った汁椀が付いている。

「……青洲さん……」

いずみは困惑した表情で、青洲を見上げる。

——何もかもが立派な席で、自分だけが、みすばらしい。釣り合わない。

カタカタ震える小さな手を、青洲が、励ますようにぐっと握りしめた。

「それぞれの家に得意料理があつてね、何かあると、こうやって持ち寄って宴会を開くんた。無理にとは言わないけど、少しずつでいいから、どれにも箸をつけてあげてよ。そうしたら、みんな喜ぶから」

青洲の説明に、いずみは小さく肯いた。

島の人たちは、本当に陽気な人達らしかった。最初は委縮していたいずみも、すっかり打ち解けて、笑い声をあげるまでになる。訊かれれば、先ほど青洲と打ち合わせた通りの馴れ初めや、身の上を答える。旧姓や、どこ出身かとか。青洲との出会いは、市の仕事場だったことする。たわいのない質問に、二人はスムーズに答えて行った。すべてが順調だった。

場がくだけてきて、料理もだいぶ片付いてきたので、厨房まで使った皿を下げる。ついつい、今までの習性で、いずみはマメに立ち働いていた。みんな口々に、いずみは、そんなことをしなくていいと止めてくれるのだけど、なんだか座っているのが落ち着かなくて、チヨロチヨロしてしまう。そんなに何かしたいのなら、子ども

と遊んでやってくれと言うので、いずみはスケッチブックをとってきた。宴会に連れて来られたものの退屈して、子どもたちが騒ぎ始めていたのだ。子どもたちを集めて、似顔絵を描いてあげることにした。

「あれ？ そんなに緊張した顔しなくてもいいんだよ？」

いずみの前で正座をして、口を真一文字に引き結んだ男の子を見て、いずみは苦笑する。

「どがん顔ば、しとればよかと？」

一番手の男の子は困惑して訊く。

「普通にしてて」

男の子は、更に困惑して、更に硬い表情になった。

「^{はちて}颯の真面目な顔ば、初めて見た気がすつとよ」

女の子たちが、はやし立てるので、颯は顔を真つ赤にして、からかった女の子たちに掴みかかった。

「喧嘩はやめてっ、颯君。こうしよう、みんな、とにかく座って。

みんなで歌える歌があるでしょ？ それをみんなで歌っててよ」

いずみの提案に、男の子たちからはブーイングが上がり、女の子たちは、口々に流行りのアイドルの歌をそれぞれに主張した。

「みんなが一緒に歌えるのがいいわ。学校で習っている歌にしようよ」

この提案には、男の子たちも女の子たちも不満だったらしい。みんなぶすつとした顔でいずみを見上げる。いずみはすっかり困ってしまった。

「じゃあ、いずみちゃんがんばんか歌ってよ。そうしたらオイらもそいば歌うから」

困っているいずみに、助け船を出したのは、意外にも颯だった。いずみは、ほつとして小さく笑む。

「いずみ、あまり歌を知らないよ。童謡で良ければ……」

子どもたちがいいと言うので、いずみは金糸雀^{かなりや}の歌を歌い始めた。

唄を忘れた 金糸雀は かなりや
後の山に 棄てましょか うしろ
いえ いえ それはなりませぬ

唄を忘れた 金糸雀は かなりや
背戸の小藪に 埋けましょか せとこやぶ
いえ いえ それはなりませぬ

唄を忘れた 金糸雀は かなりや
柳の鞭で ぶちましょか むち
いえ いえ それはかわいそう

唄を忘れた 金糸雀は かなりや
象牙の船に 銀の櫂 ぞうげ かい
月夜の海に 浮べれば うか
忘れた唄を おもいだす

(西條八十作詞・成田為三作曲)

一緒に歌うと言っていた子どもたちだったが、いずみが歌っている間、ぼんやりとしたまま誰も歌わない。

「もしかして、知らない歌だった？」

歌い終えて、いずみが子どもたちに問いかけた途端、子どもたちは、まるで夢から醒めたかのように、「へー」とか「ほー」とか感嘆の声を上げた。

「昔の曲過ぎたかなあ？」

心配そうに問ういずみに、

「なんか、すごか気持ち良かった」とか、

「なんか、月夜の海に象牙の船ば浮かべて乗ったような気分やったー」とか、子どもたちは口々に感想を言った。

いずみの歌に聞き入っていたのは子ども達だけではなかったらし

い、小さな拍手が大人たちから湧き起こる。

「いずみちゃん……」

青洲だけが、少し困った顔をして、いずみの傍に腰を下ろした。

「似顔絵を描くんだっただろ？」

「あ……うん。ほらほら、今度は君たちの番だよ。歌ってね」

子どもたちは、何かゴシヨゴシヨ相談をしていたようだったが、結局、金糸雀の歌は歌わずに、『ビリーブ』や『翼をください』など、学校で習っていた歌を声をそろえて歌いだした。

似顔絵の方も好評で、いずみの歌の余韻は、すっかり払拭される。青洲は、少しほっとした様子で、いずみの傍を離れた。

宴会が終わって、三々五々家路へと向かう人々を門まで見送る。最後の人が薬医門を後にした時、青洲といずみは、どちらからともなく小さくため息をついた。

「いずみちゃん、疲れただろ？」

「少しね。でも楽しかったよ。みんな陽気で楽しい人たちばかり。

青洲さんは、あんな人たちに囲まれて暮らしていたんだね……私とは大違い」

いずみは、少しだけ寂しげに笑った。

憂いを帯びたいずみの表情に、青洲はしばし気遣わしげにいずみを見つめると、背中を小さくポンポンと叩いた。

「……戻ろつか？」

青洲は、そつといずみの肩を抱いて歩き出す。

鳴春が、離れのお風呂を準備してくれていると言う。先に入りなさいと青洲が言うので、いずみは浴室へと向かっていた。

渡り廊下から奥庭の枯山水が見渡せる。盛りを過ぎた白いサザンカの花びらが、暗闇の中、風もないのにらはらと散っている。いずみが、それに見とれていると、背後からしゃがれた声が聞こえた。「匂う、匂うね、毒の匂いたい。みんなは、だましても、こんな寄

りばだますことはできんよっ」

いずみが驚いて振り向くと、背後に白髪の老婆が立っていた。目が悪いのか、瞳が白く濁っており、あまりよく見えていない様子だ。「……毒の……匂い？」

「そうさね。そん腹ん子は、だいの子だい？ あんたみたいな娘に、青龍が触れらるっわけがないんたい。あんたは、志木のあのおなごと同じ毒の匂いがすっ」

老婆は吐き捨てるように言った。

「……シキの女？」

いずみは目を見開いて、老婆を見つめたまま固まってしまう。

「正直にゆわんね、そん腹ん子はだいの子だい？ 場合によっちゃ、容赦せんよっ」

老人はいずみに掴みかかってきた。危険を感じたいずみは、腕を掴む老女を振り切って逃げようとするが、まるで猛禽類に捕まえられた獲物のように、振りほどくことが出来ない。恐怖で叫び出しそうになった時、青洲の声が聞こえた。

「朱音ばあちゃん、いずみを離してやってくれないか？」

青洲は、掴まれているいずみの腕をやりわりと取り返す。

「青洲ぼっちゃん！ そがん娘に触れてはいけまっせん。穢れますけん」

老婆は声を張り上げた。先ほどとは違う、朗々とした張りのある声だ。

「いずみちゃんに触れて穢れるんなら、もうとっくに穢れているよ。ずっと一緒に暮らしているんだから。でも、穢れてるなんてちっとも思わないよ。むしろ逆だと思っ」

いずみと居ると、どんどん心が浄化されていく気がしていた。

「ふん、そいは青龍の御加護が無くなってきた証ばい。今すぐ神社へ行って、禊ぎば受けた方がよかばい」

朱音ばあさんは、鼻息荒く青洲まで睨みつける。

「神社へは、もう行ったよ。鳴春がうるさいから」

「そいは良かった。そいなら、もうすぐにでん、こんおなごの正体に気づけることやろうよ。大体こんおなごは、結婚もせんうちから……」

「そんな話よりも、俺、朱音ばあちゃんに訊きたいことがあるんだ」
青洲は、くどくど続きそうな朱音ばあちゃんの小言を遮った。

「なんばいね？」

朱音ばあちゃんは、怪訝そうに眉根を寄せた。

「鈴守の分家つてあるのかなあと思ってね。余所の県に行った人とか、上京した人とか……」

青洲の言葉に、朱音ばあちゃんは一瞬絶句した後、険しい顔になった。

「なして、そがんことが気になるのね？」

「村の人たちが心配してるじゃないか。夏生君が回復するのが一番だけど、もし鈴守が分家していて、その血筋が残っているようなら、赤秀に頼んで探してもらうことも必要かと思っただよ」

青洲は用心深く答える。

「ふん、鈴守は分家なぞしておらんばい。こん島は守ることが一族の誇りなんやけん、こん島における鈴守以外は、ひとつもおらん」

朱音ばあちゃんは、胸を張った。

「……そうなのか……」

青洲は、眉間にしわを寄せる。

「……ただ、一人だけ、島は出て、鈴守捨てた馬鹿者がおったとばいよ」

「鈴守を捨てた……」

青洲は、ごくりと唾を飲み込んだ。

——ビンゴだ。

「もう鈴守とは関係のないおなごばい。除籍されておるしね。風の噂では、死んだて聞いとつよ。ロクでんない死に方やったとか……」
朱音ばあちゃんは、吐き捨てるように言ったが、その言葉は、悲しみを堪えているように、語尾が震えていた。

「それは誰だい？」

「……青子^{せいこ}ばい。鈴守青子……オイの一つ違いの姉やった」

朱音^{あちゃん}は、気まづげにそう言い捨てると、そそくさと廊下を戻って行った。

第五話 瑠璃も玻璃も照らせば光る（3）

「青洲さん……青洲さんは、何を知っているの？ 何を調べようとしているの？」

暗闇の中、いずみは隣の布団の青洲に問いかける。

「……君をきちんと守りたいんだよ。その為に必要な情報を集める」

少しの沈黙の後、慎重に言葉を選びながら、青洲が答えた。

「……ねえ、青洲さん、そっちの布団に行ってもいい？」

「……いいよ、おいで」

青洲は、少し体をよけてスペースを空けながら、掛け布団を持ち上げる。いずみは、そこに体を滑り込ませると、青洲の胸に顔を埋めた。

「……」

——何から訊けばいいのか……。

いずみの頭の中は混乱を極めていた。こんな時、自分の頭の悪さが、ほとほと嫌になってしまう。

「色々気になってるんだろっね……」

黙り込むいずみに、青洲が声をかける。

「……宴会が始まる前に、話しかけていた話をしておこうか」

青洲は、いずみの髪を優しく梳きながら、話し始める。

「まず、何故、君のお母さん、秋乃さんが鈴森姓なら間違いないと言ったことから説明しようね……」

この島を守る四聖獣の伝説は、古くから口承で伝わっているものだ。古い言い伝えであるにも拘わらず、少なくない数の島民が、その伝説をかなり根強く信じている。いや、むしろ、島民全員が信じていると言つていい。四聖獣はこの島の守り神である神社を、三つの神器は三家『鈴守家』『名和家』『石守家』の血筋を象徴していると言われる。だから、吉田を含めた四家では、代々、子どもに四

聖獣に因んだ名前をつけるのが習わしとなっていた。

一番目の子どもには、青龍に因んだ名前、色なら青、季節なら春、方角なら東、陰陽五行ならば木。二番目の子どもには、朱雀に因んだ名前、色なら赤、季節なら夏、方角なら南、陰陽五行ならば火。三番目の子どもには、白虎に因んだ名前、色なら白、季節なら秋、方角なら西、陰陽五行ならば金。四番目の子どもには、玄武に因んだ名前、色なら黒、季節なら冬、方角なら北、陰陽五行ならば水だ。だから、おじさんは、青洲って、青がつく名前なの？」

「そのとおり」

「じゃあ、赤秀さんは二番目？」

「そう言うこと、その下の弟が白舟で、四番目の妹が薫だ」

「薫？」

——何が玄武に因んでいるんだろう？

「そう、ほら、『薫』という漢字の中に黒が隠れているだろう？」

青洲は、いずみの掌に『薫』という漢字を書いてみせる。

「でも、それなら、母は、鈴守家とは関係がないと思う。ただの偶然じゃないかな。だって、母は一人っ子だったもの」

一番目なら、青龍に因んでなければおかしい。

「君、お祖母さんのことは、聞いたことがある？ たぶん、年齢からして、さつき朱音ばあちゃんが言っていた鈴守青子さんなんじゃないかと思うんだ……」

「お祖母ちゃんのことなんて、聞いたことがなかったわ……父さんも母さんも、極端に自分の出身のことを話したがいなかったから……」

……

いずみは、少し辛そうに言った。

「そうか……その辺のことは、東京に戻って調べるしか仕方がなさそうだね……でもね、君は『鈴守』の血を継いでいるよ、恐らく間違いない」

青洲は確信しているようだ。

「どうして？」

いずみは青洲を見つめる。

「どうしてもだよ。でも、このことは、特に、この島では絶対口にしてはいけないよ」

青洲はいつになく、厳しい口調で言う。

「でももし、鈴守青子さんが、私のお祖母ちゃんなら、この家は私の親戚になるってことじゃない？」

いずみは、少しはしゃいだように言った。

「もし、そうだとしても、絶対に自分が親戚だなんて言うては駄目だよ、約束してくれ」

青洲は、更に厳しい口調でいずみを諭す。

「うん、分かった。約束する」

怪訝そうに、でも神秘的な様子で、いずみが頷いた。

「……ねえ、いずみちゃん、ここで眠るつもりなら、俺の方に背中を向けて寝てくれる？　なんだか、こうしていると、もう一人がサンドイッチの具になってるみたいで不安なんだけど……」

青洲が少し困ったように、軽くいずみのお腹に触れる。いずみは、軽く、クスツと笑って青洲に背中を向けた。青洲は、いずみの背後から包み込むように腕を軽く回す。いずみは、回された青洲の手を抱え込んで、軽く口づけた。

「ねえ、青洲さん……シキの女の人のことって、いずみが訊いてもいいこと？」

「……」

青洲の幽かな動揺が指先から伝わってくる。

「ごめんなさい、青洲さんが話したくないことなら、いずみは聞きたくないの。ただ、朱音おばあちゃんが言ったことが気になって……シキの女と同じって……」

——同じ毒の匂いって……なんのことだろう。

「……ごめん、いずみちゃん、その人については、まだ冷静に話せる自信がないよ。その人は、俺のかつての配偶者で、今はもう他人だ。いつか話せるようになったら、いずみちゃんには、きちんと話

すから。少し時間をくれるかい？ それから、朱音ばあちゃんのこととは、あまり気にする必要がないと思うよ。俺の兄弟が連れてきた吉田の嫁になる人には、大抵ああやって脅しをかけると言うか……釘をさそうとしてしまうようだね……」

青洲は、苦笑する。

「釘をさす？」

いずみは首を傾げる。

「そう、将来、尻に敷かれないうにとの、朱音ばあちゃんりの配慮らしいんだ。でも、赤秀の嫁さんの時はすごかったよ。この嫁は狐憑きだつて、みんなの前で言い張つて……」

青洲は、思い出したようにクスクス笑う。

「狐憑き？ そんな……」

いずみ自身、毒の匂いがすると言われて、かなりショックだったのだ。それをみんなの前で、言われたら……いずみは、絶句する。

「いつか会うことがあるかもしれないけど、赤秀の嫁さんは、ものすごい美人だね。でもその気性の激しさが、現れているようで、朱音ばあちゃんは気に入らなかつたらしいんだ。でも、冴子さんは、そんなことを言われても凹む人じゃなかつた……」

『狐憑きですって？』

当時フィアンセだった赤秀の妻、冴子は、一瞬目を見開いて、美しい眉根をぎゅっと寄せた後、その美しい口元に妖艶な笑みを浮かべた。

『おばあちゃん、狐は狐でも、私はね、九尾の狐（*）なのよ。滅多なことを言つてると、あなたも食い殺しちゃうわよー』

凄まれた朱音ばあちゃんは、竦み上がって、念仏を唱えながら脱兎のごとく奥の間に消えたのだった。島民が、未だに語りつくす逸話だ。

聞き終えたいずみも、クスクス笑う。

「赤秀も冴子さんも、仲の良い夫婦だよ。彼女は、赤秀の前だけでは、九尾の狐どころか、生まれたての子猫みたいに従順になっちゃうからね。今流行りのツンデレ系……って言うんだっけ？ とにかく、仲が良いんだよ」

青洲もクスクス笑った。

眠りにつきたいずみの髪をゆつくりと梳きながら、青洲は考える。朱音ばあちゃんは、口こそ悪いが、心根の真つ直ぐな人だ。吉田の為になら、自分が悪者になっても、最善と自分が信じる行動を取ろうとする。赤秀の嫁への狐憑き呼ばわりには困ったものだが……。白舟の嫁については、良家の令嬢だったので、さすがに表立って釘をさすことはなかったが、裏で、ちくちくやっていたらしい。

青洲は、ため息をつく。青洲の結婚は、いわば、政略結婚だった。事態を丸く収める為の計算づくの結婚だった。その人をお披露目する為に、島へ連れて帰った日の夜を、青洲は未だによく覚えている。その人を一目見るなり、朱音ばあちゃんは、息を潜めるように沈黙した。そして、その人の目の届かないところで、そつと青洲に耳打ちしたのだった。

「青洲ぼっちゃん、あいはようないおなごばい。毒の匂いがすつ。寝首ばかかれんよう、油断してはならんとよ」と……

(*) 九尾の狐 9本の尻尾をもつ妖狐。つまり、狐の妖怪のことで、アジア全土をまたにかけ、金毛白面の大妖怪。日本では、「玉藻の前」という官女になり、鳥羽法皇に近づいて朝廷を乱した。これは、陰陽師の安倍康成に正体を暴かれ、下野の国、那須野にのがれ、そこで追手に掴まり退治された。だが、九尾の狐の体は朽ちたが、執念は残り石となったと言われている。この石が「人間はも

ちろん、空を飛ぶ鳥、地を走る獣まで、近づき触ったものは命を失う」という強烈な毒気を発した為、玄翁という僧が石を砕いて毒気を消滅させた。これが、現在も那須で見ることのできる殺生石なのだ。

（ウィキペディア、および、世界の「神獣・モンスター」がよくわかる本、を参考にしました）

第六話 能ある鷹の爪を隠せ（１）

「秋乃っ、昨夜はどこに泊ったんだっ」

朝食の味噌汁を温めながら、いずみは一人台所で身を縮めた。

昨夜帰ってこなかった母親が、今帰って来たのだ。これからきつと一悶着あるに決まっている。小学校には、今日も行けないかもしれない。

「どこに泊ったかなんて聞いてどうするのよ？」

秋乃は、煙草に火をつけながら眉間にしわを寄せた。

「母親が朝帰りなんて、子どもの教育に良くないくらい、少し考えれば、分かりそうなものを……」

心も負けずに眉間にしわを寄せる。

「何が子どもの教育よ。誰のせいでこんな仕事をしなきゃならなくなっただって思ってるの？」

秋乃は、点けたばかりの煙草を灰皿にグシャグシャと押しつけた。酒も煙草も、夜の仕事を始めてからおぼえた。

「笑わせるんじゃないわ。子どもの教育なら、現実をしつかり教えてやりなさいよ。金にも能力にも男にも恵まれなきゃ、女は体を使って働くしかないんだってさ！」

心は、体を壊して寝込みがちになっていた。絵は描いていたが、相変わらず安い値段で買ったたかれており、最近では絵具代にさえ困るようになってきていた。秋乃に夜の仕事を紹介したのは、いつも来る画商の男だった。

『なに、夜の仕事と言ったって、お酒を作ったり、お客の話相手をしたりするだけの簡単な仕事だ』

男はそう言った。

それまで勤めていた会社は、いずみを密かに出産する為に辞めてしまっていたからだ。

「……客をとっているのか？」

心が、かすれた声で問いかける。

「……仕事と言われれば、客だつてとるわよ。それが夜の仕事のゲ
ンジツつてもんでしょ？」

秋乃はしゃがれた声で、せせら笑った。

しばらく、言い争う怒声が飛び交っていたが、やがて、荒々しく
ドアを閉める音がして、居間が静かになった。いつものように心は、
どこかへ出て行ったらしかった。

貧困が、家庭を蝕んでいた。

いずみは、小さくため息をついて、母親の為にご飯とみそ汁をよ
そう。

「母さん、お疲れさま。ご飯、食べるでしょう？」

卓袱台の上の灰皿を片づけて、母親の前にご飯を並べる。そんな
いずみを秋乃は忌々しげに睨みつけた。

「ああ、あんたの声を聞くとイライラする。ご飯なんかいらないわ。
あたしに話しかけないでちょうだい。あーあ、子どもなんて産むも
んじゃない。お金がかかるばかりで、ちっともいいことなんてあり
やしない。おまえなんか生まれて来なきゃよかったんだ、おまえは
疫病神だよっ」

秋乃はそう言い捨てると、奥の部屋に行った。

恐らく布団にもぐりこむんだらう。そして、夕方まで起きて来な
い。父はお昼になるまで戻らないだらう。いずみは、一人、卓袱台
の前で途方に暮れる。

いずみは、いつもこうだ。悲しいとか辛いとか感じる前に、途方
に暮れてしまう。たぶん頭が悪いからなんだと、いずみは思ってい
るが、それは彼女なりの防御反応の一種だった。悲しさとか辛さを
感じる前に、心に麻酔を打ってしまう。

「……ごめんなさい。生まれてきて……」

誰に言うでもなく、いずみは、小さくぽつりと呟いた。

* * *

おびただしい数の白い小さな腕、腕、腕……

手に足に首に絡みついて来る。

——動けない、苦しい、息ができないっ……誰か助けて！

——誰か、誰か、誰か……誰？

霧の少し前方に、大きな背中が見えた。ぼんやりと青く光っている。

——父さん？ 違う！ おじ……青洲さん助けてっ

必死で伸ばしたいずみの手を、大きな手が包み込む。

「いずみちゃん！」

肩で息をしながら目を開けると、青洲がいずみの手を握りしめていた。

「大丈夫？ また夢を見たかい？」

「青洲さんっ」

いずみは青洲に縋りつく。

「青洲さん、青洲さんっ」

「大丈夫だよ。怖いものなんて何もいないよ」

島に来て三日が経っていた。

この島についてから、いずみは、一度として悪夢を見ない眠りがない。眠ることに怯えるようになってしまったいずみを、青洲はいつも抱きしめていてくれるのだけど、眠ってしまえば、当然夢の中でいずみは一人ぼっちになってしまふ。いつになったら島を出るのだろっ。そう思いつつも、いずみは、それをなかなか聞けないでいた。

——青洲さんは、この島で調べたいことがあると言っていたのだ。

それが済むまでは我慢しなきゃ。だって、いずみの為なんだって青洲さんは言ってくれたのだ。足手まといになるようなことは、言いたくない。いずみは、もう大人なんだし……

青洲は、調べものだと言って一日の大半を神社の書庫で過ごして

いる。いずみは、中に入れないのだそうで、大抵は社務所か外で待っているのだけど、退屈なので、ほとんど絵を描いて過ごしていた。九州の春は早い。梅はとうに盛りを過ぎ、オオイヌフグリやナズナやホトケノザが、たくましく花をつけている。オオイヌフグりは雑草なのだけど、愛らしい花を咲かせる。いずみは、それらの雑草を片っ端から精密に描いていた。

書庫の中で、青洲は一人ため息をつく。ほとんどが口語体ではないので、解読するのにひどく時間がかかるのだ。佐川がいたら、スラスラ解読してくれるんだろうになあと思いながら、目がしらを強く押す。佐川は、表向きは市の職員などをやっているが、やたらに史学に詳しくて、古い文献などもスラスラ読んでしまう。だから発掘現場では、重宝がられていた存在だった。あの物見高い性格でさえ、今となつては懐かしいくらいだ。

「青洲、おまえ、一体なんば調べたいんだと？」

後ろから声がして、振り返ると、午前中の神事を終えた鳴春が、呆れ顔で立っていた。

「この神社の成り立ちとか、四聖獣の言い伝えの源とか、そういったことを調べているんだが……」

青洲の言葉に、鳴春が顔を強張らせた。

「やっぱい、そいがなんか関係しとつと思うとか？」

「……やっぱりつて、なんだ？」

問い返す青洲に、鳴春は落ちつか無げに、視線をさまよわせていたが、声を潜めて話し始めた。

「オイたちは、まあだこまこつて覚えてん頃の出来事なんばつてん……」

鳴春は、大河の葬儀の時に話題になった、とある学者のことを語った。

その学者は、そもそも歴史学者だったらしい。主に地方に散らばっている伝説とか民話を集めて、歴史の検証をしていた。どう考え

たつて作り話だろうと思われるものでも喜んで集めていたらしい。元々この村人たちは、お人よしで話し好きな人たちだ。四聖獣の言い伝えもあつと言う間に知られた。それを聞いて、その学者は、当時、宮司だった鳴春の親父の所に、調査許可を申し出てきた。

「おまえも知つての通り、こん神社の裏山は、神が降り立った聖域として、神事以外では立ち入らんし、一般人の立ち入りも禁止しとつと。最初は、親父もそう言つて断つとつたとばってん、やつはしつこかつた……」

歴史を証明する為の大事な調査だから、せめて、山の周りだけでも歩き回ることを認めてもらえないかと食い下がった。とうとう鳴春の父親は根負けして、周りだけならと言う条件で、許可した。しかし、その学者が立ち入っていたのは、周りだけではなかった。次の神事で入山した時、神が降り立った場所として使う舞台の周りのそこここが、無残に掘り返えされていたのだ。

「青洲、ヒヒイロカネてゆう金属ば知つておるね？」

「まあ、少しは……しかし、あれは実在しないとされているだろう？」

ヒヒイロカネとは、古代日本で使われていたと言う謎の金属だ。太陽のように赤い色で、磁力を無効化し、純粋なものは金よりも柔らかいと言う。しかし、合金にすると鋼より硬く、これで刃をつくれば石ですらも切ることができたと言う。

「やつは、そいば見つけたと、当時、仲の良かった村人にだけ、こつそり打ち明けとつたげな」

「まさか……何かと間違えたんじゃないのか？」

「そいがヒヒイロカネやったかどがんかは、どうでんよかと。年寄りたちの言うには、そいつがそいば持つて本土に戻つて行つてから、三家で不審死が増えた……そう言うんだと」

「不審死……か」

三家とは、神社を守っている鈴守家と、名和家、石守家の三家だ。鈴守以外は、日頃はとりたてて何をする訳ではないのだが、年に一

度、神社で大祭が行われる時には、三家がそろって神事を執り行うところが、ここ三十年で、大祭が行われたのは、僅かに三度だけだ。三家がそろうことができないのだと言う。特に名和家の没落は凄まじく、不審死というよりも、原因が明らかかな事故死、病死続きで、生き残っている者はごく僅かとなってしまっていた。

「いずみちゃん？」

お昼近くになったので、青洲は書庫から出てきた。先に食べていなさい、と言うのに、いずみは青洲がいなければ食事をとろうとしない。眠ることについては、もっと神経質になっていて、青洲が傍にいてもなかなか眠れない。墜落するように睡魔に襲われては、うなされて目覚めるということを繰り返していた。いずみの異変は島に着いてから始まった。因果関係は不明だが、そろそろ島を出た方がいいのだろうとは思う。いずみの体が心配だ。

「鳴春つ、いずみがないんだ、知らないか？」

青洲は慌てる。いつもは神社の庭で、絵を描いて青洲を待っているのだ。鳴春が社務所のスタッフに尋ねる。

「青洲、いずみさんは、さつき子どもたちと一緒に神社は出て行ったってよ」

鳴春は、微苦笑しながら告げる。

青洲は、社務所を飛び出した。

「おいつ、こまか子供じゃあるまいし、心配のしすぎじゃなかか？」という鳴春の声を後ろに聞きながら、青洲は村へ向かって駆けだした。

第六話 能ある鷹の爪を隠せ（2）

十九年前

雨戸をたて、カーテンを閉め切った一室に、赤子の弱弱い泣き声が響き渡る。

秋乃は、生まれたばかりの我が子を胸の上に置いてもらった。小さい手をギュッと握りしめ、弱弱いながらも体の力を振り絞って泣く我が子を、秋乃は満ち足りた気持ちで見つめた。やっと、やっと、手にすることができた。秋乃の目から涙が零れ落ちる。

「生まれたばかりの秋乃にそっくりね」

青子も目を細める。栗色のくせつ毛、ぱっちりとした二重の瞳、長い睫毛、秋乃にそっくりであり、また、青子にもそっくりだった。

青子は手早く産湯を使わせると、温かなお包みに赤子を包む。

「秋乃、この子は何番目の子なの？」

「四番目よ」

秋乃の声が震える。もっと自分がしっかりしていれば、もっと異変に気付くのが早ければ、三人も死なせずに済んだのかもしれない、そう思うと胸が痛くなる。

「そう。では、それにふさわしい名前を付けなければね」

青子は、少し緊張した面持ちで言った。

秋乃は、産み月まで、ずっと母親の青子の所で過ごした。心に会えないのは寂しかったが、心は電話連絡さえ寄こしてはいけないう言い張った。しかも秋乃がいない間、絵を描く為の旅に出ると言う。そんな心の態度を不審に思ったのは、秋乃だけではなかった。

「秋乃、心さんとは、うまくいっていないの？」

そう問う青子に、秋乃は、心が語った心の実家の事情を説明する。「呪われた血筋？」

青子は、少し驚いたように目を見開いてから、考え込んだ。

「どここの出身かは聞いた？」

「何も、何も教えてくれないのよ」

「……もしかしたら……」

青子は呻いた。

「何？ どうしたの？ お母さんは何かを知っているの？」

「秋乃、私の知っていることだとしたら、それは……私の業のなせる技かもしれない。良くききなさい。心さんが話さないのならば、無理に訊きだしては駄目。そして、生まれてくる子どもは、天真爛漫に育てなさい。何も知らせずにね。それがこの子の身を守る唯一の手段になる。私は、そういう気がしてならないわ」

そう言って青子は、秋乃の膨らんだお腹をそつと撫でた。

産まれたばかりの赤子を見つめながら、しばらく難しい顔をして考え込んでいた青子が、口を開いた。

「いずみ、いずみは、どうかしら？」

「泉？」

「四番目は玄武。泉なら、水という要素が、意味にも、文字にも、含まれているわ。それに、一つ前の白虎の白も含まれているじゃないの」

青子は、嬉しそうに言った。

「お母さん、一体何の話なの？ 玄武とか、白虎とか……」

秋乃は、怪訝そうに母親を見つめる。

「秋乃には、話したことがなかったわね。私の生まれた家はね、代々、四聖獣にちなんだ名前を付けることが習わしになっていたのよ。単なる迷信に過ぎないと、若いころは思っていたんだけどね……気休めだろうと、イワシの頭だろうと、自分の血を分けた子どもには良いと考えられているものなら、なんでもしてやりたくなるものなのねえ」

青子は苦笑する。

「そつなの……不思議な話ね。四聖獣なんて初めて聞いたわ。じゃ

あ、私の名前も？」

「そう、秋乃の秋は、白虎にちなんだ季節なのよ」

「知らなかった……」

「でも、この四聖獣の話はね、この子が大人になるまで聞かせては駄目。それに漢字で『泉』ではなく、ひらがなにしなさい。隠せるものなら、隠した方がいい」

青子は神妙な面持ちで言った。

「どうして？」

秋乃は首を傾げる。

「秋乃は、もう大人だから、何を聞いても必要以上に怖がる必要はないのよ、気をつけて暮らしていれば良いのだから。実はね、早世の家系は、鈴守も同じなの」

「……え？　だって……そんな……」

秋乃はたじろぐ。

——心ばかりでなく、自分まで？

「心さんの家系がはつきりしないから、あくまでも推測にしか過ぎないんだけどね、もしかしたら、この子は、二つの家の忌まわしい血をしょっているのかもしれない。だから、何も……何も知らせずに、純粋な心のままに育てる必要があるのよ」

「どうして……」

秋乃は戸惑う。

「魔は、人の心の弱さや闇に住みつくのよ。だから恐れや怯えに敏感なの。居場所が知れれば、取り込まれる」

「魔って……取り込まれるって……」

秋乃は絶句した。

* * *

青洲は、村中を走り回った。数人の村人が、子どもたちと青龍の祠に向かったのを見たというので向かう。青龍の祠は静まり返って

いて、人っ子一人いなかった。

石組の堂の中には、石を刻んで造った龍がとぐろを巻いている。前足と頭の角がなければ、蛇に見えると、青洲はいつも思ってた。物心ついた時から、自分の守護神だと言われ続けてきた。日頃はそんなものと眺めるだけだが、さすがに今日は青龍に手を合わせた。

——いずみちゃんが、無事でいますように……

一人の島民が走ってきて青洲に声をかける。

「青洲さん、いずみさんは、子どもたちと朱雀の祠に向かったそうですよっ」

青洲の慌てぶりに、一緒に聞き回ってくれていたらしい。

「ありがとう！」

礼を言つと、海岸沿いの道を駆けだした。

海岸沿いの道の途中に、何か赤い染みのような点が、二つ三つ落ちていた。青洲は、息を飲んで立ち止まる。

「……」

恐る恐る近寄って、しゃがみこむ。震える指先で触れると、赤い染みは、ぐずりと潰れて広がった。

——これは血じゃない>

触れた指先を嗅ぐと、甘く、少しすえた匂いが鼻腔をくすぐる。

——野いちご？ こんな季節に？

青洲の背筋が冷たくなる。砕かれた玄武に塗りつけられていたという、野いちご。青洲は、再び駆けだした。

金糸雀の歌が幽かに聞こえた。一人の声ではない、合唱だ。歩を進めることにその声は大きくなり、道の彼方先に、子どもたちが集団で歩いて、こちらに向かっているのが見えた。子どもたちはリヤカーを引きながら、歌を歌っていた。

唄^{うた}を忘れた 金糸雀^{かなりや}は
後の山^{うしろ}に 棄てましょか
いえ いえ それはなりませぬ

青洲は、しばし呆然とそれを見つめていたが、リヤカーの上に乗せられているものに気づいて、慌てて駆けだした。

「いずみっ」

いずみが、リヤカーの上に乗せられていた。いずみは、ぐったりと横たわっているように見える。青洲は、頭の中が真っ白になった。
「いずみ、いずみっ」

子どもたちが、青洲に気づいて手を振る。

「いずみ、どうしたんだ？」

真っ青になりながら息を切らして走ってくる青洲に、子どもたちは、たじろいだ様子で立ち止まった。すると、それまで、ぐったりと横たわっている様子だったいずみが、むくりと起き上る。

「あ、青洲さんっ」

「いずみっ」

青洲は、委細構わず、いずみに駆け寄り抱きしめた。

「青洲さん？ ごめんなさい、心配かけちゃった？」

肩で息をしながら抱きしめる青洲に、いずみは驚いて、青洲を抱きしめ返す。

ふと、気がつくと、抱き合う二人を子どもたちが、ぼんやりと見つめていた。子どもたちと目があつた青洲は、気まずげに、いずみをそつと放すと、いくつか咳払いをする。

いずみと子どもたちは、島の南にある朱雀を見に行ったのだが、帰る途中で、いずみが疲れてしまい、休憩をとっているうちに、颯が、家からリヤカーを調達して来てくれたのだと言う。横になれと颯が、口やかましく怒るので、横になっていたのだといずみは、きまり悪そうに言った。

「げな（＊）、いずみちゃん、真っ青な顔色やったとぜ？」

颯が、大人ぶった様子で顔を顰めた。

「ありがとうな、颯」

颯に青洲が礼を言つと、颯は照れて俯いてしまった。

子どもたちと、一緒に青洲もリヤカーを引っ張りながら帰る。安心したせいか、青洲は空腹を覚えた。

「君たち、昼ご飯は食べたとか？」

青洲が、子どもたちに問いかけると、

「食べておらんよ」と、口々に言う。

「よし、ちよつと待とるなら、オイがカレーば作つてやるか」

言いながら、青洲は子どもたちの頭数を数える。鳴春の所の大鍋を一つ借りれば、なんとかなりそうだ。

「よしやー」とか「やったー」

とか、子どもたちから歓声が上がった。

(*) げな↓だつて

第六話 能ある鷹の爪を隠せ(3)

いずみが、朱雀を見て来た日の翌日、青洲は鳴春の軽自動車を借りて、海岸通りを西に向かって走っていた。

昨日、みんなで大騒ぎしてカレーを作っていると、何故か島内放送が流れた。

「今から鎮守様の所で、青洲さんがカレーば作るけん、食べたか人は集まってくれんね」

颯の声だった。青洲は、ずるつと沈みそうになる。

——なんで、カレーを作るくらいで、島内放送をする？

放送からしばらくして、どつと島民が集まり始めた。

やれ、カレーには、こいば入れろ、とか、あいは入るなとか、

こいば使えとか、こいも食べるとか、騒々しいことこの上ない。青洲は玉ねぎを大量に刻みながら、涙を誤魔化す。

——どうしてこうなるんだ？

そのうち、青洲では手際が悪すぎると、島のおばちゃんたちに厨房から追い出された。仕方なく、いずみの所へ戻ると、いずみは子どもたちと、四聖獣の話題で盛り上がっていた。

「へえー、ちゃんと島の東西南北に祠があるんだねー」

子どもたちは、島に伝わる伝承をいずみにも聞かせたらしい。いずみは、白虎も、壊されてしまった玄武も見たいと目を輝かせた。

青洲には、あまりピンとこないのだが、いずみに言わせると、実際に見たのは青龍と朱雀だけだけど、とても素晴らしい出来の石像なのだという。まるで、石の中で眠っていた四聖獣そのものを、彫り出したかのようなと言うのだ。四聖獣の鼓動まで伝わってくるようだ。

「全部見てみたいー」

日頃、自分から何かしたがることなど滅多になかったいずみが、

珍しく主張するので、青洲は連れて行つてやると約束をしたのだつた。いい加減、難解な古文書を読むのにもあきてきていたので、次の日さつそく出かけることにした。

晴れた日の海岸通りは、実に気持ちの良い道だ。堤防越しに見える海は、凪いでいるが、ほどよく海風が吹いていて心地よい。既に春の気配が濃密で、いずみは車の窓を全開にして景色を眺めている。「いずみちゃん、寒くないか？ 体を冷やしちゃ駄目だよ」

さつきいずみの膝の上に掛けた膝かけが、風にヒラヒラしているのを見ながら、何故だか、青洲は落ち着かない気分になっていた。「全然寒くないよ。きれいな所なのねえ」

いずみは嬉しそうに青洲を見つめる。時折、松林が途切れて、透き通った青い海が現れる。

——リン

鈴の音がしたような気がして、いずみは後ろを振り返った。緩やかなカーブの道だ。海側でない方は、小高い山が海際まで張り出している。鈴の音は、山側から聞こえたような気がした。でも、鈴の音を出すようなものは何もない。気のせいかと、いずみは前を向く。

——チリーン

鈴の音は、更に大きく耳に響いた。しかし、振り向いて見ても何もない。確かに何かがあるのに、視線を向けると気配が消える。

「いずみちゃん、どうした？ 何か気になるものでもあったかい？」
何度も振り向くいずみに、青洲が問いかける。

「ねえ、鈴の音がするよね？」

「鈴の音？」

青洲は、怪訝そうに問い返す。

「ほら、また！」

いずみは、怯えたように青洲に身を寄せる。

「鈴の音なんてしないよ。波の音じゃないのか？」

「青洲さんには、聞こえないの？ こんなに……こんなに……」

いずみがひどく怯えるので、青洲は車を止めた。ハザードランプをつけて、車から降りて確認しようとすると、いずみが悲鳴をあげた。

「ダメっ、青洲さん。降りちゃダメ。早く車を出してえっ」

いずみはパニックに陥っているようで、助手席からハンドルに手を伸ばす。いずみの手が触れて、クラクションが鳴り響き、辺りの空気に亀裂が入る。

「いずみちゃん？」

驚いた青洲は、いずみの手をハンドルから引き剥がすと車を発進させた。

「いずみちゃん、何があっただい？」

青洲が何度訊いても、いずみは真っ青になって震えるばかりで、何も答えられない様子だ。

「いずみちゃん、引き返した方がいいんじゃない？」

青洲の言葉に、いずみは痙攣を起こしたように体を震わせて、首を振った。とにかく、前に進むしかないらしい。

電波の事情で、島ではケータイが使えない。でも、確か白虎の祠の近くに公衆電話があったはずだ。青洲はふと思いつく。鳴春が朱音ばあちゃんに訊けば、何か良いアドバイスをもらえるかもしれない。

青洲には、いつもさっぱり分からなかったのだが、子どもの頃、時々鳴春が、今のいずみのように何かの気配に怯えることがあった。鈴守の家の子どもは、よくそうなるのらしい。しかし、そんなことを迂闊に聞けば、いずみの素性が知られないとも限らない。どうするか、青洲は考え込む。

——鳴春が、そうなった時には、どうしてたっけ？ああ、そうだし……。

そんな時には、決まって同級生だった美南を呼びに行っていたのだ。美南が鳴春の背中に思いっきり手刀を叩きつけると、ピタリと

鳴春は元通りになった。——他の誰かがそれを真似ても、全然ダメだったのに……

石守美南……気の強い女ボスで、男子からも一目置かれていた。本土に嫁に行ったと聞いていたが、三年前、事故で亡くなった。

——水面下で、何かが起こっている。

そう思っただが、それが何なのか、青洲には皆目見当がつかないのだった。

白虎の祠の前で、青洲は途方に暮れていた。

辺り一面に、野いちごが、まるで血の海のように撒き散らされている。しかも、お座りをした形の白虎の両耳が、無残にも粉々に打ち砕かれていた。その砕かれて落とされた両耳の跡にも、真っ赤な野いちごが塗りつけられている。

「なんてことだ……」

少し落ち着いてきたらしいいずみが、背後で車のドアを開ける気配がする。

「いずみちゃん、乗っていなさい。君は見ない方がよいよ」

「何があつたの？」

ひどく震える声で問いながら、それでも青洲の制止には従わずに、近づいて来る。

「見ない方がいいって……」

青洲は急に不安になって、近づいて来るいずみを車へ押し戻した。玄武が、こんな目にあわされた時、鳴春の子どもの大河が亡くなっているのだ。

「ひどいっ……」

振り返って白虎を見たいいずみが、絶句する。いずみは、青洲を振り切って、白虎に駆け寄った。

「なんて、ひどい……耳が……耳が……」

いずみは、うわごとのように眩きながら、砕かれた耳の欠片をかき集める。

「いずみ、やめなさいっ、触るな！」

青洲が叫んだ瞬間、突然いずみが、ぐらりと崩れ落ちた。

「いずみっ」

慌てて青洲はいずみを抱き起す。撒き散らされていた野いちごが、いずみの髪や顔や服に絡みつき、染みを作る。それが、まるで血に染まったようで、青洲の動揺を更に大きくした。

「いずみ、しっかりしなさい。いずみっ」

いずみは、真っ青な顔で、見開いた瞳は焦点を結んでいない。ガクガク震えながら苦しそうな呼吸を繰り返していて、時折喘鳴さえ混じっている。

――何が起こったんだ？ どうしたらいい？

青洲までガクガクと震えてくる。前の日までびんぴんしていたのに、あっけなく亡くなったという鳴春の子どもの話が脳裏を掠める。

――こんな状況だったんじゃないだろうか？

頭の中が真っ白になる。

「吉田さんじゃないですかあ？ どうしたんです？」

突然、その場には相応しくない、のんびりと間延びした声が聞こえて、青洲は瞠目して振り返る。

「佐川？ どうしてこんな所に？」

「あーあ、こりゃひどいな。せつかくの白虎が耳なしだー」

佐川は、白虎の祠を覗きこんでいる。

「佐川っ、その公衆電話から鈴守の本家に連絡をとってくれないか？ いずみが倒れたんだっ」

青洲の声に、佐川が近づいてきて、いずみを覗きこむ。

「あーあ、こんな所に、何の備えもなく……」

佐川は、困った人たちだと言いたげに肩をすくめると、バックパツクから銀色の水筒を取り出した。青洲は、佐川の行動にあっけにとられる。

「いずみさん、これを飲めますか？」

佐川は、中の液体をコップに注いで差し出した。いずみは、声が

出ない様子で、無言でガタガタ震えていたが、なんとかコップを受け取った。

「いずみ？ 声が出ないのか？」

青洲が心配そうに、いずみの背中をさする。不思議なくらい落ち着きはらっている佐川に、青洲のパニックが少し落ち着いて来た。

「いずみさんは、鈴守の関係者なんですよ？ 真っ先にやられるとしたら、声でしょうね」

青洲はぎょつとして佐川を見つめる。

「佐川、おまえ……」

――何をどこまで知ってるんだ？

「吉田さん、口移しで飲ませてあげたらいかがです？ いずみさん、一人では飲めそうにないようですよ？」

動揺する青洲をちらりと横目で見ながら、佐川が助言する。

震えがあまりにもひどいので、コップの中身がほとんど零れてしまっていた。いずみは、コップを口まで持って行くのさえできない様子だ。

佐川の言葉に、動揺してためらう青洲に、佐川が更に続ける。

「吉田さん、早くしてください。できないんなら、僕が飲ませましょうか？」

佐川がいずみからコップを取り上げると、むっとした青洲がそれを取り返し、液体をいずみに飲ませる。いずみの震えが少し収まってきた。

「もう少し、飲ませた方がいいかな？」

佐川は、更にコップに注ぎ足した。液体は、無味無臭で、青洲の舌には、ただの水のように感じられたのだが、効果は絶大で、いずみは、微かだが声を出せるようになった。もう自分で飲めると言う。

「佐川、これは何なんだ？」

青洲は驚いた様子で問う。

「水ですよ」

佐川は、にっこりとほほ笑んだ。

「水？」

青洲はあつけにとられる。ただの水？

「ええ、青龍の井戸から汲んで来たものです。なかなか良い水ですよ」

青龍と玄武の祠の傍には泉が湧いている。玄武の方は湧水として川に流れ込んでいるだけだが、青龍の方は、村から近いので、島民が生活用水として使えるようにしてある。

「……」

「今日の早朝に、僕は青龍の祠を出発して、玄武の祠へ廻り、そして今ここへ辿りついたんですよ。お二人とは逆回りをしたことになります。玄武の水も飲んでみましたが、こちらは、あまり良い水ではなくなっているようだ。昨日、いずみさんが白虎を見たいとおっしゃっていたのを聞いていたので、どこかでお会いできるだろうとは思っていたんですが……」

「ち、ちよつと待てよ。佐川、おまえ、いつからこの島に居たんだ？」

青洲は慌てる。

「昨日の朝、島に着いたんですよ。村のあちこちを見て回っていて、そろそろ鈴守の家に伺おうと思っていたら、島内放送が流れて、吉田さんがカレーを作るらしいと聞いたんで、そのまま島の人たちと一緒に伺ったんですよ。そう言えば、吉田さんは、いずみさんばかりを見ていたから、僕には気づかなかったかもしれないなあ」

佐川は、ちらりと横目で青洲を見て、薄ら笑いを浮かべる。

「私も佐川さんに気がつきませんでした。ごめんなさい」

いずみが、呟くように言うと、これには、佐川は優しく微笑んだ。

「……昨夜はどこに泊ったんだ？」

青洲は仏頂面で問いかける。

「昨夜は、一太さんの所へ泊らせていただきました。船でお会いしましたね、宿屋への土産に大吟醸を用意していると言ったら、一太

さんが、是非うちに泊れとおっしゃってくれたので……」

青洲は呻いた。

——太のことだ、何かまた口くでもないことを……

「いやー、色々吉田さんのことを聞かせていただきましたよ」

——やっぱりかー

青洲は頂垂れる。

「そうだ、白虎も清めておいた方が良くかもしれませんね。効果のほどは分かりませんが……」

佐川は、白虎の耳を軽く払って野いちごを落とすと、水筒の水をかけた。佐川の行動に、青洲は、はっと我に帰る。

「いずみちゃん、もう大丈夫そうかな？ 少しの間、一人で座ってられる？」

いずみは、弱弱しく頷いた。それを見て、青洲は小さく肯くと、祠から少し離れた場所にある公衆電話に向かった。

「中川、俺だ。青洲だ。白舟は今どこに居る？ 繋いで欲しいんだが……至急だ！ なんだった？ おい、ちょっと待てよ……」

青洲からと分かると、中川は慌てた様子で少し待ってくれと言う。テレカのポイントがものすごい勢いで減って行く。青洲は、やきもきしながら中川を待った。

『やあ、兄さん、観光旅行はまだ終わらないの？』

代わって、赤秀の声が聞こえた。

「赤秀……嫌みなら後でいくらでも聞く。今は白舟の安否を確認したいんだ。島の白虎がやられた。玄武の時と同じような状態なんだ。玄武のことは、もう聞いているんだろ？」

「……白虎が……」

赤秀が小さく呻く声がして、電話の向こうが重苦しい雰囲気になる。

「……兄さん、その情報は、少し遅かったようだよ」

赤秀が痛みを堪えているような声で言った。

「なんだった？」

青洲は絶句した。

第六話 能ある鷹の爪を隠せ（４）

青洲は、後部座席でいずみを抱き寄せて座りながら、ブツブツ文句を言っていた。

——赤秀め！ 何が遅かったーだっ！

白舟の安否を気遣って、焦っている青洲に、赤秀は手遅れだったと言う。絶句する青洲に、赤秀は続けた。

『昨日から、風邪をひいて、中耳炎を起こして休んでいる。医者の不養生ってやつだな』

赤秀は、大げさにため息をついた。青洲は、がっくりと脱力する。
「まあ、その程度で済んで良かったじゃないですか」

佐川は、運転をしながら笑い転げた。

「その程度でと言うが、白虎がやられたから、白舟が中耳炎を起こしたと言う訳でもないだろう？」

青洲は眉をひそめる。

「どうでしょうね。でも同じ耳だと言うのが、引っかけませんか？ それに、吉田さんも白虎イコール白舟さんだと思ったから、連絡をとったんでしょ？」

佐川は興味津津といった様子で振り返った。佐川の切れ長の涼やかな瞳が、黒ぶち眼鏡の奥で好奇心に輝いている。

「前を向け、前を……」

青洲は顔を顰める。

——佐川は、知らないことだろうから仕方がないとは思うが……笑い話では済まなかったのだ……薫の時は……。

その時、青洲に寄りかかってぐったりしていたいずみが、突然身を固くしたのが分かった。

「いずみちゃん？ どうかした？」

青洲の問いかけには答えずに、いずみは青洲にしがみつく。震えているようだ。

「ははあ、あれですね、いずみさん」

佐川は、前方山側の斜面を顎でさした。ぐつと速度を落として徐行する。青洲も佐川が指し示す方角を見るのだが、斜面を枯れた草が覆っているばかりだ。

「何があれなんだ？」

青洲は首を傾げる。

「その様子だと、さっきクラクションを鳴らしたのは、いずみさんですか？」

「な、鳴らすつもりはなかったんです。は、早く車を出して欲しくて、ハンドルを握ったら……鳴ってしまつて……」

いずみは上ずった声で、震えながら説明する。

「鳴らしたのは良かったですよ。こごつた気に亀裂を入れることができる」

「だから、なんの話をしているんだ？」

青洲は、気味が悪くなつて、少し怒つたように問いかける。

「見えませんか？ ほら、あそこ」

佐川は停車して、斜面の途中にある小さな岩を指差した。

「……」

青洲は目をこらすが、岩があるだけだ。いびつな形をした黒っぽい色をした岩で、特に変わった様子もない。佐川は、青洲の言葉のため息をついた。

「あの岩を睨みつけてはいけませんよ。少し視点をずらして、視界ぎりぎりの所にあの岩を合わせてみてください」

青洲は胡散臭げに佐川を見たが、言われたとおりにしてみる。

—— やつぱり、何もない……いや、待てよ……。岩の少し右、草が群生したまま枯れている辺りに、何かがないのか？

慌てて、視線を合わせると、それは消えてしまった。それきり、何度視界ぎりぎりに持つて行つても、青洲には見ることができなかった。ただ、何かの気配がこごっているのだけが、僅かに感じられる。

「あれは、一体……」

青洲は佐川を見つめる。

「ここは、島の西の果てですよ。四聖獣の口承を覚えていますか？」

「あ！」

——その昔、凶なるもの、西海より流れ着きし

「こんな所に、いずみさんのようなセンシティブな人を連れて来て、何も準備していないなんて、迂闊過ぎませんか？」

佐川は、青洲を責めるように見つめた。

「佐川……おまえ、一体何者？」

青洲は瞠目して、佐川を見つめる。

「なるほど、青洲さんにしても、赤秀さんにしても、そういう性質の人ではないようですねえ」

佐川は薄ら笑った。

「おまえ、赤秀に会ったのか？」

青洲は驚いて問う。

「赤秀さんは、今では私の雇い主ですよ」

「は？ 市役所は？」

「市役所は辞めました」

「なんだって？ 佐川、おまえ、一体何やってんだ？ 赤秀はどうしておまえを雇ったんだ？」

「もちろん、当面の僕の仕事は、お二人をふん縛って、赤秀さんの所へ連れて帰ることなんですがね、そのほかに、赤秀さんから、この島に伝わる伝説を調べるように言われています。既に、神社に保管されている古文書も見られるように、赤秀さんから口を利いてもらっているんですよ。僕は、もともと古代史を専門に勉強してきましたが、いつまでたっても希望の部署に行かせてもらえなかったし、この際だと思って、市役所は辞めました。赤秀さんが、僕のスポンサーになってくれると言うので……」

佐川は、嬉しそうにべらべらとしゃべり続けた。

「……おい、おしゃべりはそのくらいにして、とりあえず、ここからどうやって抜け出せばいいのか、教えてくれないか？ 俺には、何が何だか、さっぱり分からないんでね」

青洲は、深いため息をついた。

——赤秀め、何を考えているんだか……

「いずみさん、あなたはどうですか？ どうすれば良いか分かりますか？」

佐川は、いずみを覗きこむ。

「分かりません」

いずみは激しく首を振った。佐川は、ふうむ、と言ったきり黙りこみ、

「僕の考えすぎだったのかな……」と小さく呟くと、何やら呪文のようなものを唱え始めた。

「臨兵闘者皆陣列在前」

言葉に合わせて、両手の指を複雑に組み合わせる。

「掴まっついてください。一気に抜けますよっ」

そう言うと、佐川はアクセルを踏み込んだ。タイヤが軋む音があり、車が急発進する。あの岩の下付近を通り過ぎた瞬間、窓を開けているわけでもないのに、何か生温かい空気が、耳元を掠める。

「いやあ——」

いずみが、悲鳴を上げて青洲にしがみついた。

——ねえ、どうして逃げるの？ 一人じゃさみしいよお。私と一緒に……死んでよお

聞き慣れない女の声が、耳元で囁いたような気がして、青洲は振り返った。道路の上にゆらゆらと陽炎のような気の塊が、一瞬こぼれて、そして霧消した。

——なんだ？ あれは？

青洲は目を見張る。

「なんだか、この島は、すごいことになっているみたいですねえ。
こんな昼間から、あんなものが……」
佐川が、面白そうに笑った。

第七話 覆水盆に返らず（1）

二年前、都内、志木家

一軒の古めかしい洋館を、夕刻の弱い光が包み込む。最後の力を振り絞るように、懸命に光を放っていた太陽が、今、沈む。

光と闇はせめぎ合い、やがて闇が闇とぎの声をあげる。静かに、ゆつくりと闇に吞み込まれていく洋館に背を向けて、光は名残惜しげに消えて行った。

薄闇に閉ざされていく洋館の一室に、苦しげな女のうめき声が響く。

「うつ……うつ……お願い、やめて……もう嫌！」

秋子あきこは、ベッドに押さえつけられたまま首を激しく横に振る。

「お義母さん、あなた、少しは抵抗するとか、反撃するとか、できないんですか？ いつも泣いてばかりで……」

司つかさは、秋子の潤んだ黒目がちな瞳を覗きこんでせせら笑う。

——悪魔！ 抵抗すればひどく殴るくせに！

秋子は心の中で叫ぶ。

しかも、この力の差で、反撃などできようはずもなく、秋子にできることはただ、泣きながら、止めて欲しいと懇願することだけだ。「親父の時も、こうやって泣くんですか？」

司は、秋子の顎を掴むと、懸命に逸らそうとしている視線を捉える。

「……がっかりだな。どんな力を持っているのかと、実は楽しみにしていたんですよ。名和家の最後の生き残りが、こんな腑抜けじゃあ、ご先祖たちも、さぞかし、あの世で齒噛みしていることでしょうねえ」

司は、形の良い眉を寄せて顔を顰めると、鋭い目を細めて、艶やかに笑った。

「反撃してみせてくださいよ、お義母さん」

司は、耳元で囁くと秋子に覆いかぶさった。

昼間は、通いの家政婦や使用人が出入りをして賑やかだが、夜になると数人の住み込みの使用人だけになって、志木家は静けさを取り戻す。

キッチンに飲み物を物色しに来た司は、居間でお茶を飲んでいる華陽に気がついた。

「華陽、来ていたのか」

「お久しぶりね、司さん。元気にしていた？」

華陽の実家は地方都市にある。地方嫌いな華陽は、高校を卒業するなり、さつさと実家がある街を離れて、都内の大学に入学した。その頃から、司の実家に入り浸っていた。結婚もしたが、一年と保たずに離婚し、再び舞い戻って来ていた。司の父親とやけにうまが合うらしく、嫁に行った実の姉よりも、華陽は父に可愛がられていた。

「石守に行くんだって？」

明日から華陽は、石守家へ家政婦として入る予定になっている。司の父からの依頼だ。父親の石守家への干渉は尋常ではない。最近の父は執念の塊だ。恐らく孫でさえ粛清の対象からまぬがれることはできないだろう。そんな父親に、司でさえ時々背筋が寒くなる。

「ええ、そうよ。お姉さんに何か伝えることがある？」

石守家には、司の姉の昌代が嫁いでいる。

「いや、別に……で？ 今回の目的は何？」

司は冷蔵庫から缶ビールをとりだして、プルタブをプシュッとあけた。

「伯父さまが、随分前から探していらした、鈴守の関係者がいるらしいのよ」

華陽は、優雅な手つきで紅茶を啜った。

「へえ鈴守か！ しかし、石守家に鈴守の人間が？ 少しできすぎ

じゃないか？」

司は身を乗り出した。

「それを確認しに行くのよ。もしかしたら違うのかもしれないわ。厳密には『鈴守』ではなくて『鈴森』と名乗っているらしいから。でも、昌代さんがひどく怯えているらしいの」

華陽は眉間にしわを寄せた。

「姉さんは臆病だからな」

司は小馬鹿にしたように笑うと、ビールをぐつとあおった。

「で？ 男？ 女？ 名前は？」

「鈴森いずみ、女の子よ。気になる？」

「鈴守の女か……気になるね」

司はニヤリと笑って、続ける。

「鈴守だったらどうするつもりだ？」

「もちろん、穏便に消えてもらうわ」

華陽は妖艶にほほ笑んだ。

「華陽が言つと、穏便の意味が百八十度違って聞こえるな」

司は、眉を下げる。

「……なあ、もし、鈴守だったら、一度ここに連れて来ないか？
どんなやつか見てみたい」

——どんな声なのか聞いてみたい。

華陽は、くつくつと笑う。

「あら、もう秋子さんに飽きたの？ 随分御執心のようにけど……
部屋の外まで声が聞こえていたわよ？」

「別に、執心なんてしてないさ。子どもを作る以外は、好きなように
にしていって、親父に言われてるから、好きなようにしてるだけ
だ。大体、自分より年下の女をお義母さんだなんて呼ばされる身にも
なってみるよ。ちよつとくらい虐めなくなるのも、無理ないだろ
？」

司はビールを飲み干した。

「ねえ、窮鼠猫を噛むって言葉を知ってる？」

少し用心したように、華陽が声を潜める。

「俺はそれを期待してるんだよ。追い詰めれば、何かやらかしてくれるんじゃないかって」

司はニヤリと笑う。

「痛い目に遭っても知らないわよ？」

「俺が？」

司は面白そうに笑った。

秋子が志木の家に嫁に来て二週間が経っていた。

秋子が美術大学を卒業目前にしていた頃、養父が先物取引に手を出して、失敗した。代々引き継いできた工場を手放さなければならなくなつた時に、融資を申し出てくれたのが志木家だった。融資の条件はただ一つ、秋子が志木家の嫁になることだった。当時、秋子には将来を約束した人がいたのだが、従業員を路頭に迷わせるわけにはいかないと、養父母に涙ながらに土下座までされて、泣く泣く諦めたのだった。

嫁と言っても、相手は七十歳を越えた老人だ。しかも、その息子になる人でさえ、秋子よりも十歳近く年上というありさまだった。息子には、きちんと正妻がいたが、実家に帰っていて、秋子は一度も顔を合わせたことがない。

しかし、この家に来てすぐに、ここから逃げ出す人の方がまともなのだということを、秋子は思い知らされた。

はぎとられて、無残に散らされた衣服を掻き抱きながら、秋子は声を殺して泣く。

——どうして？ どうしてこんなことになったんだろう。この家の人たちは、みんな狂ってる……

* * *

臨 兵 闘 者……

さつきから、いずみは佐川から何やら怪しげな呪文を習っている。九字護身法とかいう呪文で、九つの文字（臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前）の呪文を唱えながら手印を結ぶことによって、悪鬼怨霊を遠ざけ災いから身を守ると信じられてきた密教や修験道の術だそう。それぞれの文字にそれぞれの手印があるのだそう。

「臨、と唱えて、金剛鉈印を組みます」

佐川は、忍者が術を使う時みたいに、人差し指だけを立てたまま指を組み合わせる。

「次に、兵、と唱えて、大金剛輪印を組みます」

佐川は、左右の手を組み、人差し指を立てて、中指をからませた。

「ん？ んん？ こうかな？」

「ええ、それでいいですよ。次に……」

青洲は、胡散臭げにそれを眺める。

佐川は、修験道を極めることが子どもの頃からの夢だったのだそう。その夢は、両親にメチャメチャ反対されて、一応市役所に就職したものの、機会があれば山にこもって修業したいと考えているのだとか。変わっているやつだとは思っていたが……青洲はため息をつく。

「ああ、それではダメです。この指はこう……」

佐川は、「者」の内獅子印がなかなか組めないいずみの背後に回り、指を一つずつ組ませていく。

青洲は、少し不愉快な気分で二人を見つめた。傍から見ると、佐川が背後からいずみを抱きしめているように見える。

「いずみちゃん、もうそろそろ部屋に戻ろう。今日は疲れているはずだろ？」

佐川は、今夜から鈴守に宿泊することになっている。明日からは神社の古文書の解読を手伝ってくれることになっているのだから、何も今そんなに急いで、そんなもの習う必要はないのだ。しかも、そんな呪文、効くかどうか分からないのだし……そもそも、そん

なもので追い払える霊だか魔だかも存在するかどうかさえ、分からないのだし……青洲は眉間にしわを寄せる。

「えゝ、でももう少しだから……」

しかし、いずみは、やけに熱中しているようで、子どもが駄々をこねるように上目づかいで青洲を見上げる。青洲は子どもを叱るようにいずみを睨みつけた。

「いえ、いずみさん、吉田さんの言うとおりですよ。あなたは疲れている。今夜はこれくらいにしましょう」

佐川がいずみから体を離す。

「でも……」

「代わりに、退魔の早九字をお教えしておきましょう」

佐川はそう言いながら、人差し指と中指を伸ばし、他の指を丸めて手剣をつくり、同じ呪文を唱えながら、素早く空中を横縦横と切っていく。

「碁盤の目を書いていく要領で切ってください。本来なら修業を積んでようやく会得できる術ですが、こけおどしには使えるかもしれません。何より、相手の氣にのまれないという氣力が大事なので、分かりますか？」

佐川の言葉に、いずみは神妙に頷いた。

そんな簡単なやり方があるのなら、最初からそつちを教えればいいのにと青洲は渋面でブツブツ文句を言う。

「青洲さん、青洲さんにもあの女の人が見えた？」

布団の中で身を寄せながら、いずみが小さく問いかける。

「……良く分からなかった。あれは、女の人だったの？」

湯上りの清々しくて甘い匂いが、いずみの髪や肌から立ち上る。

青洲は、少し落ち着かない気持ちで、息を吸い込んだ。

「実は、私も良く分からなかったんだけど、あの人は、もしかしたら、どこかで殺された人なんじゃないかと……」

いずみの言葉に、青洲の背筋が冷たくなる。風に溶けるように聞

こえたあの言葉、

——私と一緒に……死んでよお

「……いずみちゃん、ああいう気配を良く感じる人なの？ 所謂、霊感があるとか、世の中でよく言う……」

鈴守の血筋とは、そういうことなのかもしれないと思いつつ、青洲は躊躇いながら口にする。

「うん、あんなの見たのは初めて……でも、この島に来てから、少しね……なんだか良く分からない気配を感じることがあるの。この島の人たちは、とっても陽気で親切で、大好きなだけ……私は、この島が怖い……」

いずみは少し震える声で言った。

「明日から、佐川が古文書を解読してくれるから、それが終わったら、すぐに島を出よう」

鈴守の血筋が、島の何かと反応してしまうのかもしれないと青洲は推測する。それは、島を出てみればはつきりするだろうとも思う。

「うん」

小さく肯くいずみの髪をゆっくりと梳く。軽く口づけると、口づけを返してくれる。何度も口づけを繰り返し、だんだん深くなり……青洲の脳裏に、さっきの佐川といずみの姿が掠める。

——あれじゃ、いずみを抱きしめているみたいだ。

気づくと、青洲はいずみの肌に手を滑らせていた。夜着をめくり上げて、豊かになってきた胸に柔らかく触れ、果実を食むように唇を這わす。

——いずみは、佐川との距離に、気づいていたのか、いないのか……。

首筋に口づけを落とし、体中に紅い印を付けていく。いずみが青洲を呼ぶ切なげな声が聞こえるが、青洲には、それさえも甘い誘いに聞こえてしまう。

——止められない……

心の中で、自制心と欲望がせめぎ合う。ところが凶暴なまでの独

占欲が、萎えていく自制心に、更に追い打ちを掛けるように、鎌首をもたげた。

——ほかの誰かに触らせるなんて……嫌だ……

青洲は、いずみの脚を膝で割り、すらりと伸びた脚にもあざを作る。

——欲しい……

まるで欲しいものをねだって駄々をこねる子どものように、自分を押えることができない。

——どうしたんだろう？ 俺……

心の中で自問する。でも……

——欲しい……

痛みにも似た、狂おしいほどの、激しい飢餓感。

——安定期に入っていれば、少しくらい大丈夫だって、本に……いや、駄目だ。少しくらいなんて加減ができないかもしれない……でも……

まるで思春期の少年のように欲望が暴走する。

丸みを帯びてきたお腹にもあざを付けようと口づけた時、いきなり、お腹の内側から幽かに蹴られて、青洲はふと我に返った。

「あ……」

——俺、どうしてこんなに……

青洲は、暴走して押えられなかった自分に呆然とする。ふと、視線を下ろすと、潤んだ瞳のいずみと目があつた。

「……ごめん、俺、どうかしてた……」

呆然としたまま謝る。

「私こそ、ごめんなさい……私は青洲さんに抱いて欲しいのに、マメ太は嫌みたいで……」

青洲は、いずみの邪気のない言葉に、ポカンとした後、吹きだした。

いずみはお腹の中の胎児に名前を付けているのだ。男の子か女の子か分かりもしないのに、マメ太以外に思いつかないと言って……。

第七話 覆水盆に返らず（2）

——ただ、また鈴の音がする。もう聞くこともないだろうと、安心していたのに……

鈴森青子は、顔を顰めた。

いずみが無事に産まれてから二月が経っていた。いずみに添い寝している秋乃の幽かな寝息が聞こえる。青子は、ぐっすり眠っているはずの、いずみの顔を覗きこんで瞠目した。

「いずみ……」

いずみは眠っていなかった。鳶色の瞳をぱちりと開いたまま、息を潜めるように気配を消している。

「そう……あなたにもあの鈴の音が聞こえるのね。泣かずに我慢してるのね？ 聡い子。聡い子だねえ……」

青子は、いずみのポアポアの髪の毛を撫でた。

その日、青子は秋乃に、ここから出ていくように告げた。

「心さんとよく相談して、今後、どうするか決めなさい」

「どうしてこんなに急に出ていかなきゃいけないの？ 心だって、まだ旅行中かもしれないし……」

突然の青子の言葉に、秋乃はたじろぐ。

「秋乃、あなたには、この鈴の音が聞こえない？」

「鈴の音？」

秋乃は耳をすましてみるが、特に鈴の音など聞こえない。

「そう、秋乃には、たぶん引き継がれなかったのねえ。だから安心していた。私が生まれた鈴守の家は、ある気配に敏感でね、それが近づくとき鈴の音が聞こえる体質なのよ。たまに、秋乃のように、そんな体質ではない子もいるんだけどねえ」

「ある気配って？」

「良くないものよ。私は、それが怖かった。怖くて、怖くて、だから

ら逃げ出したの。でも、秋乃、そのせいで私は、あなたに、そしていずみにも、もっともつと辛い運命を背負わせてしまったのかもしれないわ」

青子は泣きだした。

「お母さん、何を言ってるのか分からないわよ？」

「許してちょうだい、秋乃。私が弱かったばかりに……でも、これだけは、言わせて。秋乃、一度逃げてしまえば、ずっと逃げなきゃならなくなる。これが、どうしようもな弱くて駄目な私が、人生の中で学んだ唯一のことよ。こんな馬鹿で弱い母親でごめんね……許してね……」

具体的な説明を求める秋乃に、一刻を争うからと、青子は、二人を追い立てた。

そして、その日の深夜、青子は原因不明の呼吸不全で亡くなったのだった。

* * *

「いずみさん、昨夜は大丈夫でしたか？」

朝食の席で、佐川がいずみを覗きこんだ。

「え？ 大丈夫って、何がですか？」

いずみはキョトンとした様子で佐川を見つめる。

「いやいや、その様子なら大丈夫だったんでしょね。吉田さんから少し不穏な気配がしていたんで、慌てて早九字までお教えしたんですが、御無事で何より」

佐川はへらへら笑いながら味噌汁を啜った。

「なんだよ、不穏な気配って……」

青洲が仏頂面で問い返す。

「言いませんよ、吉田さんには……」

佐川も仏頂面で返す。

「なんで俺には言わないんだよっ」

「だって、吉田さん、信じないでしょ？」

佐川は澄ました顔で、白いご飯を頬張った。

「信じるも信じないも、聞かなきゃ判断できないだろうっ？」

青洲が座卓を拳でドンと叩いたので、卓の上の茶碗がぶつかって派手な音が響いた。鈴守の家の人たちの目が青洲に集中する。

——あ……

青洲は、身を縮めた。どうも昨夜から感情をコントロールするのが難しい。青洲の様子を見て佐川は、首をひねる。

「気配はきれいに消えているのに、随分後遺症が残っているみたいですね」

佐川が目を眇めて青洲を見つめる。

「だから、なんの気配だよ」

青洲は気味悪そうに佐川を睨みつけた。

「昨日、憑いて来ていたんですよ。あそこから……」

青洲は瞠目し、いずみは凍りついた。

「あの女の人が……」

いずみが口ごもる。

「いいえ、あれほどのものが憑いて来ていたのであれば、いくら僕だつて放っておきませんよ。もっと小さなものです。たぶんあの人に付属していたんじゃないかな。それほど悪さはしないだろうと思つて放つておいたんですが……」

「それって……」

いずみは言葉を濁す。

「おそろく……」

佐川が頷き返した。

「なんなんだよ……いや、やめた。聞きたくない。俺は聞かなかつたことにする。もう消えてるんだろ？」

青洲は、恐々と後ろを振り返りながら、慌てて耳を塞ぐ。その様子を見た佐川は、すっきりとした涼しげな目を弧にしてしゃべりだした。

「あの女の方は、妊娠されていたんだと思いますよ。そして恐らく殺されたんでしょう。あの場から、その子を連れてきてしまった吉田さんは、子供みたいに感情のコントロールができない状態になったんじゃないですか？」

凶星をさされて、青洲は、ごくりと唾を飲み込んだ。

「僕が九字護身法を教えておいて良かったでしょう？」

佐川は得意そうに言って、いずみを見つめた。

「でも、私、あの九字の呪文は唱えてないですよ？」

いずみが不思議そうに返す。

「え？」

佐川の箸が止まる。

「だ・か・らー、もう推測で話をするのはやめようぜ。気味が悪い」
青洲が、おしまいという風に話を切り上げた。

「いずみさん……」

いつものように神社の庭で絵を描いて青洲を待っていると、佐川に声をかけられた。

「あれ？ 佐川さん、どうしたんですか？」

いずみは、きょとんと佐川を見上げる。奥の部屋に入って、まだ三十分も経っていない。

「トイレ休憩です」

そう言って、小さく笑ってから、佐川は続けた。

「いずみさん、吉田さんに気を許し過ぎていますよ。少し気を付けた方がいい」

佐川は声を低めて言った。

「え？」

いずみは佐川を見上げる。

「もしかしたら、あなたにとって吉田さんは、最も危険な人物になるかもしれません」

淡々としやべる佐川の表情からは、なんの感情も汲み取れない。

「……あの？」

いずみは戸惑う。

「僕の気のせいならいいんですが……とにかく、気を付けて。何か心配なことがあれば、僕で良ければ、相談に乗ります。どんな状況になっても、僕は、あなたの味方ですよ、たぶんね」

そう言い残すと、佐川は立ち去った。

「……」

いずみは、一人途方に暮れる。

——青洲さんが危険？ どうして？

第七話 覆水盆に返らず(3)

悪夢にうなされて、いずみは目を覚ました。いつものように悲鳴をあげなかったのは、いつもの悪夢と少し違っていたからだ。

隣の青洲は良く眠っている。いつも自分の悪夢に付き合わされているのだ。青洲だって疲れているはずだ。だけど、青洲は一度も文句を言ったことがなかった。いずみは、青洲の頬に軽くキスをする。手早く身支度をして、メモを残し、鈴守の家を出た。

朝とは言え、まだ早い時間なので、薄闇が支配している。いずみは、すがすがしい早春の朝の空気を胸一杯に吸い込んだ。植物たちが放つ濃密な気が満ち溢れている。一人ゆつくりと村の中心を目指す。

漁村の朝は早い。既に漁に出ているのか、村の中は人の気配がなかった。

青龍の祠の傍にある湧水井戸からあふれ出ている水を手ですくい、口に含む。水は喉を滑るように落ちて、体の中に入って行く。何度も何度も水をすくっては口に含む。いくらでも飲めるそんな気がした。

井戸の中には、水晶のような水がこんこんと湧いていて、水底で白い石英の砂粒がクルクルと踊っているのが見えた。できることから、この水の中に飛び込んで、そのまま沈んでしまってもいい、そんな気分になえる。そう思うほど、その水は、いずみの体にすんなり染み込んで心地よくさせた。体も心も、澄んだ水に浄化されて一点の曇りもなくなっていく、そんな気分。

「いずみちゃん、そろそろやめておいたら？ お腹を壊すよ」

突然、背後から声がした。

「青洲さん……」

振り向いたいずみの髪からポタポタと雫が落ちる。

「言ってくれば、水くらい汲んでくるのに……」

青洲はそう言って、自分でも水をすくって飲んだ。

「ここで飲みたかったの……それで、ここで飲んだら、どれだけでも飲めるって気になって……」

いずみの言葉に、青洲はクスリと笑った。

「井戸の水を全部飲むつもりなのかと思ったよ」

青洲は首にかけていたタオルで、いずみの顔と髪のを拭った。

青龍の井戸に行つて来るとメモを残しておいたので、タオルを用意して来たらしかった。

「……青洲さん、島を出る前に、どうしても玄武を見たいの。連れて行つてくれる？」

「……昨日みたいないことが起こらないとも限らないのに？」

しばらくの沈黙の後、青洲は小さくため息をついてから言った。

「うん」

いずみは即答する。

「俺はね、君を危険な目に遭わせる為に、この島に連れて来たんじゃないんだよ。むしろ逆だ。危ないかもしれないと分かっているのに、そんな所に連れていけないよ」

またいずみに何かが起こつたら、恐ろしいと心底思う。それが自分の理解を越えたものであるのなら尚更だ。

何故こんなに恐ろしいと思うのか。おそらく喪失に対する恐怖なのだと青洲は気づく。

妹の薫が行方不明になったのは、五年前の秋のことだ。当時、青洲の妻だった人と外出していて、誘拐された。

表向きは、身代金目当てだった……ということになっている。指定された場所に金を運んだ時、そこには金を受け取る人物は誰もおらず、薫と青洲の妻だけが、監禁されていた。青洲の妻は一階のソファの上で縛られていて、薫は地下で、瀕死の状態で倒れていた。

当時、吉田グループと提携していた、言わば兄弟企業の一つ、ト

ーワに、赤秀は出向していた。表向きは、出向。実情は、内偵だった。トーワの創業者と当時、吉田グループを率いていた青洲の父とは、友人であり、一時は共同経営者でもあった。それぞれに事業を分けて後も、お互いに協力しながら事業を展開していつていたのだが、それが、トーワの創業者の急逝で、経営がその息子に変わり、方針ががらりと変わった。一言で言えば、素人経営。

誰にそのかされたのか、青洲の父、龍生の制止も聞かず、株式会社として上場したのだった。上場後、株価はじりじりと値を上げ、数カ月が過ぎた頃、突然高騰した。何かがおかしい。そう察知した龍生の依頼を受けて、赤秀は出向したのだった。

「最近、ずいぶん株が上がっているようだね」

赤秀の言葉に、その企業の経営者は顔をほころばせた。

「おかげさまでね。吉田の首領には、上場を止められたけど、やっぱり上場して正解でしたよ」

赤秀が内部で調べた限り、これと言って新規の事業を展開した様子もなく、これから展開する予定もない。何か需要が見込まれるような事態が起こった訳でも、起こりそうな訳でもない。なのに株価だけが上昇する。何故おかしいと思わないのか。調べて行くうちに、ある一つの企業に辿りついた。それが志木家だった。こちらも吉田と同じように手広く事業を展開している企業だったが、その噂はあまり良くないものばかりだった。『乗っ取り屋』、それがこの業界での志木に対する大方の認識だった。赤秀が調べた段階で、志木家は、既に四十パーセントものトーワの株を保有する大株主となっていた。

「買収だな」

赤秀からの報告を受けて、龍生と青洲は眉間にしわを寄せる。

「買収の目的は、あれかもしれない……」

龍生は呻いた。トーワの創業者と共同経営者であった時代に、様々な特許を取得していた。事業を分けて立ち上げた時に、それぞれの特許も分けたが、その中で、一つお互いの事業にとって重要なもの

があった。しかし、それは、そもそもトーワの創業者がメインで考案したものだったので、最終的にはトーワが保有することになった。今のままのトーワであるならば、なんの問題もないはずなのだが、別の企業、特に志木家に渡るとなると話は別だ。吉田の事業にも支障がでる。

「トーワの坊ちゃんは、このことは知っているようだったか？」

当時、キレ者として、既に父に変わって吉田グループを引っ張っていた青洲は、難しい顔で赤秀に訊いた。

「いや、恐らく知らないだろう。株価上昇を単純に喜んでいたようだったから」

赤秀は眉間にしわを寄せた。

「そうか。では、話をしよう。設定してくれるか？」

トーワとの会議の場で、青洲は、いきなりこう切り出した。

「実は、今日相談したいことって言うのはほかでもない、トーワが持っているある特許を買い取りたいんだ」

トーワの経営者は瞠目する。青洲が言い出した特許は、かなり古いもので、正直言って自分がよく知らない父の時代のものだ。

「何故、今頃、そんなものを？」

「吉田の父の感傷みたいなものかな。最近年をとったせいかな、昔を懐かしむことばかり言い出すようになってね。亡くなった君のお父上と共同経営していた頃が懐かしいらしい。この特許は二人で案を出し合ったものらしいんだ。吉田では今でも時々使うことがあるからね。もし、トーワで売ってくれるなら、言い値で買う用意があるんだが……」

トーワの若き経営者は、一瞬瞠目してから、ちょっと待ってくれと言って席を立った。しばらくして彼はホクホクした顔で戻ってきて、しかし、ワザとらしく顔を顰めて言った。

「その特許なら、かなり値が張りますよ？ 言い値なんて言っても大丈夫ですか？」

そう言つて、狡猾な笑みを浮かべる。

「いくらなら売る？」

「一億……と言つたらどうします？」

「では、今この場で売買契約をするなら、その倍、二億出そう」
契約はあつけなく決まつた。

もし、あの時、そんな大事な特許を売る訳にはいかないと、経営者もしくは経営陣の誰かがそう言い出せば、青洲は買収の危険性を指摘するつもりでいた。金に目がくらんだ時点で、青洲はトローを見捨てたのだ。

辛辣だったのは、赤秀ではない、むしろ青洲の方だった。その時の青洲の行動が、回り回つて薫の命を奪うことになつたらしいと判明した時、青洲にできたことは逃げることに、それだけだった。
もう二度と、あの頃の自分には戻りたくない。そう思う。

「青洲さん？」

難しい顔をしたまま考え込む青洲を、いずみは怪訝そうに見上げる。

「青洲さん、もし、青洲さんが連れて行つてくれないのなら、私、一人でも行くよ。行かなきゃいけない、そんな気がするの」

黙り込む青洲に、いずみはきっぱりと宣言する。

「駄目だ」

「……ごめん、青洲さん。もう行くつて決めちゃった」

こんなに頑固で強情で毅然としたいいずみを、今までに見ていなかった青洲はたじろぐ。

その時、ふいに後ろから声がした。

「行った方がいいですよ」

青洲といずみが驚いて振り返ると、そこには佐川が立っていた。

「吉田さん、あなたも見ておいた方がいい。僕はそう思います」

「どうして……」

青洲はゴクリと唾を飲み込んだ。

「行けば分かりますよ。心配なら、僕も一緒にしましょうか？」
佐川は、いっになく神妙な様子で言った。

第七話 覆水盆に返らず(4)(前書き)

今回、中ほどに少々残酷な描写があります。苦手な方は、お気を付けください。 > m (——) (m <

第七話 覆水盆に返らず（4）

満潮を見計らって、玄武の岸まで船を出してもらった。いくらなんでも身重のいずみを、早春のこの時期に海に入らせる訳にはいかなかったからだ。

玄武の祠の前で、青洲は茫然と立ちすくんだ。砕かれた玄武の祠には、夥しい数の野いちごの枝が、まるで、中の玄武を逃がすまいとでもしているかのように絡みついていた。

薫は、年の離れた妹で、まだ大学生だった。黒髪のショートボブに、クリクリの漆黒の瞳。男の兄弟に囲まれて育ったせいかな、薫はボーイッシュな妹だった。

薫を一番甘やかしていたのは青洲だったと、家族の誰に聞いてもそう言うだろう。実際、この年が離れた妹を、青洲はとても可愛がっていた。小学生の頃には親の代わりに授業参観にも行ったし、高校生の頃に進路に迷っていた時にも相談に乗った。青洲と赤秀は父親似で、白舟と薫は母親似だ。薫といくと、よく恋人同士と間違われた。それほど仲が良い兄妹だったのだ。

「……薫……薫……」

青洲は、玄武に絡みついた野いちごの枝を力任せに引き千切っていった。涙が零れ落ちる。

瀕死の状態で倒れていた薫の手首から手の甲にかけて、何か黒いものが伸びていた。禍々（まがまが）しい人工的な模様に驚いて、袖をまくりあげると、それは腕だけでなく背中の方へも広がっていた。それは黒をメインに^{いまし}使って描かれた植物の蔓の入れ墨で、背中一面に、まるで薫を縛めるように彫られていた。背中の中央に、真っ赤な野いちごの実が描かれている。衛生状態の悪い場所で彫られたからか、または極度に衰弱していたからか、薫は敗血症を起こし

ていた。敗血症による多臓器不全。発見がもう少し早ければ、何とかなったかもしれないと医者は言った。

「青兄、ごめん……お義姉さんを巻き込んだ……」

それが薫が最期に残した言葉だった。

――巻き込まれたのは薫だったのに……

絵というものは、かなり個性がでるものだ。当然、青洲は全力を挙げて、薫に入れ墨を施した彫り師を探した。そして彫り師は、すぐに見つかった。公園の……ゴミ箱の中で。

死体は、玄武と同じ状態にされて、別々のゴミ箱から、それぞれの部位が発見されたのだった。

棘で手が切れるのも構わずに、青洲は野いちこの枝を引きちぎり続けた。やがて枝の奥から姿を現した玄武は、手も足も頭もなく、首を引っこめて身を守っているただのカメのようだった。

「青洲さん、手がっ」

血だらけになった青洲の手を見て、いずみが悲鳴を上げる。

特許をめぐる吉田の動きを敏感に察知した志木家は、すぐさま次の手を打ってきた。志木家は、強引なやり方でトーワ株の過半数を取得し経営権を奪取すると、トーワの従業員を盾に、吉田へ強引な結婚話を持ち込んだのだった。放っておくこともできた。しかし、そうしなかったのは、トーワを見捨てた青洲の良心の呵責だったのかもしれない。自分一人が多少我慢すれば、千人もの人が路頭に迷わずに済む。当時結婚に対して、何の願望も拘りもなかった青洲は、大して深く考えもせず、その話をのんだ。しかし、その半端な考えは、やがて恐ろしい結果へと結びついていった。

誘拐事件後、さほど間をおかずに、青洲の妻と薫を拉致した人物が警察に出頭してきた。トーワの元経営者だった。経営権をもぎ取られ、トーワを追い出された恨みの矛先を、何故か彼は吉田に向け

た。

『吉田青洲がすべて裏で糸を引いていたんだ。トローワにとって欠かすことのできない特許を二束三文で買いたたいておいて、一方で志木を唆^{そそのか}して、トローワを乗っ取らせたんだ。特許を盗られて価値のなくなったトローワを、志木に買い取らせておいて、自分は、のうのと志木から嫁をとる。次は志木を乗っ取るつもりですよ。吉田は乗っ取り屋だ。あいつらは悪魔なんですよ。悪魔の一人を俺は退治した。退治したただけなんだっ。俺は何も間違ったことなどしちやいないつ』

トローワの元経営者は、警察で、そうがなりたてたそうだった。

後日、中川が独自に調査した結果、薫の事件の直前、トローワの元経営者と青洲の妻が頻繁に会っていたという報告があった。聞いただす青洲に、青洲の妻、華陽は妖艶にほほ笑んで言った。

「あの人が、あんなことするなんて思わなかったわあ。私、嘘は言っていないわよ？ そうじゃないかって言っただけ……薫ちゃんは可哀そうだったわね」

「……」

——悪魔は誰だったのか……

青洲は凍りつく。

結局、悪魔は、自分だったのだ。

——俺が薫を殺した。

「青洲さん、手がっ」

いずみの悲鳴に気づいて、血だらけの掌を握りしめて立ちすくむ。
「青洲さん、手を見せてっ」

いずみは、持参した水筒の水を青洲の手の傷口に注ぐと、ハンカチを巻きつけて縛った。

「いずみちゃん、俺……」

青洲の言葉を遮るように、いずみは青洲を抱きしめた。

「青洲さん、ごめんね。玄武には辛い思い出があったんだね？ 私、何も知らなくて、無理を言って……ごめんね、ごめんなさい」

いずみは泣きながら青洲にしがみついた。

「違うんだ。君のせいじゃないんだ。俺こそごめん、取り乱して…」

…」

青洲もいずみを抱きしめ返す。

「いずみさん、水筒の水は、まだ残っていますか？」

それまで沈黙を守って静観していた佐川が口を開いた。

「まだ残っています」

「玄武にもかけてあげてください」

いずみは佐川に頷くと、持参した水筒から、青龍の井戸の水を玄武にかけた。

鈴守の離れに戻ってから、青洲は、五年前の事件を、いずみにぼつりぼつりと語った。

結局、どうしても妻の行動を許せなかった青洲は、地位も家督もすべて捨てて、吉田を出た。そうするより仕方がなかったのだ。単なる憶測や性格の不一致などの理由で離婚を言い出せるほど、吉田と志木の関係は簡単ではなかった。

「この前、君が作ってくれたオレンジデザートはね、薫が得意だったデザートにそっくりなんだ。あいつ、オレンジが大好きでね、それでいつも作っていたんだ。いつもたくさん作るもんだから、いつも冷蔵庫がいっぱいになって……赤秀がいい加減にしろって文句を言って……」

青洲は片手で顔を覆って、言葉を途切れさせた。いずみも一緒に涙を流す。青洲に辛い思いをさせてしまった自分が、哀しかった。

青洲は、ただ守りたかったのだ。家族を家を会社を従業員を……。それがどんどん裏目に出て行った。青洲が守ろうとすればするほど、大事なものが指の隙間から零れ落ちていく。結果がすべてではない

と言っけれど、その結果を受け入れられなかったらどうすればいい？ 逃げることに、それが正しいやり方だったとは思っていない。だけど、鏡に映る自分の顔を、父や赤秀そっくりな自分の顔でさえ、まともに見れないほど、ダメージを受けてしまった青洲には、それよりほかに術がなかったのだ。父も、赤秀だって、自分を責めることなどないと、頭では分かっているのに……

青洲の言葉の一つ一つを、いずみは心に刻みつけた。いずみは思う。どんな状況になっても、自分は、自分だけは青洲の味方で居たいと……。

いずみは、昨夜見た夢を思い出していた。

いつものように悪夢は進行し、いつものように青洲に助けを求めると、いつものように青洲はやってきてくれた。いつもと違っていたのは、青洲が悲しげな顔で、いずみを縊^くり殺そうとしたことだけだった。

第八話 出る杭は打たれる（1）

三十三年前

青子が暮らしていたアパートに電話のベルが鳴り響いた。電話のベルの音に何かしら違和感を感じて、青子はふと手を止める。

——鈴の音？

固まったまま電話を取ろうとしない母親を、隣の部屋でお人形遊びをしていた幼い秋乃が不思議そうな顔をして見つめる。

「お母さん？ 電話、とらないの？」

愛らしい瞳。秋乃は青子にそっくりなのだけど、瞳だけが父親に似ている。黒曜石の瞳。その瞳に励まされるように、青子は受話器をとった。

「青子か？」

秋乃の父親の、仁だ。

「仁？ 今どこに居るの？ もう戻ってきたの？」

青子は声を弾ませる。仁と青子は正式な夫婦ではない。仁には妻子がいた。でも、家同士で決めた結婚で、妻のことを愛していないと仁は言った。愛があるから愛人だ、そんな詭弁で自分を納得させて、そのような身分に甘んじたのは、その時既に秋乃をお腹に授かっていたからだった。

「今、島から戻ってきたんだ。すごいものを発見したよ」

仁も声を弾ませる。人懐っこい仁の笑顔が目に見えて、青子は顔をほころばせた。

「君から聞いた伝承は本物だったよ。すごいよ。これから研究室に寄って、少し後処理をしてから、君とこころへ帰るから」

仁の言葉に青子は目を見開いた。

「ここに来られるの？」

「ああ、久しぶりに君の手料理が食べたいな」

青子は喜びで胸がいっぱいになって、満面の笑みを浮かべたまま

受話器を置いた。しかし、仁が青子の元へ帰ってくることは、二度となかった。

その日の夜半、仁は研究室で倒れていたのを発見された。発見された時には、既に心肺停止の状態で、死因は心臓麻痺と診断された。青子が仁の死を知ったのは、それから一週間後のことだ。

仁の妻が青子の元にやってきて、金を置いて行った。秋乃は認知さえされていない子どもだ。本来ならば、放っておかれても文句は言えない立場だ。しかし、それでは寝覚めが悪いから、手切れ金として持ってきたのだと、仁の妻は冷ややかに言った。既に告別式も済んでいて、青子は仁の位牌に手を合わせることも、線香一本上げること、志木家の門をくぐることもさえ許されなかった。

何があったのか、何が原因なのか、さっぱり分からなかったのだと仁の妻は言った。ただ、研究室で倒れていた仁の周りに、砕けた土偶のようなものが散乱していたそうだった。

二年前、都内、志木家

秋子が志木家に入つてすぐに、メイドから訊かれたのは朝食のメニューだった。訊けば、志木家の朝食は、それぞれバラバラなのだそうです。当主の聖が和食、息子の司が洋食、華陽が半熟のゆで卵と野菜ジュースのみだ。朝食だけは家族が揃うことが決まりになっていた。今は嫁に行つて志木家にはいない昌代は、朝起きた時の気分で、朝食にあれこれ注文を付ける人だったので大変だったと言う話を、比較のおしゃべりなメイドが教えてくれた。名和家でも養子に出された先の佐藤家でも、朝食は家族そろって摂っていたけれど、みんな母親が作る同じメニューを食べていた。和食でも、洋食でも、それ以外でも……。

秋子が洋食を選んだのは、単に聖とは同じメニューを食べたくないという子供じみた反抗心だったが、一週間が経った頃には、洋食だろうが和食だろうが、野菜ジュースだろうが、ここの家の人とは、

食事を一緒に摂りたくないという結論に達していた。

秋子はコーヒーとクラッカーという、ごくごくシンプルな朝食を摂りながら、ぼんやりと聞くとはなしに、聖と司と華陽の会話を聞く。

「華陽、今日から石守だな。何度も言うようだが、石守では気を抜くな。東生は元より、冬樹にも十分注意することだ」

聖は重々しい声で言うと、食事に手を付けた。

「もちろん、そうするつもりですわ。でも、東生さんは卒中で、ほとんど寝たきりだそうじゃないのですの？」

華陽は、小馬鹿にしたようにほほ笑みながら、野菜ジュースを飲んだ。

石守家の当主、石守東生は一年ほど前に脳卒中を起こして、半身不随になっていた。

「わしは、冬樹にも気を付けろと言ったはずだが……」

聖は眉間にしわを寄せる。

「冬君は、昌代さんの言いなりよ。この前も六越デパートと一緒に食事をしたけれど、かわいいものだわ。二十歳にもなって、昌代さんにべったりなの。あの歳で、ママって呼んでたわよ？ それに伯父さまの可愛い孫でもあるのに、そんなに冬君が怖い？」

華陽はクスクス笑う。

「華陽、口を慎め」

それまで黙って聞いていた司が口を挟む。

「あれは孫でもなんでもない。昌代の馬鹿が、石守の子を産むなどと……正直なところ、あれにはがっかりしている。いや、昌代にはもうずっと前から失望していたのだ。あれには素質がないから。なんの役にもたたん」

聖は、苦虫を噛みつぶしたように顔を歪めた。

「素質がないのは、誰かと同じだな」

揶揄するように司の視線が秋子に注がれる。秋子は、その視線を特に気にすることもなく黙ったまま受け流した。ここの人たちの会

話は、さっぱり分からない。分かりたくもない。

「石守に鈴守がいるかもしれんのだ、用心するに越したことはない」
「はい。鈴守なら、見事に仕留めて差し上げますわ。鈴守など恐るに足らずですわよ？」

華陽は甲高く笑う。

華陽の妖しいまでに美しい顔を、秋子は、特になんの感情も見えない瞳で見つめる。仕留めるということが具体的に何を指しているのかは分からないが、関わらぬことだ。それだけを何度も心の中で繰り返す。

大抵の場合、秋子は、食べたくもない朝食をさつさと終わらせて、自室へ引っこむことにしている。その日は、自室のドアを開けようとしたところで、後ろから声をかけられた。

「お義母さん、いいことを教えておいてあげましょうか？」
司だった。

「……」

秋子は、口を引き結んで司を見上げる。

「あなたが、この家で無事にいられるのは、あなたが、素質のない単なる役立たずだからですよ。出ない杭ならば、打たれない」

司は切れ長の涼やかな目を細めて、薄い唇でにやりと笑った。

「……」

今の状態が無事だとは、決して思わない。でも今よりも悪い状況があるの？秋子は、少し戸惑ったように視線を泳がせる。

「それを良く覚えておくといい」

司は、嘲笑うように口を歪めると立ち去った。

* * *

島を出て、船が接岸した所に、赤秀が渋面で待ち構えていた。
「赤秀、まさかおまえが直々にやってくるとは思わなかったな」
青洲は、少し驚いてから、すぐに眉間にしわを寄せた。

「また逃げられたらかなわないからな」

赤秀は唸るように言った。

「もう逃げないさ。覚悟を決めたんだ」

青洲の言葉に、赤秀は、どうだか、と言って肩を竦めた。

「兄貴、この女を本当に連れて行くのか？」

赤秀は、まるで害虫でも見つけたかのように顔を顰めると、いずみを顎で指した。

「いずみの為に帰る気になったんだ。そんなに嫌そうな顔をするなよ」

青洲は小さくため息をついて、そつといずみを抱き寄せた。いずみは、玄武の祠から帰ってすぐ、体調を崩していた。食欲がなくなり、頭痛を訴えた。島の医者は、妊娠中毒症の一手手前かもしれないと言う。血圧が少し高めだったのだ。まだ調べたいことはたくさんあったが、青洲は覚悟を決めて、吉田に帰ることにした。今は何よりも安全が欲しい。それに、佐川が残って四聖獣の伝承のことは調べてくれると言う。

「いずみちゃん、大丈夫？ 苦しくないか？」

青洲は、車の中でも飛行機の中でも、何度も繰り返して訊く。

「大丈夫」

その度に、同じ答えを繰り返すのだけれど、どちらかというところの問いは、いずみの方がしたいくらいだ。

玄武を見てからの青洲の落ち込みようは、見ていてハラハラするほどで、薫を失った当時は、もつとひどく落ち込んでいたのだろうと推測すると、いずみは、なんだか胸の奥が、鉛を詰め込まれてしまった様に重くて痛い。

生まれて初めて乗った飛行機は、飛行感よりもスピード感よりも、閉塞感ばかりが際立ってしまった。

第八話 出る杭は打たれる(2)

とても病院とは思えない。いずみは、一人ぼうつとため息をついた。穏やかなアイボリー色の壁には、なんだか良く分からない抽象的な図形の絵が掛けられているし、大きめのベッドの横には、洒落たローチェストと小テーブルのセットが置かれている。ベッドの反対側には、面会者用なのかフカフカとして座り心地が良さそうなソファまであった。

飛行場から直接、リムジンでこの病院まで連れて来られた。この病院は、吉田グループが経営している病院で、青洲の弟、白舟が医師の一人として勤務しているのだと言う。

簡単な検査を受けて、いずみの入院手続きを済ませると、青洲は赤秀に引き立てられるように病室を出て行った。夕方には戻るから大人しくしててね、と言が残して。

いずみは、一人、居心地の良い部屋で、居心地悪そうに天井を見つめていたが、長旅の疲れからか、やがて夢も見ないほどの深い眠りの底に落ちていった。

この病院は、本来、病気がちだった青洲の母、朝香の為に創られたような病院だった。青洲の父、龍生が、療養生活で塞ぎがちだった妻の気を引き立てる為に設計させた病院だったので、病院と言うよりは、療養所と言う方が当たっているかも知れない。病院にしては、なんとなくゆったりとした雰囲気病院中を包んでいる。大学病院のように難病を扱う訳ではなく(もちろん、病状が重篤な場合には、提携している大学病院などに患者を搬送する準備はある)、どちらかと言うと、リハビリや療養を主目的としている。だからそういう対象の患者には、その緩い雰囲気好評で、今ではかなりなベッド数を抱える地域に根差した中堅の病院になっていた。

病院は、一般の人に開放している外来、病棟とは別に、吉田グル

ープの関係者が専用で使う病棟が別棟でくつついている。いずみは、その別棟の一室に入れられたのだった。

その日一日、夢と現^{うつ}を行ったり来たりしていたいずみは、真夜中にふと目覚めて息をのんだ。傍らのソファに赤秀が眠っている。恐る恐るベッドから降りて、ソファの上の人物を覗きこむ。

——ん？ 赤秀さんじゃない……

ブラインドから漏れ入る月光が、少し疲れたように目をつぶる横顔を照らし出す。

——青洲さん……

きちんと髪を切り、すっきりとした目のラインと彫りの深い鼻筋が現れると、頬骨の高さも厚めな唇も気にならないくらい精悍だ。

青洲を初めてみた時、四十代くらいかと思っていたが、今は年相応の三十代に見える。いずみは、両膝立ちでソファの前に佇むと、青洲の顔を食い入るように見つめた。

「……」

突然、パチリと目を開けた青洲といずみの視線がぶつかり合う。

青洲は、一瞬ぼんやりといずみを見つめていたが、次の瞬間、驚いたように起きあがった。

「いずみちゃん、目が覚めたの？」

「ごめんね、起こしちゃった？」

「良かった。白舟に訊いたら、あれからずっと眠っていて、血圧を測ろうが熱を計ろうが、食事を持ってこようが、ちっとも目を覚まさないって言うから、このまま君が目覚まさなかったらどうしようかと思ってしまったよ」

そう言いながら、青洲はいずみを抱きしめた。抱きしめ返しながら、いずみはクスクス小さく笑う。

「どうかした？」

青洲は、いずみの顔を覗きこんで首を傾げた。

「さっき目が覚めてね、ソファを見て、びっくりしたの」

青洲は更に首を傾げる。

「赤秀さんがソファで寝ているのかと思ったから。髪の毛切ったんだね？」

いずみは、クスクス笑いながら説明する。

「赤秀だったら、どうするつもりだった？ やっぱり覗きこむの？」

青洲は、いずみを引き寄せると、探るような声で耳元に囁く。

「赤秀さんだったら、また怒られないうちに、逃げなきゃって思ってた」

いずみは、くすぐったそうに首を竦めながら、クスクス笑う。いずみの答えに、青洲は軽く吹きだして、口づけを落とした。

「赤秀は、もう君のことを怒ったりしないよ。ここでは、誰も君を虐めたりしない。俺がそんなことさせないから、だから、一人でここから逃げ出そうなんて考えないでくれ」

「うん」

「約束だよ？」

「うん」

青洲の腕に抱きしめられたまま、いずみはほつと小さくため息をつく。

——こんなに幸せで、いいのかな？

このままでいらればいい、いずみは心底そう思う。

「いずみ、声を聞かせて」

青洲が懇願するように囁く。

「声？」

いずみは小さく首を傾げる。

「そう、君の声を聞くと癒される。何でもいいから、声を聞かせてくれないか？」

いずみは、小さく息をのむ。かつて、同じようなセリフを言われたことがあった。石守家の旦那様だ。

「いずみちゃん？ どうかした？」

考え込むように黙り込んでしまったいずみの顔を、青洲が心配そ

うに覗きこむ。

「あ、うつん、何でもない。ごめんね、何を話そうか？」

「……君が、今、思いついたこと」

青洲は、探るようにいずみの瞳を覗きこむ。

「……」

いずみは、小さく動揺して視線を泳がせる。

「それとも思い出したこと？ それを教えて」

「……うつん」

いずみは、戸惑いながら話し始めた。

いずみが石守家に奉公にあがった当初、当主だった石守東生は、まだ健在だった。一見、とても厳格で近寄りがたい雰囲気醸し出している人で、奥様も使用人たちも、いつも旦那様のご機嫌を伺っていた。その一方で、使用人たちの間で密かに囁かれる噂があった。ああ見えて、実は、旦那様は女性にだらしない。だから住込みの使用人たちからは毛嫌いされているのだと……。

母親に連れられて、石守家の門をくぐった時、奥様である昌代は、いずみを雇うことなど全く知らされていないと、ひどい剣幕でまくしたてた。いつもならば、何でもすぐに投げ出してしまふ母親が、その日は全く引く気配を見せなかったことを、いずみは今でも覚えている。石守の旦那様に直接会って、お話をさせてもらうまでは帰らないと食い下がった。奥様は、旦那様の悪い癖がまた始まったのだと吐き捨てるように呟いてその場を立ち去り、代わって旦那様が呼び出された。

わざわざ呼び出されて、不機嫌そうにやってきた石守の旦那様はいずみ達親子を、まるで物乞いでも来たかのように追い払おうとした。

「さっさと帰りなさい。あんな店での冗談を真に受けて、こんな所までのこのこやってくるなんて、非常識だろう？」

白髪の小柄な老人で、気難しさが、そのまま顔に出ているような人だった。眉間にしわを寄せて睨まれて、いずみは、泣きそうな表情で母親のスーツの裾を引く。一刻も早く逃げたかった。こんな所に一人ぼっちで奉公なんて、とてもできそうもない。しかし、母親は一步も引かなかった。

「そっちは冗談だったかもしれないけど、こっちは本気ですよ。条件はすべて呑んでるわ。こっちはもう引き返せないのよ。こんな立派なお屋敷の旦那様が、使用人を一人増やすくらい、なんでもないことじゃないの！」

かつてないくらい強気な姿勢を崩さない母親に、いずみの手から力が抜ける。

「条件を呑んだって、まさか……まさか、そんなことを本気で……」
旦那様が息をのんだ。

「これで、この子はあるたの思い通りでしょう？」

「……」

二人の会話を、意味も分からぬままに、ハラハラしながらいずみは聞いていた。分かったのは、母親が必死で自分を手放したがっていたことと、この屋敷でも自分は歓迎されていないらしいと言っただけだった。

今から思えば、その条件というのが、死亡届だったのだろう。いずみは、ここまで話すと、少し考え込むように間をおいた。

「いずみちゃん、俺、君に辛いことを言わせてる？　もし、話したくなければ……」

青洲は、いずみを抱き寄せる。

「違うの、どうしてあの時、母はあるなに必死だったんだろうって、今、不思議に思ったから……」

結局、奉公を許されたいずみだったが、母親にも石守の家の人にも、その部屋に置き去りにされた。戸締りの為に部屋を見回ってい

た住込みの使用人に発見されるまで、いずみは、その部屋ですつと途方に暮れていた。

石守家でのいずみの扱いは、ほとんど猫か犬並だった。特に仕事を頼まれることもなく、かと言って追い出されるわけでもない。使用人の誰かが気が向けば食べ物を与える。もしかして、自分の姿はみんなに見えていないんじゃないかと疑りたくなるくらい、石守家の人もその使用人達も、いずみに気を留めなかった。そんな状態が一月も経った頃、突然、奥様に呼び出された。

「この絵を描いたのはあなたなの？」

奥様は、涼やかな目元に嫌悪感を露わにして問い詰めた。それは、いずみが暇にまかせて、庭の花を広告の裏に描きとったものだった。

「は……い、そうですけど……」

「不吉だわ、こんな絵を描くなんて……なんて不吉な子なの！」
「？」

奥様は、怯えたように花の絵をビリビリに引き裂いた。元々白い滑らかな肌を更に青白くして、まるで絞殺されようとしてもしているかのように、奥様は、いずみを怯えた目で見つめた。

「クビっ、クビよ！ 今すぐ旦那様にクビにしてもらうからっ」

奥様は、使用人を呼ぶ為のベルを握りしめて、ひきつけを起こしたかのように振りまわした。けたたましいベルの音に、すぐに使用人が駆けつけ、奥様の命令で、いずみは旦那様の書斎へ連れて行かれた。

旦那様は、連れて来られたいずみには気づかない様子で、しばらく忙しく電話をかけたたり、書類に目を通したりしていたが、ふと、今気づいたというように、ぼんやりと佇むいずみに視線を合わせた。
「……君は絵が上手なのだそうだな」

そう呟くように言ったところで、電話がけたたましくなった。再び仕事の話をはじめた旦那様を、いずみはぼんやりと見つめる。

「……」
ついにここも追い出されるのだと、いずみが途方に暮れて黙って

いると、受話器を置いた旦那様が更に続けた。

「私の似顔絵を描けるかね？」

いずみは、驚いて顔を上げると、こくりと頷いた。

その日から、いずみは旦那様付きの使用人になった。いずみが居ていいのは、いずみにあてがわれた二階の小さな部屋（物置を兼ねていた）と旦那様の書斎のみで、屋敷から出る時も入る時も裏口を使い、絶対に奥様の目の触れぬ場所にいることが義務付けられた。使用人たちの大方の噂は、いずみが旦那様の若い愛人になったらしいというものだったが、旦那様の書斎で過ごす大半の時間を、いずみは絵を描いて過ごした。描いたのは、使用人たち全員の似顔絵。可能な限り精密に描きなさいという指示だったので、結構時間が掛かったのだ。そして全員分を描き上げた頃に、旦那様が突然脳卒中で倒れたのだった。

いずみに、たくさんの童謡を教えてくれたのが、石守の旦那様だった。

半身不随になってしまった旦那様の介護は、いずみに押しつけられた。何も仕事がないよりもずっとましだ。かいがいしく介護するいずみに、旦那様は、たくさんの童謡を教えてくれた。病に倒れてからの旦那様は、すっかり剣がとれて穏やかになっていたが、発声や音程には厳しくて、少しの乱れも聞き逃さなかった。そして、歌が上達すると、しょっちゅうこう言った。

「歌っておくれ、いずみ。おまえの声を聞くと癒される」と……

「……」

いずみが話を終えても、青洲は、いずみを抱きしめたまま黙りこくっていた。

「青洲さん？」

不安になって、いずみが問いかける。

「……」

「ごめんね、こんな話聞きたくなかったよね？」

いずみは、泣きそうな顔で青洲を見つめる。

「違う、違うんだ、いずみちゃん。俺は大事な人が大変な時に、いつも傍にいてやれない。それが辛かったんだよ。薫の時も、君の時も……」

青洲は、息を震わせながらため息をつく、いずみの髪を何度も梳きあげた。

「そんなことないよ。青洲さんは、私が大変な時に傍に居てくれたよ？ あの雨の日に、もうどこにも居場所が無くなって、途方に暮れていた私に居場所をくれたじゃない」

「いずみちゃん……」

青洲は、いずみをぎゅっと強く抱きしめてから、そのまま抱きかかえるとベッドへ運んだ。

「もうこんな時間だ。うつかりしていたよ。もう寝かさない和白舟にまた怒られる」

「白舟さんに怒られたの？ どうして？」

いずみは心配そうに青洲を見上げる。

「妊婦を逃亡に着き合わせた挙句、こんなに疲れさせるなんて言語道断だつて」

青洲は苦笑する。

「私は、疲れてなかったよ？ 今まで生きてて、こんなに楽しいことはなかったもの」

次の朝、看護師の怒声でいずみは目を覚ました。

「青洲様っ、いくら青洲様でも、患者様のベッドで一緒に眠るなんて非常識ですつ。いい加減にしてください！」

青洲は、寝ぼけ眼を擦りながら起きあがった。いずみは、突然の怒声に身を竦める。

「あれ？ 佐藤さん？ 看護師長なのに、こんな時間から仕事ですか？」

青洲は、大あくびをしながら、のんびりと話しかけた。

「どうしたら良いかと、わざわざ呼び出されたんです。若い看護師を困らせるのは、やめていただきたいのですがっ」

佐藤看護師長は、怒マークをつけたこめかみをピクピクさせながら、凄みのある目でほほ笑んだ。いずみは、真っ青になる。隣で眠って欲しいとねだったのは、いずみだ。

「このベッドは狭いなあと俺も思ったんですよ。佐藤さんが、そう言うのなら話は早い。常識的な大きさのベッドに取り換えてもらえますか？」

青洲はにこやかに答えたが、その言葉は、佐藤看護師長の怒マークの数を更に増やした様子だった。

「ごめんなさいっ。私が青洲さんに一緒に居て欲しいと言ったんです。もう、そんなこと言って困らせたりしませんから……あの……」

いずみが声を上ずらせながら、佐藤看護師長を見上げる。
「いずみちゃん、いいんだよ。ねえ、佐藤さん。こんな部屋じゃなくて、もっと大きなベッドの部屋があるでしょう？ そっちに移してもらえませんか？ 俺は当分、いずみの病室から出勤することになるんだし、ここじゃ、シャワーも使えない」

「……でも、あちらには……」

看護師長は口ごもる。

「赤秀の許可が必要……ですか？」

「……」

「佐藤さん、移してあげてください」

ドアが開いて、赤秀が現れた。

「赤秀様っ……ですが……」

佐藤看護師長は、当惑して口ごもる。

「ここだとほかの患者さんの目がありますからね、兄弟喧嘩もできない。昨夜も部屋に戻ってないと思って心配していたら、こんなところに泊って……。まあ、こんなことだろうと思っていましたかね。兄さんは、薫が死んでから、頭のねじが二、三本抜けちゃっているでしょう。放っておいたら、ここを根城にしかねませんよ。佐藤

さんも、毎朝呼び出されるなんて嫌でしょう?」

佐藤看護師長が、当惑気味に病室を出ていくと、赤秀は青洲に向き直った。

「兄さん、早速だけど、志木家が動き出したよ。何をどう調べてるんだか、兄さんの行動は逐一見張られているようだ。あの家は一体なんなんだ? 化物じみてるな。どうするよ?」

「その話は、後で聞くよ。とにかく一刻も早く、いずみを奥に移したい」

青洲は、眉間にしわを寄せた。

「そうだな。その方が良さそうだ。ここで事件を起こされちゃ、病院の評判が落ちる」

赤秀は、ちらりといずみを横目で睨むと、青洲に、では後で、と言い残して出て行った。

「青洲さん?」

いずみが不安そうに青洲を見上げる。

「大丈夫だよ。いずみちゃん心配しないで、大人しくしてて」

青洲は、いずみの髪を一梳きするとベッドから下りた。窓を開けると、庭に面した南向きの窓から春の気配がどっと溢れこんだ。

第八話 出る杭は打たれる（3）

十年前

秋乃がその人にあつたのは、夜の仕事を始めて、まだ間がない頃だつた。

「君が、鈴森秋乃さん？」

突然の来訪で、突然の指名だつた。細面に涼しげな切れ長の瞳をしていた。しゃべり方も仕草も柔らかいのに、威圧感のある男だつた。その涼しげな瞳の奥に、何か閃く刃物のようなものが潜んでいるようで、秋乃は竦み上がる。

「はは、緊張してしまつたかな？」

男は目を細める。柔らかい笑顔、だけど、その瞳の奥には得体の知れない闇がちらちらしている気配がした。秋乃は更に身を硬くする。

竦み上がっている秋乃を店のママが目線でたしなめる。先ほど、指名が入つたと知らせに來た時に、この店一番のVIPだから、くれぐれも粗相のないようにと、秋乃は釘を刺されていた。

その男の名前は、志木^{しき}聖^{さとし}。六十代とは思えない肌の張りをもち、男でありながら妖艶な美しさを持った人物で、そうであるのに、いったん口を開けば、そのなやかな外見からは想像ができなくらいの威厳と威圧感を醸し出す人物だつた。

「君は、斉藤心の奥方なのだそうだね」

まだ新人で気がつかないからと氣遣うママを無視して、人払いをし、秋乃と二人きりになった店内で、志木はいきなり秋乃にこう問いかけた。秋乃は目を見開いて志木を見つめる。志木は、心の絵を買っている画商と知り合いなのだと言つた。

「彼の絵は、実にすばらしい。もっと高値で買い取つてやつてくれと言っているのだが、なにしろ、彼の御両親が作つた借金が莫大でねえ」

秋乃は、心の絵を褒められたことが嬉しくて、志木への警戒心を少し解いた。

「心の絵を褒めていただけただけで、とても嬉しいです。ありがとうございます」

秋乃はにっこりとほほ笑む。

「ちよつと小耳にはさんだのだけど、彼の御両親は本当の親じゃないとか……」

「……」

秋乃は小首を傾げる。

「いや、本当の親じゃないのに、借金を肩代わりさせられるのも、気の毒なことだと思ったんだよ。何かほかにやり方があるのじゃないかと思ってね」

「彼は養子なんだと言っていました」

他のやり方があるのなら、教えてほしいと心底思う。

「彼の元の姓は何か知っているかい？」

「……それが何か関係あるんですか？」

秋乃は用心深く答える。

「いや、特にそう言う訳じゃないよ。あそこまでの絵を描ける人だからね、何か血筋のようなものでもあるんじゃないかと、ふと、そう思ったただけだ」

志木は、何気なく言って、ロックのウィスキーをちろりと舐める。
「すみません、それは聞いていないので、お答えできないようです」
「ふうん、夫婦なのに変な話だね？」

志木は目を細めて秋乃を探るように見たが、それ以上追及はしなかった。

その日から、志木聖は、店に来るたびに秋乃を指名するようになった。

* * *

今現在、志木グループを実質上取り仕切っている志木司^{しきつかさ}が、青洲に面会を申し込んで来たのは、青洲が吉田に戻った三日後だった。

「戻ってらしたんですね」

ダークスーツをスマートに着こなした志木司は、涼やかな目を弧にしてほほ笑んだ。

青洲は司に座るように勧める。

「今日は、どういったご用件ですか？」

青洲は感情の見えない表情で司を見つめる。

「その前に、あなたは、私や、ひいては志木家に言わなければなら
ないことがあるんじゃないですか？ 華陽のことなど、もう忘れ
去りましたか？ 吉田から放り出されたあなたの元妻を……」

司は笑みを引っこめて、鋭く青洲を見つめる。

「……その件は、既に片がついた話だと、私は理解しています。何
もかも放り出して逃げだしたことについては、非礼を詫びますが、
その件を話しにいらつしやったのであれば、彼女が何をしたのか、
彼女を吉田に送りこんだ志木家の思惑について、説明を求めること
になりますか、構いませんか？」

青洲も鋭く司を見つめる。

「志木家の思惑は明快です。優良企業である吉田と手を組みたかつ
た。それだけです。今の時勢では、企業同士の協力なしに発展は
ない。そうは思いませんか？」

司は再び笑みを浮かべたが、瞳は決して笑んではない。

「そうですね。協力する相手さえ間違えなければね」

青洲も冷笑を浮かべる。

「今日伺ったのは、トローワの件についてなんです」

司はすらりと伸びた脚を組みかえながら、話題を変えた。

「トローワを買い取ったのは良いのですが、少々、手を焼いていまし
てね。あそこは、従業員の結束が異常に硬くて、経営者の方針など
犬の無駄吠え程度にしか思っていないようですね。できれば手放した
いのですよ。もし、吉田で引き取ってもらえるのなら……」

「そのような話ならば、赤秀を呼びましょう。私に話すだけ無駄です。何の権限も持っていないからね」

青洲は、隣に置いてあった内線電話に手を伸ばす。

「いえ、話はまだほかにもあります。赤秀さんと呼ぶのは、その後にしてください」

司は青洲を制止した。青洲は伸ばした手を止める。

「こちらに、鈴森いずみさん……がお世話になってますよね」

司は青洲を探るように見つめた。

「……いいえ、そのような方はこちらにおりませんが……」

青洲は一瞬間をおいてから答える。

「あなたが逃亡に連れまわっていた女性の名前は、いずみという名前だと報告を受けていますか？」

司は、探りを入れていたことを隠しもせずに、そう言った。

「ええ、いずみという名前ですが、鈴森ではありません。人違いではないですか？」

青洲は用心深く答える。鈴森の名前はずっと伏せてあるが、いずみと呼んでいるところを押えられている可能性はある。

「おかしいな、もしかして、偽名を名乗っているのかな。写真をお見せしましょうか？」

司はそう言つて、スーツの内ポケットから一枚の写真を取り出した。そこには、書斎のデスクの上を拭き掃除しているらしいいずみの姿があつた。少し首を傾げてほほ笑んでいる。

「彼女をご存知ですよね？」

「……やはり、人違いのようですよ。いずみはいずみでも、私の妻は、別人です」

青洲は、写真をしげしげと見つめてから、首を傾げて写真を司に返した。

「おや、再婚されたんですか」

司は軽く驚いたように目を見張る。

「籍はまだ入れていませんがね……。ところで、この方はどうされ

たんですか？」

「彼女はね、ちょっとした手違いで、奉公していた家を追い出され
たんです。僕の甥っ子の子を身ごもっていたんですが……」

「……」

「すぐに手を尽くして探させたんですが、見つからなくて……甥も
すっかり気落ちしてましてね。母親の理解を得られずに一旦はあき
らめようとしたらしいんですが、そこはまあ、愛し合っていた訳で
すからね。失って初めて事の重大さに気づいたと言ったところでしょ
うか……ちよつと至らない甥っ子でね」

司は苦笑してから、

「……ですから、彼女を返して欲しいんですよ」と言つて、青洲を
真つ直ぐ、挑戦的な瞳で見つめた。

「それは御心配でしょう。早く見つかるの良いですね」

青洲は気の毒そうな口調で、しかし、鋭い視線で、司をにらみ返
す。

「……人違いでしたか。残念です」

司は、そう言いながら写真をポケットにしまった。

「では、赤秀を呼びましょうか？」

「お願いします」

青洲は内線で赤秀を呼び出した。

「……立ち入ったことをお聞きするようですが、一つ伺つてもいい
ですか？」

受話器を置いて、赤秀が来るまでの沈黙を青洲が破る。

「なんでしょう？」

「その女性を探していると言う、あなたの甥子さんは、どうして自
らここへ来ないのですか？ 探しているのは甥子さんなんでしょう
？」

青洲の質問に、司は小さくため息をついた。

「彼は、今、病氣療養中です。原因不明の熱を頻発していますね。
すっかり気弱になってしまって、姉が心配しているんですよ。姉も

突然の妊娠話で動転しただけで、それほど愛し合っているのならば、連れ戻したいと言いついて出してまして……それで、僕に搜索の役目が回ってきたという訳です」

「そうでしたか……それは御心配ですね。お大事に……」

やがてやってきた赤秀に、その場を譲ると青洲は外へ出た。自己専用を用意されたオフィスの個室に戻ると、窓の外を険しい顔で睨みつける。眼下に、オモチャのような車が列を作っている。歩道を歩く人が、ぼつりぼつりと傘を広げ始めるのが見えた。外界から隔絶された高層ビルの一室。人々の振る舞いが、外の変化をいち早く知らせていた。

「雨……か」

誰に言うでもなく、青洲は一人ぼつりと呟いた。

第八話 出る杭は打たれる（4）

志木司は、車の後部座席にもたれながら、小さな笑みをもらした。
『ツカサ、どうして鈴森いずみを連れて帰らな Catt? あそこに
いるとワタシが教えてやったノ二』

後部座席には司以外に誰もいないはずなのに、すぐ耳元で、くぐもった幼女の声がする。声は運転手には聞こえていないらしく、何の反応もない。司は、くつと笑って携帯を取り出すと、掛けるふりをしながら一人呟く。

「あそこに鈴森いずみがいることなんて、教えてもらわなくても分かったさ」

『ナゼ?』

「返して欲しいと俺が言った時の青洲の顔を見たか?」

司はおかしくて仕方がないと言つように、顔を歪めた。

『?』

「返さないと言わんばかりに睨みつけていただろ? 居るってことが見え見えだ」

『この後、どうするツモリだ? 鈴守をあきらめるノカ?』

幼女の声はくぐもっているだけでなく、その声からは何の感情も汲み取れない。あきらめることを望んでいるのか、残念だと思っているのか……。しかし、司は、まるですべてお見通しだと言わんばかりに、形の良い口角を引き上げて笑んだ。

「まあ、見てろよ。俺が蒔いた不安の種が、どんな花を咲かせるのかをね。あの青洲が嘘をついてまで手放したくない女だ。会つのが楽しみになったよ」

司は、くつくつと笑いながら、携帯を内ポケットにしまいこんだ。

* * *

辺り一面に濃霧が立ちこめている。見えるのは自分の足元だけ。いずみは、ぼんやりとその中で佇んでいた。耳をすましても何も聞こえない。足元の地面を見て、ここは野外なのだと言うことだけが分かる。

——歩き出すべきか、留まるべきか……。

その時、唐突に誰かが歩いて来る靴音がした。

サク、サクサク、サク……

誰かが近づいて来る気配がする。さほど大きくない人の……むしろ、子どもの様な軽やかな靴音だ。

「やあ、こんな所に居たんだ……見つからない訳だね」

高く良く通る澄んだその声は、すぐ背後から聞こえた。

「誰？」

いずみは振り返って問いかける。そこには、いずみと同じくらいの背の高さの、少年（少女？）が立っていた。黒髪のショートヘアーに、漆黒の大きな瞳。

「分からない？」

その少年（少女？）は、悪戯っぽい目を輝かせる。

「え？ だって……会ったことないよね？」

会ったことはないと思う……だけど、何故だか懐かしい。いずみは戸惑いながら返答する。

「きつと分からないだろうとは思ってたけど……」

少年（少女？）は、振りながら肩を竦めて続けた。苦笑しているようだ。

「おいでよ。危険が迫ってる。早くしないとやられるよ？」

少年（少女？）は、鋭い視線でいずみを見つめると、手首を掴んでをぐいっと引っ張った。

「え？ どこに？」

少年（少女？）は、返答もないままいずみの手をとると、濃霧の中、ためらう様子もなく前進した。

「ねえ、あなた、名前は？ 名前くらい教えてくれたっていいでし

よ？」

いずみは足をもつれさせながら、必死について行く。それくらい少年（少女？）の足は速かった。

「名前なんてないよ」

少年（少女？）は、少し傷ついたように言う。

「え？　なんで名前がないの？」

いずみが驚くと、彼（彼女？）は、眉間にしわを寄せて振り向いた。

「どうして名前が必要なの？」

「だって……呼べないじゃない」

いずみが口をとがらせると、その少年（少女）は虚を突かれたように立ち止まると、一瞬照れ臭そうな顔をしてから、ぷいっと前を向き、再び歩き出した。前よりも、少し歩く速度が遅い。いずみに気を使ってくれているらしい。

つないだ手から、温もりが伝わってくる。手を通して、ぎこちなく、戸惑いながら、控えめに伝わってくる心の波動。

「じゃあ、呼びたいように呼んでよ」

ついに、少年（少女？）は、くすぐったそうな笑みをいずみに向けると、はにかみながらそう言った。

「なにそれ……」

いずみは、首を傾げる。その少年（少女？）には、やはり既視感があった。背中から肩にかけての真っ直ぐなラインとか、少し癖のある柔らかそうな髪とか、横顔の鼻から口に掛けるのラインが、やけに懐かしい。初めて会ったのに懐かしい……。いずみが、不思議な気持ちで歩いていると、少年（少女？）は、突然立ち止まって、少し緊張した面持ちで振り返った。

「着いたよ。ここだ」

そこには、古ぼけた木の扉があった。その古い木の扉にいずみは見おぼえがある。

「ここから先は、僕は行けない」

——僕？ 男の子なの？

「……もしかしたら、もう遅いのかもかもしれない。だけど……何もしない訳にはいかないだろ？」

少年は、難しい顔をして呟いた。

「遅い？ 何が遅いの？」

「気づくのが遅かったかもしれない。あなたは小さいものには鈍感だから……」

——小さいもの？

「……何をするの？」

「僕らにできること。僕らにしかできないこと……」

言葉の意味は分かってても、言っている意味が分からない。少年の言葉は、まるで呪文のようだといずみは感じる。

「さっぱり分からないよ？」

いずみは首を傾げる。

「いいから、扉を開けて」

少年は急きたてるように、いずみの背中を押した。

いずみは、その古ぼけた懐かしいドアの前に立つと、手に馴染むドアノブを回し、ぐっと引く。途端に、中からぶわっと懐かしい匂いがあふれ出した。

父さんが絵を描いているんだ。

いずみは部屋の中をキョロキョロと見回す。室内には絵具の匂いが充満していた。部屋の中には大きなカンヴァス、複雑に混ぜ合わされて微妙な色合いに調節された、パレットの上の絵具たち。

筆をカンヴァスに乗せる音と匂い、そのほかは、何ものも立ち入ることを許されていない。

静寂、ただ、静寂……

いずみの目は、父親の背中を見つめながら、ぼうつと座る小さいいずみに注がれる。

いずみは思い出していた。父が絵を描き始めると、いつもこんな

雰囲気的空間と時間が、部屋全体を支配した。圧倒的なその力に、小さいずみは、ただただぼうつとなつて見ることを忘れてしまふ。自分の小さな背中が喜色を湛えているのが分かる。いずみは、父が絵を描いている時間が好きだったのだ。

いずみは、父が描いているその絵を良く覚えていた。否、今鮮明に思い出したと言う方が正確だ。

その時父が描いていたのは抽象画で、風景画ばかりを描いていた父の作品とは趣を異にしたものだった。緑色の蔓性の植物をモチーフにした、全体的に緑色の絵で、その蔓の奥に何かが潜んでいるのが分かる。何か恐ろしいまでの負のエネルギーを滲ませて潜む何か、それを封じるように立ちはだかる蔓、蔓……。絵の所々に、赤いルビーのような果実が描きこまれている。

その時、小さいずみが突然声をあげた。

絵を描いている父に声を掛けることなど滅多になかったはずみだったが、その時、何かに突き動かされるように声を掛けた。それを感じ出す。

「お父さん？　ここは？　ここはどうして何も描いていないの？」

絵のど真ん中に五百円玉程の空白があつた。何もない、真っ白な空白。

「……描けないんだよ」

小さいずみの言葉に、父は少し困つた顔をして振り向いた。

「どうして描けないの？」

「どうしてかな？　何故が分からないんだけど、描けないんだよ」

父は難しい顔をしてため息をついた。

「ねえ、いずみが描いてもいい？」

小さいずみは、目を輝かせる。父に似て絵は得意なのだ。小学生にしては、一人前な絵を描くなあと父に褒められたこともある。もつとも、半分以上は親のひいき目だったかもしれないが。それに、失敗したって塗りこめてしまえばいいことを、いつも父親の仕事を見ていたいずみは知っていた。

「……描いてみるかい？」

父は悪戯っぽく微笑むと、大胆にも、持っていた絵筆をいずみに渡した。

「ここに野いちごを描いてあげる」

小さいいずみは、高らかに宣言した。

それを見ていた今のいずみは慌てる。

——私、そんなことを言ったかしら？

父の絵に描くなど、今のいずみでは考えられない。慌てて止めた衝動に駆られていると、小さいいずみは、臆することもなく大胆な筆さばきで、その小さな空白に大粒の野いちごを描きこんだ。

鮮やかに紅く、濃く、露を纏った様に濡れた野いちご。

その野いちごは、まるでショートケーキの上の一粒のイチゴのように、燦然と絵全体の頂点に立った。それなしでは、すべてが成り立たない、それほど存在感をもって、その絵を支配した。

横で、父親がぐくりと喉を鳴らしたのに、今のいずみは気づいた。そして、思い出す。

——そうだ……この後……確か……

ビシッ、ずざざざ、ドーンッ

今のいずみが気づいた時には、小さいいずみは、父から手加減のない平手打ちを食らって、ふっとび、壁に激突していた。それは、あつという間のできごとで、悲鳴を上げる間もなかった。一度だっていずみに手を上げたことがなく、叱ったことさえなかった父が、この時は鬼神のような形相だったことを思い出す。

震えながら呆然と父を見上げて、いずみが泣き始めると、父は我に返ったようにいずみに駆け寄り、抱きしめた。

「いずみ、たぶん、おまえが最後の希望なんだ……。ああ、分かっていたとも……。分かっていたんだ。いいか、この絵は父さんが描いたんだ。おまえは何もしていない。分かったね？ いずみは何もしなかった。いいね、このことは忘れるんだ！」

父は泣いていた。そして、少し震えていた。そして、あまりの衝

撃と困惑で、いずみは、父の言いつけどおり、その時の記憶を封印したのだった。

いずみは、すっかり思い出していた。

それ以来だ、父が、いずみに絵について色々な技法を教えてくれたのは。中でもとりわけ、記憶に鮮明なのは、人物画についてだった。

「いいか、いずみ。自然界にあるものは、限りなく厳密に精密に描いても構わない。だけど、人物画を描く時には気をつける。そのまま描いては駄目だ」

「どうして？」

父は少し考えてから、突然いずみの似顔絵を描き始めた。いずみは目を見張る。まるで写真のように正確に紙の中に写し取られていく自分。指の皺一つ、髪の毛の一本に至るまで精密に、父は描きとろうとしていた。いずみは、描かれていく絵を見つめて、ごくりと唾を飲み込む。手が自然に喉のあたりをさする。

——息苦しい……まるで、紙に閉じ込められていくみたいだ……

「どうだ？」

いずみの様子に気づいた父が、鉛筆を止めた。

「なんだか良く分からないけど……苦しいよ……」

父は、心得顔で頷くと、突然、絵の中の目をぐりぐりつと漫画チックな瞳に描き変えた。まつ毛バサバサの星が宿っているような大きな瞳。元々クリクリした大きな目をしているいずみだけれど、これじゃあ少女漫画だ。ところが、父がそうした途端に、息苦しさがふわっと無くなった。父は言った。

「いいか、いずみ。人を描く時は、特徴をデフォルメするんだ。そうしないと、今おまえが感じた息苦しさを、その人にも味わわせることになる」

「どうして？ どうしてこんなことになるの？」

いずみは目を見開いて父に問いかける。

「どうしてだろうね？ 分からない。血筋……じゃないかな」

父は寂しそうに笑った。

「……私が描いてもそうなるの？」

いずみの問いかけに、父は少し首を傾げてから、

「じゃあ、父さんを描いてごらん」と言う。いずみが紙に鉛筆を走らせると、父は、しばらくしてクスクス笑い出した。

「もう、いいよ。もうやめてくれ。成程、君のは、少しタイプが違うんだよ。なんだかすごく心地が良いんだ。陽だまりの中でウトウトしてる気分になる。でも気づいたら、大変なことになっていそうだ。君の方がよほど怖いね」

父は心地良さにほほ笑んでから、急に真顔になって諭すように、
「やっぱり血筋なんだろうよ。君もなるべく人物画は描かない方がいい」

と言った。

いずみは、こつくりと頷く。

「分かった。人はなるべく描かないようにする。描く時は、正確には描かない」

父はいずみの言葉に満足そうに頷いて、そして、こう付け足した。
「いいか、いずみ、正確に精密に描く時は一つだけ、戦う必要に迫られた時だけだ」

「戦う時？ 何と？」

「その時が来たら分かるよ。そして、このことは誰にもしやべっちゃいけない。母さんにもね」

突然、ぶわつと激しい風が吹いて、いずみが手で顔を覆って目を閉じると、鼻先でパタンとドアが閉じた。

再び濃い霧の中

「分かった？」

背後で少年の声がする。

「分かったって……何が？」

「僕らにできること。僕らにしかできないことだよ」

少年は、眉間にしわを寄せて言った。

「あなた……誰？」

いずみも眉間にしわを寄せる。

「誰でもないよ……今はまだね」

誰かに似ているのだ。いずみは、考え込む。ふと、いずみの視線が少年のスラリとした長い指に留まる。この、男の子にしては節が目立たない滑らかな指は……

「冬樹さま？」

呟いたところで、いずみは目を覚ました。気配に気づいて横を向くと、そこには、少し困惑したような表情で、青洲がいずみを見つめていた。

第九話 船は水より火を恐る（1）

「……青洲さん？」

いずみはほほ笑んで起きあがると、青洲に手を伸ばす。いつもならば、青洲はいずみを抱きしめてくれるのだけれど、その日は、少し当惑した様子で、いずみの頭をくしゃりと撫でただけだった。

「……」

いずみは、ほほ笑みの引いた瞳で青洲を見上げる。

「どう？ こっちの病室は、もう慣れた？」

看護師長に怒られたあの日、朝食さえ摂らないうちに、この奥の病室に移された。別棟の病棟の更に奥の別棟。そこは、吉田家のプライベートの病室だった。一見したところでは、中庭のある一軒家。小さなナースステーションと各部屋にナースコールがある以外は、普通の家と何ら変わりない。もちろん各部屋は個室の病室になっていて、それぞれの部屋にシャワーとトイレが付いている。別室で、ジャグジー、サウナ付きの浴室もあるが、一通りの生活が個室内で完結できるようになっている。

五年前、青洲の母、浅香はこの病棟の一室で亡くなった。元々あまり丈夫な人ではなかったのだが、薫を失ってから、すっかり抜け殻のようになってしまい、寝込むことが多くなり、笑顔を取り戻す間もなく逝ってしまった。この奥病棟に居るのは、今は、いずみだけだ。看護師は検温とか食事とか決まった時間にしかやって来ない。テレビもビデオも完備されていて、いずみが望めば本でも雑誌でもゲームでも用意してくれるらしいのだが、いずみは何も要望しないままその日一日を過ごしていた。スケッチブックと色鉛筆は、いつものように持っているが、今は何を描く気も起こらない。しーんと静まりかえった病室にぽつんと一人でいると、いずみは、世界から忘れ去られた気分になる。

「ここは、寂しいよ……前の病室に戻ってはダメ？」

いずみは、しょんぼりと俯いた。

「……駄目」

青洲は、そう言うと、小さくため息をついた。

いずみが寝言で呟いた名前に、青洲は打ちのめされていた。そんな青洲の気持ちを知る由もないいずみは、当惑する。

「どうして？」

「……いずみちゃん、君は……」

青洲は言葉を途切れさせる。

「……青洲さん？　どうかした？」

「……俺、シャワーを浴びてくるよ」

青洲は、伸ばしかけた手を途中で止めると、いずみと視線を合わせることなく部屋を出て行った。

時間はゆつくりと流れていく。

青洲は忙しいのか、夜遅くにいずみの病室に帰ってきて、朝早く朝食も摂らずに出ていく。少しずつ青洲との距離がひらいていく気がする。そんなことはないと何度言い聞かせても、いずみはどんな惨めな気持ちになっていく。すっかり旅の疲れも取れたせいか、もて余した時間がいずみを更なる不安へといざなう。

奥病棟には、こじんまりした庭が付いていて、小さな人工の滝付きの池と植え込みで、まるで水墨画のような風情を演出している。池では大きな鯉が緩やかに泳いでいて、池を囲む岩の上では、時々亀が甲羅干しをしていることがある。いずみは、備え付けのサンダルを履いて庭に出ると、亀がいなかった植え込みの下を覗きこんだ。ここの亀は、とても人懐っこい。この前食事についていた蒲鉾を差し出すと、直接手から啄ばんだ。この亀は、わざわざ連れて来たのではなく、いつの間にか住みついていたのらしい。今朝は朝食にバナナが付いていた。何かの本で亀がバナナを食べると聞いたことがあったいずみは、本当に食べるかどうか試してみたくて、膝が汚れるのも構わず、池の際の植え込みの下を覗きこんだ。

「薰っ、あぶないっ」

突然、大きな声で呼びとめられ、背後から抱きかかえられて、いずみは驚いた。持っていたバナナが足元に転がる。振り返ると、大柄な老人がいずみを羽交い絞めにするように抱きかかえている。

「……あの……」

いずみは、抱きかかえられたまま目を見張る。

「薰っ、前に池に落ちたことを、もう忘れたのか？ おまえは、少しお転婆が過ぎる。もう少しおしとやかにしないと、嫁の貰い手がないぞ」

老人は眉間にしわを寄せて、いずみをたしなめた。

「だって……亀にバナナをあげようと思って……」

どこことなく青洲や赤秀に似た面ざしを持つその老人に親近感を持ったいずみは、そのまま訂正することなく言い訳を返す。

「ぬうわぁにを言っておる。亀がバナナなど食べるものかつ」

老人は、小馬鹿にしたようにいずみを睨みつけたが、いつの間にか足元に転がったバナナに食らいついている亀に目を止めると、絶句した。

「大胆那さまっ」

その時、背後から看護師の悲鳴のような声が聞こえた。

吉田家当主の吉田龍生は、癌を患っていた。にも拘わらず、病院を毛嫌いし、奥病棟にさえ行くことを拒んでいるのだと言う。

「今日は、どうしても検査を受けてもらわないといけないと思って、強引に連れて来ていたんですよ。最近、少しボケたことを言うようになっていて……びっくりしたでしょう？ 大丈夫でしたか？ すみませんでした」

医師である吉田白舟は、奥病棟の談話室でいずみに謝った。

「大丈夫です。少しびっくりしたけど……」

いずみは、微笑んで続けた。

「あの……私って、薰さんに似ているんですか？」

問いかけられた白舟は、一瞬いずみをまじまじと見つめてから、
「いえ、それほど似ていないと思います。妹の薫は、ボーイッシュな子だね。顔は僕に良く似ていました」

白舟はそう言うと、寂しげにほほ笑んだ。

「……」

いずみは、しんとした気持ちになって黙り込む。

薫の死、それがどれほど吉田家に重くのしかかっているのが痛いほど伝わってくる。ようやく青洲が戻ってきて、吉田家は再び元の平和を取り戻そうと懸命になっているに違いない。自分は足手まといになっているんじゃないだろうか……いずみは、自分を見る赤秀の眼差しを思い出して身を竦めた。

「……私は……たぶん、こちらにすごくご迷惑を掛けているんじゃないか……」

いずみは頂垂れた。そんないずみを白舟は面白そうに見つめて言った。

「何をもってあなたが、そんなことを言うのか僕には分かりませんが、少なくとも僕はあなたに感謝していますよ」

白舟の言葉にいずみは顔を上げて、きょとんと白舟を見つめる。

「……だって、赤秀さんは、私のことが嫌いみたいですよ？」

いずみの言葉に、白舟は苦笑する。

「あれは、一種のやきもちですよ。赤秀は兄を連れ帰れるのは、兄を助けられるのは、自分だって思い込んでいましたからね。あれは、なんだかんだいって、青洲兄のことを敬愛しているんです」

「……」

「今の青洲兄が、あなたにとってどのような人物なのかは分かりませんが、僕たちにとって青洲兄は、吉田の父と同様に、強い庇護者だったんです。何があっても兄に相談すれば何とかなる。そう思っているところが僕達にはあって……青洲兄が薫を失ったことで、あれほどまでダメージを受けるなんて想像もつかなかったんですよ。兄の強さは、守るべきものがあればこそその強さだったのだと、今回

のことで僕は思い知らされました」

「青洲さんは、私にとっても庇護者です。青洲さんがいなければ、恐らく私は……」

——あの雨の日に、この世界から零れ落ちていたに違いない……

「僕はね、この前兄が突然帰ってきて、あなたと一緒にいるらしいと中川から聞いた時、ああ、兄は守るべき対象を見つけて、安全な岸にたどり着いたんだとほっとしたんですよ。それまで僕は、もしかしたら兄は、もうこの世にいないのではないかと危惧していたので……」

いずみは息がとまりそうになる。青洲さんに何かがあれば、私もきっと生きていけない。そんな気がした。

「兄の守護神と言われている龍はね、顎の下に宝珠を持っているんですよ」

白舟が突然にこやかな顔になって話しだす。

「ホウシュ……ですか？」

いずみは首を傾げる。

「宝玉のことです。見たことはありませんか？ 龍のキーホルダーとか絵とか、本来は顎の下にあるとされているのですが、手に持たされているものもあるんです」

「ごめんなさい。見たことがないと思います」

いずみは、店と名の付く場所へ、あまり行ったことがなかった。

「そうですか。大抵の龍は宝珠を持っているんですよ。その宝珠は如意宝珠だと言われています。如意……つまり、思いのままになる宝玉なのだ。兄にとって薫は、兄の力を最大限に引き出すことのできた宝珠だったんじゃないかと僕は思っています。そして今、その役目をあなたが引き継いでいる。僕はそんな気がするんですよ」

白舟の言葉にいずみは、小さく首をふる。そんな大それた役目を自分がしているわけがない。自分は青洲の重荷に過ぎない。

「だから、あなたは何も気にする必要はないんですよ。無事に過ごして、健やかな赤ちゃんを産めばいいんです」

いずみは、白舟の言葉に泣きそつになる。

「でも、このお腹の赤ちゃんは……」

しかし、いずみの言葉は白舟に遮られた。

「鈴守の子は、吉田の子でもあります。それ以上に、あなたの心が青洲兄と一緒にある限り、あなたも、その子も吉田の一員なんです」

白舟の言葉に、いずみは涙が止まらなかった。

第九話 船は水より火を恐る(2)

夜遅くに帰ってきた青洲は、いずみを起こさないように、そつとベッドの隅に体を横たえた。志木司に会ってから、いずみを真つ直ぐに見ることができない。眠っているいずみが、石守冬樹の名前を呟いたことも、青洲の動揺に拍車をかけていた。

自分はいずみに良かれと思って、吉田に留め置いているが、いずみの本当の幸せとは何だろうか。石守冬樹はお腹の子どもの父親だ。その父親が、周囲の誤解を解いたので戻ってきて欲しいと言っているのならば、自分がいずみを留め置く理由などないのではないだろうか。一度は愛し合っていた仲ならば、尚更、邪魔をしているのは青洲と言うことになる。

日中は仕事に追われて頭の隅に追いやっていた気がかりが、暗闇に誘われたように次々と頭に浮かんでくる。青洲が横たわったまま考え込んでいると、隣のいずみがフサリと身を寄せてくる気配がした。

「青洲さん、お帰りなさい」

少し眠そうないずみの声がする。

「ごめん、起こしちゃったかな？」

「ううん。ずっと待ってたの。ずっと起きて待ってるつもりだったのに、いつの間にか眠っちゃってて……」

小さく笑ういずみにつられたように、青洲も小さく笑う。

「どうしたの？ 何かあった？」

青洲は、いずみの頬に指を滑らせる。

「ううん、何もない……何もないんだけど……」

いずみは青洲の胸に顔を擦りつけた。

「寂しかった？」

子猫がじゃれつくようないずみの仕草に、青洲はクスリと笑む。

「寂しかった。それにね……あのね、青洲さん、私……青洲さんの

ことが大好きなの……だから……お願い……」

いずみは、そう囁くように言っと、起きあがって自分の夜着のボタンを一つずつ外し始めた。

「……いずみちゃん？」

いずみの行動に驚いた青洲も起きあがる。

「……抱いて欲しいの」

「何言って……」

「だって、不安なんだから。青洲さんは、ここに戻ってからずっと忙しそうだし、それに……なんだか最近、青洲さんは私と目を合わせてくれないし……私、青洲さんに見放されたら……生きていけないから……だから……」

潤んだ瞳で見上げるいずみを、青洲は眉間にしわを寄せて冷やかに見下ろした。

「だから？ だから体で確認したいの？」

「……」

思いがけず、冷たく鋭い言葉を掛けられて、いずみはビクリと体を震わせた。

「そうやって、石守冬樹にも抱かれたの？」

「……」

いずみは小さく息をのむ。

——そうだった……

石守冬樹に関しては、自ら望んでそうなった訳ではなかったが、そう思われても仕方がない状況にいることに、ようやく気づく。現状だけを見れば、誰もが自分のことをふしだらな女だと思っただろう。あるいは、寂しいから、不安だから、それを埋める為に簡単に関係を持ってしまう女だと……

——確かに私はそういう女だった。満たされる一瞬を期待して、冬樹さまを完全に拒絶することができなかった。そしてその結果がこれだ。生まれてくる子に罪はなく、私だけに責任がある……

いずみは、ボタンを外す手を止めて、ぼんやりと自分の指先を見

つめる。

放心した様子で固まるいずみを見下ろして、青洲は心の中で、自分に舌打ちする。

「……ごめん、こんなこと言うべきじゃなかった。俺、どうかしてた。少し頭を冷やしてくる」

そう言い残すと、青洲は病室を後にした。

奥病棟の中庭で、青洲はぼんやりと月を見ていた。細くとがった三日月。

——どうしてあんなことを言ったんだろう……

それでなくても、いずみは普通の状態ではなかったのだ。母親に捨てられ、石守でも厄介者として扱われていたというのに。そんないずみが、差しのべられた手に縋らないでいられただろうか、あるいは関係を強要されて、拒むことなどできただろうか。青洲は、あの雨の日にちんまりと蹲っていたいずみを思い出す。

つい、この前まで何の疑いもなく、保護者として、いずみを大事に守ってきたつもりだったのだ。それを奪われそうになって動揺している。青洲は一人苦笑する。

——保護者が聞いてあきれ。これじゃ、ただの駄々っ子だ。自分のものだと思っていたものを取り上げられそうになって、癇癪を起している駄々っ子じゃないか。どこへ帰るのかなんて、誰を選ぶのかなんて、いずみが決めることなのに……

病室に戻った青洲は、いずみのベッドが空になっているのに気づいて瞠目する。

「いずみちゃん？」

洗面所やバスルームを探すがいずみは見つからない。青洲は慌てて病室を飛び出した。

どこをどう歩いたのか、さっぱり分からなくなっていた。どこに行きたいのか、どうしたいのか、ちっとも思いつかない。だけど、

病室に一人でいることがいたたまれなくて、いずみは、ふらりと病室を後にしていた。庭で佇んでいる青洲の背中に背を向けて、いずみはフラフラと廊下を歩き続けた。

青洲に嫌われてしまえば、ここに自分の居場所はない。だけど、これから先、どうやって生きて行けばよいのかも思いつかない。自分はいつでもこうだ。情けない自分にため息が出る。

足の向くままに階段を上り、階段を下り、長い廊下をとぼとぼと進む。奥病棟自体は、それほど広くないので、廊下伝いに別の棟に来てしまったのかもしれない。前にいた病棟とも雰囲気が違うようだ。ふと気づいて、辺りを見回す。倉庫のような佇まいだ。いくつか鉄製のドアが並んでいた。

その中の一つに引き寄せられるように、いずみは近づいた。全部が同じような扉なのに、その一つだけが、何かの気を発しているように、いずみは首を傾げる。ドアノブに手を伸ばすと、鍵は掛かっていた。なかった。

ぎぎぎぎぎーっ

不気味な音をたててドアは開いた。壁にあるスイッチをぱちつと押すと、少し薄暗く寒々とした蛍光灯の光が部屋中を満たした。中には、たくさんの骨董品らしい、壺や器や掛け軸などが、棚の上に無造作に置かれている。もうかなり以前から、誰も手入れをしていないのだろう、棚の上の品々はうつすらと埃をかぶっていて、隅の方には小さな蜘蛛が巣を造っていた。

いつものいずみならば、そのような場所と分かれば、すぐに退出していたことだろう。それほどその部屋は、がらんとしていて寂しげで、侵入者を拒むような空気で満たされていた。更に奥に進んでみたいと思ったのは、部屋の最奥に掛けられていた一枚の絵画に目がとまったからだ。

ゴクリ

いずみは、小さく唾を呑み込んで、絵にむかって歩き出した。

——間違いない、あの絵だ。でも、どうしてここに？

いずみは幽かな記憶を手繰りよせる。

「……いずみ、あの絵を覚えているかい？」

あの抽象画を描き上げて数カ月たった頃、父の持病が急速に悪化した。この言葉は、すっかり弱って骨と皮だけになった父が、意識を失う寸前に発した言葉だった。

「おまえが、中央に野いちごの絵を描いてくれたあの緑色の絵だ」
小学生だったいずみは、喘鳴が混じる父の幽かな声に耳を寄せて頷いた。

「あの絵は……都内にいる、父さんの……唯一の親戚の叔父さんに……わ、渡してある。もし、おまえが困って……お、叔父さんを頼ることになったら、あの絵を……探せ。もし、叔父さんが……その絵を持っていれば、ま、まだ安全は……か、確保されているということだ。も、もし、叔父さんのところ……以外で、そ、その絵を見ることがあれば、その家は……おまえの……さ、最大の敵の家だと思っ間違いない。よ、用心なさい……」

いずみは、困惑する。叔父さんがいるなんて、今まで聞いたこともなかった。しかも、

——敵って……何？

「叔父さんって誰？　なんて名前なの？」

いずみは、父親に問いかける。

「い、いいか？　この名前は……だ、誰にも言っでは……いけないよ。か、母さんにもだ。母さんは、お、恐らく……もう取り込まれてる。も、もつと早く気づくべきだった……父さんのせいだ。と、父さんが……役に立たないばかりに、か、母さんを……すまない……すまない、いずみ……」

父は涙を流した。

「父さん？」

あの時、いずみは、父が苦しさのあまり錯乱して、うわ言を言っているのだと思っていた。もうかなり弱っていたし、水さえ飲めな

い状態で、ただただ夢と現を往ったり来たりしている、終末の段階にいたからだ。

「いいか、お、叔父さんの……な、名前は……」

「父さんっ！」

その後、父は意識を失い、長い夜を過ごした後、静かに息を引き取った。最期の瞬間まで医者に診せることもままならず、近所の人アドバイスに従って、いずみが一人で父親を看取った。母親は、亡くなった日の朝、酔っ払って帰ってきた。

いずみは、ガクガク震える手で、緑色の野いちこの蔓が生い茂る抽象画をそつとなぞる。自分が描いた野いちごも、寒々しい蛍光灯の灯りの下で震えているようだ。

名和俊秋……それが叔父の名前だった。

第九話 船は水より火を恐る（3）

豪華な天蓋付きのベッドの上に、秋子は手足を縛られたまま転がされていた。

「……っ」

恐怖に目を見開いて、力なく首をふる。

「秋子、封印はどこにある？ おまえは知っているのだろうか？」

ギシリとベッドが沈み、濃茶のガウンを纏った老人がベッドに片膝をつく。老人でありながら、妖艶な雰囲気纏った志木聖は、最近めつきり衰えてしまった腕力に舌打ちをしつつ、俯く秋子の顎を指でつまんで上向かせる。秋子は聖の嫁として志木家にいるが、今まで聖は自分の部屋に秋子を入れたことがなかった。名和家の末裔として、何らかの力を見せれば、すぐにでも処分するつもりだったのだが、秋子はおよそ名和一族らしくなく何の力も見せない。そればかりか、少しばかり睨みつけただけで、震えあがって口さえきけなくなってしまう。大人しい草食獣のような女。こんな女は手を下すだけ無益だ。それが聖の秋子に対する評価だった。

「忌々しい名和一族が、こっそり施した封印だっ。おまえが知らぬわけがないだろう！」

聖は秋子の肩を掴むとガクガクと揺さぶった。

「……知りません」

秋子は蚊の鳴くような声で小さく言うと、ポロポロと涙を流した。恐らく、秋子は本当に何も知らないのだろう。そうと分かっているのに、聖は秋子を掴む手の力を緩めなかった。八つ当たりだ、自分でも分かっているのだが、自分を止められない。

「この、役立たずがっ」

襟元を力の限り掴むと、何度も平手で頬を打つ。

泣きながら、嵐が通り過ぎるのを待っている草食獣のように身を縮めている秋子に、更に嗜虐性を刺激される。

「少しお仕置きをした方が良さそうだな」

聖は、切れ長の瞳に昏い笑みを浮かべながら、ベッドの上でぐったりと横たわる秋子を見下ろし、人差し指と中指を立て、何やらぶつぶつと呪文を唱えた。間もなく、聖の口から黒い煙のようなものが零れだす。黒い煙は、空中でクルクルと輪を描いてから、獲物を見つけたように秋子の首に巻きついた。

一瞬、恐怖に目を見開いた秋子の口から、細い悲鳴が零れる。

「イヤアアア」

一瞬にして周りの空気が無くなったのかと思うくらいの息苦しさに、秋子は悲鳴さえあげられなくなる。喉を押え、酸欠になった金魚のように口をパクパクさせる。吸っても吸っても息ができない。秋子は恐怖と苦痛に体をばたつかせる。

「おまえのような役立たずは、死んでも誰も惜しむまいよ」

聖は冷酷な瞳で、もがき苦しむ秋子を見下ろして、せせら笑った。

『シユウコが死ぬヨ』

社用車で外出していた司の耳元で声がした。

「父上か……」

司は眉間にしわを寄せた。

『土蜘蛛の子を使っテル』

「ヒルコ、しばらく時間を稼げるか？」

ヒルコは返答する間もなく、司の意を汲み取って、既に志木家へ向かったらしかった。いつものように携帯を取り出す余裕もなかったので、司が呟いた言葉に運転手が反応する。

「何かおしゃいましたか？」

「急用ができた。大至急、自宅へ向かってくれ」

「はっ」

運転手が慌てて強引にUターンすると、車は悲鳴のようなタイヤ音を上げた。

最近の父、聖は著しく衰えていた。力の一部を封印されているこ

とが、その理由だと本人は考えているようだが、それだけではない。長い間、依り代として肉体も心も酷使しているのだ。そろそろ限界だ。しかし、それを自分では認められない。だから名和家の末裔である秋子に当たっているのだ。

——気持ちは分からねでもないが……

司は眉間にしわを寄せた。

『……どうか……ドウカ、お許シクダさい……』

苦しげな息の下から、秋子が許しを乞う。既に秋子は窒息寸前で、意識がないはずなのにだ。そんな秋子を、目を細めて見下ろしながら聖は嗤う。

「小賢しい真似を……ヒルコ、何の為の助命か？」

聖は軽く舌打ちをすると、呪の力を弱めた。

『……旦那サマ、ヒルコは……この体が欲しゅうございマスれば……』

……

少し息が楽になったヒルコが、息を切らせながら言葉を紡ぐ。

「馬鹿がつ、その体は依り代にはなれぬ。そんなことも分からぬほど血迷うておるのか？」

『いいえ、何か、ナニカ、ホウホウガ……』

既に涙で濡れていた秋子の頬を、更なる熱い涙が流れ落ちる。

その時、背後でドアが開いた。

「父上、こんな所で秋子が死ねば、また良からぬ噂が立たないとも限りません。無益な殺生はおやめください」

それでなくとも、志木家はお化け屋敷だと、近所で噂になっているのだ。

「司っ、おまえまでなんだっ。こんな時間に……」

怒りにまかせて怒声を上げた拍子に、聖は激しくむせ込んだ。

「父上、さあ、少し落ち着いて横になってください。ヒルコ、父上を少し眠らせてさしあげろ」

秋子はコクリと頷くと、突然瞳から光を失って、気を失うように

崩折れた。司は、無残な様子でベッドに転がっている秋子が無造作にベッド下に下ろすと、父親を横たわらせた。

「父上、土蜘蛛の子は俺が引き取ります。よろしいですね？」

「好きにするがよい」

司が、足元に転がっている秋子の上に手をかざして、呪を唱えると、秋子に纏わりついていた黒い気体が湯気のように立ち上って、司の掌に吸収されていった。

呼吸ができるようになって、やや顔色が回復してきた秋子を肩にしょって、部屋からそつと出て行くこうとしている司に聖が呼びかけた。

「その女とは離縁する。手続きをしてくれ。それには何の利益も情報もない。傍にいれば、イライラしてまた手を下してしまうだろう。そうなると厄介だ」

父親の言葉に頷いてから、司は秋子の顔をちらりと確認する。まだ気を失っているようだ。

「離婚については了解しました。早々に手続きを致します。ただ、今この女に出て行かれると色々不都合があるので、しばらく屋敷に置いておきます。なるべく父上の目の届かない所にいるようにさせますので……」

「ふんっ、好きにするがいい。ただ、そいつは紛れもなく名和の血筋だ。甘く見ない方がいい。ヒルコは縛り付けられている。気づいているか？」

「ええ、気づいておりますよ」

ヒルコは、秋子の体を欲しがっている。依り代にならないことを分かっていながらだ……。哀れなヒルコ。

「器どもは狡猾だ。依り代にはならぬ癖に、手を下す……鼻もちならない」

聖は吐き捨てるように言うと、静かに目を閉じた。

秋子は誰かの肩に担がれて、廊下を歩いている時に気が付いた。

もう自分は死ぬんだと思っていた。だけど生きている。

ドサリと自室のベッドに横たえられ、涼しげな切れ長の目が秋子を見下ろす。

「どうして……助けたの？」

秋子は、司の瞳をぼんやりと見つめて呟いた。

「勘違いするな。助けた訳ではない。今この屋敷で死人を出したくないだけだ」

司は感情の見えない表情でそう言うと、秋子から目をそらす。

「……そうだったの。もう死んでも良いと思ったのに……ここじゃ、死ぬ自由もない訳ね？」

放心しきった様子で、ぼんやりと言葉を紡ぐ秋子を、司は、目を細めて睨みつけた。

「終末が近づいている。封印の場所が分かった。三種の神器も揃いつつある。おまえは、この先どうなるのか、見てみたくはないのか？」

「……あなたの言葉はいつも呪文みたい……さっぱり分からない」

司の言葉の意味が分からない秋子は、ぼんやりと司を見上げると小さくため息をついた。秋子の大きな瞳は漆黒で、司に柴犬を連想させる。鈴守、名和、石守の三家では、闇に取り込まれないようにと天真爛漫に育てる傾向にあるらしいが、意味のないことだ。そんなことで器としての気配を消せるはずもない。しかし、そのせいか秋子にしても、報告を受けている鈴森いずみにしても、どこかしら稚い雰囲気は抜けていない。司は、秋子の様子に毒気を抜かれたように脱力して盛大にため息をつく、眉間に指を当てて、くつくつと笑いだした。

「何も分らないのなら、何もするな。大人しく俺の伽の相手をしていれば良い。そうすればヒルコも喜ぶ。あれは愛情に飢えているからな」

「なっ、私はそんなっ……」

秋子は瞠目した後、真っ赤になり、次いで真っ青になった。

「……ヒルコって……」

「何度かおまえの体に入り込んでいるだろう？ 心配するな、おまえの体には一時的にしか憑けぬ。おまえは依り代にはなれない体質だからな」

「それって……憑くって……ユ、ユー……」

秋子の言葉を司は遮った。

「ヒルコはヒルコだ。この世に生を受けて、すぐに親に捨てられた哀れな子だ。少しくらい憑かれたところで何の害もない。幽霊などと無粋な呼び方をしないでやってくれ」

司は眉間にしわを寄せてたしなめてから、今日はもう休めと言い残して部屋を出て言った。

第九話 船は水より火を恐る（４）

「兄貴、こいつは本当に鈴守なのか？ 鈴守ならば、あの部屋に入ろうなどと思わないんじゃないのか？」

真っ青な顔でぐったりと目を閉じたままのいずみに、赤秀が顔を顰める。鈴守は負の気配にセンチティブだ。以前、赤秀は確認の為に、あの絵を鳴春に見せようとしたことがある。しかし、鳴春はあの部屋のドアに手を触れることさえ嫌がった。

「俺が悪かったんだ。俺が……いずみを追いつめた」

青洲は、ベッドに横たわるいずみの手を握りしめたまま顔を歪ませる。いずみは、鈴守に間違いないのだ。しかし、混乱したいずみが負の気配に気づかなかったとしても無理のないことだ。

病室からいなくなったいずみを、病棟中探しまわった。いずみは、倉庫として使っている別棟の部屋の一室で倒れていた。寒々しい蛍光灯の下、冷たい床の上に倒れているいずみ。その伸ばされた手の先に……あの絵があった。

大きな溜息をついて赤秀が病室を出て行くと、青洲は青白い顔で目を瞑るいずみを覗きこんで、その頬にそつと口づける。

——いずみは、まだあの雨の中にいるのかもしれない……

青洲はぼんやりとそう思う。もうすっかり安心して、もう世界から零れ落ちる心配などないとすっかり安心して暮らしているのだと思っていた。青洲自身が考え得る限りの安全を準備し、常に傍にいて見守っていたつもりだった。それが……青洲の嫉妬から出た少しばかりの拒絶に、これ程まで激しく反応するとは思ってなかった。いや、いずみにとっては、少しばかりの拒絶ではなかったのだろう。例えるならば、高い崖の縁から両手を伸ばして青洲に助けを求めるような状況だったのかもしれない。自分は、いずみがそんな状態にいることに気づかずに拒絶してしまったのかもしれない。自分では駄目なのかもしれない。青洲は項垂れる。

「……青洲さん……」

ぼんやりと目を開きたいずみが、小さく呟く。

「いずみちゃん……ごめん、俺は君を傷つけてしまったみたいだ」
青洲の言葉に、いずみは小さく首を振った。

「私こそ、ごめんなさい……突然あんなこと言われたら困るよね。
私……馬鹿だから、気がつかなくて……」

いずみは小さくしゃくりあげた。

「……そうじゃないんだよ、いずみちゃん……そうじゃなくて……」
青洲は口ごもる。どんな言い訳も、結局はいずみを傷つけてしまいそうな気がする。いずみの行動が問題なのではなく、自分の独占欲が問題なのに、それを言い訳にしまえば、いずみの過去を責めることになってしまう。黙り込む青洲を悲しげに見つめて、いずみは小さな震える声で続けた。

「もう、困らせたりしないから……だから……だから……」

——嫌わないで……

肝心な言葉は、震える唇に阻まれて言葉にならない。

「いずみちゃん、誤解しないで聞いて欲しいんだけど……。実は俺……君に隠してることもあるんだ」

涙でぐしょぐしょのいずみの頬を拭ってやりながら、青洲は意を決したように話し始めた。

「二、三日前に、石守の関係者が君を探しに吉田にやってきた」

「……」

いずみは目を見開いて、青洲を見つめる。

「石守家は君を追いついたことを後悔していて……君に戻ってきて欲しいと考えているようなんだ」

いずみは、目を見開いたまま、あり得ないと言うように小さく首を横に振った。

「石守冬樹が君を探しているそうだ。それを聞いて、俺は……君を失うことが怖くて、嘘をついた。ここに君はいない。ここにいない。いずみは、鈴森いずみではないと……そんな見え透いた嘘を、探しに

来たその人に、ついてしまったんだ。俺、最低だろ？」

「……青洲さん……私は……」

戸惑ったように口ごもるいずみの言葉を遮って、青洲は続けた。
「君が、石守冬樹の元に戻りたいのなら、俺に君を止める権利はないと思う。石守冬樹はお腹の子の父親なんだからね。逆に、君には、石守に戻るのか、吉田に留まるのかを決める権利がある。すべては君次第だ。結論は急がない。ただ、一つだけ、俺の気持ちを言わせてもらえるなら、俺だってそのお腹の子の父親だと……思ってる。それだけは、忘れないでいて欲しい」

青洲は、心にわだかまっていた気がかりを話しおえて、幾分気が楽になったのか、幽かにため息をついてから、哀しげにはほ笑んだ。
「……」

いずみは、ぼんやりと青洲を見つめたまま黙り込む。

「……もし、石守に戻ることに決めたとしても、その時は俺にきちんと話して欲しい。俺が連れて行く。絶対に一人で行動しない、それだけは約束して欲しい」

いずみは途方に暮れた気持ちで、青洲の言葉を聞いた。

第十話 天は自ら助けるものを助く（1）

激しい雨が、外と内に明確な線引きを施していた。

塗り込められたような薄闇の中、ある和風家屋の一室で、田口俊秋は息を殺して佇んでいた。田口は養子に出された先の姓だ。元々の名を名和俊秋と言った。

眼前には緑色の抽象画。

ここ数年、この絵の負の気配が濃密になって来ていたのには気づいていた。それが、ここ数日一段と濃い。封印主に何かが起こったのだ。封印が不安定になっている。限界なのかもしれない。俊秋は意を決したように抽象画を壁から外すと、嚴重な梱包を施した。先ほど、連絡しておいた宅配業者がまもなくやってくるはずだ。宛先を書きつけ玄関の隅に置く。

そもそもこの絵は、俊秋が描いたものではない。ある日、ここに届けられた。送り主の名は偽名、住所は、ある地方都市の公園の住所になっていた。しかし、俊秋は確信する。これは名和家の誰かが施した封印なのだ。何かの事情があつて手放さざるを得なかったに違いない。恐らく危険が迫っていた、そう言うことだ。

名和家が身の危険を感じて散らばり、息を殺すように身を潜めて暮らし始めたのは、ここ数年のことではない。ほとんどの者が名和の名を隠し、養子に出せるものは出して、身を隠した。お互いに連絡を取り合うことも、お互いの暮らしぶりを知ることもないのだが、近くにいれば、お互いに気配を感じ取ることができた。名和家の力は封じる力。その力の気配を感じることができたのだ。だから封印を施されたこの絵が届けられた時、俊秋は身震いをした。それが名和家の封印であるとすぐに感じ取ることができたからだ。

名和俊秋とその兄が、実家のある島を離れて、都内に出て来たのは子どもの頃だ。それぞれ別々の家に養子として引きとられた。その兄が、交通事故死したのは、もうかなり以前のことだ。子どもが数人いたが、無事に育っていれば、もう高校生くらいの子どもがいてもおかしくない年頃だ。絵の送り主は、恐らくそれらのうちの誰かなのだ。確認する術はないが、確信している。気にはなるものの、動くことはできない。せつかく施した封印の在り処を知らせることになりかねないからだ。

同じ名和の血筋と言っても、すべての者が封印できる力を持つ訳ではない。五人兄弟であっても、誰一人その力を授からなかったという家を知っている。俊秋の家では、兄がその力を授かっていた。力が強ければ強いほど気配は強くなる、よって力を忌み嫌うもの達に見つけられるリスクが増す。

負の気配の怖いところは、その存在に気づけるものが限られていると言うことだ。警察は当てにできない。騒ぎ立てれば、狂者のレツテルを貼られる。だから名和家は身を潜めたのだ。

いにしえ
古の時代、あの四聖獣の伝承が生まれた頃の時代には、名和家はその力を自在に操っていたと言われている。それが、長年の平和な時代で、その力を使う機会が減り、意義や使い方までが忘れ去られた。それは名和家に限らず、鈴守、石守にも共通して言えることだ。力は実際に使われることがなくなり、形骸化もしくは儀式化した。一度、島に戻り、力の正しい使い方を調べる必要があるのだろうとは思うが、果たせないまま十数年が経過していた。

ぞわり、と闇自身が引き攣れるような気配がして、俊秋ははつと振り返る。

——ドコにやっタ？

頭の中に禍々しい声が響く。

——封印ヲ ドコニやつタ？

薄闇の中、俊秋の足もとに深い闇が凝っていた。

「……ひっ」

俊秋は慌てて後ずさりするが、まるで闇に絡め取られたように足が動かない。闇は、ぞわぞわと俊秋の脚を這い上り、やがて俊秋自身を呑みこんでいった。

* * *

いずみは、中庭の池の前に一人ぼんやりと佇んでいた。頭の中がごちゃごちゃだ。あの野いちごの絵が吉田家にあつたことも、石守家が自分を探していることも、青洲の誠実な告白までも、すべてが悪いことに感じられる。

——自分の敵とはなんだろう？ 吉田家が敵ならば、とつくの昔に自分は無事ではいらなかったのではないだろうか？

石守家については、あの石守冬樹が、母親である昌代の意向に反することなど、まして昌代を説得するなどと言うことは、到底信じられない。冬樹にしても、昌代にしても、使用人一人ごときに、人や時間を費やして探し出そうとすることなどありえない。

もし、探していることが本当だとすれば、自分を探している真の目的はもっと悪いことだ。墮胎していないなら、その費用を返せとか、石守の血筋の子どもを私が産むことを許せないとか、そう言ったことに違いない。

でも、それらは、いずみにとっては全く瑣末なことだ。なによりも、自分が辛いと思うのは、青洲の本心が分からないということ。青洲にとって自分はお荷物だ。

それでも、居たいなら吉田に居ても良いと言うのは、ただの責任感ではないだろうか？ 本当は、吉田から出て行って欲しいと思っているのではないだろうか？ それを言い出せないだけなのではないだろうか？

池の中を優雅に泳ぐ赤と白の斑の大きな鯉を見ていると、背後で声がした。

「薫、また池を見ているのか？」

「父さま……」

いずみのことを、すっかり薫と呼ぶようになってしまった龍生のことを、いずみはいつしか父さまと呼ぶようになっていた。薫がそう呼んでいたのだと言う。

吉田龍生は、振り返るいずみの頬を、いきなり人差し指でつついた。

「いたっ」

つつかれた頬を押えていずみが見上げると、龍生が面白そうに笑った。

「父さまっ」

睨みつけるいずみに、

「おまえに辛気臭い顔は似合わん。やめておけ」と龍生は澄ました顔で言った。

「父さま……」

その時、突然黄色い鳥がハタハタと舞い降りてきて、龍生の肩に留まった。小首を傾げる様子が愛らしい。カナリヤのようだ。

「おお、もう戻ってきたのか。ほれ、薫の所へ行くか？」

龍生は小鳥に話しかける。

「二、三日前から、外に出たがっていたから、さっき出してやったのだ」

龍生は、いずみに説明すると、

「懐かしいだろう？ フィン、薫が戻ってきたぞ」と再び小鳥に話しかけた。

びるるるる、ピーピーピー

小鳥は龍生の指先で歌うようにさえずると、フワリと飛び上がり、いずみの肩に留まった。人差し指を軽く伸ばして近づけると、フィ

ンはためらうことなく、いずみの手にちょんちょんと弾みながら移動した。

「外に出たがる癖に、外に出ると戻りたがるのだ。好奇心が旺盛なくせに怖がりな飼主に似たのだろう」

龍生はにやりと笑った。

「……鳥かごの中で育った鳥は、鳥かごから出られないのかな……」
ぼそりと呟いたいずみを見下ろして、龍生は少し首を傾げた。

「人は鳥かごの中では生きられない。鳥かごの中にいると思うのは、おまえの心の中に檻があるからだ。ここは檻ではない、ネスト（巣）なんだよ、薫。だから、おまえは、再び羽を得て戻ってきたのだろう？」

「え？」

驚いて見上げるいずみの視線を受け止めて、龍生は眩しげに目を細めてほほ笑んだ。

「誰に分からなくても、わしの目を誤魔化すことはできないさ、薫。なあ？ そうだろう？」

ぴるるるるる、ピーピー、ぴるるるる

いずみの指先から飛び立ったフィンは、抗議するように龍生の頭の周りを何度か旋回してから、龍生の肩に留まった。

「そうか、おまえも分かっているのか？ そうか、そうか……」

嬉しそうに目を細める龍生をぼんやり見つめながら、いずみは首を傾げる。

——今、父さまは、私のことを薫と呼んでいた？ ちがう。私じゃない……私じゃなくて……

* * *

島の西側の海域は、岩礁が入り組んでいるので、島民はめったに船では近寄らない。特別にチャーターした漁船の先端に立って、佐川は双眼鏡を覗きこんだ。

「もうちょっと島に寄ってもらえますか？」

「もうちょっとなら寄れるばってん、もうボチボチ限界たい。こん辺は岩だらけだけんな。座礁してしまうとぞ」

操舵室から一太が声を張り上げる。

「分かりました。行ける所まで行ってください。後はなんとかします」

錨を下ろして停泊した船から、佐川は海に飛び込んだ。こんなことになるのならば、スキューバダイビングの講習も受けておくべきだったと、佐川は軽いため息をついてシュノーケルを口に咥えなおります。

海水の透明度は高く、天気も良い。しかし、この広大な海の中で探しているものが見つかるとはとても思えない。それほど圧倒的なモノを相手にしているのだ。広大な自然の前に人は無力だ。仮に目的のものを見つけられたとしたら、それは見つけられたのではない、見つけさせられた、そう言うことなのだろう。

佐川は、水面に顔を出して太陽を振り仰いでから、大きく息を吸い込んで再び海底を覗きこんだ。

第十話 天は自ら助けるものを助く(2)

佐川は、船縁で、へたり込んでため息をついた。

——灯台もと暗しとはこのことだ。

散々、泳ぎ回って、慣れぬ水中メガネとシュノーケルに四苦八苦し、海水をガブガブのみ、もう限界だと辿りついた漁船の船底に奇妙な石の遺跡らしきものの影を捉えた。慌てて、水中カメラを船縁から下ろすと、底にかなりな大きさの石の鳥居が横たわっているのが映し出された。鳥居の中央には、やはり石で造られた額束^{がくづか}が建てられているのだが、海藻や貝がびっしりくっついていて読めない。

「こいは何だ？」

背後から一太がカメラの画像を覗きこむ。

「これは、神社の鳥居ですね。神社の名称が刻まれた額束も付いているのに、これではさっぱり読めませんね。どうするかな？ 確認するだけでいいのに、こんな巨大なものを引き上げるわけにもいかないしね……」

佐川は頭を抱え込む。船から確認できたのはひどくラッキーだったが、肝心の神社の名前を確認するには状態が悪い。

——もつと浅瀬にあれば良かったのだが……

「こんくらいの深さなら、オイがちょっと行ってきてやるか。なんが書いてあるか読めばよかとろ？」

画面を食い入るように見つめていた一太が、突然そう言った。

「一太さんが潜るんですか？」

佐川は怪訝そうに一太を見つめる。

「ふふん、さてはオイがスペシャルティ・ダイバーげなことば知らんな？」

一太は得意そうにふんぞり返ると、背後にあった船窓の枠に頭をぶつけて、いてっと頭を押えた。

スキューバダイビングは、水深が大きくなるほど緊急時の浮上が

難しくなり、窒素酔いや減圧症の危険性も高くなる。だから技術レベルに応じて潜ることができる深度が決められているのだが、スベシャルティ・ダイバーともなれば、約四十メートルまでは潜水可能だ。潜水用具を船室の奥から引きずり出し始めた一太を、佐川は神々しいものを見るように振り仰いだ。

一太が、付着物を取り除き、撮影してくれた画像を覗きこんで、佐川は納得と満足の入り混じったため息を何度もついた。鳥居の額束に書かれている文字は、当然その神社の名前が刻まれている。そこには、『四鬼神社』と書かれていた。

* * *

いずみは、一人病室でぼんやりと窓の外を見つめていた。既に来月には臨月を迎える。超音波の画像から、胎児の発育が順調であることと、ほぼ間違いなく男の子であることが分かっている。あの夢に出て来た少年がお腹の子のイメージと重なる。

——何かを伝えようとしていたんだろうか？

危険が迫っていると言った少年の真剣なまなざしを思い出す。

——僕らにできること。僕らにしかできないこと……。私にできることってなんだろう？ 絵を描くこと？ でも、一体何の？ 誰の絵を描けと言ったんだろう？ さっぱり思い当たらない。

いずみは、深いため息をついた。

気がかりはそれ以外にもある。青洲への返事だ。あれから青洲はあの話題を一切口にしなかった。吉田に留まるのかとも、石守に行くのかとも訊かない。もつとも、そんなことを聞かれても、いずみは途方に暮れるしかできないのが現実で……。その問題を考えれば考えるほど、あの狭くて薄暗かった青洲の部屋が、途轍もなく温かく懐かしく感じられ、できることならば、あの頃に戻りたいと願うと

ところで思考は止まってしまふのだった。

いずみの病室のドアがノックされたのは、そんなことをごちゃごちゃと考えていた昼下がりのことだ。午前中は、やれ検温だの検査だの回診だので、バタバタする病室だが、昼から夕方までは、特別なことがない限り静かでゆっくりとした時間が過ぎて行く。

「はい」

看護師ならばノックとともに入ってくる。青洲ならばノックとともにいずみに声をかけるのが通常だった。しかし、今回の来訪者は、いずみの返事を確認してからドアを開けたようだった。ドアを開けた瞬間、清冽な生花の匂いが部屋中に拡散する。

「いずみちゃん……」

声の主は、いずみは目を見張った。

「……華……陽さん？」

長く伸ばされたさらさらの黒髪、しなやかな淡い色のパンツスーツをさらりと着こなした姿は、下手にスカートやワンピースなどを着るよりも遥かに優美で女性らしく見える。華陽さんは、いずみが石守の家で奉公していた時に、仲良くしてくれていたメイド仲間だ。もともと華陽は、石守の親せき筋の人だったので、メイドと言うよりは客に近かった。何故メイドとして働いているのかとの問いには、少し声を低めてこう言った。

「実はね、私、捜しているモノがあるの。だから今までも色々なお屋敷で働いてきたのよ」

「捜している物？」

いずみは目を見張って問い返す。

「絶対に誰にも言わないでね？ いずみちゃんだから話したのよ？ だから旦那さまにも、昌代さんにも、冬君にも、内緒よ？」

それが何なのか、その時、いずみは訊かなかったのだけれど、自分だけに話してくれたのだと思うと、いずみはすっかり嬉しくなつて、無条件に誰にも言わないと約束したのだった。

「いずみちゃん、心配したわ」

華陽は、持参した花束をベッド脇の小テーブルの上にばさりと置くと、ベッドの上で呆然として座っているいずみをふわりと抱きしめた。

「いずみちゃん、あなたが石守の家を出た日、私、すぐに後を追ったのよ。でもどこにもいないし、電車に乗るつもりかと思って駅でも探して回ったわ。あの時、どこに行ってたの？ 私、ずっとあなたからの連絡を待っていたのよ？ 今じゃ、冬君も昌代さんもあなたを探しているわ。聞いていない？」

電車に乗るなど、乗車経験のなかったいずみにとっては、選択肢になかったのだ。いずみは、石守を出てから青洲に拾われるまで、すべての行程を徒歩で移動していた。

「聞いてたよ。聞いてはいたんだけど……」

いずみは言葉を濁す。華陽に会いたいと思わないこともなかったが、石守に戻るつもりは皆無だったのだと思いつく。自分が迷っているのは、このまま吉田で厄介になっていて良いのか、それともここを出て、吉田に迷惑を掛けない暮らしを自力で模索するかだったのだということに思い当る。そこまで考えて、ふと疑問がわき上がった。

「そういえば、華陽さん、どうして私がここにいて分かったの？」

いずみの問いかけに、華陽は、少し気の毒そうな顔をしてほほ笑んだ。

「その様子だと、いずみちゃん、何も聞いていないのね？」

「何のこと？」

胸騒ぎがする。

「あら、やだ、どうしよう。いずみちゃんは知らない方がいいんじゃない？」

華陽は少し困った顔をして言葉を濁す。

「教えて！ 何のことなの？ 気になるよ」

いずみの必死な様子に、華陽は更に困った笑みを浮かべたが、声を潜めて話し始めた。

「私が話したって、青洲には言わないでね？ 青洲はあなたに知られたくなくて教えていないのかもしれないから。実は私ね、青洲の妻だったの」

華陽の言葉に、いずみは呆然とする。

—— 華陽さんが青洲さんの奥さんだった？

「だから、少々人脈があつて、あなたがここにいてるってことを聞き出せたのよ」

華陽の言葉は、いずみの頭のどこか表面を上滑りしていく。

—— 青洲さんの元妻……

頭の中でこだまする。

『……ごめん、いずみちゃん、その人については、まだ冷静に話せる自信がないよ。その人は、俺のかつての配偶者で、今はもう他人だ。いつか話せるようになったら、いずみちゃんには、きちんと話すから。少し時間をくれるかい？』

島で聞いた青洲の言葉が頭の中でリフレインする。

「ごめんなさい。なんだかショックを受けている？」

華陽が更に気の毒そうに、いずみの瞳を覗きこんだ。

「……ううん……ううん、少しびっくりしただけ……」

—— 嘘だ。ショックだった。

冷静に話せないと言うことは、その人に対してまだ心が残っているということだ。どういう気持ちが残っているのかは知らないが、とにかく、忘れられないでいると言うことだ。

今まで少し引つかかる、とか、少し違和感がある、とかだった淡い感情が、現実にごうして人の形で現れ、しかもそれが自分の知っている人だと分かると、不安が濃く暗い雨雲のように、むくむくと湧きあがり、いずみの心を浸蝕していく。

「そう？ だったら良かったわ。ほら、私達、お互い嫌で分かれた

わけじゃなくて、薫ちゃんの事件のせいでうまくいなくなっちゃったでしょ？ だから、それを知ったら、いずみちゃんが嫌な気持ちになるんじゃないかって心配して、青洲はあなたに知らせなかったのかもしれないわ。あら、私、余計なことを言っているわね」

華陽は気の毒そうにいずみを見つめた。

確か、青洲は薫が自分の元妻と外出中に事件に巻き込まれたのだと言っていた。

——だからそのせいで華陽さんとうまくいかなかったの？ でも、そうなのだとしたら、まだ青洲さんは華陽さんのこと……

「……華陽さんは、青洲さんのことを……」

——まだ愛してるの？

口ごもって黙り込むいずみの心の声を聞きとったかのように、華陽は言った。

「そうね、もし青洲が戻ってきて欲しいって言ったら、戻りたいって思つかもしれないわ。だって、私達、愛し合っていたんだもの……」

いずみは、ごくりと唾を飲み込む。

「あなたは？ いずみちゃん、あなたは青洲のことをどう思っているの？ 彼、優しい人だから、きっと好きになったわよね？」

華陽は悲しげにいずみの瞳を覗きこんだ。

「私……」

「ごめんなさい。こんなことを言いに来たんじゃないの。もう、いのよ。私たちはもう終わったんだから。青洲が私に戻ってきて欲しいなんて言う訳がないんだわ。だって、今は可愛いいずみちゃんが傍にいるんだから……」

「華陽さん……私……」

いずみは途方に暮れる。

「それよりもね、私、ずっと気になっていたことがあって、それを確認したくて来たの。私、以前、捜しているモノがあるって言ったわよね？ 実は私、ある絵を探しているの」

「絵？」

「そう。恐らく薫ちゃんの事件に関わっている絵だと思うの。薫ちゃん誘拐されたという話は青洲から聞いているのよね？」

「ええ……簡単にだけ……」

「彼女が発見された時、背中全体に野いちこの入れ墨が描かれていたことは？」

「え？」

——野いちこの入れ墨？ そんなの訊いていない……

「そう、まるで薫ちゃんを縛りつけるみたいに背中一面に描かれていたの」

島の玄武が、野いちこの蔓に縛り付けられるように絡みつかったのを見たのはついこの前だ。ひどく取り乱して野いちこを取り払っていた青洲を思い出す。

——だからだったんだ。あんなに血だらけになっても野いちこの蔓を取り払いたいと青洲さんが思った、その理由……

「信じてもらえないかもしれないけど、私、生まれつき巫女^{シャーマン}体質なのよ。霊の気配に敏感っていうか……。実は、あれ以来、いつも薫ちゃんの気配を感じているのよね。彼女苦しんでいるみたいなの。

野いちこの絵を捜して欲しいようなのよ。その絵には何かがあるらしいの。たぶんその絵を見れば、その理由が分かるんだと思うんだけど……。いずみちゃん？ もしかして、心当たりがあるの？」

真っ青になって、がくがく震え始めたいずみを華陽は怪訝そうに見つめた。

第十話 天は自ら助けるものを助く(3)

その日、青洲のオフィスに島から連絡が入った。ひどく慌てて取り乱した様子の鳴春だった。

『青洲！ おまえ大丈夫なとか？』

いきなりな問いかけに、青洲は面食らう。

「大丈夫って……何が？」

青洲の問いかけには答えもせずに、鳴春は更に問い返す。

『おまえは大丈夫なんばいな。そいなら、赤秀は？ 赤秀は大丈夫なとか？』

赤秀と打ち合わせ中だったのだ。目の前の赤秀にチラリと視線を投げてから、青洲は返事をする。

「赤秀は、今、目の前にいるよ。代わった方がいいか？」

青洲の言葉に、報告書に目を走らせていた赤秀が何事かと顔を上げる。

『いや、大丈夫ならよかと。実は、島の青龍と朱雀が壊されとりたい。さっき、井戸ば使おうてした一太ん所の嫁が見つけたと。確認したら朱雀もやられとって……どっちも頭ば砕かれとって……。午前中までは何てもなかったとぜ？ オイ、おまえたちが心配で……』

鳴春は泣きだしそうな声で言った。

「青龍と朱雀まで……」

青洲は呆然とする。

「俺たちは大丈夫だ。……うん、気を付けるよ。ありがとう。また近々、そっちに行くよ。佐川はちゃんと調べてくれてるんだよね？ え？ こっちに向かってる？ そうなのか。分かった。大丈夫だよ。うん、分かってる。ありがとう。じゃあ」

青洲は電話を切ると、赤秀に島で起こったことを伝える。

「白虎の時は、白舟のやつひどい中耳炎を起こしてたけど、俺たち

は関係ないみたいだな」

聞き終えた赤秀は、そう言って肩を竦めた。

「関係があつたら大変だぞ？ ひどい頭痛が脳溢血か、あるいは、会社を乗っ取られて経営者をクビになるかじゃないか？ 頭を碎かれてるらしいからな」

青洲も肩を竦めた。

* * *

いずみは華陽を連れて、あの絵がある部屋へと歩いていった。一度しか行つたことがない場所なのだけれど、どこなのかはつきり分かる。気配を感じるのだ。より気配が濃密な方を選んで歩を進める。この前も、なんとなく歩いていたらつもりだったが、結局はあの絵の気配につられて辿りついたのかもしれない、いずみは、そんな気がしてならなかった。

——あの絵は……結局、なんだつたんだろう？

あの絵を描いた時の父の顔を思い出す。鬼神のようだった父の顔。

——父さんは、あれを何のために描いたんだろう。……あの絵のせいで、薫さんの事件が起こったの？ もし……そうなのだとしたら、どうしよう……どうしたらいいの？ 分からない。分からないよ……「ねえ、いずみちゃん、あなたは、その絵をここで初めて見たの？」後ろをついて来ていた華陽が話しかける。

「……うん、どうして？」

心の中で警鐘が鳴った気がして、いずみはとっさに嘘をついた。

「じゃあ、その絵を誰が描いたのかは知らないのね？」

「……うん……知らない」

『いいか、この絵は父さんが描いたんだ。おまえは何もしていない分かったね？ いずみは何もなかった。いいね、このことは忘れるんだ！』

父の声が脳裏に響き渡った気がして、いずみは、動揺しながらも

返答する。

「そう……」

華陽は、いずみの動揺には気づく様子もなく頷いた。

ドアは前回と同じように、嫌な擦過音をたてて開いた。華陽は、開かれたドアから迷うことなく真っ直ぐにあの緑色の抽象画を目指して歩き出す。

「やっと……見つけたわ！　こんな所にあつたなんて……」

華陽は歩み寄ると、指先で絵をなぞる。中央の野いちごまで指を滑らせたところで、突然何か熱いものにでも触れたかのように手を引っこめた。

「忌々しいっ。ガゴウジ、今、出して差し上げますわ」

華陽は突然何か白銀に閃くものを振りかざしたかと思うと、絵の中央の野いちご目指して突き立てた。

「華陽さんっっ」

いずみは瞠目すると、慌てて華陽に駆け寄り制止する。

「放しなさいよ！　まだ封印は解けていないわ」

深々と絵に突き刺さったナイフの柄が、いずみの動揺と共鳴するかのようにブルブルと振動する。

「華陽さん？　どういうことなの？　やめて、やめてよっ」

——父さんの絵がっ！

「邪魔よっ！」

華陽はいずみを容赦なく突き飛ばした。バランスを崩して倒れてしまったいずみを見下ろして、華陽は妖艶にほほ笑んだ。

「そう、そうだったわ。その前にその子を何とかしなくてはね……」

転んで強かに脇腹を打ってしまったいずみが、なんとか立ちあがろうと蹲っているところに、華陽は近寄ると、いずみの腕に何かを突き立てた。鋭い痛みが走り、いずみは悲鳴を上げる。いずみの腕から外された華陽の手には、薬液を注入し終わった注射器が握られていた。

「いたっ！ な、何を……何をしたの？」

突然、脱力感がいずみを襲う。立ちあがろうとしていた腕から力が抜け、いずみは再び床の上に転がった。目の前が薄暗くなる。

「大丈夫。これであなただけ死ぬことは、たぶんないわ。ちゃんと量を計算したもの。一時的に筋力が衰えるだけ。計算が間違っていないからね」

華陽はおかしくて仕方がないというように、艶めかしい笑い声を響かせた。

「司が一度あなたの声を聞きたいってうるさいのよね、鈴守なんかに期待できることなんて何もないのに……。仕方ないから、あなたはもう少し生かしておいてあげる。だけど、その子はダメ」

「……なぜ……」

頭の中に空白が広がっていくようだ。目の前がどんどん霞んでいく。声も出すのも精いっぱいだ。

「石守だからよ。石守は危険なの。だからイライナイのよ」

「……っ」

その時、突然、何かが体の中から流れ出す感触がした。足の間を伝わって、透明な液体が足元に流れ出す。

——破水した？

いずみは瞠目する。

「心配いらないわ。その子は一呼吸もすることなく、一声も泣くことなく、楽に死ねるから。その程度の量を入れておいたから」

悪意の塊のような華陽の言葉に、いずみは瞠目する。

——助けて！ 青洲さんっ！ マメ太がつ、マメ太が死んじゃう！

声にならず、動くこともままならず、伸ばした手が空しく宙を掻く。涙だけが、いずみの気持ちを表すように幾筋も流れては落ちる。それを楽しげに確認すると、華陽は、再びナイフで絵をずたずたに切り裂いた。やがて、切り裂かれた絵の中から、どす黒い湯気が立ち上る。同時に、ガタガタと倉庫中の窓ガラスが震えるように音を立てた。

「ガゴウジ、伯父様に力をお貸しくださいな」

黒い煙は、部屋の天井付近でグルグルと何度も旋回し渦を巻き、雷鳴のような、もしくは地響きのような不穏な轟音をとどろかせた。黒い煙が蛍光灯に触れる度、スパークする音がして、蛍光灯は苦しんでいるように不規則な点滅を繰り返した。

「ガゴウジ！ お願いです。伯父さまに力を！」

黒い煙は、ようやく華陽の言葉を聞きとれたかのように、

『オオオオオオ』

と地の底から響いているかのような音をたてながら、倉庫の明かりとりの小さな窓をすり抜けて外へ出て行った。

「いずみちゃん？ あら、もう意識が無くなっちゃった？」

華陽は、妖艶な笑みを浮かべて黒い煙が出て行くさまを見送っていたが、倉庫内が静かになると、足元に転がっているいずみに視線を落とした。いずみは、お腹を抱え込むように丸まって横たわっていたが、その体の下には、破水した羊水が広がっている。

このまま放っておけば、胎児は母体から出られないまま死んでしまいかもしれない。そうなれば、いずみも無事ではないだろう。それならそれでも良い。華陽は肩を竦める。妊娠中のトラブルなど良くあることだ。

「いずみちゃん、最期に、良いことを教えてあげるわね。聞こえているなら聞きなさいな。実は私ね、石守には、あなたを始末する為に行ったのよ。狙いはあなただったの。だからあなたが追い出された後、駅のホームから、突き飛ばしてやろうと思って捜していたのに、あなただったら、どれだけ野蛮人なの？ 電車も使わずに、歩いて青洲の所まで辿りつくなんてね。そうそう、これも教えておいてあげなくちゃね。私と青洲が愛し合ってたなんて嘘っぱちよ。私、青洲が大嫌いだったわ。凡庸なくせに、偉そうにしてて、傲慢で、青洲なんか指一本触れられなくなかったの。私はね、あなたみたいに、優しくしてくれるなら誰でもいいなんて人間じゃないの。…

：そうね、薫ちゃんのことは、少し好きだったわ。あの子には才能があったもの。でもね、私の言うことを聞かなかったから、少しお仕置きをしてあげたの。まさか死んじゃうなんて思わなかったわあ。びっくりだったわよ」

華陽は、いずみの顔を靴先で持ち上げて上を向かせる。意識を失っていると思っていたいずみの瞳には、まだ光があった。頼りない視線が宙で焦点を結んでいる。

「ふふ、まだ意識があったの？ でも、動けないでしょ？ 良い気味ね。ついでに言っておくわ。私、あなた也大嫌いだった。声を聞いただけで虫酸が走るのよ。今助かつて、結局、あなたは司に始末されるわ。だって彼がその声を聞いて気分が悪くならないわけがないんだから」

華陽は、思いつきり馬鹿にしたようにいずみを見下ろすと、お腹を庇うように縮こまっている背中をつま先で蹴飛ばしてから、絵を切り裂いたナイフをいずみの手に握らせた。

「じゃあね、いずみちゃん」

いずみは、薄暗い倉庫に横たわったまま放置された。

（ガゴウジについて）

奈良県奈良市にある元興寺がうじは、日本で最も古い歴史をもつ由緒正しい寺だ。この寺を由来にした奇妙な言葉がある。『ガゴウジ』、『ガゴジ』、『ガンゴジ』ともいい、れっきとした日本語で、意味は『鬼』である。

元興寺の鬼伝説は、「日本霊異記」の道場法師の話がその原型とされる。

「その昔、元興寺の鐘楼に悪霊の変化である鬼が出て、都の人たちを随分怖がらせたことがある。その頃、尾張国から雷の申し子であ

る大力の法師が入寺し、この鬼の毛髪をはぎとって退治したという有名な話がある。元興寺では、鬼を退治した道場法師を神格化して「八雷神」とか「元興神」と称し、奇妙な鬼面を伝えている。この面は、鬼を退治した鬼神を象徴しているという」

古来、鬼は闇に隠れ、人をくらうものとされ、悪鬼邪気の象徴であり、追い払わなければ春は来ないと言う。この鬼を退治するのに元興神のような鬼を越える鬼神の存在を想定したのだ。

（本章参考文献）

消された王権 物部氏の謎（オニの系譜から解く古代史） 関裕二著
元興寺の鬼（元興寺公式サイト）

第十話 天は自ら助けるものを助く(4)

野いちご 赤い実だよ
木蔭で 見つけたよ
誰も 知らないのに
小鳥が見てた

野いちご 赤い実だよ
ひとつぶ つまんだよ
朝つゆ 光るよ ほら
こぼさぬように

(阪田寛夫訳 フィンランド民謡)

—— 歌声が聞こえる……くりかえし、くりかえし、穏やかに、安らかに、宥めるように、包み込むように……あれは……誰の声だったか……

『いずみは、この歌が大好きだな』

—— 父さんの声だ。

『でも、あなたが抱いていないとダメなのよ』

—— 母さん？

生ぬるく不安定な夜。突然言いようのない不安におののいて、居ても立つても居られなくて、火がついたように泣きわめくいずみを、かつて誰かがしっかりと抱きしめて宥めてくれていた。それをすっかり忘れていた。

『それに君の声じゃないとダメなんだよ』

父さんが、優しくいずみの背中をポンポンと叩く。

『君の声は本当にいいね。君が初めて僕に声を掛けてくれた時、すっかり聞き惚れてしまったよ』

そう言う父さんに、くすぐったそうに微笑み返す母さん。

——母はあんな柔らかい表情をしていただろうか？ あんなやさしい声で笑っていただろうか？

『いずみ、丈夫に育つてね。元気に育つてね。それだけが、父さんと母さんの願いなのよ？』

——……母さん？

『いずみつ、起きろ！ マメ太が死んじゃうよ』

——誰？

『もー、この報知機、ぜんっぜん誤作動しねー。吉田家こんなところに金かけてんじゃねーぞっ。おいっ、いずみつ、おまえが何とかするしかなさそうだぞっ。起きろよー』

——誰なの？

『ちよつとー、いずみだけじゃ無理よ。誰かおじさんに知らせに行つて！』

『えー、おじさん、鈍感だからなー。ねえちゃん行けよ。一番怨念強そうじゃん』

『きいいい、なんですって？』

——まさか！ お姉ちゃん？お 兄ちゃん達？

『おい、いずみが目を覚ましたぞ』

いずみは薄暗い視界の中で必死に目を凝らした。冷たい床の上で自由の利かぬ体かもどかしい。生温かく広がっていた羊水は、既に冷えきっている。

——どれくらい時間が経ったんだろう……マメ太が死んでしまう……死んでしまう……助けを呼ばなきゃ……助けて……助けて！ 青洲さんっ

「……た……たす……」

——思うように喉を越えぬ声……もどかしい……

『いずみ、左の奥、左の奥に……がある。押して！』

お兄ちゃんの声が脳内で響く。

——無理よ。体がちつとも動かない。

『いずみ、マメ太が危ないのよ……早くしないと死んでしまうっ！』
——マメ太っ！

ドアの外で誰かが騒ぐ気配がして、デスクで書類に目を通していた青洲はふと顔を上げた。秘書の中川が困った様子で入ってきた。

「青洲様、お騒がせして申し訳ありません、実は大旦那様が……」

困った顔で報告する中川を背後から突き飛ばすような勢いで、青洲の父、龍生が部屋に乱入する。

「青洲！ 何をしておるのだっ。薫が……またしても薫がピンチだと言っのにつ！ 悠長に仕事などしている場合かつ」

龍生は、こめかみに青筋を立ててどなり散らす。

「……父さん……」

青洲は困惑と憐れみの表情を浮かべて口ごもる。

「父さん……じゃあるかつ、薫を捜せっ！ 早く！ 今すぐにだ！」
龍生は掴みかかるように青洲の腕を引っ張った。そこに追いかけて来た赤秀が龍生の腕をとる。

「父さん、ほら、病室に戻るぞっ！」

「まったく！ どいつもこいつもっ！」

龍生が赤秀の腕を振り払って、元来た道を駆け戻ろうとした瞬間、火災を知らせる非常ベルの音が鳴り響いた。

現場はひどい有様だった。真っ青な顔で倒れているいずみ、ずたずたに切り裂かれた絵画、棚から落ちて無残に砕けた調度品の置物。駆けつけたみんながいっせいに息を呑む気配がした。青洲は一瞬瞠目してから、すぐにいずみに駆け寄った。

「いずみ！ いずみちゃん！」

抱き上げた途端、右手からカカリとナイフが転げ落ちる。真っ青な顔、床に拡がる透明な液体、閉じられた瞼は微かに痙攣して、体が絶望的なまでに冷たい。

「いずみ！　しっかりしろ！　今、助けてやるからっ」

青洲はいずみを抱えあげると、悲惨な現場に右往左往している家人たちをかき分けて病室へ急いだ。

手術中の赤いランプが灯った手術室の前で、青洲は長椅子に腰かけたまま頭を抱え込んでいた。

いずみを診察した医師は、いずみが非常に危険な状態にあること、ただちに胎児を取り出す必要があること、そして……胎児がほぼ絶望的であることを深刻な表情で説明した。

——どうして？　何があつた？

倉庫の後始末をした中川から不穏な報告もあつた。緑色の抽象画の切り裂き痕は、いずみが握っていたナイフによるものだろう、と……。

「いずみさんがやったのだと考えるのが、もっとも順当なのですが」

……」

「何の為に？　何の為にいずみがそんなことをしなきゃならないんだ！」

青洲は中川に食ってかかる。

「そのへんは、いずみさんが回復し次第聴くことができるでしょう。それともう一つ、気になっていることがあるのです」

なんだ、と青洲は不機嫌そうに問い返す。

中川はスーツの内ポケットから四角く折りたたまれたハンカチを取り出した。

「いずみさんの病室に、このような花が一つ落ちていたんですよ……」

……青洲様は、この花に心当たりがありますか？」

中川が丁寧にハンカチを広げると、中から花びらが出て来た。ピンク色の釣鐘状の花で、花弁の内側に無数の斑紋がある。

「いや、知らない。こんな花は初めて見るよ」

花弁を良く見ようと手を伸ばした青洲の手を、中川はやんわりと押しとどめた。

「申し訳ありません。触らない方がよろしいかと思ひます」
「？」

怪訝そうに首を傾げる青洲に、中川は続けた。

「この花は、ジキタリスと言ひます。花壇などにも植えられている植物なのですが、有毒なのです。花を見て楽しむ分には良いのですが、口にすると危険なのです」

「まさか、この花のせいで……」

青洲が目を見開く。

「いいえ、それは違ひます。この花の有毒成分は強心剤として働くのです。先ほど、白舟様に確認したのですが、いずみさんの状態は、そのような作用によるものではなく、むしろ、筋弛緩剤のようなものを使った状態に似てゐると言ひます。私が気にしてゐるのは、このような花が、病室にあつたということなのです。病院に持ち込むにしては、この花は、不穩で、不適切だと……」

「それは……つまり……」

青洲は口ごもる。

「もしかしたら、これを持参した来訪者は、いずみさんを害する為に、二重の用意をしてきたのではないかと……」

「……」

青洲は瞠目する。

「それほどもでに強い意志を持つて、害される理由がいずみにあつたと言ひのだらうか？」

中川の説明に、絶句してゐる青洲の背後で手術室のドアが開いて、中から白舟が出て来た。

「兄さん、ちよつといいかな……」

眉間にしわを寄せて難しい顔をした白舟は、青洲を手術室脇の小部屋へと誘導した。

——頭が重い。体中が痛い。あれ？ どうして私、こんな所にゐんだっけ？

うつすらと目を開けた視界に、点滴のパックが目に入る。

——そうだ、私病院にいて……うつん、ちがう……ちがう……華陽さんが来たんだった……

いずみは目を見開いた。

「マメ太っ」

慌てて、点滴を受けていない方の手でお腹をまさぐる。途端に下腹部に激痛が走った。

——いないっ！ マメ太がいない。

お腹の中でグリグリ動いていた、あの小さなマメ太の気配がすっかりない。いずみは痛みにかまわず、体を起こそうともがく。そこへノックの音とともに看護師が入ってきた。

「あら、目が覚めましたか？」

看護師長の佐藤だった。佐藤看護師長は、いずみの顔を覗きこんで小さく笑う。

「あのっ、マメ太は？ 赤ちゃんは？」

いずみの問いかけに、佐藤看護師長は少し困ったように目を伏せた。

「……今、青洲様をお呼びしますね」

いずみは放心したようにベッドに横たわっていた。青洲がそんないずみを心配そうに見つめる。

——手は尽くしたんだよ……

青洲はそう言った。

——マメ太もよく頑張ったんだよ……だけど……

『じゃあ、呼びたいように呼んでよ』

くすぐったそうな笑みをいずみに向けて、はにかみながらそう言った夢の中の少年の横顔を、いずみは思い出していた。

——マメ太……うつん、薫……ごめん、ごめんね。私のせいだ。あんな大事な絵がある場所に、あんな人を連れていくべきじゃなかつ

たんだ。マメ太は、ちゃんと警告してくれていたのに、私……気が
つかなくて……

涙が後から後から零れては落ちて行く。

——ごめんなさい……薫……そう呼んであげられなくて……

第十一話 人を呪わば穴二つ（1）

ドアの外で言い争う声が、部屋の中まで聞こえてくる。

「もう少し待ってくれ、赤秀」

青洲の声だ。

「もう一週間以上待った。十分だろう？ 話を聴くだけで、何も取り調べをしようと言っているんじゃない」

イライラした様子の赤秀の声が響き渡る。

「いずみはまだ落ち着いていない。もう少し待ってくれ」

青洲が懇願するように赤秀を押しとどめている背後で、ドアが開いた。

「青洲さん、私なら大丈夫だから……」

青洲にそう言つと、いずみは赤秀に視線を移して、どうぞとドアを広く開けた。

「……いずみちゃん……」

困惑する青洲を赤秀は一瞥すると、病室に入って行く。それに続きながら、青洲は小さくため息をついた。

——精神的に落ち着いていないのは、むしろ俺の方だ……。

あの日、マメ太を失ったと知って、いずみはパニック状態に陥った。

「嘘！ 嘘だよね？」

「……」

沈黙する青洲に取り縋って揺さぶりながら、いずみはマメ太に会わせて欲しいと懇願した。

「マメ太に会わせて！ どこにいるの？ マメ太に会わせてよっ」

「……事故が事件か分からないから……調べてるんだ……だから、今は……会わせられない……」

「そんな……ひどい……まだ小さいのに……まだ……あんなに小さかったのに……ひどい……」

いずみは、取り縋った手を力なく、はたり、と落とした。

「いずみちゃん、あそこで何があった？ あの部屋で何があったんだ？ 教えてくれないか？」

「……」

青洲の問いかけに、いずみは、途端に彫像のように固まった。

「いずみちゃん？」

「……マメ太にひどいことをした人は罰せられる？」

「当然だろう？」

「死刑にされる？ マメ太と同じように！」

いずみの口から飛び出した言葉は、青洲の予想を上回るほど憎しみがこもったもので、それまでの弱弱しかったいずみのイメージからかけ離れたものだった。

「それは……裁判所が決めることだね」

いずみから飛び出した言葉の強さに、思わず青洲は口ごもる。

「……私がやったんだ……」

「いずみちゃん……」

「あの絵を切り裂いて、マメ太を死なせたのは私よ、全部私がやったの……」

小さな握りこぶしを震わせて、視線を床に落としたまま、いずみが叫んだ。

「いずみちゃん、俺の目を見て言えよ！」

逸らしていた目を青洲に向けて、いずみは何度も何度も、自分がやったのだと言い張った。そして、もうここにはいられないから、出て行くと言う。

せめて抜糸が済むまではとか、せめてもう少し体力が回復するまではとか、色々な理由を付けて、もうしばらくここに留まるようにと、青洲は説得していた。

マメ太を失ったショックで、そんなことを言い出したのだろうと青洲は思っていて、もう少し精神的に落ち着けば、本当のことを話してくれるだろうとも考えていたのだが、予想に反して、いずみの

態度は目を追うことに硬化していった。

——俺達も本当のことを話すべきなんじゃないだろうか……

何度も何度も自分の心に問いかける。白舟の意見はもつともだが、これではいずみの暴走を止めることができない。

——短慮を起こさないでくれると良いのだが……

ベッド脇のソファの一人掛けの椅子に赤秀が座り、その向かいの二人掛けの椅子に青洲といずみが並んで座る。

「さて、そろそろ本当のことを話してもらおうか。あの部屋で何があつた？」

赤秀の威圧的な言葉にも、臆する様子もなく、いずみは赤秀を真っ直ぐ見つめた。

「……私がやったんです。絵を切り裂いて……勢い余って転んで……それで……」

「へーえ、転んだだけで筋弛緩が起こるのか？ 君は……」

赤秀は冷えた視線をいずみに注ぐ。

「……」

赤秀が睨みつけても、いずみは怯むことなく無言のまま睨み返す。「では聞くが、君が切り裂いたあの絵がどんなものなのか、君は知っているのか？」

「……」

——封印だ。今なら分かる。あの絵から解き放たれたあの黒い煙を見た今なら、あれがどんな絵だったのか、父が何をしていたのかが分かる。

だまりこむいずみを睨みつけて、赤秀は続けた。

「あの絵は封印なんだそうだ。送り主が、そう書いてあつた。あの絵を守るために、少なくとも二人の人間が命を落としている」

赤秀の言葉にいずみははっと顔を上げた。

「命を落とした……」

「そうだ。その絵を描いた封印主と、送り主だ」

「……」

——送り主つて、まさか……まさか……
いずみは動揺する。

「おい、ちよつと待てよ、そんな話俺も聞いてないぞ」
青洲が横から口を挟む。

「これがあの絵と一緒に同梱されていた手紙だ」
赤秀は一通の手紙を取り出して、青洲に手渡した。

拝啓

宗家 龍生様

突然このような物を送りつける無礼を御許してください。

当方、訳あつてこの絵を所持することが難くなつたため、宗家
吉田龍生様にこの絵を託したいと存じます。この絵は、名和家が残
した最後の封印になるやもしれません。

実は、この封印は私が施したのではなく、私の甥もしくは姪が
施したものであるはずなのですが、それを確認することは叶いませ
ませんでした。かなり以前から封印が不安定になっており（封印主が、
既にこの世にいない可能性も考えられます）、そうでありますのに、
残念ながら、私には、この絵の封印を維持する術がありません。つ
きましては、この絵を島の神社に奉納していただくことはできない
でしょうか。多少なりとも封印を維持できるのではないかと思いつ
いた次第でございます。加えて、四聖獣の伝承の真の意味を解読し、
再び、宗家と三家、ひいては島の安寧を得られますよう、御助力頂
ければ幸いです。

とりいそぎ、用件のみにて失礼いたします。

平成○年×月○日

田口俊秋（旧姓 名和）

敬具

青洲の横から手紙を覗きこんでいたいずみは、送り主の名前に小さく息を呑んだ。

「この送り主が……亡くなっただんですか？」

がくがく震える指先を握りしめながら、いずみが問う。

「そうだ。宅配業者が異変に気づいて通報したらしい。俊秋氏は奥の間で倒れていて、既に絶命していた。検死の結果は突発性呼吸不全ということだった。玄関先に梱包されたこの絵があつて、ここを送り先になっていたから、連絡があつたんだ」

「いずみちゃん、この日付……」

青洲が手紙の日付を指でなぞる。

「君に出会った日だ……」

薫の命日でもあつたあのひどい雨の日……名和家の一人が命を落とし、しかしその遺志により、この絵は吉田に辿りついた。そしていずみもまた、青洲の元に辿りついたのだ。

「……」

いずみは悲しげな顔で黙り込んだままだ。

「この絵は誰が描いたんだ？ 調べたのか？」

「……」

いずみは動揺して、びくりと体を強ばらせるが、それに気づいた様子もなく赤秀が答える。

「もちろん調べたさ。しかし、名和家っていうのはすごく捜しづら인다。ほとんどの者が姓を変えて潜むように暮らしている。名和俊秋の兄と、その子ども二人を探し出せたんだが、すべて既に亡くなっていた。恐らく俊秋が書いてある通り、封印主も亡くなっているんだろう。封印というのが本当で、そのせいで俊秋が命を落としたのなら、封印主など真つ先にやられるはずだろう？」

「封印……か……」

青洲は考え込む。

——絵が切り裂かれたと言うことは、封印が解かれたということではないのか？ しかし、吉田家にはその後何も変わりがない。島に

いる三家にも連絡をとったが、何も異常はないと言う。異常と言えば、青龍と朱雀が壊されたことぐらいだ。

「赤秀、どうしてこの絵は、俊秋氏の遺志どおり島の神社に奉納してないんだ？」

青洲がふと思いついたように問う。

「しようとしたさ。だけど、鳴春がとてもこんなものを神社に置けないって言うんだ。手に負えないって。親父に相談したら、しばらくうちの倉庫に置いておけて。確かに鈴守には手に余るだろうって言うんだ。で、手に余るってなんのことだって言ったら、おまえたちには分かるまいよと見下したように言うんだ。マツタク、ム力つく親父だぜ。でも、あの頃は、親父もまだボケてなかったはずなんだがなあ……」

そう言つて赤秀は肩を竦めた。

「そう言えば佐川は？　島を出てこつちに向かっていると鳴春は言っていたが、連絡はあったのか？」

佐川には四聖獣の伝説を調べてもらっていた。

「それが……実は佐川と連絡が取れないんだ……島の西海岸の海底に、古い神社の鳥居が沈んでいるのを見つけたという連絡があつて……それきりなんだ」

赤秀が眉間にしわを寄せる。

「神社の鳥居？」

青洲は首を傾げる。島にある神社は島の東、吉田姓と同じ名を冠した神社が一つあるきりだ。西側に神社があつたなどと、昔話でさえ聞いたことがなかった。

一方、いずみは一人、赤秀の言葉に瞠目していた。

「僕が九字護身法を教えておいて良かったでしょう？」

佐川の得意げな笑顔がいずみの脳裏に浮かぶ。

——まさか……まさか……。あれほどまでに霊に対する対処法を身に着けていた佐川だ。何もあるはずがない。無いはずだ……でも……あの封印から出て来た霊の気配は尋常のものではなかった。島で

感じたあの女の霊どころではない。絶望的に暗く、底しれず冷たく、痛いほどの渴きを包含したエネルギー塊。

——あれは何処へ行つたのだらう。華陽の言つた『伯父さま』とは誰のことなんだろう？ もし佐川が、封印が解かれたせいで危険な状態に巻き込まれているのだとしたら？ 一刻の猶予もないのだとしたら……

ここまで考えて、ふと、自分に探るような青洲の鋭い視線が注がれていることに気づいた。赤秀も怪訝そうに、いずみと青洲を交互に見つめている。いずみはゴクリと唾を呑んだ。

「いずみ、あそこで何があつた？ 君は何を見た？」

いつもよりも格段に低い声で、青洲が問いかける。

——こわい……

いずみは竦み上がって、青洲を見上げた。

「……赤秀、悪いが席をはずしてくれるか？」

いつもならば、赤秀がいる方が緊張して小さくなってしまつていずみなのだが、青洲の怒気をはらんだ瞳に睨まれて、いずみは、部屋を出て行く赤秀の背中を縋るような思いで見つめた。

第十一話 人を呪わば穴二つ（2）

いずみが少しずつ変化してきたのには気づいていた。

最初に出会ったあの雨の日から逃亡して島に辿りつくまでは、常に頼りなげで、自分の意志を持っていないんじゃないかと心配するほどだったのだ。島で玄武を見たいと言い張った辺りから変化が始まったような気はしていたが、確実に変わったと認識したのが、この奥病棟に移ってからだった。常に不安そうで、その不安を埋めるために闇雲に助けを求めて手を振りまわしている、そんな様子だったのだ。ずっと以前から断崖絶壁の上に居たのに、突然、こんな所にいたのだという現実に気づいて、怯え、助けを求める、そんな様子に似ていた。

青洲は、赤秀が出て行ったドアのカギをカチャリとかけた。

「……青洲さん？」

少し怯えた瞳が青洲を見上げて小さく名を呼ぶ。

「……」

青洲は無言のまま、いずみを抱き上げるとベッドへと運んだ。ベッドの縁にいずみを腰かけさせて、青洲はその前に立ち、いずみの瞳を覗きこむ。

「佐川がそんなに心配？」

「え？」

思いがけないと言う顔でいずみが青洲を見上げる。

「……心配ですよ。青洲さんは心配じゃないんですか？」

青洲は、心配だ、といずみの言葉に同意する。

赤秀の話にいずみが動揺したのは三度。絵の送り主の死、佐川の失踪、そして絵の描き手についてだった。いずみは、あの絵のことを随分前から知っていたのかもしれない、あの絵が封印だったことも、もしかしたら描き手のことも知っているのかもしれない。

——封印できる描き手……いずみの父親は絵描きだが、彼に封印な

どできただろうか？

中川に調べさせたところによると、斎藤心の絵は風景画しかないと聞いている。あの野いちごの絵は抽象画で、しかも斎藤心氏の画風とは異なるものだった。封印ができる描き手など、そうそう居るものじゃない。恐らく封印をしたのは、鈴守か名和か石守の血筋であるはずだ。

石守冬樹……青洲の脳裏にこの名前がゆらりと浮上する。青洲は重い気持ちで、次の質問を口にする。

「あの絵は何だった？ 君はあの絵が何か知っていたんだろう？ 切り裂いた時に、何が起こった？」

「……」

途端に重い沈黙が返ってくる。

「それとも何も見なかった？ 切り裂いたのが君じゃなかったから

……」

青洲の言葉に、いずみは頑なな表情で、青洲を睨みつける。

「私がやったの！」

いずみの言葉を見無視して青洲は続ける。

「……切り裂いたのは、俺に言えない人間だった？」

「……」

無言で目をそらすいずみの顎を指先で持ち上げて、青洲は口づけた。いずみの軽い動揺が伝わってくる。構わず、青洲はいずみをベツドの上に押し倒す。

「……青洲さん？ 青洲さんっ」

いずみの細い手首をベツドに押しつけたまま、何度も口づけを落とし、首筋に唇を這わせる。触れる素肌の滑らかさに、零れる吐息の甘さに、切なげに自分の名前を呼ぶ声の頼りなさに、吹っ飛びそうになる理性を押えこんで、青洲はいずみの反応を冷静に観察する。

衣服の下、素肌に青洲の手が触れても、肌蹴た胸元に唇を這わせても、戸惑いがちな瞳が時折青洲に向けられるだけで、いずみは抵抗らしい抵抗を示さない。

「抵抗……しないんだ」

青洲の言葉に、ふと我に返ったように、いずみは押さえつけられたまま青洲の瞳をぼんやりと見上げる。

青洲は初め、いずみがお腹の子を失って呆然自失になっていて、何も語らないのだと思った。次に、いずみの異常なまでの頑なさに、何かを隠しているのだと思った。そして、赤秀の話に動揺するいずみを見て、誰かを庇っているのでは……と思いついたのだった。

庇うのならば、心当たりは一人しかいなかった。

石守冬樹だ。いずみは石守家で奉公していたのだ。あの絵のこと
も封印のことも、石守家で何かを知った可能性がある。密かに中川に調べさせていたのだが、今現在、石守冬樹は行方不明だ。病氣療養中だと志木司は言ったが、石守家にもいないし、どこかの病院にいるという情報も出てこない。中川は外国に行っている可能性を示唆したが、もし、何らかの理由で国内に潜伏しているとしたら？
そしていずみの前に現れたのだとしたら……

あの日あの部屋で何があったのか、青洲は時間を掛けて、いずみから聞きだそうと考えてはいるのだが、何一つ事態が前に進まない
いたずらに青洲の嫉妬心や、いずみを失うことに対しての恐怖心が
嵩を増してゆく。既に危険水位に達していた。

——もう溢れそうだ……しかし……

力づくでいずみを支配しても、心まで支配することはできない。

——いずみの本心を知りたい。石守冬樹を庇っているのなら、
何を隠してる？

青洲は苦しげなため息をつく、いずみから離れた。

「……どうして、私が抵抗するって思ったの？」

いずみが身を起こして、胸元の衣服を掻き合わせながら問う。

「君が……石守冬樹を庇っているんだと思っていた。ここに……あ
の日、あの絵がある部屋に、彼が来たんだと思った。そして石守冬
樹が絵を切り裂いたんだと思っていた……」

石守冬樹に恋情を抱いて庇っているのなら、いずみは青洲を拒絶

するはずだ、そう思ったのだ。

「私が冬樹さまを選んだから、青洲さんを拒絶すると思ったの？」

突然その場に相応しくないクスクス笑いが聞こえて、青洲はそらしていた目をいずみに戻す。

「青洲さんは、私を買いかぶり過ぎてる」

はんなりとほほ笑むいずみに、青洲は怪訝そうに首を傾げる。

「私は、優しくされれば誰にでも体を許す、そんな女なのよ。青洲さんが考えているような女じゃない。そう、誰でもいいのよ」

いずみの笑みが深くなる。

「……いずみちゃん。何を言ってるんだ？」

青洲は眉間にしわを寄せた。

「赤ちゃんの面倒を見てくれそうだったから、青洲さんの傍にいただけ。それだけなのよ。それだけの理由があれば、私は誰にだって抱かれるわ」

「いずみつ」

青洲はいずみの腕を掴んで手を振りかざした。いずみは、一瞬だけ身を強ばらせたが、すぐに青洲を真っ直ぐに見つめる。

「打てば？ それで青洲さんの気が済むならちつとも構わない。もう、面倒なのはうんざりなのよ。私は自由になりたいの。だってまだ若いんだし、今までやれなかったことだらけだったから、それを一つずつやっていきたいの。だから、もう私には構わないでほしいの」

青洲は、振りかざした手を下ろしてギュッと握りしめ、震えるような深呼吸を一つする。

「……何をしたいんだ？ 君は何をするつもりだ？」

押し殺したような青洲の問いに、いずみは臆することなく、ほほ笑んで答える。

「……色々なことよ。友達を作って一緒にショッピングに行ったり、旅行に行ったりしてみたいわ、それに私、同年代の男の子と遊んでみたいのよね。私、若い男の子と遊んだことないから」

「……」

につこりほほ笑むいずみの視線を、青洲は受け止めきれずに目をそらした。やがて、くるりと背を向けると、荒々しくドアを開け、青洲は無言のまま部屋を後にした。

いずみは一人、病室に佇んだまま、ぼんやりと窓の外を眺める。

——ネスト（巢）から出る時が来たんだ……

はた、と涙が零れ落ちる。

心の中で目覚めた憎悪が、日を追うごとに強さを増していた。いずみの心の中で、確かに聞こえていた諫める声や宥める声が、どんどん力を失って、真つ黒な鬼の心が荒れ狂う。

——ごめんなさい。青洲さん。もう、青洲さんは私なんかと関わってはいけない。私は、私が犯してしまった過ちの後始末をしなきゃならない。その為に、きつと私は……人を殺す。青洲さんは殺人犯なんかと関わってちゃいけないんだ。

——ごめんね、青洲さん。私……人を殺したいの……

いずみは、スケッチブックを取り出した。心を集中させるために、目を閉じ、記憶に刻みつけられた標的の顔を呼び出す。

——許さない。髪の毛一本でさえ例外なく、私はあなたを閉じ込めて逃がさない。待ってなさい、華陽さん、私はあなたを許さないわ。

第十一話 人を呪わば穴二つ（3）

外には明るい陽光が溢れている。

——すっかり春ね

秋子は自分にあてがわれた部屋の片隅で、窓の外を眺める。生垣のレンギョウが花盛りで、黄色い花がいかにも楽しげに咲いている様子を見て、秋子は目を細めた。

志木聖は今入院している。二週間ほど前に、突然倒れたのだ。原因は不明なのだが、昏倒したまま目を覚まさない。数日前から華陽も具合が悪いとかで、検査入院をしている。

秋子は志木聖と離婚したが、未だに志木家に留まっていた。封印と三種の神器と四聖獣の伝承の片が付くまでここに留まること、それが離婚に当たって、志木司が出した条件だった。

何の事だか良く分からなかったが、離婚できると聞いて、秋子は二つ返事で承諾した。承諾すると、すぐに司はたくさんの書類を紙ばさみに挟んで持ってきた。当然、そのうちの一枚が離婚届である訳なのだが、他に挟まっているこの書類の束は一体何なのだろう。

「この書類はなんですか？」

不審げに、離婚届の下に挟まっている書類に目を通す。何かの権利書のような。眉間にしわを寄せて文面を読み始めた秋子を司が制止する。

「あまり、詳しく読まない方がいいかもしれませんよ？ お義母さん。いや、読んだ方がいいかな。離婚したくなくなるかもしれないね。志木家の財産が惜しければ、よくよく目を通して離婚を思いとどまることですよ。俺ならそうしますね」

そう言って、司は目を弧にして笑う。

「志木家の財産なんて興味ありませんっ」

秋子は口を引き結んで、良く確かめないまま、すべての書類に署

名し、ハンコを押した。

そして後になって、秋子は後悔していた。

——もったときちゃんと確認するべきだったかも……それに、もっと他に確認すべきことがあったんじゃないだろうか……

——あの離婚届はもう提出されたのだろうか？　だとしたら、今ここに居る私の身分ってなんなのだろう。

司は封印と三種の神器と四聖獣の伝承の片が付くまでと言ったが、一体それは何なのか、いつ片が付くのか、しかも、何故こんなことを司が決めるのか。秋子は聖の嫁であつたはずなのだが……

「はあ、私ってば、バカだなあ。片が付くのが十年後とかだったらどうしよう……」

唯一つ、ここに居られて良かったと思うのは、既に帰れる家がないという現実があることだ。名和家は既に離散しているし、養父母の家も、ほぼ同じような状態になっていた。

秋子は更に憂鬱な気分のため息をつく。

そもそも、自分が志木家に嫁いだのは、佐藤の家業であつた鉄工所を潰さない為ではなかったか。志木家からの潤沢な資金を受けて、借金返済は叶った。しかし養父母の心は、次第に荒んで行った。

志木家を当てにして、更なる金融投資に手を出し失敗する。志木家に度重なる金の無心を始め、再三の申し出に志木家が断ると、ギャンブルや消費者金融にまで手を出す始末。結局、鉄工所は不当たりを出して倒産した。養父母は離婚し、どうにか人手に渡らずに済んだ実家に養父が一人でひっそりと暮らしている。養母は、田舎にある自分の実家に帰ったそうだ。養父の家が人手に渡らずに済んだのさえ、志木家のお陰という状況で……でも、養父のいる家にはもう戻れない。

——ここを出されて困るのは自分の方だ。

秋子は一人苦く笑う。

——養父母はどうしてしまったんだろう。

ギャンブルなどに手を出す養父ではなかったし、養母はしっかり者で、いくら困ったからとはいえ、養父が消費者金融などに手を出すことを止めないわけがないはずなのに……。しかも、久しぶりに会った養父は、すっかり人が変わってしまっていた。秋子は唇を噛む。

——あんな人ではなかったのに……。どうして……

そんなことをつらつらと考えていると、血相を変えた若いメイドがノックもなしに部屋に飛び込んで来た。

「もっ、申し訳ありません奥様。少しここに居させていただいても良いですか？」

メイドの顔は蒼白だ。

「構わないけど……。どうしたの？ また？」

聖が倒れてから、志木家の屋敷のあちらこちらで奇妙な現象が多発するようになっていた。無言電話はしょっちゅうで、時々電話の向こうで子どもの笑い声がするとか、女のすすり泣く声が聞こえるとか。また、冷蔵庫のものがすぐに腐ってしまうとか、拭いても拭いても廊下に水たまりができていたりとか、誰もいないはずの部屋から大勢の足音がするので、行ってみても誰もいないとかで、屋敷のメイドたちはすっかり怯えてしまっていた。

メイドたちが騒ぐ度に秋子も顔を出すのだが、秋子が奇妙な現象に出くわしたことは一度もない。なんでも、秋子が近くにいると不思議な現象が起こらないのだそうで、今や秋子の部屋は避難所、もしくは結界と化していた。

「そうなんです。さっきシーツを取り出そうと思ってリネン室に行っただけです。そうしたら……」

鍵など掛かっているはずのリネン室のドアが開かないのと言う。無理やりドアノブを回そうとガチャガチャすると、中から女の泣き声がする。気づいたらドアノブが生ぬるく濡れており、慌てて

手を放すとべつたりと血が付いていたと言う。

ガタガタ震えながら拳を握りしめるメイドの手を、秋子は解いて開いてみるが、血らしきものは何も付いていない。

「大丈夫、血なんて付いてないわ」

秋子は、メイドを椅子に座らせると、気を落ち着かせる為にカモミールティーを用意する。

「お、奥様、申し訳ありません。こんなことまでさせてしまって…

…後は、私がっ」

ティーポットからカップに注ごうとしたところで、メイドが慌てて立ちあがる。

「いいから座ってなさい。それに私、もう奥様じゃないし……」

湯気が立つカップにハチミツを小さじ一杯入れてかき混ぜる。

「いいえっ、奥様です。どうしてそのようなことを？」

メイドはブルブルっと首を横に振って、元々大きな瞳を更に見開いて問い返す。

「あら、聞いていないの？ 私はもう志木家の人間じゃないのよ？
だって離婚届にサインしたし……」

そう言う秋子に、メイドは少し戸惑った様に首を傾げた。

「でも、やはり奥様です。司様から、引き続きそう呼ぶようにな言われておりますので」

「？」

秋子も首を傾げる。

——相変わらず、あの人（司）の考えていることは良く分からない

……

ようやく落ち着いて部屋を出て行ったメイドを見送って、秋子は小さくため息をついた。秋子はなるべく屋敷内をうろつかないようにと申し渡されているのだ。大旦那様である聖の目につかないようにと言われている。一度、聖にひどい目に遭わされてからは、すっかり聖のことが怖くなっていたので、喜んでこの部屋に引きこもっ

ていた訳なのだが、春の陽気に誘われて、外に出てみたいと思った。

——大旦那様も華陽さんもないし、司さんは会社だし……構わないわよね？

久しぶりに外に出た気がする。玄関の扉を開いて、秋子は外の光の強さに目を細めた。行くあてがある訳ではなかったが、ぶらぶらと庭を歩いて門へと向かう。八重桜が重そうな花を誇らしげに風に揺らして、風には幽かに清浄な甘さが溶け込んでいる。春は秋子の一番好きな季節だ。すべてが初々しく、次に来る季節への期待と不安に戸惑っている。均一でない空気。その不安定さが、逆に心地よい揺らぎを秋子に感じさせる。清々しい気持ちで歩いていると、門の少し手前で声を掛けられた。

「奥様、どちらへいらつしやるのですか？」

メイド長の野上だ。歳は五十になるくらいだろうか、それほど年嵩には見えなかったが、意志の強そうな眉と艶やかに結い上げた黒髪が印象的な女性で、大抵の使用人は彼女がいるだけで、無口になり、行動的になり、有能になる。野上が、直接秋子に何かを言うてくることはほぼなかったが、常に監視されている、そんな気はしていた。

「あの、えっと……お天気も良いようだし、少し散歩にでも行つてこようかと……あつ、それに、佐川のおば様に預けてある茶丸の様子を見てこようかな……なんて……」

秋子は引きつった笑顔を浮かべ、ふと思いついた用事を口にしてみる。

茶丸は野良犬だった。ある日志木家の敷地に逃げ込んで、飼い犬であり番犬であった志木家の犬達にいじめられて、屋敷の床下に逃げ込んでいたものを秋子が見つけた保護した。茶色で丸っこい顔をしていたので、茶丸。秋子が付けた名前だ。今は、訳あって、佐川の家に預けてある。佐川家は志木家の遠縁に当たる家だ。

「特別なご用がない限り、屋敷内から出さないようにと司様より承っております。しかも今は、大旦那様が一大事の時、少しご自重していただかないと、使用人たちにも示しが付きません」

「……すみません、天気が良かったものですから、つい……。大旦那様のことを考えないことは無かったのですが、ずっと、部屋に居たので……。息がつまりそうで……」

さっきまでの清々しい気分が一気にしぼんでいく。項垂れて、それでも、くどくどと言いつく秋子に冷徹な視線を落として、野上は再び口を開いた。

「このようなことを一介の使用人が口出しすべきではないと思いますが、あえて言わせていただきます。大旦那様ならびに司様が、奥様の為に、どれほどご尽力くださったのかお忘れでしょうか？ 佐藤家の窮地を救い、それでも立ち行かなくなった御尊父様が、終の棲家であつたご実家を手放さずに済んだのは誰のお陰です？ 不当たりを出した鉄工所の従業員二百十余名、誰一人失職することなく再就職できたのは誰のお陰だったでしょうか？ この志木家一大事の折、少しくらいの不自由を堪忍できぬとは、あまりにも大人げないとお思いませんか？」

「……ごめんなさい……。部屋に戻ります」

秋子は項垂れたまま、しおしおと自室へ戻った。

——なんて至らない嫁だと思われているんだろうな。もう嫁じゃないのだけれど……

秋子は、泣きそうな気持で小さくため息をついた。

その日の午後、志木家は突然慌ただしくなった。大旦那様の意識が回復したのだ。聖は、すっかり衰弱しきっていたが、屋敷に戻りたいと言っているらしい。そこで医者とも相談した結果、本人の意向を汲んで、自宅療養に切り替えることにしたのだと言う。衰弱が激しいので、免疫的にも弱っている、とにかく清潔にとの医者の指示の元、屋敷中の窓と言う窓が張り開けられ、大掃除が開始された。

日頃から掃除は行きとどいていたが、カーテンや絨毯まで清潔にと言われれば、やり直すしかない。

そんな作業中に、メイド長から秋子は呼び出された。

「奥様、誠に申し訳ないのですが、大旦那様のお部屋を大掃除致しますので、少しお力をお貸し願えませんか？」

聞けば、奇妙な現象は、大旦那様の部屋で起こる回数が断トツで多いらしい。メイド達が怯えて、作業が一向に進まないのだと言う。「私もすべてを信じている訳ではないのですが、時折、背後に気配を感じることがございまして……」

いつもの威厳が少しばかり鳴りを潜めて、心なしか心細げにみえる野上に親近感を覚えた秋子は、二つ返事で了承した。

大旦那様の部屋は、以前、ひどい目に遭わされた時に入ったきりで、それ以降近づいてもいない。少しばかり不安はあるものの、たくさんの使用人が立ち働いているのを見れば、すっかりそんな不安も吹っ飛んで、秋子は張り切って部屋の中へ入った。

「まああ、奥様はそんなことをしなくても良いのですよっ」

秋子が雑巾を絞っていると、血相を変えた年嵩のメイドが慌てて秋子から雑巾を取り上げた。

「だって……私は何をすればいいの？」

「ここに、居てくださいればいいのです。あちらのソファに座って、お茶……は、今は無理ですが、後ほどご用意致しますので、本でもお読みになっていてくださいませ」

埃っぽい空気をハタハタと手で追いながら、書棚の傍にある応接セットを指し示した。

「……はい」

秋子は言われるままに、ソファにすくとんと腰を下ろす。

最近、秋子の扱いは、ほぼ結界師だ。特に何をしているわけではないのだけど……秋子は首を傾げる。確かに、所謂靈感があるとか

ないとか、世の中で言われる類の話には無縁であるというのは昔から自覚があった。だって、自分の目や耳や感覚で確認できないのだ。信じろと言う方が無理だろう。だけど……志木家に来て、何かがある、それを時々感じるようになった。大抵、司が傍に居る時だ。突然記憶が飛んで、今まで自分が居た場所から移動している。移動した記憶は無い、だけど時間が少しだけ経過している。つまり自失している間に行動したとしか考えられない。

——ヒルコ……あれはなんなのだろう。霊？ 私は一時的に霊に憑かれていたということなんだろうか？ 自失している間、私の体をヒルコが動かしているということ？

しかし、問題なのは……秋子は呻く、その間に自分がしていることなのだ。大抵の場合、自分から司に……もうやめよう、思い出したくもない。

司に抱かれるたびに、何かが一つ一つ繋ぎとめられていく。そんな気がしていた。それが司の望みなのか、秋子の望みなのか、あるいは単なる秋子の勘違いなのか……分からないまま今に至っている。ただ、何となく感じるのは、何かの理由で司が自分を必要としているということ。

今まで司が秋子にしてきたことは許しがたいことばかりだが、それ以上に、司の真意の方が気になった。

——何か理由があるのだ。

鈍い秋子にもそれくらいは感じ取れる。ただ単に、ひどい目に遭わせて楽しんでいるのではないと思う。

——いや、たまにはそうなのかもしれないが……。

その証拠に、司が秋子に手を上げたのは一度だけ。しかも、司を拒んで果物ナイフで自刃しようとした時だった。それ以来、秋子の前には果物ナイフもステーキナイフも、デザートナイフでさえ、一切並ばなくなった。すべて一口大にカットされている。これじゃ、キッズプレートだ。秋子は苦笑する。

司は一見暴君に見えるが、むしろナイーブだ。秋子はそう思う。もし、この婚姻が聖とではなく、司とのものであったなら……秋子は考える、そうであつたら、自分はこれほどまで悩むことなく、傷つくことなく、司の伴侶として暮らしていたのではないだろうか？否、こんな仮定を考えても仕方のないことだ。秋子は深いため息をついた。

本でも読んでおいてくれと言われたが、特に読みたい本も持つてこなかったし、今から取りに行きたいような本もない。仕方なく、大旦那様の書棚を覗いてみるが、経済や、経営の本ばかりで、秋子が読めそうなものはないようだ。唯一、書棚の下段の隅に、世界の名画集が並んでいたの、ヴラマンクの画集を抜き出した。

モーリス・ド・ヴラマンクは十九世紀の終わりから二十世紀初頭にかけて活躍したフランスの画家で、フォーヴィスム（野獣派）の代表者だ。叩きつけるような荒々しいタッチの絵が有名だ。彼の有名な言葉に、

『花瓶とクロスとは同じ物質か？ 地上に落ちた花瓶は、音を立てて割れなければならない。クロスの落ちる音は軽い。机を打てば木の音がしなければならぬ。それを描いてこそ絵なのだ！』というものがある。物の本質をエネルギーに描いた画家なのだ。秋子はこの画家の絵が大好きだ。見ていると元気が湧いて来る。

モノの本質を捉えたいと、かつて、秋子も美大で奮闘していたことがあった。もっとも、秋子を取り組んでいたのは、絵ではなく彫刻だった。名和家の者は、美術系の学校に行く場合にかぎり、ある企業から援助を受けることができた。だからこそ、両親を失って、養女になっていた秋子でも、気兼ねなく金のかかる美大に行けた訳なのだ。

仕方なく、秋子は画集を眺めながら、掃除が終わるのを待つことにした。

第十一話 人を呪わば穴二つ（4）（前書き）

（注意） この回では、R15 スレスレの表現があります。もし、御不快だと感じられた方がいらしたらご連絡ください。R15に切り替えたいと思います。また、そのような表現に御不快を感じられる方は、読まれる前に十分お気を付けください。

招夏

第十一話 人を呪わば穴二つ（４）

手の先からパタリと本が落ちて、秋子は目覚めた。辺りを見回すと、すっかり掃除は終わっていて、誰も居ない。ソファがリクライニングになっていて、膝かけが掛けられている。待っている間に眠ってしまったらしい。テーブルの上には、約束通り、お茶の準備がしてあった。

「やだ、起こしてくれたらよかったのに……」

既に西の空が薄赤く色づき始めている。落とした本を拾い上げてテーブルに置く。ふと、表紙に目をやって、それがさっきまで見ていたヴラマンクの画集ではないことに気がついた。

——あら？

本を取り上げて開いてみる。アルバムだった。

たくさんの写真が貼り付けられていて、その一つ一つに手書きのメモが書かれていた。几帳面そうな志木聖の字だ。

正子（嫁） 二十五歳

長女 昌代誕生

しばらくは、仲の良さそうな親子三人のスナップ写真が続く。ところが、それから十二年後、唐突に司が出現する。

長男 司誕生

司一人の写真。それ以降、親子で写った写真がない。そして、スナップ写真がなくなり、代わりに集合写真が一年ごとに一枚ずつ貼られている。昌代十一歳、司〇歳から始まって、毎年一枚ずつ。場所も同じ、志木家の玄関の前だ。

毎年同じ場所で同じ日に集合写真を撮る。それが志木家の決まり事であるらしかった。秋子が入った写真も二年前からのものが貼り付けられている。

——どうして司は母親に抱かれている写真がないんだろう？

不思議に思いながらアルバムをめくっていると、最後のページに

封筒が貼り付けられているのに気がついた。封筒には写真が数枚入っている。

仁 三十一歳 弟 死亡（三十三年前の日付）

美桜 十九歳 司の母 死亡（三十二年前の日付）

秋乃 仁の愛人の子 死亡（三年前の日付）

いずみ 秋乃の子（死亡？）

——司の母……美桜……十九歳、死亡……

写真に写っている美桜は、とても美しい人だった。儚げで、それでいて凜としている。司はどちらかというと聖に似ているのだけれど、聖よりも印象が少し柔らかい。この母親の雰囲気を受け継いだのかもしれない。そう思いながら写真を見つめっていると、いきなり指から抜き取られた。驚いて顔を上げると、そこには司が立っていた。

「君がこんなに詮索好きだったなんて知らなかったな。元夫が何をしていたのかが気になるのか？ それとも離婚したことを後悔している？」

秋子は慌てて立ちあがる。

「あ、あの、違いますっ、見ていた画集を落としてしまって……拾ったらそのアルバムで……私、詮索なんてするつもりは……」

司の目には激しい怒りが宿っていて、秋子は自分が地雷を踏んでしまったらしいことに気づく。

司は、秋子の言い訳を聞いているのかいないのか、取り上げた写真に一瞥をくれてから、残りの三枚と合わせて封筒にしまいアルバムをパタリと閉じた。そして、オロオロと立ち尽くす秋子の手首を掴むとぐいっと引き寄せ、怯えて瞠目するその瞳を覗きこむ。

「俺の母はね、志木家のメイドだったらしいですよ。奉公にあがってすぐに手をつけられたんだとか……俺を産んだ時に死んだそうです。出産時のトラブルだったとか、あるいは、邪魔にされて殺され

たんだとか、色々言う人がいますよ」

秋子は、恐怖と悲哀と同情がないまぜになった複雑な思いで、司を見上げる。

「……可哀そうですか？」

司の瞳に残酷な光が宿ったような気がして、秋子は身を縮めた。その瞬間、ドンッと肩を押されて後ずさる。そのまま二、三步下がったところで、ベッドの縁にぶつかって横倒しに倒れ込んだ。

「気に入らないな。俺はね、今まで人に憐れまれたことなど一度も無いんですよ」

そう言いながら、司は秋子をベッドの上に押さえつける。

「その目、気に入らない……」

馬乗りになって片方の手で秋子を押さえつけたまま、司はスーツのネクタイを片手で解くと、しゅるりと抜き取った。

「なっ、何を？ やめてっ、やめてくださいっ」

秋子は目を見開いて怯えた声を上げる。そこへノックの音とともに誰かがやってきた。

「奥様、お目覚めですか？ お茶を……」

入ってきたのは野上メイド長で、ベッドの上の秋子と司を見て瞳目する。

「野上、俺が呼ぶまで人払いしておけ」

司の言葉に、野上メイド長は一礼するとドアを閉め立ち去った。

「ねえ、俺の母の時もこんな風だったと思いませんか？ この家でメイド一人が助けを求めたところで、主人が下がれと言言いさえすれば、誰も助けるものなんていないんだ」

秋子の目から涙が零れ落ちる。

「誰の為の涙です？ 憐れな俺の母の為ですか？ それとも、これから起きる自分の身の不運を嘆いているんですか？ そんな目で俺を見るのはやめてもらえませんか？」

司は持っていたネクタイを両手でピンと張る。秋子は瞠目した。以前聖にこの部屋で受けたひどい仕打ちが脳裏によみがえる。

「何をするんですか？ いやっ、嫌です。やめて！」

パニック状態になって、メチャメチャに腕を振り回す秋子に舌打ちをすると、

「ヒルコ、大人しくさせろ」と司は低く呟いた。

途端に、秋子はパタリと腕を下ろして大人しくなる。司は、ネクタイで秋子に目隠しを施した。二重三重に巻きつけて、強く結ぶ。

秋子は閉ざされた暗闇の中で意識を戻した。もうすっかり肌に馴染んでしまった体温も、体に覚え込まされた律動も、激しい息づか
いも、何もかもいつもと同じなのに、視覚が奪われているせいか、
いつもよりも熱い、体の奥から湧き上がる甘い痺れが強すぎて、こ
わい……

——どうして、この人は、いつもこんな風に切羽詰まった抱き方を
するんだろう？

暗闇の中なのに、意識がスパークして真っ白になる。意識を手放
すほんの一瞬、闇の中に、夕焼けの朱を見た気がした。

ほとんど闇に呑み込まれようとしている夕日の様な、闇色に染ま
ってしまふことから懸命に踏みとどまっているような、淡い淡い朱
の光球。

秋子は、その光球にそつと手を伸ばす。ぴくりと少し震えたよう
に揺れてから、その光球は秋子の掌に降りてきた。小動物の拍動の
ように小刻みに震える球体。そのあまりにも儚く頼りなげな様子に、
そつと抱きしめようとしたところで、秋子は強かに拒絶された。

——あつ……

光球はふわりと飛び立って、そのまま闇の中に消えて行く。その
刹那、秋子は葉ずれの音にも似た幽かな声を聞いた。

——シュウ……すまない、君を巻き込んでしまった……

——……司さん？

秋子は泣きたい気持ちで、光球の後を追う。

——司さん、あなたなの？ 何をそんなに怯えているの？ あなた

の本質は何？ 教えて…… 教えてよ……

気を失ったまま眠る秋子の頬にかかる髪をそつと掻き上げる。下男に運ばせようと言う野上を制止して、司は自分で秋子を部屋まで運んだ。前にあてがっていた部屋よりも格段に狭く小ぢんまりした部屋だ。秋子は既に聖の嫁ではなくなっていたが、しばらくはここで暮らすようにと言ってある。今、秋子に出て行かれて困るのは、志木家の方だ。使用人達がパニックを起こしていなくなってしまう。「司様、これはやはり申し上げておくべきかと存じます。今日奥様に大旦那様の部屋に居て欲しいとお願い致したのは、実は、私の私でございまして、もしそのことで奥様にお怒りなのならば……」

野上メイド長の言葉は、司に遮られた。

「分かっているよ。秋子が詮索などするはずがない。分かりきったことだ。彼女は志木家になんの関心もないからね。俺が癪癪を起してしまった、それだけのことだ。シュウが目覚めたらいたわってやってくれ」

司は振り向いて野上を見つめる。

「差し出がましいことを申し上げました。仰せの通りに致します」

野上は深々と頭を下げる。

「野上、父上は間もなく身罷^{みまか}られるだろう。その際には、どのようなことになるか、俺にも想像がつかない。もし、俺に何かあったら、その時は秋子に力になってもらってくれ。そうなったら、おまえたちが頼れるのは秋子だけだ。そして、その後のことは佐川家の崇に相談すると良い」

そう言い残すと、司は部屋を後にした。

「……承知いたしました」

野上メイド長は悲しげに顔を歪めてから、司の後ろ姿に深々と頭を下げた。

第十一話 人を呪わば穴二つ（5）

華陽はベッドの上で、身もだえしながら呻いていた。

——苦しい、苦しい、苦しくてたまらない。

何か見えない糸でがんじがらめにされている、そんな気分だ。病院で様々な検査を受けたが異常なしだった。

——異常なんてあるわけがないのよ。あの女！あの女のせいに決まってる。こんなことができるなんて知っていたら、あの場で始末していたのにつ

華陽も志木聖と同じ日に志木家に戻って来ていた。自室として使っている部屋の片隅で呼鈴を鳴らす。やってきた使用人に、司を呼ぶようにヒステリックに言いつける。

「しかし、司様は会社にて会議中でございまして」

「いいからっ、すぐに戻るように伝えなさいっ」

執事は一礼して下がった。

鎮静剤を投与されて、小一時間も眠った頃、司が一人の男を引きつれてやってきた。

「司さん、遅いじゃないの！何をしていたの？私がこんなに苦しんでいるのに……」

「病院では何ともないと言われたんだ。とりあえず何もしようがないだろう？」

司は形の良い眉を寄せて肩を竦める。

「なるほど、これは凄いな……」

司の後から付いてきた男は、華陽を無視して部屋のあちこちを歩き回っていたが、終いには感極まったように声を上げた。

「何が凄いんだ？ 崇」

司は眉間にしわを寄せる。

「誰なの？」

華陽は、胡散臭そうに眉間にしわを寄せた。

「司、紹介してくださいよ。おっかなくてしょうがない」

さほど怖そうな様子でもなく、男はへらへら笑う。

「華陽、こいつは佐川^{さがわ}崇^{たかし}。親父の弟の仁叔父^{じんしゅ}を知っているだろう？
その二男の孫だ。だから、俺達の従弟の子になる」

司の説明に華陽は目を見開く。

「仁叔父様の……」

「こいつは変わり者でね、ついこの前まで市役所なんか勤めてたんだ。でも、今は……」

司は、そこまで話すと含み笑いをもらす。

「その変わり者が気に入ってるくせに」

佐川はにやりと笑う。

「別に気に入ってる訳じゃない。頼りにしてるだけだ」
司もにやりと笑う。

「それで、どうして佐川家の人間がここに在るわけなの？」

華陽は顔を顰めて、苦しげに問いかける。

「苦しいですか？　ここまで凄^{すご}い封印を施されているんですから、
苦しいでしょう。横になってもええですか？」

佐川は華陽を横たわらせると、体の表面に沿って触れるか触れないかの中空に手を滑らせる。

「やはり封印なのか？」

司も覗きこむ。

「いずみさんの気配がする。しかし……なんと禍々しい……」

佐川は顔を顰めた。

「やつぱりあの女なのねっ、あの時、あの子もヤツてしまえばよかったのよ！　それを司、あなたが鈴守に拘るからっ」

わめき散らす華陽を佐川が遮る。

「あなたは一体何をしたんです？　ここまでいずみさんを汚^{けが}すなんて、余程のことではなければ不可能だ。あれほど清浄な人だったのに……」

「何が清浄よっ、こんな恐ろしいことをしておいて……ああ、苦し

いわ。司さん、今すぐにあの女を始末してよ。お願い」

華陽は司に取り縋る。

「だから俺は鈴守に手を出すのはやめておけと言ったんだ。どうしても行くなら、封印の場所を確認するだけにしておけと言ったんだろう？」

司は、縋りつく手をやんわり外しながら、眉間にしわを寄せる。

「今、いずみさんを始末すれば、封印の場所も分からなくなりますよ。今しばらく、我慢してください。僕が何とかしてみましよう」

佐川は、華陽ににっこり微笑みかけてから、司に外に出ると目で合図する。

「で？ どうする？ 何が分かった？」

別室で窓の外を睨みつけるように無言で立っている佐川の後ろ姿に、司は問いかける。

「僕を何の為に吉田に貼り付けたんです？ 何の為に島まで行かせたんですか？ 闇雲に手を出すくらいなら、最初から僕なんて必要なかったんだ」

佐川は背中を向けたまま、怒りを含んだ声で、それでも静かに問いかける。

「……随分怒っているようだな」

黙ったまま返答しない佐川に、司は苦笑して続けた。

「……華陽は父に命令されて石守へ行っただ。鈴守を始末するように言われてね。あれは父に気に入られていたからな。期待に応えたいと思う気持ちが強かっただろうし、華陽自身が、依り代としてもうかなり蝕まれているんだ」

「で？ いずみさんに何をしたんです？」

「華陽は胎児を始末したと言っている。あと、ガゴウジの封印を解いたと……」

「……なんてことを……」

佐川は呻いた。

「父は三種の神器が揃うことをとても恐れていた。だから吉田に鈴守と石守が揃いそうだと知って度を失っていたのかもしれない。父も、依り代として限界だったから……」

「司……それは逆だ。それは、自分で自分の首を絞めたも同然な愚かな行為ですよ。恐らく伯父さんが倒れたのはそのせいです。弱っている体にガゴウジは毒でしかない」

佐川は眉間にしわを寄せて苦しげにため息をついて続けた。

「僕は、島の神社で四聖獣にまつわる神話、史書を調べて来ました。そして、島の西海岸に沈む四鬼神社の鳥居を見て来ました。僕の結論はこうです。三種の神器が必要なのは、吉田家よりも、むしろ、志木家の方だと。なのに、あなたたちは肝心の石守を潰してしまっただですよ」

「……それは確かなことなのか？」

司は眉間にしわを寄せる。かつて、依り代となっていた華陽の兄は、石守の力を受けて死んだ。決して戦ったわけではない。その石守の人間と華陽の兄は親友だった。華陽の兄の苦悩を知って、むしろ力を貸したはずだったのだ。石守の力は意図せずして志木を滅する。その事件以来、そう信じ込まれた。だから、司の父も華陽も華陽の父も、石守を恐れるのだ。名和については、そもそも憑いている霊が忌み嫌うので、依り代の意志とは関係なく迫害してしまう。鈴守に関しては、実害はなかったものの、神器の一つとして敬遠してきたというのが本音だ。名和家の一人でありながら、ヒルコに気に入られた秋子は例外中の例外なのだ。

「石守なくして、志木家に未来はありません。どうするつもりですか？ 石守冬樹はどうしました？ まさか……」

佐川は目を眇める。

「行方不明ってことになっている。俺が忠告したんだ。しばらく雲隠れしておいた方がいいって。恐らく、姉がどこかで匿っているだろう。姉は冬樹を溺愛しているからな」

「すぐに呼び出せますか？」

「どうかな、少しでも危険だと姉が思えば、まず無理だろうな。姉は志木家のことを嫌っているから、潰れるならそれでも構わないと思っっているだろう」

司は苦笑する。

「伯父さんが亡くなる前、もしくは、いずみさんがここに来るまでには呼び出しておくことですよ。石守冬樹がどれほどの力の石守なのか分かりませんが……」

「鈴守自らここに来ると言っているのか？」

司は軽く瞠目する。

「あの封印が分かりませんか？ あの禍々しい復讐の色を滲ませたあの封印が……彼女は、そう遠くない未来にここへやって来ます。封印を施したものの元に……、すべてを終わらせる為に……」

「……すべてを終わらせる為に……」

司は沈痛な面持ちで復唱する。

「それと、もう一つ、苦情を言わせてもらいますよ」

佐川は上目づかいで司を睨みつけると続けた。

「名和家から嫁をとったんなら、僕にも一言教えておいて欲しかったですよ。僕がここまで手間取ったのは、名和家の生き残りを捜し回っていたからなんですよ？ 名和家がどれだけ捜しにくいか、この前話したでしょう？」

「しかし、鈴森いずみは、封印もできるのだろう？ 名和の血筋のものなんじゃないのか？」

「確かにいずみさんは、そのようです。しかし彼女はその道の教育を何一つ受けていない。すべてが自己流なんです。しかも彼女が扱うのは紙。耐久性が低い。僕が捜しているのは、もっと強い素材を扱える人なんです」

封印としての依り代を造れる名和家の生き残りを捜し回った。幾度となく途切れそうになる一筋の糸を辿って、ようやく見つけた名和家の末裔。それが志木家に嫁として入っていた。まさか志木家が名和の人間を受け入れるとは思っていなかった。またしても灯台も

と暗しだ。しかも、佐川の祖母とその嫁は捨て犬を介して交流があるという。それを知った時の、佐川の脱力を想像できるだろうか。「秋子のことを言ってるのか？　しかし、秋子は、名和家としての力などほぼ持つていないに等しいようだが……」

司の言葉に、佐川は大げさにため息をついた。

「ここまであなたを繋ぎとめ、かつ、志木家で無事に過ごせている名和家の人間に力が無いわけがないでしょう？」

更に佐川は続ける。

「それから、これだけは予め言っておきますよ。もし、いずみさんがここに乗り込んできて、あなたと彼女が危うい状態になった時、僕は迷わず彼女を助けます。自分の身は自分で守ってください」

佐川の言葉に、司は眉間にしわを寄せた。

「小さい頃から可愛がってやったのに、つれないやつだなあ」

そう言つてクスクス笑う。

「彼女の方が、血筋的に僕と近いですしね。若くて綺麗な従妹を優先して助けるのが常識と言うものですよ」

佐川はしかつめらしく言ってからニヤリと笑う。

とんでもない常識だと司も笑った。

「鈴森いずみが来ると、危うい状態になるんだな？」

突然鋭い視線を向ける司に、佐川は頷く。

「人を呪わば穴二つつて言うでしょう？　自業自得ですよ」

佐川は、窓の外へ視線を移し、傾いてきた日差しに目を細めながらひっそりと笑った。

第十二話 水は低きに流る（1）（前書き）

水は低きに流る　：水が高いほうから低いほうへ流れるように、物が自然の成り行きに従って運んでいくことのたとえ。

第十二話 水は低きに流る（1）

青洲は一人、いずみの病室のソファの上でひっそりと座っていた。窓から入ってくるのは東風、すっかり緩みきった心地よい風だ。

——なのに、どうしても冷えきった気持ちになつてしまうのか

……

青洲は小さく身震いする。

いずみが出て行つてから、病室の中の物は何一ついじっていない。青洲が誰にも入ることを許さなかったからだ。にもかかわらず、ベッドは使った形跡さえなくらい綺麗に整えられている。荷物は何一つない。初めていずみに会った時に持っていたミニボストンも、青洲が買つてやったスケッチブックも色鉛筆も、何一つ残っていない。いずみがここにいたと言つた気配さえ残っていないような気がする。青洲はベッドのシーツに手を滑らせる。温かみの欠片もない。

いずみの失踪に気づいた時、青洲は愕然とした。

——どうして気づかなかった……

自分を責める言葉ばかりが湧きあがってくる。いずみから投げつけられた言葉の棘に激昂して、その夜、初めていずみを一人ぼっちにした。その結果がこれだ。

いずみの失踪を知つたのは、翌朝看護師ににこやかに声を掛けられた時だった。すべてが、いずみの計画だったのだということを知つたのも……

「青洲様、今日からしばらく外泊なんだそうですね。いずみさん、とても嬉しそうでしたよ？」

——何のことだ？

「搾乳した分は冷凍して三日分たっぷりありますから、ご心配なさらず、ゆっくりして来てくださいませ」

いずみには、同日に生まれた新生児に母乳を提供して欲しいと頼んであった。

「青洲様？」

固まる青洲に看護師が訝しげに問いかける。胸騒ぎがする。昨夜のいずみは、かつてないくらい挑戦的で、反抗的で、およそいずみらしくなかった。いずみの病室まで慌てて駆けつけ、ドアを開けて青洲は瞠目した。

クローゼットを開け、ベッド脇のチェストの引き出しを開け、洗面所の化粧台の棚を開けてみた。荷物はおるか、いずみがここに居たのだという気配さえ、きれいさっぱり無くなっていた。

——いずみちゃん……書き置きさえなしなのか？

あまりにもきれいさっぱり何もなくなっていることに、いずみの決心の硬さが表れているようで、青洲は茫然とすることしかできなかった。

——いずみちゃん、どうして？ どうしてこうなるんだよ？

いずみが昨夜言った言葉を思い起こす。

『打てば？ それで青洲さんの気が済むならちつとも構わない。もう、面倒なのはうんざりなのよ。私は自由になりたいの。だってまだ若いんだし、今までやれなかったことだらけだったから、それを一つずつやっていきたいの。だから、もう私には構わないでほしいの』

青洲はソファに脱力したように座ると頭を抱え込んだ。

——いずみちゃん、君はそんなに不自由な思いをしていたのか？

俺と居るのがそんなに窮屈だった？

いずみが失踪してから、青洲は、いずみがいた病室でばんやり過ごすことが多くなった。仕事がない時間は大抵病室のソファでばんやり過ごす。自分の中から何かがごぼつと抜けおちてしまったよう

で、何をするにも気が入らない。

見かねた赤秀がいずみの行方を捜してくれているが、まだ見つかっていなかった。一度だけ、たった一度だけ、銀行で金を下ろしたという情報が入った。すぐにその付近一帯を隈なく捜させたが見つからないという。青洲は苦笑する。銀行で金を下ろせば足がつく。下ろした銀行からはすぐに離れる。それを教えたのは青洲自身だった。

下ろした金額はほんの僅か、どこか遠くに行っている訳でも、誰かと遊び回っている訳でもないようだ。しかし、そのことが、逆に青洲の不安を煽る。本当に自由が欲しくて、自由になって楽しく暮らせているのなら、それで構わない。そう思えるまでに気持ちは鎮まってきた。しかし、いずみに関する些細な情報が青洲を不安にさせる。

ちゃんと食事はできているのだろうか、また雨に打たれてどこかで蹲っているのじゃないだろうか、また世界から零れ落ちそうになって途方に暮れているんじゃないだろうか。

いつものように青洲がいずみの病室でぼんやりと座り込んでいると、ドアがノックされた。返事をする赤秀が入ってきた。その後に佐川が続いて入ってくる。青洲は瞠目して立ちあがった。

「佐川？ おまえ無事だったのか？ 何していたんだよ。心配したぞ」

いつもの佐川ならば、へらへらと笑って皮肉か冗談の一つでも言いそうなものだが、その日の佐川はいつになく生真面目な顔で御心配かけてすみませんと言う。

「佐川？」

いつもと様子が違う佐川に青洲は首を傾げる。

「報告が遅くなっすみませんでした。今、赤秀さんからいずみさんのことを聞きました。僕はもっと早く、こちらに来るべきだった。実を言うと、僕は、いずみさんが吉田さんから離れることはないだ

ろうと高をくくっていたんです。まさか、一人で行動を起こすとは思っていなかった。僕がいずみさんに余計なことを言ってしまったのかもしれない」

青洲に気を許し過ぎていると忠告したことが今になって悔やまれる。あの時は、石守がいずみのお腹にいたなどと知らなかった。だから、てっきり青洲が水子の霊を滅したと思ったのだ。

——いずみに関して言えば、そんなことなど心配する必要さえなかったというのに……

情報不足が事態を悪い方へ悪い方へと導いて行く。佐川は痛みを堪えるような顔で髪の毛を掻きむしりながら続けた。

「今から、島で僕が調べたことを報告します。そのうえで、吉田さんと一緒に行ってもらいたいところがあるので」

「俺に？」

青洲は自分を指差す。佐川は頷いた。

「ええ、そうです。あ、でもその前に……」

佐川は病室の中をぐるりと見回した。目を閉じ、中指で眉間をトントンと軽く叩く。

「ありますね。ここにいます」

そうブツブツ呟きながら、部屋を歩き回り始めた。そんな佐川を見つめて、青洲と赤秀は顔を見合わせて肩をすくめる。

「何があるんだ？」

青洲の問いかけに、佐川はしーっと言って、片手を上げて青洲を制止する。間もなく、佐川は部屋の隅の敷物を剥がし始めた。その下から、何か大きめな四角いものを引っ張り出す。

「いずみのスケッチブックじゃないか！」

佐川が手にしている物を一目見て、青洲は声を上げた。

以前、いずみを喜ばせたくて何が欲しいかと訊いた。そのスケッチブックは、青洲がいずみに買ってやった初めてのものだった。

佐川は、青洲や赤秀にも見えるようにそのスケッチブックのペー

ジを次々に開いて行く。そこにはたくさんの野の花々が描かれていた。

ナズナ、レンゲ、オオイヌノフグリ、スギナ、タンポポ、シロツメクサ、ハハコグサ、ハルジオン……

植物のみならず、まるで、その場全体を紙に閉じ込めているようだ。木の芽流しの雨の匂いや、葉をそよがせる風に至るまで、その植物を取り巻く気配が感じられる。いずみのスケッチを初めて見た赤秀は感嘆の声を上げた。

植物のスケッチが終わったところで、島の四聖獣が描かれていた。青龍、朱雀、白虎、そして玄武が、砕かれた頭と足を復活させて、そこには描かれている。

「すごいな、これは……」

佐川が嘆息する。

「いずみは、どうして玄武を元のままの姿で描くことができたんだろう？ 見たことはないはずだ……誰かに写真でも見せてもらったんだろうか……」

青洲は茫然と呟く。

砕かれる前の玄武を、いずみは見えていないはずだ。しかし、手足の形や、頭の傾け具合や、玄武の目線などすべてが一致していた。

「これを見れば、四聖獣の修復は完璧にできそうだ。このコピーをもらってもいいかな。すぐにでも鳴春に送りたいんだが……」

赤秀も感銘を受けたように口を挟む。

「四聖獣の修復って、もしかして、他の二体にも何かあったんですか？」

佐川が驚いたように問う。佐川が島を出た次の日に、青龍と朱雀は破壊された。そのことを知らせると、佐川は深刻そうな顔で、

「良かった、いずみさんがこれを描いてくれて、本当に良かったですね」と言う。

どうということかと問う赤秀に、佐川が続けた。

「いずみさんは名和家の血筋なんですよ。だから封印ができる。それぞれの四聖獣に宿っている魂が、今、この紙に定着させられているのです。玄武から続くこの一連の四聖獣の破壊は、呪を施されたものだとは僕は推測しています。ただうっかりと壊してしまった、そんなものではないんです。だから玄武、白虎の破壊では、それぞれが守護していた対象であつた薫さん、白舟さんにダメージがあつた。しかし次の青龍と朱雀の破壊では、吉田さんにも赤秀さんにも影響がなかった。それはこの封印があるなしで左右されたのだと思います。僕は今、初めて、名和家の本来の力を確信できた気がします」

佐川は何度も一人頷いた。

そんな馬鹿な話が、と笑う赤秀に、信じられませんか？ と佐川は静かに笑う。

「ちよつと、待ってくださいよ」

そんな二人の間に青洲は割り込んだ。

「いずみちゃんは、鈴守だろ？ 名和の血筋な訳がないじゃないか。彼女の母親が鈴守なんだから。父親は旧姓斎藤だ。仮に名和の姓を変えたのだとしても、名前は、心。四聖獣に何のかかわりもない名前じゃないか？」

今現在、散り散りになった三家が、今を昔のように子どもに名前を付けているとは限らない。しかし、斎藤心氏は生きていれば四十半ばの人間。あの頃の三家と吉田宗家の子どもたちは、生真面目なほどに、四聖獣の伝説を意識した名前を付けられていた。

青洲の言葉に、佐川は心得顔で何度か頷いて、

「そう思うのが普通なんでしょうね」といつものへらへら笑いを作る。

普通と笑われて、青洲はむっとする。

「何か知ってるんなら、さっさと披露しろよ」

不貞腐れた様子の青洲にニヤリと笑って、佐川は続けた。

「そもそも、四聖獣の色や属性は五行説に基づいて定められています」

五行とは、木・火・土・金・水の万物を形成する五つの元素が、順番に生みだされて循環する性質、相生（せいせい）、または相手を滅ぼしていく性質、相剋（そうこく）を持つというものだ。これが、万物は陰と陽から成るという陰陽論と結びついて、陰陽五行説とも呼ばれる。

これを四神にあてはめて、青龍が木、朱雀が火、白虎が金、玄武が水となり、残った土は中央に置かれ、黄龍が麒麟にあてられることが多い。この五大元素は、古代中国ですでに発見されていた五つの惑星とも相関関係にあるとされている。中国では、赤道を周回する星々をも観測し、これを二十八の星宿に分類しており、それを七宿ずつ分けて、やはり東西南北に配置した。これらを踏まえると、青龍は、東方を守護して、季節は春、五行に置いては、木の属性を司るということになるのだ。

「東方七宿は、角（すばし）、亢（あみほし）、？、房（そい）、心（なか）、尾（あしたれ）、箕（み）で、角宿が龍の角を、尾宿が龍の尾を指しており、この七宿をつなげると、龍の姿が浮かび上がるのです。つまり斎藤心氏の名前は、この東方七宿からとったものなんだと思いますよ。恐らく斎藤心氏は、名和家の五番目の子どもだったんだと思います。だからあからさまに青龍に関わる文字を付けられなかった。逆に、それが幸いしてうまく隠れたのかもしれないが……」

佐川の説明に、青洲も赤秀も黙り込む。

「さて、いずみさんの立ち位置が分かったところで、核心のページを見てみましょうか？」

青洲と赤秀は、はっと佐川に視線を送る。

「核心……」

呆然と呟く青洲に、佐川は軽く肯く。

「そうですよ。もうお分かりだと思いますが、このスケッチブックは名和家が施した封印なんです。当然、その力に気づきたいはずみさんがすることは、一つです。復讐の相手を封印すること。ほら」

佐川はスケッチの最終ページをめくる。途端に、青洲と赤秀の口から嘆息が漏れた。

「華陽……」

青洲が苦しげに眼を閉じた。

「あの日、いずみちゃんの前に現れたのは……」

青洲は、いずみに元妻華陽のことを、まだ話せていなかった。青洲自身、華陽に対して未だに心の整理がついていなかったし、本音を言えば、許せていなかった。憎んでいた。そんな感情をいずみに知られたくなくて、話していなかった。

青洲は考える、もし自分が華陽と薫の事件のことを話して、青洲の気持ちを知っていたら、いずみはもつと華陽に対して警戒したのではないか、容易く封印の絵の在り処を教えることなどなかったのではないか、あんな事件に巻き込まれずに済んだのではなかったか……青洲は呻く。

「そうです。彼女がいずみさんと、そのお腹の子を害し、名和家の封印であつた絵を切り裂いたんです。そして中に封印されていたモノを解放した……」

「あの封印は何だったんだ？ 華陽は何を何の為に解放した？」

佐川はパタリとスケッチブックを閉じる。

「それを説明するのは、少し長い話になりそうです。可能なら、もう一人の御兄弟の白舟さんもいっしょに聞かれることをお勧めしますが……」

生真面目な様子で提案する佐川に、青洲は頷いた。

遠くで、微かに春雷が轟いて、窓から湿気を帯びた風が、ざあつと吹きこんだ。

第十二話 水は低きに流る(1) (後書き)

参考図書 : 世界の「神獣・モンスター」がよくわかる本 東ゆみ
こ監修 造事務所編著

第十二話 水は低きに流る(2)

いずみが吉田を出てから、真っ先にしたことは長い髪を切ることだった。目立ち過ぎるとお姉ちゃんが言うのだ。

いずみは、封印の場所で倒れて以来、この世に生を受けられなかったいずみの兄妹たちと再び交信できるようになっていた。いつもできるわけではない。いずみが眠りに落ちる瞬間もしくは眠りから目覚める瞬間の僅かな時間、三人と意識を交感することができる。初めは、いずみの決意を知って思いとどまらせようとしていた兄妹たちだったが、日を追うごとに、いずみの心に寄り添うように力を貸してくれるようになった。

三人との交感はこの風に始まった。

『いず……』

『いずみ……』

——誰？

『いずみ、どうしておじさんの傍を離れたの？ 離れちゃいけなかったのに……』

——お姉ちゃん？ どうして？ どうして……居るの？

『そんなこと、今はどうでもいいわ』

『いずみ、人を呪わば穴二つという言葉を知っているか？』

——お兄ちゃん……

『いずみ、あんなやつに仕返すだけ無駄だぜ？ おまえが掛けた封印で、もう随分苦しんでるはずなんだから、もうほっとけよ。だって、マメ太は……』

『ダメだ、やめろ。それは俺たちが言っていることじゃない。吉田が隠している以上、それは吉田が語ることだ』

——なに？ 青洲さんは何かを隠しているの？ 教えて、チイお兄ちゃん。

『……ごめん、言えねー』

『いずみ、少し頭を冷やさない。あなた一人で何ができるというの？ あなたが華陽を手に掛けて、マメ太が喜ぶと思うの？』

——マメ太を喜ばせる為じゃない。華陽さんを罰する為でもないよ。
『じゃあ、何の為なんだ？』

——苦しいの。私は自分の気持ちを収めることができない。自分の気持ちを鎮めたいの。だから、どうなるかなんて分からない。華陽さんを手に掛けると決まった訳でもない。とにかく、私は自分が施してしまったあの封印をどうにかしなくちゃいけない。その為には、私はもう一度、華陽さんに会わなきゃならない。どうするかは、その時に決めるよ。

施した封印を手掛かりに、華陽の居場所を特定した。いずみは、自分が施した封印を辿って、その場所まで行くことができるのだ。それは磁力や重力などの目に見えぬ力に似ていた。

例えば、ここに一つの棒磁石が転がっていると。そこには何も無いように見えるが、その場一帯に砂鉄をふりかけると、砂鉄は両極を中心に無数の線を描きだす。封印はそれに似ていた。吉田家に置いてきた封印のスケッチブックから、封印を施した華陽まで、細い細い線が続いている。封印の場所がそれぞれ磁石の両極の様な状態になっているので、より線の密度の濃い方を目指すことによって、その場所を特定することができる。封印の線は、いずみには気配として伝わってくる。

辿りついた屋敷の表札を確認した日の夜の事だ。眠りに落ちる寸前、頭の中で声が響いた。

『志木家には、いずれ来なきゃならないだろうとは思っていたんだ』

——どうして？

『いずみ、私たちはね、初め母さんに憑いていたの。だって私たち母さんの子供なんだもの、当然よね？ でも、ある日追い出されたのよ。母さんに性質の悪い霊がたくさん憑くようになって、私たちは居られなくなったの』

『そうだぞ。志木聖はひでーやつなんだ。母さんに色々悪い奴を吹きこんでさあ』

——志木聖？

『志木聖は母さんが夜働いていた時の客だったんだ』

『母さんが心配だぜ。あんな奴らに憑かれちまってよお。どうなったんだか……』

『たぶん、母さんはもうこの世にはいないわよ』

三人は声を上げて泣き始めた。

——あの……ねえ、泣かないで？ まだ決まった訳じゃないんだし。ところで、父さんには憑かなかったの？

『父さんには憑けなかった』

人の魂には色々なタイプがある。簡単に憑依できる人、できない人、一時的にしか憑依できない人などがあるらしい。憑依できる人は、所謂、霊感があると言われる人なんだと思うと長兄は言った。父親は、手がかりも足掛かりもなくて、つまり憑けない人だったというのだ。

『ホワイトボードにマーカーで書いても、擦ればすぐにとれちゃうだろ？ 父さんはそんな感じだったんだ』

——それで私に憑いたの？

『本当は、一時避難的に憑いたはずだったんだ。ところが、おまえの魂はその三つのタイプともまた違ってた』

——ちがうの？

『実は、俺たちおまえから離れたくても、離れられないんだ。何かの力でぎゅーっと繋ぎとめられているみたいで……よく分からない

んだ』

それで水子供養をしてもらった時も、結局、あちら側に行くことができなかったのだと兄妹たちは口々にそう言った。

華陽の居場所を把握していながら、いずみが志木家にすぐに乗りこまなかったのには訳があった。

いずみは吉田を出る時、自分が持っていた荷物の一切合財を病院のゴミ箱に捨てて来た。冬樹からもらったミニボストンも、靴も、石守家で使っていたエプロンも全部まとめて袋に入れて捨てて来たのだ。青洲から買ってもらった色鉛筆はさすがに迷ったが、ほとんどの色が持つのも難しいくらい小さくなっていたので、それも捨てた。スケッチブックは捨てるわけにはいかないので、病室の敷物の下に隠してきた。

すべてが終わってしまえば、見つかつてても構わなかったが、できることなら自分と吉田家の接点を断ち切っておきたかったのだ。捨てたゴミが完全に処分されるまでは事を起こせない。インターネットカフェやまんが喫茶などで時間を潰す。公園の遊具の下で一夜を明かしたこともあった。

春とはいえ、夜風は体にしみる。ちんまりと縮こまってウトウトしていると、青洲が迎えに来てくれた夢を何度も見た。

――馬鹿だな、私。青洲さんが私を心配してくれることなんて、もう無いのに……

涙が零れ落ちる。

――ああ、本当だ。本当に、人を呪えば穴二つなんだね。

『今なら、まだ、戻って謝ればおじさんは許してくれると思うぞ？』

――もうダメだよ。もう引けないの。私自身が封印の力に引きずられてる。華陽さんに会わずにはいられない。そして会ってしまえば、私は何をするか分からない。どうしたらいいのか……分からないの。『いずみ……何があっても、どんなことになっても、私たちはあなたの味方だから……』

『そつだぞ』

兄妹たちは口々にそう言った。

——ありがとう。お姉ちゃん、お兄ちゃんたち……

——まただ……

秋子は握っていたフォークを持ったまま、外の気配に耳をそばだてる。

既に食事を摂ることすら難しくなった志木聖は、病室となった自室で一日中点滴を打たれていたし、相変わらず具合の悪い華陽も食事は自室で摂るので、大抵の食事を一人か、もしくは司と一緒に摂る。この日は、珍しく早く帰ってきていた司と一緒に食卓についていた。

「シユウ？　どうかしたのか？」

司が探るような視線を秋子に向ける。最近の司は秋子のことをこう呼ぶ。大旦那である志木聖とは既に離婚しているので、当然秋子は司の義母ではない。以前のようにワザとらしく『お義母さん』と呼ばれるのに比べれば、随分ましだと秋子は思っている。

「いえ、何でもありません」

秋子は司の問いかけに小さく首を振って、食事を続ける。

——お姉ちゃん？　まさかね……

昔、まだ秋子が小学生だった頃、いけないと言われていたのに良く姉の所へ会いに行った。逆に、姉も秋子の所に会いに来てくれた。それぞれ別の家に養子に出されていたけれど、小学生の足で歩いて会いに行けない距離ではなかった。だから、姉が交通事故で亡くなるまでは、二人で示し合わせて、中間にある公園や川の岸边でよく待ち合わせをしたものだ。

公園のブランコに座って姉を待ちながら、時々、秋子は目を閉じて耳をそばだてる。姉が近づくと、気配で分かるのだ。何かオレンジ色の温かいものが近づいて来る気配。姉の気配はいつも陽気で暖かくて秋子をウキウキさせる。

それに似た気配を、最近、ここ志木家で感じるのだ。初めて感じたのは、一週間ほど前のことだった。ただ、姉と違うところは、その気配が濃密な悲しみを纏っているということだった。胸が痛くなるほどの悲しみ。

——お姉ちゃんに似ている人がいるのかもしれない。私に気配を感じ取らせるような誰かが……

そう考えると、少し嬉しくなつて、秋子はその人の悲しみが癒えることを祈りつつも、その人の気配を捜すことを楽しみにするようになっていた。

「シュウ、後で俺の部屋に来てくれないか」

無言で食事に集中しているふりをしていた秋子は、司の言葉にはつと顔を上げる。志木家に嫁に来て随分経つが、司の部屋に呼び出されたことは無かった。いつでも司が秋子の部屋に来る。

「……あの……どうして？」

動揺した視線が宙をさまよう。

「話があるんだ」

「……話しなら、今、ここで伺います」

用心深く返答する秋子に、司は苦笑する。

「俺の部屋で話す。もし君が来ないのなら、ヒルコを迎えに行かせる。ヒルコの方が君よりもずっと色っぽく対応してくれるから、俺はそれでも全然構わない。それが嫌なら、自分で来なさい」

最近の司は、秋子のことをあからさまに子供扱いする。いや、厳密に言えば、子ども扱いではなく、所有物扱いと言った方が近いかもしれない、あるいは愛玩動物とか……

秋子は小さくため息をついた。

秋子は、司の部屋の前を何度も往つたり来たりしていた。

司の態度が、がらりと変わったのは聖が倒れてからだ。

変わったと言っても、しかしそれは、ほんの些細なことだ。簡単に言えば、秋子に対する態度が変わったのだ。皮肉も言わないし、

辛らつな言葉もぶつけない。無理やりに抱こうとしないし、時々秋子を見つめる視線が妙に優しげだったりする。しかし、そのことが逆に秋子を不安にさせる。

――何が司をそうさせているのか。

秋子の脳裏に、以前感じた朱の光球のイメージが浮かぶ。

――あれは、司だったのだろうか……。

考えてみれば、そもそも、司が秋子に辛らつな言葉をぶつけるのは、聖が近くに居た時ではなかったか……

ふと、思いついて考え込んでいると、ドアが中から開いた。

「いつまで、そこでウロついているつもりだ？」

不機嫌そうな口調に、秋子は首を竦めた。

司の部屋は驚くほど物が無い。パソコンが乗ったデスクと、ベッド、クローゼットがあるきりだ。初めて入った秋子はキョトキョトと辺りを見回す。そんな秋子を気にする様子もなく、司はデスクの引き出しから長四角の木箱を取り出した。

「これを身につけておくと良い」

唐突に差し出された木箱に秋子はたじろぐ。恐る恐る受け取って、箱の蓋を開けようとしたところで制止された。

「ここでは開けないでくれ。ヒルコが嫌がる」

「え？」

「タリスマンだ。クオーツにセーマンとドーマンを刻ませた。ヒルコはそんなもの役に立たないというんだ。だったらどうして嫌がるのかと訊いたんだが、それには返答がない」

司はクスクス笑う。一方、秋子は眉間にしわを寄せる。

――タリスマン？ セーマン？ ドーマン？ なにそれ。やっぱり司の言葉はほぼ呪文だ。

「……さつき、気配を感じたんだろう？」

司の探るような瞳に、秋子のはつと顔を上げる。

「名和家の人間は、お互いに存在を気配で感じ取れるらしいな」

「……そうなんですか？」

きょとんと問い返す秋子に、司は苦笑する。

「本当に何も知らないんだ」

「名和の両親は、名和家の事をすごく怖がっていたんです。名和家は呪われてるって、口に出すのも嫌な様子で……。父は、できるなら婿養子になって姓を変えたかったらしいんです。でも事情があつてできなかったって、それだけを何度も口にしました」

秋子は木箱を指でなぞりながらぼつりぼつりと説明する。

「そうか……。まもなく、君の同胞がここにやってくる。そうしたら、否応なしに、俺はその人と対峙しなければならない。ターゲットは華陽だが、父が倒れた今、俺が志木家を守らなければならないから。仮にその人が俺を倒した場合、後の事をシュウ、君に頼みたい。詳しいことは、野上に話してある。そして、もし、その人が倒れた場合、君は速やかに志木家から退避しろ」

「え？」

後を頼むと言われてたじろいでいた秋子は、更に驚愕して瞠目する。

「できれば、佐藤の実家以外に避難しろ。あの親父さんの元では避難にならないだろうからな」

司は眉間にしわを寄せる。

「でも……」

志木家を出てしまえば、秋子には行く当てがない。そもそも司が倒れず、その人が倒れた場合に、どうして自分が出て行かなければならないのか。どうしてその人と、そんな事態に陥るのか。話しあう余地はないのか。

「行く当てが、どうしても見つからない時は、吉田グループの吉田赤秀に匿ってもらうのがいいかもしれない。名和家だと言えば、それなりの対応してくれるはずだ」

司はデスクの引き出しをガサガサと探っていたが、やがて一枚の名刺を取り出した。吉田グループと言えば、秋子が美大に行く時に

出資してくれた企業だ。

「どうして……どうして吉田グループが私なんかを匿うんですか？」
差し出された名刺を受取らずに、秋子は小さく首を振りながら後ずさる。

「君が名和の人間だからだ」

司は更に一步踏み出して、名刺を秋子に握らせる。

「私は……私は、どうしてここに居てはいけないんですか？ おっしゃる通り、私には行く当てがありません。それに、もし、私で何か役に立つことがあれば、何でもします。だから……」

姉に似た気配を持つその人と、闘うことなく話しあう余地はないのか。自分なら何か役に立つのではないか。秋子は祈るような気持ちで言葉を紡ぐ。

秋子がそう言った瞬間、司の表情が一変した。冷たく嘲笑うようなその瞳。拒絶の瞳。

「思いあがらないでください。貴女にできることなど何一つありませんよ。今までだってそうだったでしょう？ 貴女にできることは夜の相手くらいだ。それももう飽きたんでね。この先、俺が志木家を継いだあかつきには、貴女に出て行つて欲しいんです。邪魔なんですよ。それだけです」

冷徹な瞳には取りつく島もなく、触れた相手を容赦なく傷つける昏い笑み。

——これがいつもの司だ。分かっていたはずなのに、なのにどうしてこつも胸が塞がったような気持ちになつてしまうのか……

秋子は唇をかむ。

「……」

懸命に目を見開いていたのは、驚いたからじゃない。胸の奥からこみ上げてくる熱い感情が零れ落ちないようにする為だ。

秋子は、渡されたタリスマンも名刺も手から滑り落ちたのに気づかぬ様子で、無言で部屋を逃げるように立ち去った。

タリスマン お守り

セーマン 星型の印（五芒星）

ドーマン 格子状の印（九字紋：横五本縦四本の線からなる格子形）

第十二話 水は低きに流る（3）

白舟の仕事場である一般病棟の一室に、青洲、赤秀、白舟、そして佐川が集まっていた。

「まず初めに、この写真を見てもらえますか？」

佐川は青洲に一枚の写真を差し出した。

写真にはいずみが写っている。海をバックに青白い顔をして蹲って座っていた。島の西、白虎の祠を見に行った時のスナップ写真のようだ。

青洲は痛々しげにいずみを見つめる。呼吸困難になって紫色になってしまった唇に、ぎこちなく水を飲ませたのが随分遠くに思える。青洲は唇をかんだ。

——またこんな顔で、どこかに蹲っていなければ良いが……。

「どうです？ ちょっと凄いでしょ？」

佐川が深刻な顔で、青洲に問いかける。

「凄い？ まあ、あんなことがあった後だからな、顔色が悪いのは当たり前だろう？ こんな写真いつの間に撮ったんだ？」

首を傾げる青洲を、一瞬あつけにとられたように目を見張って見つめると、佐川は苦笑する。

「まったくもう、吉田さんは……いずみさんばかり見てないでくださいよ。そうじゃなくて……」

佐川は青洲が見ている写真の背景の海を指差す。

「海を良く見てください」

青洲は怪訝そうに佐川が指さした背景の海に目を凝らす。

いずみの長い髪が風になびいているその後ろ、暗青色に広がる海の表面。海面に何か白いものが浮遊している。否、浮遊しているのではない。それこそ数え切れないほどの白い手が海面から突き出しているのだ。その夥しい数。

青洲はぐくりと唾を呑みこみ、次の瞬間、

「うわああ」と叫んで、隣の赤秀に放り渡す。

渡された赤秀も、背景の海を凝視してから、

「うわっ」と叫んで、隣の白舟に放り渡した。

白舟もまた怪訝そうに眉根を寄せながら、写真を一目見るなり、

「わぁ」と叫んで、佐川に放り渡した。

三兄弟の一連の動作を面白そうに見ていた佐川は、回ってきた写真を更に青洲に放り渡す。

「おいー、なんでまた回すんだよっ」

青洲は無然とした表情で、写真を再び佐川に戻す。

「何周くらい回るかなと思って……」

へらへら笑う佐川に、三兄弟の無然とした目が集中する。

「冗談ですよ。そんなに睨まないでください」

佐川は首を竦めた。

「この写真は一体何なんだ？」

青洲は眉間にしわを寄せて佐川に詰め寄る。

「この写真は、所謂世間で言われるところの心靈写真なんじゃない
ね」

佐川は肩を竦めた。

佐川の説明によると、あの島が面している西の海は、地形なのか
気脈なのか、はたまた海流によるものなのか、所謂浮遊霊が集まり
やすい場所なのだという。

「一太さんに聞いたのですが、溺死体が流れ着くのは圧倒的に西の
海が多いのだとか。恐らくそれは、今に始まったことではなく、四
聖獣の伝承が生まれた時代の大昔からそうなんだと思いますよ。そ
こで、島を守る為に、島の西、西海に向かって神社が造られた。そ
れが四鬼神社だったのです」

「島の西に神社があつたなんて聞いたことがない。しかも、四鬼神
社なんて……」

青洲は茫然と呟く。

「確かに四鬼神社の記述は、今現在、島の鎮守である吉田神社の蔵書にはありませんでした。ただ、昔から伝わっている志木家の史書には、あの島の事と四鬼神社の記述があるのですよ。僕は、それを知っていました」

「なんだって？ 何故おまえが志木家の史書などを知っているんだ」
赤秀が佐川に詰め寄る。

「赤秀、落ち着けよ。佐川は志木家の親戚筋の人間なんだ。志木家の史書を知っていたっておかしくは無い」

青洲が穏やかに赤秀を押しとどめる。

「吉田さん、知っていたんですか？」

佐川は驚いて青洲を見る。

「ああ。知ったのは最近だけだな。いずみちゃんのルーツをずっと調べさせていたから……」

青洲は少し困ったように、赤秀と佐川を交互に見つめた。赤秀は惘然とした様子で、佐川と青洲を睨みつける。

「……それでも、僕の事を心配してくれていたんですか？」

軽く驚いた様子の佐川に苦笑すると、

「そんなの、当然だろう？ いずみちゃんだって、随分心配していたんだぞ」

と青洲は静かに言った。

「……そうですか」

佐川はいずみの名を聞くと、悲しげに少し眉間にしわを寄せてから小さく笑った。

「これが海中で見つけた四鬼神社の鳥居です。一太さんに撮ってもらったんですよ」

青い海底に横たわる石の鳥居。額塚には『四鬼神社』の文字。一体いつからここにこうして沈んでいたのか。青洲も赤秀も白秋も、息をのんで写真を食い入るように見つめる。

「鳥居が沈んだのは、恐らく何かしらの天変地異なんだと思われま

す。それかなり古い時代のことでしょう。そのような神社があったことすら、なんの記録もないですからね」

「しかし……飯に天変地異で神社が鳥居ごと海に沈んだとして、どうしてその後、新たに建立されなかったんだ？ 飯にも神社だろう？」

赤秀が呆然と呟く。

「あくまでも僕の推測ですが、その頃には既に吉田神社が鎮守として、あの島に定着していたんだと思います」

「つまり、吉田の方が後から来て、乗っ取ったと言いたいのか？」

惘然とした様子の赤秀に、佐川は苦笑する。

「みなさんは、『出雲の国譲り』という言葉聞いたことがありませんか？ 古事記や日本書紀に出てくる神話なんですけど」

神代の昔、地上界の国造りを行つたのは大国主命と言われる神だ

オオクニヌシノミコト

った。大国主命は、天上界から追放されたスサノヲノミコトの子孫

にあたる。その大国主命は出雲にて国造りを進める。ところが、国

造りを進めてきた大国主命のもとに、ある時、天照大神が支配する

アマテラスオホミカミ

天の高天原から神々が遣わされる。神々は、大国主に「地上世界を

タカマガハラ

天の神々に譲れ」と迫るのだ。大国主命は国を譲ることになる。

これが『出雲の国譲り』であり、『天孫降臨』と言われる神話の概略だ。

「日本の記紀の中には、神話に限らず、歴史としてこのような国譲りの話が他にもあるのです。例えば、神武東征の際の饒速日です。

ニギハヤヒ

饒速日は、神武天皇が九州から来る前に大和を支配していたのですが、神武に大和の支配を譲ります。これも明らかに国譲りでしょう？ まあ、もつとも神武天皇も史実ではないと言われていますけどね……」

佐川は肩を竦めた。

「つまり、それらの話と同様に、元々いた志木を吉田が追い出した

と言っ訳か？」

赤秀は眉間にしわを寄せる。

「僕は追い出したとか、乗っ取ったとか一言も言っていないませんよ？
譲った話をしただけです……」

「譲ったと言えば聞こえはいいが、要はそう言うことなのだろう？」
無然とする赤秀に、佐川は苦笑する。

「そんなこと誰にも分かる訳がないじゃないですか。分かったところでどうなるものでもなし……僕が言えるのは、かつて四鬼神社が存在した。それだけです」

「……それで？」

島の西に沈む古い鳥居。汀目指して打ち寄せる夥しい白い手。

青洲は不安げに先を促した。

「歴史を辿ってみると、時の政権にまつろわぬモノ、まつろわぬ癖に力を持つ者は、ことごとく排除されるのが定石です。あるものは神として祀りあげられ、あるものは鬼として恐れられ、あるものは作り話として神話の中に封印される。恐らく、四鬼とは、そう言う存在だったんだと思います」

「……」

赤秀が不快そうに、眉間の縦じわを更に深くする。

「気にする必要はありません。それが人間の歴史つてもんです。勝ち残ったものが自分の都合の良いようにしていくのが自然でしょう？　ただそこで問題なのは、四鬼が持っていた力です。そもそも四鬼は、地勢的に問題があつたあの島の守り神であつたはずなのです。僕が思うに、四鬼家は太古の昔、シャーマニズムが崇拜されていた頃の原始的な宗教を司っていた家なんじゃないか思うのですよ。そこで、出てくるのがあの四聖獣の伝承です」

その昔、凶なるもの、西海より流れ着きし

悪しき心満ち溢れ、妬みあい、憎み合い、奪い合った

四聖獣のもとに集まりし三つの神器

すなわち、鈴、縄、石もて

そのものを鎮め、縛り、封印せし、と

「今ではただ単に、伝説とかお伽話だと信じられていますが、これは実際に島で起こったことなんじゃないかと僕は考えているんです。しかも、この伝承にある四聖獣とは、当時の島の守り神、四鬼家のことではなかったかと……」

佐川の言葉に、青洲も赤秀も白舟も黙りこむ。

三人が沈黙する中、佐川は続けた。

「そして、ある時、この伝承と志木家の史書を知ったある人物が、それを探る為に島にやってきたのです。それが三十三年前の事です」
「島にやってきた歴史学者か！」

青洲が声を張り上げた。

「吉田さんも聞きましたか。そのとおり、彼は歴史学者でした。そして志木家史書の記述にあったとおり、禁足地であった神社の裏山から、ある封印を掘り当てたのです。当初、彼は伝説の金属、ヒヒイロカネではないかと思ったようですが、それはそんなものじゃなかった。輝いて見えたのは、それだけ強い封印を施されていたからだったんです。そして、調査の為に、僅かばかりの破片を削り採ったところで封印は解かれた。その歴史学者は、その日研究室で死んでいるところを発見されています。奇しくも、封印を施したのも四鬼家、封印を解除したのも志木家という皮肉な結果になってしまった訳です」

「志木家が……」

赤秀が茫然と呟く。

「佐川……おまえ、どうしてそんなにその歴史学者を詳しく知ってるんだ？」

青洲も茫然として問いかける。

「僕は……その歴史学者、志木仁の孫に当たるんです」

佐川は苦いものを飲み込むような表情で言った。

「志木仁……なんてことだ、志木仁が三十三年前に島に来た歴史学者だったなんて……」

青洲は呻く。

「その様子だと、いずみさんルートから、既に志木仁のことをご存じだったようですね」

青洲は中川に、いずみと鈴守家とのつながりを調べさせていた。いずみの母、鈴森秋乃は鈴守青子の娘であり、鈴守青子は志木仁の愛人だった。つまり、いずみには、鈴守と名和と志木の血が流れていることになる。それを知った時、青洲は驚愕した。そして更に、志木仁の正体だ。

「ということは……いずみさんと佐川さんは従兄妹同士ということになるんですね？」

それまで静かに黙って聞いていた白舟が口を挟む。

「そう言うことになりますね」

佐川は小さく笑んでから、続けた。

「僕が高校生の時に、祖母の家の倉庫で祖父の日記を見つけたんです。日記には島に行く前からの経緯と、着いてから、そして研究室に戻った日までのことが詳細に記述されていました」

佐川の祖母は、祖父の死後、実家である佐川に戻っていたが、祖父の残した遺品をかなり状態良く残していた。そして、佐川が高校生になったある日、祖母は、佐川にそれを自由に見て良いと言ったのだった。

佐川には他の兄弟も、また伯母の所にも数人従兄妹がいたが、祖母は何故か佐川だけに遺品を仕舞ってある部屋のカギを渡した。

祖母によると、佐川は祖父に一番良く似ているらしい。顔とか性格とか、歴史好きなところとか。全くもって目障りだと、祖母は佐川を見るたびに文句を言った。しかし笑ってしまうのは、その癖、祖母は何事かある度に、佐川を呼びつけるのだ。用事を言いつける

のは大抵佐川だったし、自分の誕生日に呼びつけるのも佐川だったし、処分品だと言いつつ何かと物を渡すのも佐川だった。祖母は、祖父とは全くの政略結婚で、恋人がいたのに引き離されたと、しょっちゅう佐川に愚痴った。佐川を祖父に見立てて、言えなかった文句を言っていたのかもしれない。佐川は当時、まだ小学生だったのだが……。佐川は苦笑する。

「祖父の不幸だったところは、祖母ときちんと向き合えなかったこと、向き合う前に、鈴守青子さんに出会ってしまったことなんじゃないかと僕は思っています」

志木家の史書を知る歴史学者の祖父と、島の伝承を知っていた鈴守青子、まるで何かの悪い悪戯のように二人は出会ってしまったのだ。そして封印は破られた。

「では、あの『野いちご』の抽象画に封印されていたものは……その時解放されたものということなのか？」

赤秀は眉間にしわを寄せる。

「最初の封印が破られて、中に閉じ込められていたモノは、まず祖父に憑依したんだと思います。しかし、祖父はそれを受け入れられるだけの器をたぶん持っていなかった。祖父を離れたそのモノが次にターゲットに選んだのが、志木家の長兄、志木聖だったんです」

「そう言えば、志木家が企業を立ち上げたのが、三十三年前くらいじゃなかったか？」

青洲が首をひねる。

「たぶん、封印が解かれたことと関係があると思いますよ」

佐川が同意する。

志木家の力は、シャーマン体質。憑依されれば、後はそれを制御できるかどうかにかかってくる。制御さえできれば、これ以上の強い味方はない。陰陽師が式神を操るようなものだ。起業するのだから難しくなかっただろう。問題は、常に制御し続けなければならな

いということだ。制御できなくなれば、逆に使役される、操られる、もしくは、暴走する。

「伝承に従えば、封印されていたのは、西海より辿りつきし凶なるものです。憑依された志木聖には、悪しき心、つまり、妬み、憎み、奪う気持ちが満ち溢れたはずです」

志木家は乗っ取り屋だという、その噂。青洲は深いため息をつく。――法に則っているだけ、まだましなのかもしれない。他に何をしてきたかは知らないが、少なくとも青洲が知る志木聖は、殺人鬼でも強盗でも詐欺師でもなさそうだった。

「鈴守、名和、石守の三家で不審死が相次いだのは、志木聖が制御できなかった霊が暴走したからだと僕は考えています」

しかし制御できなかった霊たちが再び解放され、結果、志木聖は昏倒した。志木聖に制御できなかったものが、司に制御できるかと問われれば、佐川には、分らないというしかない。だから、今この時こそ、三つの神器が必要だというのに、肝心の石守が行方知れずだ。佐川は不安を隠せない。

「かつて、その暴走を止める為に、いずみさんのお父さん、名和心氏が、あの『野いちご』の封印を施したんです。もしかしたら、いずみさんも手伝っていたかもしれせん。いずみさんのあのスケッチブックの封印は、今、力に気づいて初めて施した封印という訳ではなさそうでしたからね。少なくとも、父親の封印を目の当たりにしていたんだと思います。いずみさんなら、もしかしたら、霊の暴走を止めることができるのかもしれませんが。しかし、いずみさんもまた、志木家の血筋。シャーマン体質を受け継いでいる可能性があるのです」

佐川の指摘に、青洲はごくりと唾を飲み込んだ。

その時、突然、白舟の胸ポケットから呼び出し音が響いた。

「はい、え？ 分かりました。すぐに行きます」

深刻な顔で黙り込む三人を残して、白舟はあたふたと部屋を後にした。

「で、俺は何処に行けはいいんだ？」

深刻な顔で、問いかける青洲に佐川がニヤリと笑う。

「まずは、石守へ。石守冬樹を吉田さんの力で引っ張り出して欲しいんです」

第十二話 水は低きに流る（4）

屋外は眩しい光と蝉しぐれ、しかし、部屋の中はしんとした重い空気が張り詰めていた。

先ほど、強かに叩かれた頬を押えながら、司は、その幼げな年格好に似合わないほどの憎悪に満ちた瞳で、自分の前に立ちはだかる父親を睨み返す。

原因は、ほんの些細なことだった。当時小学校で流行っていたスケートボードを司が欲しがった、それだけのことだ。

「司、おまえが欲しいと思うものなど、何一つ手に入らないのだということがまだ分らないか？」

志木聖が意地悪く笑む。

司は、幼いころから必要なものには不自由をしたことがなかったが、欲しいと口に出したものは何一つ与えられないという奇妙な躰をされて育った。氣に染まぬ本や靴や旧式のボードゲームはふんだんに買い与えられていたが、同級生が得意げに見せびらかすような最新式のゲーム機も漫画も流行りの運動靴でさえ、彼が欲しいと口に出したものは一切買い与えられなかった。それが聖の教育方針だったのだ。

「どうして俺だけ？ 姉さんは好きな物をなんでも買ってもらってるじゃないかっ」

司は父親を睨みつけたまま声を張り上げる。

「昌代とおまえは別人だ。人が違えば対応もちがう。おまえは母と野上に同じ対応をするのか？」

今ではメイド長となっている野上だが、当時はまだ入りたての新人メイドだった。

「あんなの母親じゃないっ。野上の方がずっとマシだっ」

司は憎々しげに聖を睨み返す。

「そうだとも、おまえの母親は正子じゃない。素性の良くない一介のメイドだ。おまえのその物覚えの悪い頭は大方、母譲りなのだろう」

父の非情なまでの嘲笑に、当時まだ小学生だった司はギリツと奥歯を噛みしめた。

——欲しいものは口に出してはいけない。本当に欲しいものは、欲しくないふりをする。欲しいものを手に入れる為には、策を練る必要があるのだ。

それが、その躰から司が学んだことだった。

やがて司は、欲しがらずに欲しいものを手に入れるという技術を身につけていったが、そうやって手に入れた物はすぐに飽きた。頭を使って物を手に入れること自体がゲーム感覚になっていつて、しまいには、それが本当に欲しかったのかどうかさえ分からなくなる。それにも飽きてしまうと、司の中の欲しいと思う感覚自体が、どこか曖昧で希薄なものになっていった。

それが、依り代として必要な資質なのだと言うことに気づかされたのは、高校に入った年だった。依り代として身に霊が憑依すると、霊はさまざまな誘惑を仕掛けてくる。

『ツカサ、ナニがホシイ？』

『司、何をシタイ？』

『誰かキに入らないヤツをコロシテやろうか？』

その望みを一旦、口に出したが最後、霊たちは手段を選ばずそれを遂行した。そして彼らは、その見返りとして司の魂を食む。汚れた仕事をさせれば、その分、魂は闇色に浸蝕されていく。望みの内容が過酷であればあるだけ魂も目減りする。完全に闇色に染まってしまうえば、後は霊達の操り人形になるしかない。だから、本当に必要な物以外は欲しいと口にしないこと、もしくはいつそ、欲しいという感覚を無くしてしまうことが必要だったのだ。

それは依り代となった司が、闇に呑み込まれず、人として在り続ける為に必要な資質だったのだ。

このように表面的にはストイックな生き方を強いられてきた司だったが、一つだけ、どうしても表立って欲しがることを止められなかったものがあつた。

司は聖の枕元に佇む。

――あれほど厳しく叩きこまれたはずなのに、あなたの教育は肝心なところで役に立ちませんでしたよ、お父さん。あなたはご存じないかもしれませんが……

司は独り苦笑する。

聖は一旦意識を回復して屋敷に戻ってきたものの、戻ってからはその大半を意識がないまま昏睡していた。心拍モニターの規則正しい音と、時折自動的に計る血圧計の空気圧音が、この部屋が病室であることを主張している。

土気色の顔に刻まれた皺は深く、これまでの父親の苦闘を物語っているようで、司は顔を顰める。

父が死ねば、それまで父を依り代としていた霊たちは、次の依り代に殺到するだろう。この家だけに限れば、それ継承するのは十中八九、司だ。

自分はそれに耐えうるのか。もし、自分が耐えられなかった場合、どうなるのか。考えても仕方がないことだが、考えることを止められない。

――どうして、俺なんだろう。どうして、そんなことの為に俺は存在しなきゃならないんだ。

司はそう考えてから、首を振りながら小さくため息をついた。

自分の出生の理由や、理由も知らないまま受けた厳しすぎる躰を責めるには、もはや父親は摩耗しすぎ、疲弊しすぎていた。父親の立場になって考えれば、恐らく考え得る最善の策をとったのだろう。

あれほどの靈魂が解放された時、どのようなことになるのか想像がつかない。世の混乱を防ぐために、志木家には依り代としての跡継ぎが必要だったのだ。

司は部屋の天井に視線を移す。聖のベッドの上の中空、天井よりも少し低い場所に、昏く冷たい気が凝っているのが感じられる。それは、雨垂れが下に落ちるのとは逆に、聖の体から少しずつ上方に上っていく邪気の気溜りだった。その気溜りは、まだ、かろうじて聖に繋ぎとめられていたが、既に次に依り代となる体を求めて蠢いている。

——志木家は、どうしてこのようなことになってしまったのか……司は深いため息をつく、聖の部屋を後にした。

満月が煌々と照らす廊下に佇み、司は耳をそばだてる。寝静まった屋敷の中は不気味なほどに静まり返っている。

佐川が報告に来てから一週間が経っていた。父、聖は日に日に衰弱していき、華陽は一向に回復する様子がなく、鈴森いずみも現れない。ただ、秋子が気配に耳を澄ます仕草が頻発しているところを見ると、恐らく鈴森いずみが近くまで来ているのだろう。

——様子を窺っているのか、躊躇っているのか……彼女がやって来たらどうなるというのか……

司は屋敷内を一回りすると、秋子の部屋の前で立ち止まった。

手には、先日秋子が、司の部屋に落として行ったタリスマンと吉田赤秀の名刺がある。

「困った人だ……」

司は小さく笑う。

「ヒルコ、鍵をあける」

部屋の奥で衣擦れの音がして、部屋の鍵がカチャリと開錠される。そこには葡萄酒色の絹地の夜着に包まれた秋子が、感情の見えないぼんやりとした表情で佇んでいた。

「ツカサ、シユウコにタリスマンをつけるノカ？」

秋子が少し眉間にしわを寄せる。しかし、これは秋子ではなく、姿を借りたヒルコの言葉だ。

「いや、まだつけない。嫌なんだろう？」

司は含み笑いを漏らす。

「……」

無表情に佇んだままの秋子の前を通り過ぎ、司は秋子がいつも持ち歩いているバッグの中を探り、中からケータイを取り出した。すばやい指使いで、吉田赤秀の連絡先を登録すると、元通りバッグの中に戻した。

「ツカサ、そんなにシユウコがダイジ……か？」

「ヒルコ……おまえのようなものでも恠気を起こすものなのか？」

司はクツクツと笑う。

「……」

ヒルコは無表情なまま立ち尽くす。

「秋子に関係ない。関係ないものを巻き込む気になれない。それだけだ。気にするな」

司は、ヒルコを背後から抱きすくめる。

「ツカサ、ワタシは、おまえからハナレナイ……」

ヒルコは、初めて、父、聖から譲り受けた霊だった。強い力を持ち、他の霊を従わせる能力を持っていた。ヒルコが司を守護している限り、他の霊は司に手を出せない。代わりに、司もまた、ヒルコに逆らえない仕組みになっている。

「ヒルコ、今まで良くやってくれた。感謝しているよ」

ヒルコが憑依している秋子の髪に軽く口づける。

「ガゴウジが移ってきてても、ワタシはおまえからハナレナイ……」

ヒルコの言葉には抑揚がない。逆にそれが底しれぬ闇を想起させる。

脱出不可能な、深く、冷たく、昏い闇の沼……。

それでも、司がそれを恐ろしいと思うことは、最早ない。馴染み

過ぎているのだ。光ならば闇を恐れるのかもしれない。自分が既に闇の眷属なのだと証明されているようで、司は苦笑う。

「頼りにしている。だけど、もし向うに行けそうなら、行くがいい。こちらにいつまでも未練を残していても辛いだけだろう?」

「行くトキは、おまえもイツシヨだ。ハナレナイ」

司はヒルコの瞳の中を覗きこむ。いつもは温かな色を浮かべている秋子の瞳なのに、今は底なしの闇を覗きこんでいるように昏く、冷たい。

「……そうだな、それも良い」

司は秋子を抱き上げると、静かにベッドの縁に座らせる。そっと扱わないと、少しでも秋子の覚醒レベルが上がるとヒルコは落ちてしまう。

「ダクのか?」

誘うような口調でヒルコが司を見上げる。

「いや、今日はやめておくよ。そんなことしたら、ヒルコはあつという間に落ちてしまうだろう?」

「……」

「ヒルコ、何かしゃべってくれよ。俺の事をどれくらい好きか聞かせてくれ」

「……ダレに訊いてイル?」

「おまえしかいないだろう?」

司は小さく笑む。

ヒルコはしばらくの沈黙の後、小さな声で囁き始めた。

「……アイシテイル。ワタシはツカサのソバを決してハナレない。ツカサは、ワタシがマモル。ダレにもワタサない。ツカサはワタシのモノ……」

司は秋子の髪に手を這わせながら、そっとかきあげる。そして、軽く何度も口づけた。

——シュウ……

同じ顔で、同じ声で、絶え間なく囁かれる睦言に、司は強く秋子

の体を抱きしめた。

——シュウ、シュウ、お願いだ。その声で、その顔で、俺の心を麻痺させてくれ。どんな状況に陥っても、俺が君を傷つけないで済むように。君に手を掛けずに済むように……

ヒルコが落ちて、秋子の体からガクンと力が抜ける。

愛おしそくに何度も口づけを落としてから、司は、秋子をベッドにそつと横たえた。ヒルコ以外の霊が、名和家の末裔である秋子を害さない保証はない。そうなった時、秋子にとって一番危険なのは司ということになる。

司は、木箱から取り出した水晶のタリスマンを秋子の首に掛けると、簡単に外されないように軽い呪い（まじない）を掛けた。これは、自分から秋子を守る為のタリスマンだ。触れてはいけない印だと記憶に叩きこむように、司はタリスマンに刻まれたセーマンとドーマンをしげしげと見つめた。

万が一の時、少しでも時間稼ぎになってくれれば、それで良い。その隙に秋子が逃げられるかもしれない。それは、欲しがることを止められなかった秋子への、せめてもの罪滅ぼしのつもりだった。

『……ワタシは、ツカサからハナレナイ。シュウコにはゼツタイにわたさナイ』

背後でヒルコが囁く声が、冷たく響いた。

第十二話 水は低きに流る（5）

「吉田さん、少し離れて歩いてもらえますか？ 僕、日本酒の匂い苦手なんですよね」

佐川は辺りをクンクンと嗅ぐそぶりをしてから、少し顔を顰めた。「別に一緒に来てくれなんて頼んだ覚えはないぞ。おまえが離れて歩けばいいだろう？ 大体、酒が嫌いな奴が、どうして甘酒なんか頼むんだよっ」

青洲は思いつきり不機嫌な様子で顔を顰めた。

青洲と佐川は、石守家から徒歩で移動していた。青洲の襟元から胸のあたりまでの広範囲にわたって、白っぽい染みがこびりついている。

「いやー、メニューに甘酒があるなんて珍しいなと思って……実は、僕、甘酒を飲んだことがないんですよ」

佐川は黒ぶち眼鏡のフレームを中指でくいつと上げると、口角を片端だけ上げてへらと笑う。

石守家に着いて、客間で待たされている間、家人が飲み物のオーダーを訊いてきた。メニューを渡されて、青洲はそれに目を通すことなくお茶を頼んだのだが、佐川はしげしげとメニューを眺めてから、甘酒を注文したのだった。

「で、どうでした？ 甘酒。美味しかったですか？」

佐川は興味津津と言った顔つきで青洲を見る。

「味なんか分かるかつ、俺は飲んだ訳じゃない、ぶっかけられたんだっ！」

青洲は憤怒の形相で佐川を睨みつける。

「しかし……そもそも、先にお茶をぶっかけたのは、吉田さんでしたよ？」

苦笑しながら肩をすくめる佐川に、青洲はムスツとした表情で黙り込んだまま、歩く速度を速めた。

石守冬樹を引っ張り出す為に、青洲は融資色の濃い提携話を用意した。石守家は個人病院を開業していて、石守東生は院長だった。東生亡き後は、冬樹が継ぐところを、医師業にてんで興味がなかった冬樹は医者にはならず、診療は他人に任せて、自分はもっぱら病院経営の方に力を入れていた。直接会って話したい、吉田からの申し出に、石守冬樹はようやく姿を現す気になったらしかった。

石守冬樹は、しばらくして現れた。すらりと背の高い長身で、ピシッとプレスされたワイシャツに、結ばれたネクタイがやけに奇抜できざつぽい。志木司の話とは裏腹に、顔色も良く健康そうだ。その石守冬樹の後ろから、青白く神経質そうな女性がついて来て、青洲と佐川に一礼した。女性は石守冬樹に面ざしが少し似ているようだ。

「昌代伯母さん、お久しぶりです」

佐川の挨拶に、その女性は怪訝そうに一瞬見つめてから、硬い表情を少しだけ和らげた。

「あら、崇さんなの？ 見違えたわ。どうしてここに？」

高いソプラノの声が耳に障る。青洲は幽かに眉間にしわを寄せた。「僕、今吉田グループで働いているんですよ。吉田さん、こちらは石守昌代さん、石守家の大奥様ですよ」

佐川がにこやかに説明すると、青洲は軽く会釈をする。昌代も軽く会釈を返してから、佐川をしげしげと見つめた。

「崇さん、安心しましたよ。市役所なんか就職してしまつてと、お母さまが心配されていましたからね。ようやく家業を継ぐ修業を始めたって訳なの？」

「さあ、どうかな」

佐川はへらへら笑う。

少し場がほぐれたところで、昌代が席を勧め、一同は腰かけた。「初めまして吉田青洲です。本日は弊社のオファーに応じてくださり、ありがとうございます」

青洲は鋭い視線で石守冬樹を一瞥してから、低姿勢に頭を下げ名刺を差し出す。石守冬樹は慌てたように、自分のスーツのポケットをあちらこちら探り始めた。

「どうしたの？ 冬君、お名刺は？」

昌代が隣から小声で囁く。

「書斎に置いてきたみたいだ。ママ、取ってきてよ」

冬樹が囁き返す。しょうがない子ねえと呟きつつ、愛想笑いを浮かべながら昌代は席を外した。

「すみません。今、名刺をお持ちしますので……」

謝る石守冬樹に、

「あ、やばい。僕、まだ名刺を作っていなかった。転職したばかりだから。市役所時代のでいい？」と佐川はへらへら笑いながら名刺を取り出した。

「崇さんとは、会ったのは初めてですね」

差し出された名刺を見ながら、冬樹がにこやかに話しかける。

「冬樹君はずっと外国に行っていたからね。僕はとんと外国には縁がなくて……」

佐川は笑顔のまま続ける。

「縁と言えば……冬樹君、鈴森いずみさんって知ってるでしょう？ 前にこちらで働いていた……」

「え？ いや、あ、ええ、知ってますけど……彼女が何か？」

突然出て来たいずみの名前に、少し戸惑い気味に冬樹は言葉を濁す。

「実は、少々縁があつて、今彼女を吉田で保護しているんですよ」

青洲が後を引き取る。

「え？」

「彼女が身ももっていたことはご存知ですよ？」

青洲の鋭い視線に、冬樹の顔が青くなる。

「え……あ、はあ、まあ」

「あなたが鈴森さんを捜していると、ある人から伺っているのです」

が……」

「僕が？ いや、捜してはいませんが……」

冬樹は、ぼかんとした表情で答える。

「お腹の子供は、あなたの子だったんじゃないのですか？」

ストリートな青洲の問いに、冬樹は明らかに狼狽した様子だった。

「まさか！ 彼女がそう言ったんですか？ いやあ、まいったな。」

どうしてそんな嘘を……。実は彼女は、父が通っていたバーのホステスの娘だね。泣き付かれて仕方なく雇ったらしいんですが、母親に似て、少々だらしない子だね。誰の子だか分からない子どもを身ごもったって言うんで、辞めさせたんですが……。あ、もちろん、ただ追い出したわけじゃないですよ。ちゃんと退職金も、病院に行く費用も持たせたんです。まだ若い子だし、一人で育てるわけにもいかないでしょうしね。今、そちらにご迷惑をおかけしているんですか？ いやあ、参った。彼女がそんな嘘をつくなんて……。大変失礼をしました。僕の子だなんて。そんな馬鹿な……。そうだ、こちらで引き取りましょう。お困りなんですよ。いやあ、参ったな。彼女は、どうしてそんな……」

まくしたてる石守冬樹の言葉は、青洲がぶっかけたお茶で遮られた。程良く冷めてはいたが、一口も飲んでいなかったのも、かなりな量が石守冬樹の顔から背広にボタボタと滴り落ちる。

「彼女は、だらしないし、嘘つきでもありませんよ。とてもしつかりしたお嬢さんです。悪いところがあるとしたら、運が悪かったくらいなものですよ。あなたなんか目をつけられてね」

青洲は石守冬樹を睨みつける。

茫然としている石守冬樹に、更に言葉を続けようとしていた青洲の言葉も、これまた同様に、何かの液体が降り注いで遮った。辺りに、甘ったるい酒かすの匂いが拡散する。いつの間にか名刺を持って戻ってきていた昌代の手に、佐川が注文していた甘酒の湯のみが握られていた。佐川も口をつけていなかったらしく、かなりの量の甘酒が青洲の背広の胸付近に広がる。

「一体何事ですか？ 鈴森いずみは、とんだアバズレ女でしたよ。冬君が何をしたって言うんですか！ 失礼にも程があるでしょう？」

昌代は甲高い声でまくしたてた。

「鈴森いずみさんのお腹の子の父親が、石守冬樹だと教えてくれたのは、貴女の弟の志木司氏でしたよ。貴女も冬樹君もいずみさんを追いだしたことをとても後悔していて、捜しているのだと教えてくれたのも彼でした。これはどういうことなんですかね？」

青洲は感情の見えない冷たい瞳で、静かに昌代に問いかける。

「司が？ どうしてそんなことを……」

昌代は茫然とした表情で口ごもった。

「私はまどろっこしいのは苦手ですね、腹の探り合いはやめましょう。本音を話しますよ。今日、私がここに来た真の目的は、冬樹君、あなたに石守としての力を貸してもらったのです。今、いずみさんは、恐らく窮地に立たされている。君なら、彼女を助けることができるんじゃないかと、佐川が言うので、私はここに来たんです」

青洲の言葉に、昌代は小さく息をのんだ。

「い、石守の力など、冬君にある訳がないでしょう？ この子は、何の関係ありませんよ！ この子は、あんな恐ろしい石守とは違うんです。なんの言いがかりですか？ いずみの窮地など、知ったことじゃありませんよ。あんな素性の知れないアバズレ女っ」

「ママ、石守の力って一体何の事？」

一人ヒステリックに騒ぐ昌代に、冬樹が怪訝そうに問いかける。

「ああ、冬君、あなたはそんなこと知らなくていいのよ。あなたは関係ないの。関係なんてないんですとも！」

何も知らなげな冬樹と、常道を逸して取り乱す昌代に、青洲が佐川に怪訝そうな視線を送ると、佐川は小さく苦笑して首を横に振った。

「行きましょう。吉田さん。残念ながら、彼は大した力は持っていないようです。いずみさんとは器が違うようだ」

小さく肯いて立ち上がった青洲の後に、佐川が続く。

「崇さん、今度きちんと説明にいらつしやい！　その野蛮な方抜きでね！」

佐川の背中に、昌代がヒステリックにわめき散らす。

「昌代伯母さん、いずみさんは素性の知れないアバズレ女なんかじゃないですよ。彼女は僕の従兄妹なんです。佐川の祖母が、ずっと捜していた志木仁の孫なんですよ」

「……」

目を見開いて固まる昌代と、それをオロオロと見守る冬樹を一瞥すると、

「じゃあ、失礼します。もうここにお邪魔することはないでしょう。説明することもないですしね」

佐川はそう言い残して、青洲の後を追った。

玄関先まで見送りに出た家人が、青洲の様子を見て驚いたように制止すると、すぐにおしぼりが運ばれてきた。拭うと、染みは幽かにしか残らなかったが、日本酒の匂いはあまりとれた気がしない。拭ってもらっているところに、石守冬樹が、少し途方に暮れたような表情でやってきた。

「いずみは……お腹の子を処分したんじゃないんですか？」

「気になるのか？」

青洲は鋭く睨みつける。

「あ、いや、別に……」

冬樹は慌てたように視線をそらした。

「彼女は処分するつもりはなかったようだよ。だけど、結果的に処分したことになった」

「……」

青洲の言葉に、石守冬樹はホツとした表情を浮かべた。そんな石守冬樹を青洲は腹立たしげに見つめると、早々に石守家を退出した。

屋外には陽光が溢れている。眩しげに光を受け止めながら、青洲は思う。

この光は、いずみをきちんと照らしているだろうか。きちんといずみの心の中に射し込んでいるだろうか。その問いに返ってくるのは、否定的な答えばかり。世の中は光で満ち溢れているのに、こんなに温かな光が降り注いでいるのに、恐らくいずみは冷たい雨の中にいる、そんな気がしてならなかった。途方に暮れたいずみの顔ばかりが思い出される。

腹を立てているのは石守冬樹に対してではなく、自分に対してだ。いずみに、石守冬樹が捜していると伝えた時の、いずみの言葉を思い出す。

『冬樹様は、私に戻って欲しいなんて思わないと思います。だって、私は……単なる厄介者だったし……』

いずみは、何度も途方に暮れた顔でそう言った。

——どうして、いずみの言葉を信じられなかったのだろう。自分はどうして、志木司の言葉などを信じ、いずみの言葉を信じなかったのか。

志木司は、単に神器である三家の血筋を揃えたかっただけなのだ。佐川の話聞いた今ならば、分かる。まんまと志木司の策略に引っ掛かって、嫉妬した拳句、いずみを失ってしまった自分の浅はかさ、に腹が立った。同時に、どれほど劣悪な環境下でいずみが生きてきたのか、その一端を垣間見た気がした。

いずみの味方など、ほばいなかったに等しいのだろう。あの雨の夜、いずみは良く分からないのだと緩く否定したが、あのまま青洲が見つけていなければ、いずみは死んでいた。そう確信する。

胸の奥がざわざわした。

石守の家を出ると、青洲は足早に歩き出した。志木家へ行くなら、近道できる徒歩の方が早い。運が良ければ、途中でいずみを見つけることができるかもしれない。

黙々と足早に歩く青洲を佐川が追いかける。

「吉田さん、どうするつもりなんですか？」

志木家がある住宅地に入ったところで、ようやく青洲は歩く速度を落とした。息を切らしながら佐川が問いかける。

「いずみちゃんを連れて帰る」

「はあ……しかし、それで解決と言う訳にはいかないと思いますよ？」

佐川は眉間にしわを寄せた。

「分かってる。力を持った石守を捜さなきゃならないんだろう？」

「だけど、それは今すぐと言う訳にはいきそうもない。それまでは、なんとしても志木司に持ちこたえてもらう。そもそも三種の神器が揃わなければ、意味がないんだろう？」

母親離れていない、腑抜けの石守冬樹を当てにするよりも、その方がずっと勝率は良さそうだ。眉一つ動かさず平然と大嘘をつける志木司のことだ、憑かれてあっけなく終わるということはないのではないか。あのふてぶてしさは称賛に値する。嘘について動揺した拳句、あんな石守冬樹に嫉妬した自分が馬鹿みたいに思えた。それに、今は何よりも、いずみを危険にさらすことを避けたい。

「それはそうですが……持ちこたえてもらうって、何か名案でもあるんですか？」

佐川は首を傾げる。

「ない。おまえが考える。金なら出す」

「……金を何に使うんです？」

佐川があっけにとられたように青洲を見つめる。

「それを考えるのがおまえの役目だと言ってるだろ？ 志木司の元氣が出そうなのは何だ？ 好きな食べ物とか、好みの女性とか、そつだ！ 金髪美女のチアリーダーで応援するとかどうだ？」

「吉田さん、本気でそんなことが司の役に立つと思ってるんですか？」

佐川はがつくりと肩を落とす。

「……思っていないさ。どうせ俺はその程度しか思いつかない俗人だ。殊に、あの四聖獣の伝承に関することについては、お手上げだ。」

何しろ、俺には何が何だかさっぱり分からないんだからな。そもそも三種の神器は何をするんだ？ 四聖獣は何の役割をする？」

青洲は立ち止まり、真剣なまなざしで佐川を見つめると続けた。

「俺はただ、いずみちゃんに……、今まで虐げられた人生しか送ってこなかったあの子に、安全で安心して暮らせる場所を用意してやりたい、普通に、笑顔で暮らせる生活を用意してやりたい、ただそれだけなんだよ」

そんな青洲を、佐川は感極まった表情で見つめ返した。

「……吉田さん、僕はずっと考えていたんですよ。あの島で、あの水子の霊はどうして吉田さんに憑いたのかと……。僕もいた、いずみさんもいました。我々は二人とも志木の血を引いています。しかし、あの子は吉田さんに憑いた。その理由がようやく分かった気がします」

「どういうことだ？」

「！」

佐川は青洲には答えずに、突然、ビクリと弾かれた様に目を見開いた。

「どうした？」

佐川は小脇に抱えていたスケッチブックを取り上げて、パラパラとページをめくり、華陽が描かれているページを開く。

ドクリドクリと脈動する肖像画。その禍々しいまでの邪気。縛めを解こうと抵抗しているようにも見える。

「急ぎましょう。いずみさんが行動を起こしたようです。封印の気配が変性しました」

佐川の言葉に青洲は瞠目すると、駆けだした。

第十三話 疾風に勁草を知る（1）（前書き）

疾風に勁草^{けいそう}を知る：激しい風が吹くことによって初めて、風にも折れぬ強い草が見分けられる。つまり、逆境に遭って初めて、その人の真価が分かる、という意

第十三話 疾風に勁草を知る（1）

三十年前、夏、

明かりを消した薄闇の部屋に三人の人影が蠢いていた。祭壇らしき台の上に一体の土偶が置かれていて、その両脇に和蠟燭の灯りがチラチラと踊る。

「本当にこいでよかとか？」

白い着物に身を包んだ志木保が、不安げに祭壇の前に座る。

「うん、たぶんこいで間違おらん。土偶はちゃんと名和のやつに作ってもらつとつし、深冬も喉の調子は万全たい。そうがやる？」

古本を何度も確認しながら、石守夏紀が頷く。

「うちは、こいば唱えていればよかとね？」

鈴守深冬も不安そうに問う。

「そつたい。じゃあ、始めるぞ」

当時、三人は中学校の同級生だった。志木保は元々本土に家があったが、石守夏紀と鈴守深冬は親戚の家に居候をさせてもらいなगर、島に近い本土の地方都市の中学校に通っていた。保は、離れに自分の部屋をもらつていて、勉強会と称しては、三人で良く集まっていた。三人とも妙にウマが合つて、入学当初から仲が良かったのだ。

それが、中二になつた春あたりから、保に異変が現れた。元々裕福な家だったのだが、いつの間にか欲しい物を何でも手に入れていく。それを気前よく友達にあげてしまふ。成績が上がつたご褒美だと本人は言うのだが、その成績も異常な上がり方をした。元々は中の上程度の成績で、本人いわく、コツコツ努力型。それが、一学期の中間テストで唐突に一位になった。様々な物を手に入れて、順風満帆に見えていた保だったが、夏休みが近づく頃になると、その順調さに反比例するように顔色が悪くなつていった。

問いただす夏紀に、保が青い顔で震えながら説明する。

「俺……悪か奴に取り込まれとるみたいなんばい……」

「悪か奴？ だいだ？ よそん学校のやつか？」

親分肌の夏紀は、眉間にしわを寄せて身を乗り出した。

「……ちがう……夏紀、信じてくれるか？ 俺の言うことば、笑わんで信じてくれるか？」

「信じるよばい。言ってみろよ」

真っ青になつてガタガタ震える保を怪訝そうに見やりながら、夏紀は先を促す。

「俺……悪霊に……憑かれとるみたいなんたい」
「……」

夏紀はごくりと唾を飲み込んだ。妄想だとか、思い込みだとかで笑つて済ますには、保は真剣過ぎ怯え過ぎていた。それに、夏紀自体、靈魂の類の存在を信じる素地があつた。夏紀は、ぐつと頷き、それで？ と先を促す。

「最初は、なんでん願い事は叶えてくれる魔法使いみたいなもんで思おとつたと。だけん、欲しか物ば色々頼んで……成績も上がるごととしてもうて……だばつてん……だんだん、だんだん、やつが叶ゆつごと誘つてくる内容が、か、過激になつてきとつて……」

変声期特有の不安定な声が裏返し、保は言葉を詰まらせた。

「なんばしように誘つてくるんだと？」

「……き、気に入らんやつば……こ……こ、殺そうつて……俺、危うく、渡辺ばやろうつて言いそうになつて……」

保は両手で顔を覆つた。

渡辺は生活指導の教諭だ。髪形や服装の僅かな違反にネチネチ注意するタイプで、生徒の大半は彼の事を嫌っていた。だからといって、殺していい訳はない。そんなこと誰でも知っている。

「保、そがんことは頼んじや、絶対駄目だぞ」

夏紀は、励ますように、諭すように、保の肩をがっしりと掴む。「分かつとるよ。だばつてん、いっぺん口にしてしまえば、やつはやるんたい。例えば、寝言で言っただけでんやるとばい。夢までコ

ントロールできんよ。なあ、俺はどがんしたらよかとか?」

最近は何もすることも恐ろしくなつて、夜もゆつくり眠れていなかった。夢の中でさえ、やつが誘惑しに来るからだ。

「保、ちよつと時間ばくれ。島にある俺の実家の納屋に、除霊の古本があるんたい。俺、子ども頃に悪さすつとそこに入れられてさ、だけん知つとるんたい。俺んがたは、代々除霊ん家系やつたげな。今週末島に戻つた時に、そいばこつそり持つてくるから、そいまでなんとしてもコントロールすつとだぞ。よかな?」

夏紀の言葉に、保はさすがの思いで何度も頷いた。

部屋の中に、静かに深冬の被詞はいつひが読み上げられる。

「——もろもろのまがごと　つみ　けがれあらむをば　はらへたまひ　きよめたまへと　まをすことを　きこしめせと　かしこみかしこみもまをす……」

(——諸々の禍事　罪　穢有らむをば被い給ひ清め給へと白す事を聞こし食せと　恐み恐み白す……)

深冬の詞が続く中、保の背後に立った石守夏紀は指を組み合わせ、印をきる。

一つ印を切る度に、周囲でバチツパチツとスパークするような音が部屋のあるこちらから響き始めた。闇がざわめき、蠟燭の炎が、風もないのに右へ左へ前へ後ろへと激しく揺らめく。いつもなら、やかましく鳴きたてている蛙の声も、闇に吸い込まれてしまったかのように聞こえない。

「やめろーっ、やめろっ、苦しかつ。深冬う、やめてくれよおお」
突然、闇を切り裂くように保が悲鳴を上げ、体を折り曲げて身もだえ始めた。

「夏紀、大丈夫なの?」

詞が途切れ、深冬の不安げな声が幽かに響く。

「詞は途切れさせるなっ!」

夏紀の言葉に、深冬はヒクツと喉を鳴らすと、再び詞を唱え始め

た。

「苦しかあ、やめてくれ、お願いだ、夏紀い、やめろよおお」

保の絶叫が響き渡る。

夏紀は、すべての印を結び終わり、意識を集中させると、気合のこもった一声を発し、手刀で保の背を叩く。その瞬間、人型の闇が保からずぱんと抜け出したように見えた。濃度の濃い人型の闇は、まるで粘度の高い液体のように後を引きながら、保の中から、ずりずり出てくる。

「ひいいい、だいだ？ おまえはっ、いやだあああ、そっちには行きとくないっつ、やめてくれ、はなせっ、はなしてくれよおおっ」

保は、断末魔の様な悲鳴を上げて、何度も宙を払う仕草を繰り返してから、どうつと前かがみに倒れ込んだ。保の悲鳴を最後に、闇の流出が止まる。

深冬が悲鳴を上げながら、保に駆け寄り抱え起した。

夏紀は、再びすばやく手刀で印を切ると、土偶めがけて引導を渡す。その瞬間、闇と土偶が、まるで磁石のN極とS極となったかのように引き合い、結合した。

「保、大丈夫か？ こいで除霊できたはずたい。もう大丈夫だぞ」
夏紀も保に駆け寄る。

「……保、息しとらん」

深冬は震えながら夏紀を見上げる。

「なに？」

「保、息しとらんよおお」

深冬が絶叫する。

「保？ 保っ、しっかりしろよっ」

突然、地震前のような地鳴りが響き渡り、再びバチッバチッとスパークする音が部屋中のあちこちから鳴り始めた。次いで、祭壇の上に置いてあった土偶が、触りもしないのにガタガタ揺れたかと思うと、まるで内部から爆発するように弾けて飛び散った。

「きゃあああああ」

「うわあああ」

飛び散った土偶の破片は、夏紀と深冬の前面に降り注いだ。

離れの異変に気付いた大人たちが、すぐに救急車を呼んだが、志木保は、意識を回復することなく息を引き取り、夏紀は粉々に飛び散った破片で視力を失い、深冬は深々と突き刺さった土偶の欠片で声を失った。

こうして華陽の兄、保は、華陽が小学校に上がる前年、その短い人生を終えたのだった。華陽は、幼いころから、この話を何度も何度も聞かされた。石守は恐ろしい力を持っているのだと志木家の誰もが恐れた。また一方、石守も自身の力を恐れた。石守家は、人を害する力を継承しているのだと。除霊の力は、人をも害すると判断した石守家は、力の使い方を封印した。すなわち、夏紀が使用した書物は言うに及ばず、それについて記述のあった古文書の多くを、禁書として処分してしまったのだった。人一人が亡くなったのだ。それは無理からぬことではあった。

* * *

スープを一口啜った秋子がぴくりと顔を上げる。

——相変わらず、分かりやすい人だ……

司は向かいで、やはりスープを啜りながら秋子をチラ見する。

「シユウ、今日も佐川に行く予定なのか？」

先週から、秋子は毎日のように佐川の叔母に呼ばれて外出している。佐川の叔母はかなり気難しい人で、志木家を避けるように暮らしていたのだが、秋子が拾った子犬を預かってもらうようになってからは、時々秋子を呼びつけているようだった。それがここ数日、いつになく頻繁だ。今日は週末だというのに、秋子が出かけてしまえば、ほぼ意識のない父親と体調の回復しない華陽の愚痴に、司一

人が向き合うことになる。しかも、外には招かざる客がうつろっている。

「いえ、今日は参りません」

「佐川で、一体何をしているんだ？」

基本、佐川の叔母の呼び出しには、理由を聞くことなく外出許可をしている司だったが、こうも頻繁だと気になってくる。ここ数日、佐川家には、日頃どこかをほつつき歩いていて自分の家には滅多に帰らない崇が居ついているようだし……司は顔を顰める。それもさることながら、今、父親の容体がかつてないほどおもしろくないのだ。だから、できれば秋子には、屋敷内にいて欲しいと思っている。もっとも、佐川の叔母の呼び出しは主に昼間なので、秋子がいなくても、特段、害のある霊障もなく済んではいるのだが。

「あの……実は、茶丸の具合が悪くなかったんです。食欲がなくて……それで、叔母様が心配して呼んでくださっていたんです。私が行くと、少し元気になるようだったので……」

秋子はオドオドと説明する。

——あの、バカ犬。やはり、捨ててきておけば良かったか……

司は、内心舌打ちをする。

「しばらく外出するのはやめてくれないか？ 父の容体がおもしろくないのは知っているのだろう？」

「……はい、もうどこにも参りません」

秋子は何かを言いかけて、しかし、何も言わずに頷いた。

妙に神妙な様子の秋子に、逆にイライラする。司はバターが良くきいたオムレッツにくざりとフォークを突きさした。フンワリとしたオムレッツが乱暴な扱いに文句を言っているかのように、金属と陶器のぶつかり合う嫌な音が響く。

「あの……」

躊躇いがちな秋子の声に、司は視線を上げる。

「なんだ？」

「……いえ、なんでもありません……」

司は怪訝そうに秋子を見つめたが、それ以上何もいわず、黙々と食事を続ける。食後のコーヒーが終ったところで、司は野上を呼びつけた。

「野上、外でうろついている客人を連れて来てくれないか？」

「司さんっ、それはっ……あの……やめた方が……」

不安そうな秋子に、司は顔を顰める。

「もう待ちくたびれた。話を聞くだけだ。この前は鈴森いずみが来れば、対決することになるだろうと言ったが、彼女の行動は想定外だ。彼女が何をしたいのか分からない。何をしたいのか訊きたい」

崇には、鈴森いずみが手を出してこない限り、こちらからは手を出すなと言われている。まだ準備ができていないのだとも。しかし、こう頻繁にうろつかれては、気になって仕方がない。

「でも……」

「話を聞くだけだ。君は自分の部屋へ行っていないさい」

「……私も一緒にします」

秋子は意を決したように口を引き結ぶ。

「好きにするがいい」

司は客間へと向かった。

いずみは、志木家の塀の周りを往ったり来たりしていた。何度来ても、この家は、いずみを疎ませてしまう何かが漂っている。その気配が、拒絶なのか、誘引なのか判じきれない。何度も、家の前まで来ては、うろついて、すぐそこに戻り、そして、また出直すことを繰り返す。しかし、その日は、門の前に誰かが佇んでいた。

「失礼ですが、鈴森いずみ様ですね？」

きりつとした眉の印象的な女性で、艶やかな黒髪は一分の隙もないほどにきりりと結い上げられている。

「……はい、そうです。けど……」

まるで悪さを見つけた小学生のように怯えた瞳で見つめる。

「当家の主人がお連れするようにと申しております。どうぞ、お入

りください」

「……」

有無を言わさぬ、その女性のきっぱりしたものの言いに、いずみは、
操られるようにこくりと頷くと、誘導されるままに、その後を追っ
た。

第十三話 疾風に勁草を知る（2）

志木家の門をくぐった途端、いずみは目を見開いて立ち止まった。

——鈴が……

鈴の音が、頭の中で激しく鳴り響く。

りーん ちりーん

りーん ちりりーん

鈴の音は、高く低く、警告するように、悲鳴をあげるように——
鳴り響く。

「どうかされましたか？」

立ち止まるいずみに、案内していた女が怪訝そうに振り返る。

「あ……いえ、何でもありません」

いずみは、ふと我に返って、慌てて首を振り、再び歩を進めた。

秋子は、客間で司と一緒に客人の到着を待ちながら、昨日佐川家で聞いた佐川崇の言葉を思い出していた。

「秋子さん、大伯父が亡くなるか、もしくは不測の事態が起こって、いざとなった時には、司のことをどうかよろしく願います。本人には自力で何とかするようにと言ってはありますが、恐らく司にも僕にも、できることは無いに等しい」

崇はしゃがんだまま、茶丸の首回りをぐしゃぐしゃと撫でまわしながら、小さく笑う。

「あの、それはどういう……」

秋子は首を傾げる。

「あなたは、司から何も聞いていないんですね？」

崇は、やっぱりかと呟くと苦笑した。「司のやつ、この期に及んでカツコつけ過ぎだろ」まるで茶丸に愚痴を言っているかのように、俯いたまま小さく呟いてから、崇は続けた。

「あなたもご存じのとおり、大伯父が亡くなれば、司は志木家を継

ぐことになります。しかし彼の場合、継ぐのは家や財産ばかりではない。大伯父に憑いている霊までも引き継ぐことになるのです」

茶丸を撫でるのをやめて立ち上がった崇の瞳には、ふざけている様子は微塵もない。

「……霊……ですか？」

秋子は、戸惑い気味に、しかし深刻な表情で問い返す。

「秋子さんは、靈魂の類を信じない人ですか？」

崇は黒ぶちの眼鏡をついと中指で持ち上げる。

「……信じて……いませんでした」

秋子は躊躇いながら答える。

「過去形ですね」

小さく笑う崇に、秋子は少し困ったように頷く。次は秋子が撫でる番だと言わんばかりに、懐っこく飛びついて来る茶丸のほんわりした丸い頭をぱふぱふ撫でてやりながら、秋子は躊躇いがちに説明する。

「私には見えないんです。だけど、大旦那様が倒れられてから、色々不思議なことが屋敷内で起こるようになって、使用人達が教えてくれるんです。あんなことがあった、こんなことがあった……。それに、私、司さんと居ると、時々記憶が無くなることがあって……最初、私、二重人格になっちゃったのかって心配したんですけど、それって……ヒルコと呼ばれている霊の仕業なんだって……私が意識が無い間、そのヒルコが私に憑いて体を動かしているんだって、司さんが……そう言うんです」

秋子の言葉に、崇は大真面目に頷く。

「志木家は代々、シャーマン体質を持つ人間を多く輩出する家でね、今現在、その体質を色濃く受け継いでいるのが、大伯父である志木聖、その子どもの司、そして従妹にあたる華陽、この三人なんです。だから大伯父が死ねば、大伯父が抱えている霊の大半は司に憑くはずです」

「そんな……」

秋子は眉を顰める。

——既に色々抱え込んでいる様子の司だが、更なる霊が憑いて、大丈夫なんだろうか。

「僕は心配なんですよ。そうやって、順繰りに靈魂を引き継いで行けば、いつか志木家は破たんするだろうと……」

「破たん……」

「一度、除霊をしなければならぬのは分かっているのですが、志木家に限って言えば、これが存外難しい。明確にこうやれば良いという正しいやり方が、分からないんです」

「……」

秋子はごくりと唾を飲み込んだ。

「かつて、割と近い過去に除霊をした例がありましてね、古い言い伝えの通りにやったようなんですが、除霊された側が……亡くなりましてね……彼は司の従兄に当たる人だったんですが……」

秋子は、はつと息をのむ。

「除霊した側も、失明したり、声を失ったりで大変だったらしいんです。更に不幸なことに、その時、除霊のやり方を記した古文書が、多数処分されているんですよ。だから、益々やり方が分からなくなっている。唯一分かっているのは、四聖獣の伝承にあるとおり、正しい除霊には鈴守家、名和家、そして石守家の力が必要だと言うことだけなんです」

「名和家……って？」

秋子は驚愕して目を見張る。

「もしかして、四聖獣の伝承をご存じなかったですか？」

崇も目を見張る。

「知らないです……」

秋子の返事に、崇は一瞬驚いた後、クスクス笑い出した。

「まいったな。僕はてつきり、司は、名和家の血筋として必要だから、あなたと結婚したのだと思っていましたが、どうやら違うようだ。司はあなたのことが本当に欲しかったんですね。司は、そうと

は言い出せないでしょうから、あなたは司の気持ちが分からなくて苦勞したんじゃないですか？」

笑いながら問いかける崇を戸惑い気味に見上げながら、秋子は訂正する。

「あの…… 崇さんは誤解してらっしゃいますよ？ 私は司さんとはなく、大旦那様の嫁として志木家に入ったんです。でも、もう今では志木家の嫁ではありませんけどね」

小首を傾げる秋子に、佐川は苦笑して肩を竦める。

「本当に何も知らないんですね。あなたは…… いや、やめておこう。これは、あなたと司の問題だ」

崇は真面目くさった顔で、一人何度も頷く。

「なんですか？ なんのことなんです？」

秋子が問い詰める。

「司はああいう人なので、あなたの御苦勞はお察ししますが、僕はそこまで無粋な人間ではないのでね。後は司に聞くなり、ご自分で調べるなりした方が良いと思います」

そう言って、崇はにっと笑った。

崇の言う、自分と司の関係も気になったが、それ以上に、不測の事態が起こった時に、自分に何ができるのか、何をすれば良いのかが気にかかった。もちろん崇に訊いてはみたが、それは崇にも分からないという。そして、今まさに、その不測の事態が起こりかけているのではないか、そんな気がして、秋子は落着かない。

「遅いな、何をしているんだ。ちょっと見てこよう。君はここにいなさい」

「いえ、私もっ」

立ち上がった司につられたように、秋子も立ち上がる。

「シユウ、どうした？ 今日は少し変だな」

司が秋子を鋭い視線で覗きこむ。

「私は…… 私は司さんの何ですか？」

思いつめた表情で問う秋子を怪訝そうに見つめてから、

「……さては、崇に何か入れ知恵でもされましたか？ 元お義母さん」

と司は意地悪気に片頬だけで嗤う。

「……崇さんは、何も教えてはくれませんでした」

「あなたは知らなくて良いことです。今はね」

「……」

——自分のことなのに、私は何も教えてもらえない。いつも蚊帳の外だ。

傷ついて潤んだ瞳で睨みつける秋子を、司は面白そうに覗きこむ。その時、メイドの一人が客間に駆け込んできた。

「司様っ、大変ですっ。野上メイド長がっ」

屋敷の中まで案内した野上メイド長は、玄関ホールでいずみに向き直った。

「鈴森様、大変失礼ですが、手荷物を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」

言葉だけを聞けば丁寧な伺いだが、彼女のきっぱりしたものの言い方には、拒否するという選択肢はなさそうだ。いずみは小さく頷いて、手荷物を渡した。

手荷物と言っても、小さなキルト地の手提げ一つつきりだ。アパートに居た頃、近くに買い物に行くのに必要だろうと、青洲が買ってくれたものだった。手提げの中には、中身がほぼ底を尽きかけている財布と、ハンカチ、そしてマメ太が無事に生まれるようにと青洲が神社で受けて来てくれたお守りが入っていた。

いずみは、中身をチェックしている女の指先をぼんやり見つめながら、ふと、苦笑する。

——私、ここに何をしに来たんだろう……

華陽に復讐する為に来たはずなのに、何一つ準備をしていなかった。

その時、

ちりりりーん

一際、鈴の音が高らかになったかと思うと、ピタリと止まった。止まったと同時に、左の手の指先に、氷水のような冷気が貼りつく。『つかまえた、次はお姉さんが鬼だよ』

小さな男の子の声だった。驚いて声のする方を見ると、実際、小さな男の子がいずみの左手を掴んでいる。青白い頬をした子どもで、口元はほほ笑んでいるようなのに、瞳は木の洞のように昏くて感情が見えない。

——なんて冷たい手……

いずみは、小さな手を温めるように右手で包み込むと、屈みこんで話しかける。

「この子？」

昏い瞳を覗きこんだ、その瞬間、唐突に床が消失した。真つ暗な闇に呑み込まれる。

——きやああああ、誰か！ 誰か助けてっ

いずみの悲鳴に気づく者など誰一人なく、どす黒い闇の沼から突き出した夥しい白い腕が、いずみの体中に絡みついて闇の中へ引きずり込む。ずぶずぶと闇に沈みながら、いずみは、頭上に見える丸く切り取られた光の円が少しずつその直径を小さくしていくのを、絶望的な思いで見上げた。いずみの手は、光の円を掴もうと何度も虚しく空を掻く。

——いやああああ、青洲さんっ、怖いよ！ タスケテエエ……

暗く深い闇の底、そこには光も音も存在しない。

いずみは、闇の中で一人緩やかに漂う。不思議なことに、恐怖は長く続かなかった。一旦闇に沈んでしまうと、すぐに順応して、とろりと纏わりつく冷たい闇が、次第に心地よく感じられてさえきたのだった。

いずみは、闇の中をゆるゆると漂う手で頬を撫でてみる。濃密で、

滑らかで、すんなりと肌に馴染む闇。

——ここは……私の場所だ。私はずっとずっと、こんな昏い闇の中で生きて来たんだ。貧乏で、校外学習にも、修学旅行にだって行けずに、仲間外れにされて……どこに行っても疫病神だとか邪魔者だとかアバズレだとか言われてきた私には、こんな昏い闇こそが相応しい。ここならば、人を憎んで、恨んで……誰かれ構わず傷つけたとしても、心など痛まない。なぜなら、ここには罪と言葉がない。罪がなければ罪悪感もない……。

いずみは、ここまで考えると小さく首を傾げた。

——罪？……罪って何の事だったかな？ 嫌だ、自分で言っておきながら意味が分からないなんて……

いずみは、再び手で体中を確認するように撫でて行く。ゆるく泡立てた生クリームのように、闇は肌の上を滑らかに滑っていく。

——なあんだ、こんな気持ち良い。どうしてあんなに怖がったりしたんだろ？

いずみは、くすりと小さく笑う。

『鬼だ……次の鬼だ』

『新鮮な魂だ！』

昏く冷たい闇の底で、いずみはたくさんの声を聞いた。たくさんの声は、興奮し、歓喜し、雄たけびを上げる。

いずみの手を掴んでいた男の子が、にやりと笑うと、高らかに宣言した。

『さあ、望みを言うが良い、鬼の継承者。契約だ』

第十三話 疾風に勁草を知る（3）

一通り手荷物のチェックを終えた野上メイド長は、傍でぼんやりと佇んでいる鈴森いずみに話しかけた。

「失礼ですが、軽く体に触れても構いませんか？」

「……」

しかし、いずみから返事がない。

「あの、鈴森様？ ボディチェックをさせていただきたいのですが……」

相変わらず、反応のないいずみを怪訝そうに見つめながら、野上は軽くいずみの肩をゆする。

「鈴森様？」

野上の呼びかけに、ふと我に返ったようにいずみが見つめ返す。

「あの、ボディチェックを……」

野上の言葉を遮るように、いずみが口を開く。

「華陽さんはどこにいます？ 教えてください」

先ほどまで、おどおどした様子だった鈴森いずみとは別人のようだ。野上は、一瞬怪訝そうに眉間にしわを寄せたが、すぐに完璧な接客用の笑顔を作る。

「大変申し訳ありませんが、華陽様は、ただいま体調を崩しておりまして、どなたにもお会いしたくないとおっしゃっているのです。

もし、何かご用が御有りなのでしたら、当家の……」

「華陽さんの部屋を教えなさい」

再びいずみが野上の言葉を遮る。

「……華陽様にどのようなご用なのでしょう」

不審そうに問う野上に、いずみがふわりとほほ笑みかける。

「殺します」

歌うように紡がれた言葉に、野上は一瞬絶句する。

「……鈴森様、そのようなことを御冗談でもおっしゃるのであれば

……」

しかし、野上メイド長の言葉は三度遮^{みたび}られた。

「あなたは邪魔なだけのようです。しばらく眠っていてくださいね」
ほほ笑んで綻んだいずみの艶やかな唇から、黒い霧が現れて、それは野上の眼前で一旦小さな花の形を作ると、次の瞬間、すつと、野上の眉間に吸い込まれるように掻き消えた。同時に、野上は支える力を失い、どつと床に崩れ落ちた。

慌てて客間に駆け込んできたメイドは蒼白だった。

「野上はどこだ？」

司の言葉に、メイドは震える声で返事をする。

「げっ、玄関ホールですっ」

大股で客間を後にする司の後を、秋子が小走りで追う。

——何が起こったの？

秋子は、何度も気配に耳を澄ます。先ほどまで感じていた、いつものあの人の温かい気配が唐突に消え、秋子が不審に思った次の瞬間、どす黒い闇が底なし沼のような冷たい気配が浮上したのだ。

——あの人に何かが起こったんだ。何か良くないことが……

秋子はぐつと拳を握りしめる。

玄関ホールには、野上メイド長が倒れており、オロオロと立ち尽くすメイド達と、野上の状態を確認している秘書の姿があった。

「野上っ」

「司様、ご心配には及びません。気を失っているだけのようです。今、運ばせますので」

父親の代から仕えている初老の秘書が、落ち着いた様子で報告する。

「医者？」

「今、呼びに行かせました」

気を失っているだけにしては、やけに顔色が悪いようだ。不審に思った司は、野上の顔を覗きこみ、軽く瞠目する。

——呪が施されているのか……

司は、口の中でブツブツと呪を唱えると、野上の頭上に手をかざす。しかし、野上に施された呪は解ける気配を見せない。司はゴクリと唾を飲み込んだ。

施されている呪の印は、まぎれもなく志木家に巢食う霊のものだ。なのに司の命令をきかないということは、その霊が、志木家から完全に切り離されたということを意味する。

——そんなことが起こりうるのか？

野上は、その手に見えない小さなキルト製の手提げを持っていたらしく、手の先に、その中身が散乱していた。司は、その中に入っていたらしい、安産祈願のお守りを手にする。

『ツカサ、鈴森いずみハ、二階ダ。でも近寄らないホウがイイ』

司の耳元でヒルコの声がする。

「どういうことだ？」

司の問いには答えずに、ヒルコは小さくクスクスとさざめき笑う。
『バケモノだ、アレは』

ふと、二階へ続く階段に目をやると、秋子が切迫した顔で、二階へ上っている。

「シュウ！　だめだっ戻れっ」

『いずみ、だめだっ戻れっ』

耳元で耳ざわりな声が聞こえる。いずみは眉間にしわを寄せた。

『いずみ、お願いよ。目を覚ましてっ』

——なんてひどい雑音なの？

女の子の声のようだが、いずみには黒板を爪でひっかいているような音にしか聞こえない。

『いずみ、そんなやつらと口きいちゃダメだって』

いずみは苦痛で顔を顰める。

「うるさいっ、だまって！」

いずみが声を張り上げると、耳ざわりな声はピタリとやんだが、

今度は自分の声のひどさに啞然とした。自分の声のなんと不快なところか。

——私、こんなに嫌な声だったかしら……

志木家は、かなり大きな屋敷らしく、二階にもたくさんの部屋があった。

「華陽さん、どこ？ どこにいるの？」

歌うように華陽に呼びかける。

長く続く廊下を歩いていると、壁に掛けられている絵画や、隅に飾られている骨董品らしい置物などから、次々と何かの影がするりと出てきては、いずみの中に吸い込まれていく。それが決して不快な訳ではないのだけど、それが入っていく度に、少しずつ自分の声への嫌悪感が増えて行く。やがていずみは、口を閉ざした。

黙ったまま一つ一つドアを開けながら進んでいると、廊下のほぼ中央の一際豪華な扉が、そろりと開いた。

「……いずみ……か？」

背の高い白髪の老人が立っていた。青白い顔をして、頬も、伸ばした手も痩せこけているのに、声は弱弱しく掠れているのに、その姿はどこかしら妖艶な空気を纏っている。

「あなたダレ？」

「僕は、おまえの祖父の兄、志木聖だ。ずっとおまえを捜していた。やはり生きていたのだな。秋乃はおまえが死んだと言い張っていたが……」

志木聖は薄く笑う。

「ねえ、華陽さんはどこにいるの？ 教えてよ」

虚ろな瞳で問いかけるいずみに、老人は瞠目する。

「いずみ……まさか、おまえ、鬼と契約を交わしたのか？ そんな馬鹿なことがあるはずがない。おまえが鬼の継承者になるなどということが……神器であるはずのおまえが……ありえない……」

志木聖は、驚愕して首を何度も振る。

「華陽さんはどこ？」

「華陽をどうする？」

「殺します」

いずみの返答に、聖はごくりと唾を呑んだ。

「まさか……おまえ、それを頼んだのではなからうな？　まさか、それを霊達に命令したのではなからうな？」

志木聖は、いずみの肩を掴むと、ガクガクと強い力で揺さぶる。しかし、悲鳴を上げたのはいずみではなく聖の方だった。

「うわあああ、やめろつつ、やめてくれえええ」

いずみに触れた掌から、自分の中にあつた闇が、物凄い勢いで流出していく。志木聖は苦痛に顔を歪ませながら悲鳴を上げた。

二階から聞こえてくる聖の悲鳴に、秋子の腕を掴んでいた司の手から力が抜ける。

「あれは？」

司は階段を駆け上がった。

廊下の先に、志木聖と鈴森いずみが対面する形で立ち尽くしているのが見えた。こちらからは、苦渋に歪んだ聖の顔しか見えない。

「お父さんっ」

慌てて駆け寄る司の耳に声が響く。

『ツカサ、あれにフレルな。しぬゾ』

ヒルコの忠告よりも先に、司の手が背を向けているいずみの肩に伸びる。

ドクッ　ドクドクッ

擬音のままに、何かが自分の中から流れ出す。

――何？

いずみに触れた掌から、自分の中にある闇が急速に吸い取られていく。司がいずみに触れた途端、逆に聖は廊下の隅に弾かれて崩折れた。生きているのかいないのか、聖は廊下に干からびたように横たわる。

一方、司は、まるで感電してしまったように、いずみから手を離

することができない。魂までも吸い取られてしまいそうで、司の顔が苦渋に歪む。

『ツカサ、手をハナせ。すべての霊^モが、流出てしまえば、シヌ!』
いつもは単調で無機質なヒルコの声に焦りの色が混じる。

——しかし……

まるで強力な磁石に吸い付けられているかのように、触れている手を離せない。

——くそっ、こんなことで……

引こうが押そうが貼りついて動かない掌、徐々に脳内に空洞が広がりがつつあるような空虚感。絶望的なまでの圧倒的な力に、司が呻く。

——ここまでと言うことが……

その瞬間、何が起こったのか司には、さっぱり分からなかった。何か細いロープのようなものが司の手に纏わりついて、特段強い力で引かれた訳でもないのに、はらり、と手はいずれみから剥がれた。驚いて振り向いた司の目に、困惑した様子の秋子が映る。

「司さん? どうしたんですか?」

秋子の手が司の手をやんわりと掴んでいる。

「……シユウ……」

呆然と呟く司の耳に、ヒルコの声が響く。

『これは、ヒニクなコトだ。ナワに助けられるトハ』

「ヒルコ、どうなっているんだ? これは……そうだ! お父さん
っ」

廊下に横たわる聖を振り返る。脈を診ると、弱弱しいがまだ息はあるようだ。

「シユウ、人を呼んで、医者に連絡してもらってくれ。シユウ?」
振り返ると、秋子はいずれの肩に手を掛けて、しきりに呼びかけている。秋子がいずみに触れても何も起こらないらしい。

「大丈夫ですか? しっかりしてください。あなた、どうしたんですか?」

いずみは虚ろな瞳のまま立ち尽くし、返事は無かったが、しきりに何かを呟き続けている。

司の耳元で、ヒルコがいつもよりも強ばった声で囁く。

『ツカサ、放つてオケ、あれはヤガテ、シヌ』

「どういうことだ？」

『あれは、トテモ、ややこしいウツワなのだ。気づかなイカ？ 志木ケ中ノ魂魄ガ、あれにスイ込まれテイル。依り代に定着してイナイモノなど一たまりモない。それがドレだけのリヨウか想像がツク力？』

「どれくらいなんだ？」

「ヒヤクではキカヌ」

「……どうしてそんなことに……」

『わからナイ。しかし、これだけはワカル。あれダケの魂魄とケイヤクしてしまえば、どんなに真新シイ魂でも、数時間デ、喰い尽さレル。クイ尽されたタマシイには、長く憑ケヌ。やがて、魂魄ハ肉体カラ離れ、依り代はシヌ。それがキマリだ』

——どうする…… 祟を呼ぶか……

『なにヲしても、モハやムダだ、魂魄はステニ離れヨウトしていル——何？ 早すぎる。まさか、契約が成立しなかったのか？

いずみの肩を掴んでいた秋子は、突然熱いものに触れたかのように手を離れた。少し怯えたように後ずさる秋子の視界から、いずみの姿がかき消されていく。

「え？ えっ？ どうなっているの？ これは……」

いずみの姿は、まるで空気の亀裂に呑み込まれていくかのように、秋子の視界から徐々に消えていく。

「ねえ、あなた、大丈夫なの？」

しかし、最早秋子にはいずみに触れることさえできない。困惑して後ろを振り向くと、後ろに倒れ込んだまま、司も驚いた様子でいずみを見ているが、司の目は、秋子が見ている物とは違うものを見ているようで、視線が何かを追って上下する。秋子も司の視線を追

つてみるが、既にいずみの姿はどこにも見ることができない。

「これは……野いちごだ」

司が掠れた声で呟いた。

「え？ 野いちご？ どこにそんなものが？」

司は立ち上がり、キヨロキヨロ見回している秋子の傍に歩み寄ると目を見張った。

「なんだこれは？」

『ワカラナイ』

司の問いに、ヒルコが僅かに困惑の色を滲ませて返答する。

『フウインかもシレナイ』

「封印……もしこれが、鈴森いずみの封印の印なのだとしたら、ガゴウジを封印したのはこの子だったと言うことなのか？」

司は呆然と呟く。

三種の神器を肅正する為に使役していたガゴウジが封印されたと聞いたのは、もう十年も前のことだっただろうか。野いちごに囲まれて動けないという言葉を最後に寄こしてガゴウジは戻ってこなかったらしい。当時、司はそれには直接関与していなかったのだが、庭に植えてあった野いちごの茂みを、聖が腹立ちまぎれに根こそぎ引っこ抜いていたのを思い出す。華陽に至っては、苺の柄だと言うだけで、癩癩を起して食器を下げさせていたことさえあった。

見る見るうちに、いずみの足もとの床から伸び出した野いちごの蔓は、数え切れないほどで、いずみを覆い隠すように、縛めるように、蔓をうねらせ、葉を茂らせ、あまつさえ、五枚花弁の可憐な花をほころばせ、幾重にもいずみを取り囲んだ。

白い花びらが、風もない廊下に はらりはらりと零れ落ちる。

『バケモノ……』

司の耳元で、ヒルコの密やかな声が響いた。

第十三話 疾風に勁草を知る（4）

「司っ、大丈夫ですか？」

声とともに、ばたばたと複数の足音がして、呆然と立ちつくす司と秋子の後ろでピタリと止まる。

「これは一体……」

青洲とともに駆けつけた佐川が絶句した。

野いちごの蔓は既に、中にいずみがいることなど分らない程びつしりと生い茂っていた。しかしその蔓は、秋子に見えないのと同様に青洲にも見えない。

「これ？ 佐川、これって、どれのことだ？」

困惑したようすの青洲の声に、司が振り向く。

「吉田……青洲……」

呆然とした様子の司を、青洲が鋭く一瞥する。

「悪いが、邪魔をする。いずみを返して欲しいんでね」

「……返すも何も、彼女は勝手にここに来たのであって、俺が閉じ込めている訳でも、隠している訳でもありませんよ」

にらみ合う二人の脇を慌てた家人達が志木聖を病室へと運んでいく。家人たちにも野いちごが見えている様子は無く、坦々と作業は進められているようだ。

「司、いずみさんが自分から事を起こすまで、何もするなと僕は言いませんでしたか？」

こうなった経緯を司から聞いた佐川は、眉間にしわを寄せた。

「……こんなことになるとは思わなかったんだ」

司は慥然と返してから、小さくため息をつく。

「で……魂魄が離れようとしたところでこのような状態になったというのですか？」

「ああ。ヒルコは魂魄が既に離れようとしていると言っていたんだ

が、離れる前にこうなった。封印かもしれないも言ってたな」

「と言うことは、彼女は依り代にならなかったということでしょう
か」

佐川は顎の下に拳を当てる。

「いや、一旦依り代になったはずだ。しかし、何かの理由で契約が
成立しなかった、ということだと思う」

「契約が……成立しない？」

佐川は眉間にしわを寄せる。

鬼を継承する者は、依り代となったのち霊と契約を交わす。依り
代が望みを言い、霊がそれを叶える、という単純なものだ。霊は望
みを叶えた代償として、叶えた望みと同等の魂を喰らうことができ
る。小さな望みならば僅かな魂を、大きな望みならば大量の魂を霊
は喰らうことができる。そこで契約は成立する。

「最初に大きな望みを言ってしまえば、大量の魂を失う分だけ、自
制心が損なわれる。だから、俺は、依り代となる前に、できるだけ
魂を消耗しない訓練を受けて来た。しかし、彼女は違う……」

「だから契約が成立しなかったというのか？」

青洲が首を傾げる。

「いや、そうじゃない。正しい理由は俺にも分からない。契約が成
立しなかったということは、どちらかが履行できなかったというこ
とだと思う。霊が望みを叶えられなかったか、鈴森いずみが望みを
言わなかったか、もしくは、望みを叶えたのち、何らかの理由で、
対価としての魂を喰らわれなかったか……」

「ちよつと待つてください、望みを言わなくても、契約が成立しな
いんですか？」

佐川が目を見開く。

「そうだ」

「その場合はどうなるんだ？」

驚いたように絶句して、考え込むように俯いた佐川を怪訝そうに
見ながら、青洲が先を促す。

「一旦依り代になったのち、靈魂が離れば依り代は死ぬ。契約が成立していようが、していまいが、これは同じだと思う。仁叔父の例がそうなんだろう。仁叔父は、憑かれたその日に他界している。本人に聞いた訳ではないから、何が起こったのか推測でしかないけどね。もしかしたら、血筋のようなものがあつて彼女も似たような状態になっているのかもしれない。しかし、彼女の場合は、厳密な意味で、いまだ魂魄は離れていない。いや、離れられなくなっていると言った方が正確かもしれないが……どうする？」

司は佐川に答えを求めるように見つめる。

「いずれにしても、このままの状態を放っておく訳には行きませんね。とにかく揃えられる物を揃えて除霊を試みましょう。これがいずみさんの施した封印ならば、鈴と名和は揃っているはずですが、後は、石守の力なんですが……」

佐川は青洲の顔を見て、肩を竦める。

「おい、ちよつと待てよ。そんな適当なことをして、いずみちゃんは大丈夫なんだろうな」

青洲は眉間にしわを寄せた。

「そんなこと、誰にも分かりませんよ。だけど、このままでも大丈夫ではないでしょう？」

佐川が深刻な顔で見つめ返す。

「……本当に、ここにいずみちゃんが居るのか？」

生真面目な様子で頷く佐川に、青洲は廊下をもう一度探るように見つめた。

右手の窓側からは、窓越しの柔らかな光と緑陰が射し込んでいる。左手壁側には、各部屋のドアと、その間々には、花をモチーフにした抽象画が掛けられていたり、調度品がさりげなく飾られていたりする。廊下の行き止まりにもドアがあつて、それすら、ここからはつきりと何の障害もなく見渡せる。

「……分からない」

青洲はいらだたしげに、手を突きだした。まるで暗闇の中を歩い

ているかのように手探りで進む。

「もう少し右です。そこに野いちごの、一番太い蔓があるんですが……」

つられたように、佐川も手を伸ばす。しかし、その野いちごの蔓は幻像のように、佐川にも触れることができない。何か目に見えないバリアのようなものがあって、そこから先に触れられない空間があるのだ。

青洲は佐川から事情を聞くと、何もないように見える空間を手さぐりでかき回す。しかし、青洲には、手探りをしようが、目を凝らそうが、何も感じられないのだ。

——俺は何もしてやることができないのか？

青洲の指先が空しく宙を搔く。

「ちくしょうっ」

めちやくちやに腕を振りまわした拳句、肩で息をしながら悪態をついていると、突然、何もない空間からにゅうつと青緑色の腕が伸びてきた。長い鉤爪にゴワゴワした剛毛の生えた腕。その腕が、青洲の胸ぐらをぐいつと掴むと、決して小柄ではない青洲の体を、いとも容易く空間の亀裂の中へ引っ張りこんだ。青洲の上半身が空気の裂け目に吸い込まれていく。

青洲は、一瞬、自分に何が起こったのか分からなかった。何か強い力にぐつと引き寄せられて、視界が一変する。先ほどまで見ていた廊下が消失し、白い靄の奥に、こんもりと茂った緑色の葉っぱと、今を盛りに咲き乱れている野いちごの花が出現したのだった。

——これは……

あっけにとられて目を見張る青洲は、上から降ってくるような野太いどら声で我に返った。

『おまえ、良い匂いがするな』

太い腕が、再び青洲の胸ぐらに伸びて、上着の襟を掴む。上着はまるでティッシュでできていたのかと思うほど、簡単にビリリッ

破れた。破れたスーツの襟は、頭三つ分ほども上にあるその腕の持ち主の口にあてがわれた。どうやら舐めまわしているようだ。

——甘酒……か？

青洲は、あまりにも突然の出来事に、怖がるべきなのか喜ぶべきなのか、感情が迷子になってしまふ。こんなにデカくて怪力な怪物なのだ。怖いと思つて当然なのだろうが、何しろデカ過ぎて、顎から上の、その表情が全く見えないのだ。甘酒の匂いを喜んでいるようだ、危害を加えてこないとは限らない。しかしお陰で、どうやらいずみの封印の中に入れたようだ。あの野いちごの蔓の奥にいますみが居る、そう思うと、先へ進みたい気持ち湧きあがる。とりあえず、せつかく入れた体が外に出てしまわないように、青洲はデカい怪物の足に生えている剛毛を一つかみすると、モヤツと煙っている封印の外側に、頭を押し出してみた。

外では、佐川と司が慌てた様子で、青洲の体を引つ張っていた。

その後ろで、秋子がハラハラした様子で見つめている。

「おい、ちよつと、引つ張るのをやめてくれないか？ 全部抜けたらもう入れなくなるかもしれないじゃないか」

青洲が首だけを出して、苦情を言つと、三人がそれぞれに悲鳴を上げて飛びのいた。

「きゃ——」

「わああああ」

「ぎゃああああ」

三人の驚きように、青洲は一瞬ぼかんとする。しかし、自分の体の位置を見て、真つ青になった。青洲の体は、斜め四十五度に傾いたまま空気の中に上半身だけ消えている。なのに、青洲の首は、その体の隣下方からよきと生え出しているようなのだ。自分の体を足元から見上げて、青洲は瞠目する。

「うわああ、これはどうなってるんだ？」

「吉田さんっ、首がとれちゃった訳じゃないんですかっ」

佐川が真つ青な顔で問いかける。

「とれてないっ、とれてない……と思う……だって、俺、しゃべれるし……」

「そうですか……だったら良かった」

佐川が少しホッとした様子で、しかしまだ声を上ずらせたまま答えた。

「中に野いちごがあるんだ。俺、中に入ってみようと思う」

「大丈夫そうですか？」

「分からない。しかし、なんだかデカい怪物みたいなのがいるんだが、あれはどうしたらいい？」

「中に居るなら、恐らく靈魂の一つなんだろう。なるべく口をきかない方が良さと思います。が、こればかりは僕にも何とも言えない。ありません。ケースバイケースでしょうね」

「いずみに会えたら、俺は、どうすれば良い？」

「僕たちは、今から急いで除霊の準備を始めます。いずみさんに会えたら、できるならそこから連れ出してみてください。できなければ、いずみさんを元気づけてあげてください。吉田さんがチアリーダーでもやってあげれば元気が出るんじゃないですか？」

にやりと笑う佐川を青洲が睨む。

「チアリーダーはともかく、やるだけやってみる。後を頼む」

そう言い残すと、青洲の首は再び空気の亀裂の中にかき消え、次いで体もスルスルと消えて行った。

「秋子さん、ちょっとこれを持ってもらえますか？」

佐川は持参していたスケッチブックを秋子に手渡す。

「これは？」

「これは、いずみさんが施した封印です。中をご覧になっても構いませんよ。あなたなら、その絵の真の意味がお分かりになるでしょう。いよいよ、あなたの力の見せ所になりそうですよ」

怪訝そうに見返す秋子に小さく笑うと、佐川はケータイを取り出した。

「あ、お祖母様ですか？ 祟です。今、志木家にいるのですが、こちらで秋子さんに作ってもらっていた土偶が、もうできあがっていると思うんですが……ええ、あのヘンな形のあれです……」

苦笑いしている秋子に気づくと、

「あ、すみません、祖母は口が悪くて」と佐川はケータイを押えながら謝った。

「……今からそれを大至急、志木家へ届けて欲しいのですよ」

「あ、あの、それ……」

何か言いたげな秋子に気づく様子もなく、佐川は素っ頓狂な声を上げる。

「ええ？ なんですか？ 今度の誕生日にカメオが欲しい？ 何言ってるんですか、こっちは、今それどころじゃ……ええ、そうですよっ！……分かっていいるなら、そんなこと言ってないで……分かりました。分かりましたよ。カメオですねっ。そのかわりに今から五分以内に届けてくださいよっ、でないと、百円シヨップで買いますから、カメオ……ええ？ なんですか？……秋子さんにもう届けてある？」

佐川は、絶句して秋子を見つめる。

「あの……ごめんなさい、あれなら私の部屋に置いてあります」
消え入るような声で謝る秋子の声と、

「百円シヨップ以外で買ったカメオ、楽しみだわねえ」と勝ち誇ったように声高にしゃべる祖母の声を聞きながら、佐川はがっくりとうなだれた。

第十四話 窮すれば通ず（1）（前書き）

窮すれば通ず：困難だからといっても、簡単にあきらまることなく
解決法を考えていると、道が開かれるという意

第十四話 窮すれば通ず(1)

花が散る 小さく 白く 羽のように軽く

ふわり ひらり

ふわり ひらり はらり

髪に、額に、まぶたに、頬に、鼻に、くちびるに

花びらは降り積もる

いずみは白く煙った靄の中で、仰向けに横たわっていた。

体が重くて動かない。まぶたさえも閉じることができない。凍りついたように動かない視界の中で、白い花びらが、遙か上空の霞みの中からチラチラと現れては降り注ぐのを、ただぼんやりと見ていた。

ここは深い闇の沼の底の底。時間と空間が堆積してできた大気の層が幾重にも重なって、その重みで動けないのだと、いずみはぼんやりと理解する。存在するのは、静寂……気が狂いそうなほどの静寂……

——声が聞きたい

『誰の?』

——自分ではない誰かの声……

『誰でもいいの?』

——ちがう!

『じゃあ、誰?』

——分からない……

——お願い……私の名前を呼んで……

——私の名前を……優しく呼んで……

——私は私の名前が分からない

——分からない……分からない……

——助けて……

涙が零れ落ちる。

白い靄は上空で渦巻いて、いずみを責め立てる。

『契約を』

『さもなくば、解放を！』

耳をふさぎたくてもふさげない。いずみは静かに泣き続ける。

——ごめん、ごめんなさい……

——私は、ナニモシテアゲラレない

青洲は深い霧の中を、ひたすら野いちごの茂みを目指して歩いていた。それほど遠くないように見えるのに、野いちごの茂みはいつこうに近くならない。足元がフワフワしていて頼りないのに加えて、足元で粘りつく霞みが絡みついているようで、それが足取りを重くしていた。しかも、後ろから、あのデカい怪物がずっとついて来るので、それも気になって後ろばかり振り向いてしまう。

「おい、ついて来るなって言ってるだろ？」

青洲は眉間にしわを寄せて文句を言う。

ところが何度文句を言っても、怪物は青洲が立ち止まると止まり、歩き始めると、再び怪物も後をついて歩き始めるのだ。先ほど破かれた背広の襟の切れ端は、食べてしまったのか、既がない。

——まあ、ウール100%だから、食べても大丈夫なのかな？

ふと気づいて、青洲は上着の胸元をクンクンと臭ってみる。未だに濃厚な甘酒の匂いがする。

——これか？　これのせいなのか？

青洲は上着を脱ぎ、ネクタイも外す。どちらも結構な甘酒の匂いが染みついている。ネクタイをズボンのポケットに丸めて押しこむと、青洲は上着のタグを確認した。確かに表地はウール100%だが、裏地はキュプラ100%と書かれてある。

——キュプラ……化繊だっけ？　確か、綿を加工したものだったか……
……良くわからんな。

青洲は上着を手に、後ろを振り返った。

「おい、これをやるから、もうついて来るなよ。ほらっ」

青洲は怪物に上着を放り投げる。

「表地は羊の毛だが、裏地は化繊かもしれん。裏地を食うのはやめておけ。腹を壊すぞ」

果たして怪物が腹を壊すのかどうか分らなかったが、一応注意はしておいた方が良さそうだと思った訳なのだが、怪物は上着を手にした途端、一瞬途方に暮れたように立ち止まった。しかし、すぐに上着を持ったまま青洲の後を追う。

——なんなんだよ。どうしてついて来るんだ？

青洲も途方に暮れたまま歩を進める。しかし野いちこの茂みは一向に近づく気配がない。そして相変わらず怪物はついて来る。

「おいー、頼むからついて来るのをやめてくれないか？」

青洲はとうとう音を上げた。

『願い事を言うが良い』

怪物は突然野太い声を響かせて話しかけてきた。青洲は瞠目する。——願い事？　これが霊との契約というやつか？

しかし、志木司の説明によると、契約は依り代になって後のことだと聞いている。いずみの結界に入ったことによって自分も依り代になったと言うことなのか。青洲は考え込む。

「一つ、訊いてもいいか？」

青洲が考え込んで立ち止まったのを幸いに、どっかりと座りこんで嬉々として背広の裏地をピリピリ剥がし始めた怪物に問いかけた。
『なんだ？』

怪物は、背広の胸ポケットを口に放り込みながら、ぐぐもった声で返事をする。

「願い事を言ったら、おまえは俺の魂を食うのか？」

生真面目な顔で問いかける青洲に、怪物はむしゃむしゃ咀嚼していた口を止めて、ぽかんと青洲の顔を見上げた。

『何故？』

「願い事を叶えれば、その願いの代価として魂を喰らう。それが契

約なんじゃないのか？」

怪物は青洲の言葉に、面白そうに顔を歪めて、くくく、と笑うと再び咀嚼を始め、ごくりと飲み込んだ。

『おまえは依り代にはならぬ。願い事を叶えるのは、甘酒付きの背広の礼だ。だから、叶える願い事は一つだけ。つまり、背広の代価と言う訳だ。久々の甘酒だ、もう少しサービスしてやっても良いとは思うが、なにしろ量が少ない……』

怪物は不満げに口をとがらせた。青緑色の皮膚に、つり上がった眦、口から覗く歯は肉食恐竜のようにとがっている、しかし、拗ねた様子のその表情がやけに子どもっぽくて、青洲は苦笑する。天真爛漫な鬼、もしそんなものがあるのならば、目の前に居るこいつの事かもしれないと笑いをかみ殺す。

——背広代なら問題ないか。

気を取り直して、青洲は今一番難儀していることを打開することにした。

「では、あの野いちごの中に行きたいんだが、連れて行ってくれるか？」

『あの中に行きたいのか？』

怪物になら、さほど難しくは無いかもしれないと考えて口にした青洲の願いに、怪物は顔を顰めた。

「ああ、そうだけど……」

『どうしてもか？』

「？」

何故か憐れんだ瞳で自分を見つめる怪物を怪訝そうに見返しながら、青洲は頷く。

『どうしても行くと云うのなら仕方がない』

怪物は青洲に近づくと、頭を右手で鷲づかみにし、左手と左腕で青洲の体を掴んで固定する。

「ちょ、ちょっと待てよ。何をするつもりだ？」

今にも首を引っこ抜かれそうな体勢に、青洲は慌てた。

『あの中に入れるのは魂魄のみだ。案ずるな。楽に殺してやる』

そう言いながら、怪物は頭を持つ手に力を込めた。

「待て待て待て待てつ、ストップだっ」

青洲の制止に、怪物の手から力が抜ける。

「ちょ、ちよつと待ってくれ。願いを言いなおす。厳密に言えば、俺はあの中に居る鈴森いずみに会いたいんだ。いずみを元の場所に連れ戻したいんだ。更に言うなら、俺はいずみに安心して暮らせる場所を作ってやりたいんだ。だから元の場所に戻った時に、俺が死んでいては意味がない。いずみは……死んでいない、絶対に死んでないと思う。だから俺も死ぬわけにはいかないんだっ」

少々混乱気味に願いを言い直す青洲に、怪物は小さく首を傾げた。

『鈴森……だと?』

怪物は幽かに動揺した様子だった。

「そうだ。鈴森いずみ……俺の大事な人だ」

『鈴森……いずみ……』

怪物は腕を組んだまま、何かを必死に考えこんでいるように、もしくは、何かを思い出そうとしているように、見えた。

「あ、そうだつ、あの野いちこの近くまで連れて行ってもらうことはできるか?あの中には魂魄しか入れないとしても、近くまで行くことはできるのだろう?」

とにかく近くまで行ってみて、それから次の事を考える。今、青洲に思いつけることは、それだけだった。

『よかるう』

青洲の言葉に、怪物は、ふと物思いから目覚めたようにぼんやりと青洲を見つめた。が、次の瞬間、怪物は青洲の脇にぶつとい腕をグイッと差し込んで、粘る霞が広がる地面を蹴って飛び上がった。

第十四話 窮すれば通ず(2)

——その女は、

——鳶色の愛らしい瞳をしていた。

——鈴を転がすような涼やかな声をしていた。

——涼やかな声で、優しく、何度も名を呼んだ。

——かつて、自分が持っていた名を……

——今は失ってしまった……俺の名を……

青洲が思うに、怪物に脇を挟まれて空中を飛ぶという奇怪な経験は、一生に一度で十分だと思う。厳密に言つと、怪物は飛んだのではない跳んだのだ。野いちごの茂みまで、怪物は三度跳躍した。その度に、青洲は自由落下による浮遊感と着地による衝撃を繰り返す。安全だと保証付きの遊園地の遊具でさえ十分怖いのに、その保証がない怪物の腕に抱えられて跳躍を繰り返しながら、青洲は血が泡立つ恐怖を感じていた。野いちごの葉に触れられる場所まで来たところで、怪物は青洲を放した。放された青洲は、その場にへたりこむ『着いたぞ。ここでもいいのか？』

「……あ、ああ、ここで、いい」

壊れたおもちゃの人形のように、青洲は、へたり込んだままコクコクと首を何度も縦に振った。

一息ついて見回すと、地面は辺り一面白い花びらで覆い尽くされていた。野いちごの馥郁とした香りが、その場を包み込んでいて、何故だか青洲を切ない気持ちにさせる。野いちごの茂みは、無数に伸びた蔓同士が絡み合つて、まるで巨大な塔のようだ。野いちごは、上空の霞みの中に吸い込まれるように、どこまでもどこまでも伸びていて、その先端は下から見ることもできない。ジャックと豆の木の野いちごバージョンだ。やがて、青洲は沈黙したまま、座りこんだ。

——ああ、なるほど、確かに、ここにいずみがいる。

青洲はそう確信する。いずみがいつも纏っている気配、それがこの野いちごの茂みから発散されていた。

「いずみちゃん、ここまで来たよ。俺はこれからどうすればいい？ どうしたら君に辿りつける？ 君に……会いたい……会いたいんだ」

野いちごの蔓にそつと手を這わせながら、青洲は問いかける。しかし青洲の問いかけに答えは無く、ただ、はらはらと花びらが舞い降りる。

ふと気づいて視線を移すと、野いちごの前で怪物が不思議な行動をとっていた。デカい手の親指と人差し指を使って、ガラス細工でも触ろうとしているかのように用心深く、野いちごの細い枝をかき分けては、覗きこみ、またかき分けては覗きこむ。小さな子どもが通れるくらいのトンネルができたところで、怪物はトンネルに向かっておいでおいでをした。

何事かと、後ろから青洲が見守っていると、中から何やらぼんやりと光る塊が三つモゾモゾと這い出してきた。光の塊は、野いちごの外に出ると、むくむく変形して子どもの形になった。青洲はゴシゴシと目を擦る。小さな子どもだ。幼稚園にあがる前よりもまだ小さいかもしれない。

その小さな子どもたちの前で、怪物は可能な限り体を小さくして屈みこみ、何度かその鋭い鉤爪付きのゴツイ手で、子どもたちを触ろうとしてはやめ、触ろうとしてはやめを繰り返し、ついには観念したように青洲を振り返った。

『ちよいと手伝ってくれないか？ この子たちの呪を解いてやりたいのだが……』

先ほどのしゃべりかたとは声が全く違う。子どもたちを怖がらせない為なのか、野太い声をなるべく出さないように努力しているらしい。青洲は啞然としつつ、ぎこちなく頷く。

「あ？ あ、ああ、いいよ。どうすればいいんだ？」

『口を塞いでいる野いちごの蔓があるだろう？ その結び目を掴んでくれ』

「口を塞いでいる蔓？ どこにそんなものが……」

確かに子どもたちの口は、何かで貼り付けられているのかと思うくらい、真一文字に引き結ばれている。

『もしかして、おまえには見えないのか？ 見えないくせに、よくここまで来られたものだな』

怪物はあきれたように青洲を見たが、自分が引つ張りこんでおきながら、よく来られたは、ないものだと言青洲はため息をつく。

「見えなければ手伝えないのか？」

『いや、俺が指示した場所を掴んでくれ』

青洲が指示された場所を手さぐりでつかむと、つかんだ方の青洲の腕を怪物がつかんで、何やらぶつぶつと呟く。怪物が呪文を唱え終わると、まるでジッパーが下ろされたように、小さな口がぽかんと開いた。金魚が苦しげに呼吸をするように、しばらくパクパクと口を閉じたり開いたりした後、男の子は突然青洲目指して飛びかかってきた。

『おじさんっ！』

小さな手が、青洲のズボンの膝上を握りしめてしがみつく。

「えっ？」

青洲は硬直したまま、怪物を見上げる。怪物は一瞬、腑に落ちない顔をしたが、すぐさま青洲に次の指示を出して、次々と呪を解除していった。三人すべてを解除した時、青洲は一人を肩車し、一人をおんぶし、そして残りの一人を抱っこするという状態になっていた。

『おまえが、その子たちの父親なのか？』

訝しげに問う怪物に、青洲は首を激しく横に振った。同時に子どもたちも激しく首を横に振る。

「君たちは誰だい？ 俺の知ってる子？」

青洲がそう聞いた途端、子どもたちは口々にがりたてた。

いずみが……とか、野いちこの封印が……とか、ガゴウジが……とか、魂魄が……とか、青洲が……とか、それぞれがそれぞれに言いたいことを一気にまくしたてるので、何が何だか分からない。

「ちよつと、ストップ、ストップ。一人ずつ話さなきゃダメだ。ちつとも聞きとれない」

青洲も怪物と同じように、地面に座り込んで子どもたちの目線に合わせる。子どもたちは、男の子二人と女の子一人という構成のようだ。兄妹なのだろう、面ざしがよく似ている。そして、もう一人、面ざしが似ている人に青洲は心当たりがあつた。

——この子たち、いずみちゃんに良く似ている。

一人ずつと言われて、一人の男の子が話し始めた。

「僕たち、この世に生まれられなかったいずみの兄妹なんです。いずみの中にガゴウジが入りこんできて、それでいずみ、依り代になつちやつたんです。あり得ないことなのに……僕たちは神器なのに……」

口ごもる男の子の後を、女の子が引き取る。

「でも、いずみは契約を結ぶことができなかったの。だって、神器なんだもの。依り代になれるわけがないんだから……」

子どもたちの説明はこうだった。いずみは、複雑な資質を持っているのだ。依り代となる志木家の血と、依り代になれない神器の血しかも神器のうち、鎮める為の鈴守家の血と、縛る為の名和家の血を受け継いでいる。鎮める為の血は魂魄を引き寄せ、縛る為の血が繋ぎとめる。結果として、結界の中には魂魄がひしめき合い、離れようにも離れられない状態になっているのだそうだ。しかも、依り代となりながら、契約を結べないままなので、依り代としても機能しない。様々な魂魄が、あの野いちこの結界の中で怨嗟の声をあげて渦巻いているのだと言う。

「どうなるんだ？ どうすればいい？」

子どもたちの説明に、青洲は困惑する。

『このままでは、結界がもたない。見てよ、ほら』

指し示された野いちごの根っこの部分を見ると、他の部分とは違って赤みがかった金の色が光を乱反射している。

『このままだと、いずみ自身が封印として結晶化してしまうわ。青洲さん、助けてやって、お願いよ』

青洲は瞠目する。島にやってきた歴史学者が神社裏の禁足地から掘り出したという封印。彼は、それをヒイロ力ネと間違えたのだった。太陽のように赤い色で、古代日本で使われていたと言う謎の金属。

——封印として結晶……

『おじさん、いずみは俺たちの妹なんだ。力を貸してやってくれよ』

『どうすればいいんだ？』

『いずみは自分の名前を失ってる。探し出して、思い出させて欲しいんだ』

『それは、この中に入らなければならないということか？』

三人は、一斉に頷いた。

この中に入ると言うことは、つまり、青洲自身が魂魄にならねばならないと言うことだ。青洲はごくりと唾を飲み込んだ。

いずみを助ける、その為にここまでやってきた。

「……いいよ、やろっ」

少しの沈黙の後、青洲は静かに頷いた。

第十四話 窮すれば通ず(3)

結界となっている野いちごの根元は、じわじわと結晶化を進めている様子だった。それを一瞥してから、意を決したように、青洲は怪物の傍に歩み寄った。

「これをやろう。もう一つ願いをきいてくれ」

青洲はズボンのポケットにつっこんでいた甘酒付きのネクタイを取り出す。ネクタイは絹100%、確認済みだ。

——虫とは言え、生き物が作ったものなら、食っても大丈夫だろう。きつと……

『おまえ、この結界の中に入るつもりなのか？』

怪物は難しい顔をして問う。

「そうするよりほかに、いずみを助けだす方法がなさそうだからね」

青洲は硬い表情で答える。

『おまえなしで、鈴森いずみはどうするのだ？ おまえは、鈴森いずみに安心して暮らせる場所を作ってやるんじゃないのか？』

「……いずみちゃんは、一人じゃない。生きてさえいれば、俺じゃなくても誰かがそんな場所を作ってくれると思う。彼女は……そうしてあげたくなるような人だから……だから、きつと大丈夫だ」

青洲は苦しげに言葉を絞り出した。

それまで黙って青洲と怪物の会話を聞いていた三兄妹は、首を傾げる。

『ねえ、おじさん、その話はまだ続くの？ 早くしないといずみが

……』

「そうだったね、悪かったよ。じゃあ、ひとつ頼むよ」

青洲は苦笑してから、怪物に目で合図する。怪物が、青洲の首をへし折ろうと手を掛けた瞬間、三兄妹たちが悲鳴を上げた。

『きゃあああ』

『待て待て待て待てっ』

『ストップ、ストップだよぉ』

三兄姉は、怪物のぶつとい腕に取り縋ったり、ペチペチ叩いたり、ごわごわの髪が渦巻いている頭にかぶりついたりしている。

『そんなことをしたらおじさんが死んじゃうだろ？』

『ちよつとー、青洲さんになんてことすんのよぉ』

『二人とも何考えてるんだよぉ、意味不明だぜ』

口々に文句を言う。

「だって、結界の中に入ってることは、魂魄にならなきゃ入れないってことだろう？」

怪訝そうに問う青洲に、三人が大きなため息をついた。

『そんなことをして、元の世界に戻った時、おじさんがいなかったら、いずみはまた路頭に迷うよ。あれはおじさんが思ってるほど強くないし、賢くないし、器用でもない』

「しかし……じゃあ、どうしろって……」

青洲は困惑して口ごもる。

『青洲さんは、私たちがいずみと同様に、名和の血を継いでいるってことを忘れていない？』

いずみに良く似た女の子が小さく笑んで青洲の手をそつと握った。小さい頃のいずみは、きつとこんなだったに違いないと青洲は思う。

「名和の血……」

「そう。名和は、すなわち縄。縛めるものであると同時に、繋ぎとめるものもあるんだ。こんな風にね……」

二人の男の子たちが、青洲の両の脚にそれぞれ取り縋る。その上で、女の子がグツと青洲の手を引っ張ると、青洲は、青洲の体からするりとぬけた。驚いて振り返ると、蟬の抜け殻になったかのような青洲の体が、同じ場所に立ちつくしていて、そこから青洲の本体まで細い糸のような白っぽい縄状のものがつながっている。

『僕たちは、おじさんが戻ってくるまでここで繋ぎとめておくから、必ず、必ず、いずみを連れて戻ってきて』

青洲は、しばし呆然としたまま立ち尽くす。後方で、怪物も目を

見張っているのが見えた。

先を促すように手を引く女の子を制止すると、青洲は引き返して、青洲の脚にしがみ付いている男の子二人に、しゃがみこんで、それぞれ腕を回して抱きしめた。戸惑った男の子たちが互いに顔を見合わせる。

「ありがとう。君たちは……この世に生を受けられない辛い運命を背負った子たちなのに……なんて立派な兄弟たちなんだろうね。いずみは何て良い兄弟を持ったんだろう」

涙で声が震える。青洲の言葉を聞いた途端、三人を取り囲んでいた白っぽい光が、急に温かみのある金色の光に明滅する。

『青洲さん……』

後ろから、女の子が青洲の肩にそつと触れる。青洲は振り返って、女の子も抱きしめた。女の子は頬を赤らめて、くすぐったそうに笑うと、青洲をひしつと抱きしめ返す。

「おじさん、思い出したよ。以前お金に困って、消費者金融でお金を借りようとした時、君が、止めてくれたんじゃないか？」

いずみの入院費の前金の為に、お金を引き出そうとした機械の防犯用ミラーに映った女の子の顔が、その女の子に良く似ていることに青洲は気づいた。

『あれ、三人でやったのよ。ばれちゃった？』

女の子は決まり悪そうに笑ったが、他の男の子たちは、やけに嬉しそうに悪戯っぽく破顔した。

「本当に、本当にありがとう」

青洲は何度も何度も、小さな子どもたちの頭を代わる代わるクシヤクシヤと撫でた。

『じゃあ、青洲さん行きましよ。早くしないと……』

「そうだね」

『ここから入れるわ。でもね、私たちは入れないの。いずみに拒絶されているから』

女の子は悲しげに青洲を振り返る。

「分かった。大丈夫だ。任せておいてくれよ。ちゃんといずみを連れて帰るから」

三人に頷くと、青洲は、先ほど三人が這い出してきた野いちごの結界に開いた穴に、身を屈めて入りこんだ。

結界の中は、粘るような闇が支配していた。

一筋の光も射さない闇の砂漠。空には嵐の前のような暗く渦巻く分厚い雲。しんと底冷えのする大気が這いずる大地。生き物の気配は無く、ただ、静寂と死の匂いが濃密に淀んでいる。

——なんて暗く悲しい場所なんだろう……

青洲は、絶え間なく意味もなく押し寄せる絶望感にさいなまれつつも、なんとか自分を鼓舞して歩き出す。数歩進んでため息をつき、更に数歩進んで、意味もなく慟哭したくなる気持ちを宥める為に蹲る。

——こんな寂しい場所に、いずみはいつから居るんだろう、いや、居たんだろう……

蹲ったまま、齒を食いしばって声を殺して泣く。

『おい、おまえ、青洲という名前なのか？』

蹲っている青洲の頭上から野太い声が響いた。青洲は、驚いて弾かれた様に顔を上げる。あの怪物が付いて来ていた。

「おまえ……付いてきたのか？」

青洲は呆けたように上を見上げる。

『どんな字を書くんだ？』

怪物は相変わらず、もつきゅもつきゅと口を動かしていて、青洲が先ほど渡したネクタイが口の端からはみ出している。青洲は、途方にくれた寂しい世界に突然現れた怪物に、嬉しさのあまり頬ずりしそうになったが、ぐっと思いとどまった。

「青洲の青は色の『青』だ。洲は長州の『州』に三ずいを付けたものだ。それがどうかしたか？」

怪訝そうに問う青洲を無視して、怪物はブツブツと呟く。

『青……鈴森……』

怪物と会話をして、少し気分が落ち着いてきた青洲は、再び立ち上がって歩き出した。振り向くと、怪物もブツブツ呟きながら歩き出す。少し安堵した気持ちで、先ほどよりも格段に軽い足取りで、青洲は歩き続けた。

地平線まで続いているように見える砂の海の上に、ぼんやりと白く光るものを見つけたのは、間もなくのことだった。

「あれは……なんだろう？」

『あれは、魂魄だ。いや、人かな？ いや、ありえないか……なんだろうな』

頼りない返答でも返ってくるだけでした。青洲は力を得た思いで、白い光に駆け寄った。

——そこには、白い光に包まれて横たわるいずみが……居た。

青洲は息をのんでいずみを見つめる。

「いずみつ」

駆け寄る青洲の足元を乾いた砂がすくう。

「いずみつ、いずみつ」

沼のように沈んでいく砂に、青洲は泳ぐようにもがきながら手を伸ばす。ようやくの思いで、いずみの手に触れた途端、青洲はいずみとともに砂の沼に呑み込まれてしまった。

第十四話 窮すれば通ず(4)

冷たく暗い水晶の粒子にともに引きずり込まれながら、青洲はいずみの手をしつかりと握りしめた。小さな冷たい手。

——もう離さない……

しかし、砂に体中を圧迫されて、次第に息さえできなくなる。

——くそっ、ここまできて……くっ……

やがて青洲は意識を手放した。

雨が降っていた。

しのつく冷たい雨だ。

時折、雨漏りがする粗末な小屋で、子どもは、兄妹たちと寒さをやり過ごそうと身を寄せ合う。

ある日、鎌や鋤を持った大人たちが粗末な小屋にやってきて、身を寄せ合っている彼女を兄妹から引き剥がした。病に伏せていた母が、大人たちの足に縋って取り返そうとしたが、願いは聞き届けられず、強かに打ち倒されて水たまりに投げ出された。

「おつかさん！ おつかさんっ」

彼女は必死に手を伸ばす。最後に見た母は、ずぶぬれの手を突き出したまま顔を歪めて泣いていた。すっかりやつれて青白い顔に、濡れて乱れた髪が貼りついている。

——あんなに濡れちゃあ、おつかさんが死んでしまう。病気なのに

……

彼女は母を失う恐怖に泣きわめいた。誰かが、うるさいと彼女の頬を打つ。

雨が降っていた。

火がついたように泣きわめく彼女の上にも、伏せたまま慟哭する母親の上にも、それに取り縋って泣く兄妹たちの上にも、容赦なく雨は降り続けた。

三年にもわたる冷たい夏があった。

村には、飢餓と伝染病が蔓延していた。

彼女が心配した母よりも、少しだけ早く天に召されることなど、その時彼女は知る由もなかった。

彼女は災異を鎮める為の、神への贄となつたのだった。

青洲は目を覚まして、自分が号泣していることに気づく。辺りは一面、白い靄で包まれていて、真つ白な雪片のような花びらが、はらはらはらと落ちてくる。身を起こしてみると、傍らにいずみが座つて、青洲を見つめていた。少し大人びた穏やかな笑顔を湛えている。

『青洲さん、やっぱり来てくれた。来てくれるって信じてた』

そう言つて、いずみは花のようにほほ笑んだ。その笑顔に、青洲は安堵する。

「いずみちゃん、良かった。無事だったんだね」

青洲は、いずみに手を伸ばす。青白い頬はひんやりと冷たい。

『青洲さん、早くここから出ましょう。ぐずぐずしていたら、出られなくなってしまうわ』

焦っている様子のいずみに、青洲は大きく肯いた。

「そうだね。でも、俺、どうやってここから出たらいいのか分からないんだけど……君は分かるかい？」

『もちろんよ。何か願い事を言ってくれる？ そうしたら、私がここから連れ出してあげる』

「……願い事？」

幽かな違和感があった。かみ合わせがずれて、軽く空回りする歯車の様な気持の悪い違和感。青洲は眉間にしわを寄せる。

『そう、願い事よ』

「……どんな願い事でもいいのか？」

『うん』

青洲はごくりと唾を飲み込んだ。

——これは、霊との契約に似ていないか？ 願うことなど唯一つだ。ここから二人で無事に脱出すること。どんな願い事でもいいとは、どういうことだ？

「君は……誰だ？」

「……」

青洲が問いかけた瞬間、悲しげに顔を歪めたいずみの輪郭がぼやけていく。青洲が驚愕している目の前で、いずみが、空気に溶け込んでいくように霧消した。

『おい、大丈夫なのか？』

ぼんやりと座り込む青洲の視界に、怪物が大あくびをしながら問いかける。ふと我に返ると、いずみの姿も、白く光っていた物体も消え失せていた。

「いずみちゃんは？」

青洲は慌てて辺りを見回す。

『あれは鈴森いずみではない。結界の中に閉じ込められた魂魄の一つだ。おまえを依り代にして、ここから出ようと考えたらしいが……まあ、おまえを依り代にするなど、一か八かの賭けだろうな。それだけ、皆、切羽詰まっているのだ』

怪物はくつくつと面白そうに笑った。

「いずみじゃなかったのか……」

青洲は放心したように呟いた。

——それにしても、あの夢が本当の事ならば、なんと悲しい過去を背負った魂魄なのだろう。あのような悲しい魂達が、ここに閉じ込められているのだとしたら……

青洲の考えを、怪物の野太い声が遮る。

『同情はせんことだ。所詮、成仏できなかった魂魄だからな。業が深かったのだろう』

「……あんたも、そうなんだろう？」

青洲は怪物を見上げる。

『まあな。俺もまた、業をしょってる。なんだったか忘れたけどな』
怪物の呑気な返答に、青洲はがくつと肩を落とす。

「忘れるようなことで、さまようなよ」

足元の靄が時折切れる度に、見える大地の色が徐々に赤みを帯びた金色に変わっていく。青洲はいたたまれない心持で、それを眺めた。

「なあ、この結界の中で、このまま結晶化してしまったら、俺たちはどうなるんだろうな？」

『なんだ、もう諦めたのか？』

「いや、諦めた訳じゃない。結晶化するにしても、絶対いずみだけは探しだすさ。彼女をこんな所で一人ぼっちにしておきたくないからね」

青洲は立ち上がって、ズボンの尻をはたはた叩く。

『おまえが一緒でも、結晶化してしまえば何の意味もないだろう？』

呆れたように言いながら怪物もまた、立ち上がる。

「それでも、傍に居てやりたいんだ」

青洲の返答に、怪物は小さく首を傾げた。少し嬉しそうにほほ笑む。

『ならば、呼んでみる』

「え？」

『力の限り、名を呼んでみるがいい』

怪物の提案に、青洲は息をのむ。

——どうして今まで気づかなかったんだろう。これはいずみの結界なのだ。ならば、すべてが、いずみのはずではないか。そもそも、いずみの兄妹たちが言っていたではないか。いずみは名前を失っている。だから思い出させてやって欲しいと……。

青洲は声の限りにいずみの名前を呼んだ。

「いずみーっ、鈴森いずみっ、返事をしろ。鈴森いずみーっ。おま

えは鈴森いずみなんだぞつ、この声が聞こえたら返事をしろつ」

何度も何度も名を呼ぶ。力の限り、声の続く限り。

苦しげに体を折り曲げて息を整えている青洲が、再び名を呼ぼうと体を起こした時、突然、重く垂れ込めていた雲が割れ、一筋の光が射し込んだ。射しこんだ光は、金色に輝き始めていた大地に丸い白い染み作りだす。青洲が眩しさのあまり目を細めた次の瞬間、そこにいずみが立っていた。泣きはらした後の様なぼんやりした瞳。憔悴しきった儚げな立ち姿。

「いずみちゃん」

青洲が喜色を湛えて駆け寄ると、いずみは戸惑ったように数歩後ずさった。

「……いずみちゃん？ 俺だよ。青洲だ。覚えてないのか？」

「青洲さん……」

いずみは途方に暮れたように、青洲の名を呼んだ。

「良かった。覚えているんだな？ 自分の名前も分かるんだな？」
小さく頷くいずみを、青洲は抱きしめた。その温かな頬に指を滑らす。

「青洲さん…… どうして青洲さんがここに？」

「探した。君の事をずっと探していた。ずっと会いたかった。帰ろう、吉田に。俺の元に戻っておいで」

青洲の言葉に、いずみは静かに泣き始めた。

「青洲さん、私は……私、もう戻れない。良く覚えていないんだけど、たぶん私、誰かを……あの家の誰かを……殺しちゃったわ。マメ太を……マメ太を殺した……華陽さんが憎かったの。だから華陽さんに会いに行ったの……そうしたら……」

しゃくりあげながら、懸命に説明するいずみを青洲が制止する。
「分かっている。全部分かっているから。でも、君は誰も殺してない。だから心配なくていいんだ。それに、いいかい、良く聞いてくれ。マメ太は死んでない。無事なんだ。かなり危険な状態だったけど、持ち直した。またマメ太が命を狙われるんじゃないかって心配だっ

たから、白舟と話し合つて、君にまで嘘をついた。そんなことをしなければ良かったと、今では後悔している。吉田で、マメ太が待つてゐる。だから、いずみちゃん、帰ろう吉田に」

「……マメ太が……生きてる……」

「そうだ、ちゃんと生きていて、君が吉田から出ていくまで、君の母乳を飲んで少しずつ元気になっていたんだよ。今ではもう、すっかり元気なんだ」

「良かった……マメ太……マメ太に会いたい」
いずみは泣きじゃくつた。

「うん、会いに行こう。ここから出よう」

青洲の言葉に、しかし、いずみは悲しげに体を離れた。

「青洲さん……マメ太のことをお願いします」

「何言つてるんだよ、一緒にマメ太に会いに行くんだろ？」

「私は、ここから出られない……ほら、もうこんなになつてゐる」

悲しげないずみの視線の先を追つて、青洲は瞠目する。いずみの足は、金色に輝き始めていた大地と溶接されたかのように一体化していた。慌てて、青洲はいずみを抱き上げたが、それはできなかった。力を入れれば入れるだけいずみに苦痛を与えてしまうようで、

青洲は一旦断念する。

「どうしたらいいんだっ」

青洲は困惑する。

「……青洲さんはマメ太に必要な人だから、青洲さんだけでもここを出てください。マメ太を、マメ太をどうかよろしくお願いします」

そう言いながら、いずみは青洲の両手をとつて自分の首に当てた。

「青洲さん。今ならまだ結界を壊すことができます。だからお願い……私を殺して」

第十四話 窮すれば通ず(5)

いずみの細い首に手を当てたまま、青洲は途方に暮れる。

「いずみちゃん、そんなことできない……そんなこと……できる訳がないだろ？」

青洲の両手が、力なくはらりと落ちる。いずみは再び青洲の両手をとって首に当てた。金色の大地はじわりじわりと這い上って、既にいずみの膝までを黄金色に変性させていた。

いずみは、島で見た夢を思い出す。

悪夢の中で、青洲に助けを求めると、いつでも青洲は助けにきてくれた。しかし、最後にみた悪夢の中で、青洲は悲しげな顔でいずみを縊り殺そうとしていたのだ。なんという、暗示的な夢……。

——あの夢が現実になる時が来たんだ……

いずみは、青洲の目を真っ直ぐに見つめた。

「……青洲さん、青洲さんは元の世界に戻ってください。そしてマメ太のことをお願いします。私ね、青洲さんに会えて幸せだった。今まで生きてきた中で一番幸せだったの。私は、青洲さんがくれた幸せな記憶があるから……私はもう大丈夫。だけど、マメ太は、これから、きっと青洲さんが必要になる。だからお願い、青洲さん……」

切々と訴えるいずみの懇願に、青洲は絶望的な思いで両手に力をいれた。しかし、すぐに再び青洲の両手から力が抜ける。

——駄目だ、できない。いずみを失って元の世界に戻ったところで、どうなるというんだ？

「青洲さん……お願いよ……」

泣きじゃくるいずみを抱きしめたまま、青洲は首を振る。

「いずみちゃん、やっぱりできないよ。マメ太には、白舟も赤秀も親父だつてついてる。だから心配ないんだ。親父なんて、自分の本当の子どもみたいにつきつきりだよ」

「父さまが……」

いずみは目を見張る。

「^{かある}馨って、名前までつけちゃったんだ。俺たち、兄弟みんなで止めたんだけどね。いずみの了解もなしに勝手なことするなつて。でも、もう馨って名前に反応するまでになつてて……ごめん。だから、マメ太は何の心配もいらないんだ。俺は、君とここに残る。もう二度と、君を失いたくないんだよ」

「青洲さん……」

青洲に強く抱きしめられながら、いずみは、ひっそりと涙を流した。

「あの子は……マメ太は、馨って名づけられて喜んでいると思う。そう呼ばれて、私も嬉しい」

——父さま……ありがとう……馨と名づけてくれて……

あの時、吉田の奥病棟で、龍生は確かにこう言ったのだ。

『誰に分からなくても、わしの目を誤魔化すことはできないさ、薫。なあ？ そうだろう？』と……

あの夢に出て来た少年……照れ臭そうに俯いた横顔を、いずみははつきりと思い出していた。

——良かった。馨……無事で……本当に良かった。

それまで、少し離れたところで、ぼんやりと青洲といずみのやりとりを聞いていた怪物が、ゆるゆると遠慮がちに近寄ってきた。青洲には目もくれず、いずみの顔を不躰なまでに、じろじろと覗きこむ。いずみは驚いて青洲にしがみついた。

「ああ、いずみちゃん、こいつは……えっと……俺をここまで連れて来てくれた怪物なんだ。名前は知らないんだけど……」

怪物は、青洲の説明が耳に入っていないのか、無言のまま、そろりと遠慮がちにいずみの髪に手を伸ばす。いずみが小さな悲鳴を上げた。

「おいー、怖がるだろ？ やめろよ」

青洲の制止も聞かず、更に怪物は、鋭い鉤爪のついた指先でいずみの顎をつまむとグイッと無理やり上を向かせた。

「やめろって」

怯えて固まってしまったはずみから、青洲は手を払いのけた。

『これが、鈴森いずみか？』

「そうだ」

少し呆然とした表情の怪物に青洲が答える。怪物は、ぶつぶつと呟き始めた。

『その女は、鶯色の愛らしい瞳をしていた。鈴を転がすような涼やかな声^{ひと}をしていた。涼やかな声で、優しく、何度も名を呼んだ。かつて、俺が持っていた名を……今は失ってしまった……俺の名を……。彼女の名前は……鈴森……青……せい……』

怪物の独白に、青洲は瞠目する。

「鈴森……青子と今言ったか？ あんた……あんた、まさか……志木……仁……なのか？」

青洲の問いかけに、怪物は一瞬驚愕の表情を浮かべて、しかし、次の瞬間途方に暮れたように呟いた。

『そうだ。俺は……志木仁だ。思い出した……思い出した……』

「ねえ、青洲さん、志木仁って誰なの？ 青洲さんの知っている人だったの？」

怯えたまま問ういずみに、青洲も少し途方に暮れて説明する。

——こんな所に、志木仁が……。

「いずみちゃん、彼は、志木仁氏は、君のお祖父さんだ。君のお母さん、鈴森秋乃さんのお父さんなんだ」

「私のお祖父様……」

目を見開くいずみに、青洲は頷いた。

『いずみ……俺の孫？ そうか、それでこんなに青子に良く似ているのか。秋乃も青子に良く似ていたが、秋乃以上に青子そっくりだ』
志木仁は途方に暮れていた表情を緩めて、嬉しそうに小さく笑う。
しかし、すぐに暗い表情になった。

「……青子はどうしているだろうか。君は何か知っているか？」

「鈴守青子さんなら、既に他界されています。いずみが生まれて間もなくのことですよ」

いずみの身边を秘書の中川に探らせた。良い結果は何一つなかったのだ。青洲は苦い気持ちで、志木仁に伝える。

「そうか……そうだろうな。あんな恐ろしい封印を破ってしまったんだ。霊に敏感だった青子が無事で済む訳がないんだ」

志木仁はがっくりと頂垂れた。

「どうしてだ？ どうしてあなたは、島の禁足地から封印などを掘り出してしまったんです？」

青洲は痛ましい心持で問いかける。

『そうだな、俺たちは……愚かなことをした。だけど、誓って言うが、決してあんな恐ろしい結果をもたらそうと思つてのことじゃなかった。俺も青子も、ただ、単に互いに喜ばせたかっただけなんだ。俺は歴史学者として功績を上げて青子を喜ばせたかったし、青子もまた、俺に情報を提供することで喜ばせたかったんだと思う。だけど、結果的に、俺は決して掘り出してはならないものを、掘り出してしまった……』

怪物の姿のままで、志木仁は更に縮こまって頂垂れた。

「あの夜……封印を解いた夜、研究室で何があった？」

『あの夜にあったことは、今思い出しても鳥肌が立つよ。俺は、てつきり、あれがヒビロカネだと思つていたからね、成分を調べる為に少し削ったら、中から悪霊がワンサカ出て来たんだ』

志木仁は、たった今悪夢を見たかのように、ゴツい両手で顔をこしこしと擦った。

「あんたは依り代になれなかったのか？」

青洲の問いかけに、志木仁は力なく首を振った。

「いや、契約をしなかったんだ。何か願い事を言えと言われて、無いと答えた。何度かそんなやり取りをしていたら……このさまだよ」

志木仁は苦笑する。

「……適当になんでも言えば良かったんじゃないのか？ 愛人と暮らせるようにしてくれとか……」

青洲が皮肉をこめて言うのと、志木仁は力なく笑った。

『君は、霊のことを何も分かってないらしいな。そんなことを頼んでみる、やつらは手段を選ばずそれをやる。恐らくトツコは無事でいらなかったはずだ』

「トツコ？」

『正妻だ』

「なにが正妻だ、だ。威張って言えることなのか？ そもそも、正妻が心配なら、あんたは愛人なんて作るべきじゃなかったんだ」

突然湧き上がった憤りに、青洲は思ったままを口にしてしまい、しまったと手で口を塞ぐ。鈴森青子が志木仁の愛人だったことをいずみは知らない。案の定、いずみが当惑した表情で、「愛……人？」と、呟く。

しかし、志木仁は悪びれる様子なかった。

『二人とも大事だったんだ。仕方がないだろう？ 人を思う気持ちでコントロールできるほど、俺はできた人間じゃなかったし、世の中にはどうしようもないことが石ころみたいに転がっているものなのさ。少なくとも、俺の人生はそうだった』

志木仁はため息をついて弱く笑う。

「……俺、このままここであんたと一緒に結晶化したくない気分満載だな。俺は、自分の気持ちに正直に生きて、誰かを不幸にするような生き方はしたくない」

顔を顰めて苦言を呈する青洲に、しかし志木仁は破顔した。

『そうか！ それを聞いて安心した。それなら、ここからとっと出て行けばよい』

「しかし、残念ながら、俺はいずみちゃんを置き去りにする気もないんでね」

憮然と見つめる青洲に、志木仁は目を輝かせた。

『だから、二人で出て行けば良いと言っている。君に孫を任せよう』

！』

「任せようって……」

青洲は遠い目になる。

——正妻も愛人も子どもも、全部置き去りにして、とつとつ、死んだ癖に……

「そりゃ、二人で出て行けるものならそうするさ。だけど、いずみちゃんの足が……」

『足がどうしたって？』

志木仁がニヤリと笑む。

志木仁がいずみを持ち上げると、溶接が溶けたかように何の抵抗もなく持ちあがった。いずみは、すっぽりと志木仁の腕の中に収まる。青洲は目を見張った。

『ああ、青子と同じだ。柔らかくて良い匂いがする。いずみ、か……良い名だ』

志木仁は、いずみに頬ずりをした。いずみは驚いた様子で、しかし、ぎこちなく志木仁の首に抱きつく。

「すごい……お祖父さま」

「どうして？ 俺には持ち上げられなかったのに……」

当惑気味の青洲に、志木仁は小さく笑む。

『なに、がっかりすることは無いさ。君にはできないことなんだ。言っただろう？ 君は依り代になれないと。そして当然、俺にもできないことがある。だから、俺の最後の勝手な願いを君に託すよ。どうか、いずみを幸せにしてやって欲しい』

そう言つと、志木仁は縋りついていはいずみに、優しい視線を落とした。

『いずみ、凄いのは俺じゃない。依り代になれない性質の彼がここまで来られた、それこそが凄いことなんだ。奇跡なのだよ。覚えておくといい』

志木仁の言葉に、いずみは嬉しそうに笑顔で頷いた。しかし、青洲は、志木仁の足元を見て驚愕する。

「あんだ、足が……」

青洲の声に、いずみも気づいて小さく悲鳴を上げる。志木仁の怪物めいた足が、金色の大地と一体化していた。

『もういいんだ。俺はもう現世にはいられぬ身だ。すべて思い出したし、覚悟もできている。最後に孫にまで会えた俺は果報者だ。ほら、耳を澄ましてみる、聞こえるだろう？ 疾風が近づいている。光の道を辿って、向こう側に戻れ』

志木仁が指し示した方を見ると、薄暗い金色の大地に、細い一本の光の道ができていた。それは緩やかなカーブを描いて一直線に空へと続いている。

「疾風とは？」

怪訝そうに青洲が問い返した、その時、大気を震撼させる遠雷の音が鳴り響いた。志木仁が、急げと合図する。それに大きく肯いて、青洲は光の道に足を踏み入れた。

『いずみ、向うに戻ったら、伝えてくれ……』

志木仁の声が、轟音をたてて吹き荒れ始めた風に紛れる。

「お祖父さまーっ」

振り返り振り返り、名残惜しそうに何度も自分を呼ぶいずみに、志木仁は大きく手を振った。青洲はいずみの手をしっかりと握りしめると、志木仁が指し示した光の道を疾走した。

第十五話 汝にいずれものは汝に返る（1）（前書き）

自分のしたことは、いいことも悪いこともすべて自分の身に返ってくる、という意

第十五話 汝にいずれものは汝に返る（１）

秋子は、自室にあるチェストの一番上の引き出しを開けた。中で暗緑色の土偶が、ゴトリと身じろぎをする。

この土偶は、佐川崇に頼まれて、佐川の叔母様の家のアトリエで秋子で作ったものだ。粘土をこねて、形を作って、佐川崇の知り合いの窯元で焼いてもらった。ちょっと見には、縄文時代の遮光器土偶に似ているかもしれない。崇に説明された使用目的を何度も何度も頭の中でイメージしたら、こんな形が脳裏に浮かんだのだ。秋子にとってのパーフェクトなフォルム。しかし、それでも秋子は迷う。――本当にこれで良かったかしら……

秋子にとってはパーフェクトでも、使用目的にマッチしているかどうかを知る術は無い。

作りなおすことはできない。出来上がるまでに一週間かかったのだ。もちろん超特急で作った。本来ならば、秋子が得意としているのは彫刻だったが、佐川が一刻も早く作って欲しいと言うので焼物にした。

「これは、いざとなった時使うことになるはずです」とも、言った。――いざという時が来たってことなの？

秋子は唇を噛んで土偶を握りしめる。佐川の元に帰ろうと振り向いたところで、秋子のはつとして立ち止まった。

「司さん？」

いつのまにか司が部屋にいたらしい。少しも気づかなかった秋子は動揺する。

「崇と随分親しいんだな」

司の瞳には、いつになく諦観めいた色が浮かんでいて、それが妙に秋子の胸をざわつかせる。

「……佐川のおば様の家で、時々お見かけしただけです。特に親しい訳では……」

土偶を作っていることは、司に内緒にして欲しいと佐川は言った。司に憑いている霊に勘づかれれば、せっかく作った土偶にも、それを作った秋子にも良くない事が起こるかもしれないと言うのだ。秋子は、握っていた土偶をさりげなく背後に隠した。

「そうかな？ それだけには見えなかったが……まあ、いい」

司は、ゆつくりと秋子に歩み寄る。秋子は更に動揺して後ずさった。

「どうした、ひどく動揺しているみたいだな」

窓際まで後ずさった背中が、窓枠にぶつかる。

「あの……崇さんが待っていますよ。早く行かないと……」

司は分かっていると頷く。

「君は、吉田青洲が無事に鈴森いずみを連れて戻って来れると思うか？」

司の思いがけない問いに、秋子は困惑した表情で分からないと首を振る。

——あの二人、鈴森いずみと吉田青洲は、どこに消えてしまったんだろう。

秋子には何もないように見える廊下に、結界があるのだと佐川は言った。司にもそれが見えているようだ。

「司さんには、結界の中の吉田さんや鈴森いずみさんが見えるんですか？」

秋子の問いかけに、今度は司が首を振る。

「いや、見えるのは野いちごの蔓だけだ。二人とも、その中に居るんだろう。中は見えない」

司は更に秋子に歩み寄る。

「……司さん？」

司は指先で秋子の顎をつまんで仰向かせると、何度が軽く口づけを落とす。次いで、深く食むように口づけた。

「んっ、司さん、もう行かなきゃ……」

司は無言のまま、秋子の首筋に光っているシルバーのネックレス

の鎖を指で引き揚げた。服の下に隠れていたタリスマンが現れて、光を乱反射する。

——俺はどうだろう。俺は志木家を……そして秋子を守れるだろうか。

司はタリスマンが隠れないように、秋子の服の胸元にそつと置く。
「もし……俺に何かあった時は、どうするか野上に指示してある。相談すれば、崇も助けてくれるはずだ」

そう言い捨てて司は背を向けた。秋子は一瞬固まって後、その背中に駆け寄ると司の上着の裾をつかんだ。

「司さん、私っ」

司が驚いたように振り返る。

「私、自分に何ができるのか分からないですけど、名和家の一人として、あなたを守ります。だから司さんも諦めないで……」

いつになく強い視線で見上げる秋子に、司は一瞬瞠目してから、面白そうに笑った。

「どういう風の吹きまわしなんですかね？ あなたに守ってもらえるなんて夢にも思いませんでしたよ、お義母さん」

いつもの意地悪そうな嗤い顔。

——この人が私に突き放した言い方をする時は、危険から遠ざけようとしている時なんだ。そんなことに今頃気づくなんて……

秋子は口を引き結んだ。

「私は諦めませんから。最後まで絶対諦めませんからっ」

秋子のいつにない強い口調に、司はたじろぐ。

「シユウ、何を思いついたのかは知らないが、自分の身の安全を一番に考える。俺ばかりか君にまで何かあったら、志木家はとうなる？」

「私、物語を読み始めたら、結末もカラクリも全部知らないと眠れなくなる性質なんです」

秋子は突然きっぱりと言い放つ。

「……」

唐突な秋子の言葉に、司はぽかんとする。

「私はあなたを全力で守ります。その代わりすべてが無事に済んだら、あなたが書いたシナリオの結末もカラクリも全部、いいですか？ 全部ですよ？ 全部教えてもらいますから」

「……シユウ……」

司の表情が苦しげに歪む。

その時突然、秋子の部屋の中で、何かがスパークするような音が響き渡った。天井で、窓際で、ベッドの上で、サイドテーブルで、秋子の部屋の中のいたるところで、パシッ、パシッと音がする。

『イマイましい名和が、ナニを企んでイル』

司の耳元で、いつになく感情を滲ませたヒルコの声がする。

「ヒルコ？」

司が息をのむ。

地震でもないのに、ベッドがガタガタと上下に弾み、本棚の本が落下する。ベッド脇の小テーブルに乗っていた小さな観葉植物が落下して、辺りに土を撒き散らした。

「何？ 何が起こっているの？」

秋子は悲鳴を上げる。そのとき、小机の上に出したままにしてあった石材加工用の鑿が秋子の手目がけて飛んできた。

「きゃああ」

鑿は、まっすぐ秋子の左手に命中した。左手で隠すように持っていた土偶が、ゴトリと音をたてて落下する。血がボタボタと土偶の上に滴り落ちた。痛む左手を庇ったまま蹲る秋子の上に、更に他の工具が飛んでくる。

「やめろ！ ヒルコ！」

秋子を庇う司の肩にも工具が当たるが、それは上着の表面を掠って落ちた。

『イマイましい、うとまシイ……恨めシイ……』

「ヒルコ、やめろ！」

いつになく強い怨念の色を滲ませたヒルコに、司は戦慄する。所

詮、ヒルコとて成仏できなかった魂魄なのだ。業をしょっている。恨む気持ちに火がつけば、手がつけられなくなる。そのことを忘れていた訳ではないが、実際にその禍々しい気配を目の当たりにすると、やはり竦む。更に、今までと異なつて、ヒルコが秋子をターゲットにしたことに司は動揺していた。

——どうすればいい？

その時、ドアがパタンと開いて、佐川崇が入ってきた。

「臨 兵 闘 者 皆 陣 列 在 前」

崇が印を結ぶ度に、ヒルコから苦しげな声が漏れる。スパーク音が少しずつ鎮まってく。最後の印を結んだ時点で、ようやくヒルコは暴走をやめた。しかし、未だに部屋中の空気に怒りが満ちている。

「崇……」

「あんまり遅いんで見に来たんですよ」

崇はいっぴくなく切羽詰まった深刻な顔をしている。

「秋子さん、大丈夫ですか？」

崇は、しゃがみこんでいる秋子の隣に膝をつくと、震えている秋子を覗きこむ。秋子は震えてこそいるものの、毅然とした強い瞳で崇を見つめると、

「ええ、私は大丈夫です」といいながら、隠し持っていた土偶を司の目につかないように手渡した。

「シュウ！ 血が！」

少し呆然としていた様子だった司が、秋子の左手を見て息をのんだ。鑿は秋子の手の甲を深々と抉っていたらしい。右手で押えていても尚、ボタボタと血が滴る。

「大丈夫です。私は手当をしてもらってからすぐに参ります。司さんは崇さんと一緒に先に行っていてください」

崇が付いていれば、司は恐らく大丈夫なのだろうと秋子は思う。何の呪文なのかは知らないが、崇の言葉で暴走していた何かが鎮まった。

「しかし……」

「司、先に行きましょう。結界が変化してきているんですよ。もうあまり時間がないようだ」

崇の言葉に、司は眉間にしわを寄せて、そうか、と頷いた。

「シュウ、君は本当に一人で大丈夫なんだな？」

「はい。私もすぐに参りますから……」

心配そうな司に、秋子は小さく微笑んだ。

第十五話 汝にいずれのものは汝に返る(2)

結界の前に祭壇を設けた。祭壇と言っても、白い布を掛けただけの小机だ。すべての使用人を一階に退避させたので、二階に居るのは佐川と司だけだ。念のために、聖と華陽の病室も下に移していた。

「……司、確認しておきたいんですが……」

佐川は少し緊張した面持ちで、後ろに控えている司に話しかける。

「なんだ？」

「ヒルコという霊は……司の事をどれくらい浸蝕しているんです？」

「……それを聞いてどうする」

司は口の端を歪めて皮肉そうな顔で笑う。

佐川は都内に戻ってくる前、島に近い本土の街に、少しの間滞在していた。石守夏紀に会う為だ。三十年前の除霊の話を書く必要があった。石守夏紀は、まだ四十を少し過ぎたくらいの歳なのだが、既に白髪で、歳よりも随分老けて見えた。右の眉から右頬に掛けて、ざつくりと切れた跡が生々しく残っている。右目は眼球自体が無く、左目もほぼ視力がないのだという。

佐川が初めて三十年前の除霊の事を持ち出した時、石守夏紀はひどく取り乱して、佐川を追い返した。佐川の粘り強い説明で、当時の状況を少しばかり聞くことはできたが、一貫して石守夏紀の口は重かった。それだけ心の傷が深かったと言っことなのだろう。

「またしても、志木家はそんな状況に……」

これが、ようやく玄関に入ることを許されて、石守夏紀が呟いたセリフだった。

「なんが悪かったとか、未だに分からんと。名和家に作つてもろうた石像が脆すぎたかもしれんし、名和家もそんな場に連れてきておくべきやったかもしれんし、そいか……保が霊に浸蝕され過ぎとったかもしれんし、もしくは、どれもこいも、やり方が違つとったとか

もしれん……」

石守夏紀はそう言って、深くしわが刻まれた顔を歪めて涙を流した。

「始めないのか？」

問いに答えず黙りこくつたまま考え込む崇に、司は再度問いかける。

野いちごの封印は徐々に力を失っているようで、根元から少しずつ枯れ始めていた。豊かに茂っていた葉は灰緑色に変色して萎れ、花は既に散ってしまっていて、花の散った後が実る準備をしているようだったが、それは実にならぬまま軸ごとボトボトと落下する。

「……秋子さんを待ちましょう」

「いや、すぐに始めてくれ。秋子を巻き込みたくない」

「石守がいらないですよ。いずみさんだって、どうなっているのか分からない。せめて……」

佐川の言葉は司に遮られた。

「崇、これは志木家の問題だ。俺のやりたいように……やってくれないか？」

「しかし……」

佐川は、いつになく思いつめたような司の懇願にたじろぐ。佐川にとって司は、比較的歳が近くて一番身近な親戚だった。佐川には実際の兄もいたが、霊の気配を感じられる存在として、司は兄よりも近い存在だったのだ。しかし佐川のシャーマン体質を知っているのは、司と佐川の祖母だけだ。そのことを知られば、恐らく佐川は養子として志木家に迎えられたはずだ。安全牌として、志木聖は一人でも多くの後継者を求めている。志木家に入れば、依り代としての偏った教育をされる。司は佐川の体質を知った時、隠しておくべきだと忠告した。そして祖母がそれに賛同した。司は秘密の共有者だった。司は佐川を、単なる年下の親戚として可愛がることもパシリとしてこき使うこともしたが、決してその秘密を振りかざし

はしなかった。佐川にとって司は、ある意味兄以上の存在だったのだ。

——だから、躊躇う。

躊躇って沈黙する佐川に、司は続けた。

「崇……ヒルコは俺が初めて依り代として引き受けた霊なんだ。随分長い付き合いになる。しかし、どれくらい浸蝕されているかなど、もうそんなの関係ないんだ。ヒルコは除霊される時には……俺も連れて行くと言ったんだから」

「司っ」

佐川は瞠目する。

「シユウは名和の力に目覚め始めている。おまえ、余計なことを吹きこんだらう？ 彼女がどこまでその力を発揮できるのか分らないが、発揮した場合、霊はその力に応じた迫害を加えてくるだろう。だから、シユウを巻き込みたくないんだ。石守がいらないなら、なおさらだ。俺がいなくなった後の志木家の事を頼みたいとも思っているしな」

「名和の彼女に志木家を託すつもりなんですか？」

佐川は呆然と言葉を紡ぐ。

「なに、シユウがいれば、悪い霊も志木家には近づかなくなるだろう。望むところだろ？ 崇、頼む。始めてくれ」

司の諦めたような、吹っ切れたような顔に、佐川はすべての言葉を呑みこんで、頷いた。

崇が読み上げる被い言葉が静かに流れる。被い言葉が書かれた除霊の本は、島の鈴守家の納屋の隅でようやく見つけたものだ。

「諸々の禍事 罪 穢有らむをば被い給ひ清め給へと白す事を 聞こし食せと 恐み恐み白す……」

次いで、石守夏紀から直々に聞きだした封印の印を結ぶ。

秋子はイライラした気持ちで、傷口を押えていた。手当をしてく

れると買って出たメイドの手際が極めて悪いのだ。消毒薬がないと探し、ガーゼがないと探し、包帯がないと探す。ようやく揃ったと思ったら、消毒薬を秋子のブラウスにぶちまけるし、包帯は転がって再びどこかへ行ってしまふ始末だ。

「ねえ、急いでいるのよ。もうガーゼで縛るだけでいいから早くしてくれない？」

「もー、奥様は見かけによらず短気ですねえ。ちょっと待ってください。急かされると益々、あら、ガーゼが……」

ガーゼがメイドの手から離れて、まるで風に煽られたかのようにひらひらと宙を舞う。

秋子がガーゼを追って右手を伸ばす。自分でガーゼを拾って縛ってしまおうと思ったのだ。ガーゼはひらひら舞って床に落ちた。それを拾う為に手を伸ばした途端、秋子は左手に激痛を感じて顔を顰めた。メイドが秋子の左手を握っている。

――何？

振り仰いで、秋子は瞠目する。いつも見ているそのメイドとは明らかに違う表情だったからだ。驚いて見上げる秋子に、メイドは昏い瞳で笑んだ。

「アナタはツカサ様の所にイク必要ナドないんですヨ」

そう言いながら、メイドは秋子の左手の傷をぐいっと押し広げた。「あつつ、痛いっ」

拡げられた傷口から、更に新しい血がボタボタ滴る。慌てて手を振りほどいて後退する秋子を楽しそうに見つめながら、メイドはさつさと部屋から退出した。

――なんだったの？ 今のは……

呆然とメイドを見送った秋子は、左手からボタボタ血が滴っているのに気づいて、慌ててガーゼで縛った。

――とりあえずこれでいいわ。

しかし、ドアノブに手を掛けて瞠目する。

――鍵？ まさか、このドアには鍵なんて……

しかし、何度ガチャガチャさせても、ドアノブは動く気配がなかった。

「ねえ、ちよつと！ 開けて！ 開けなさいっ」

秋子はドアをどんと叩く。ここは二階の一室だ。他の使用人も、旦那様も華陽さんも階下に避難している。奥まった部屋なので、司や佐川がいる廊下からは離れていた。

――声が聞こえないのかしら？

そこまで考えて、秋子はようやく自分が置かれた事情を理解した。ここはピアノを置いてある部屋だ。つまり防音になっていると言うこと。あのメイドは、最初からこうするつもりで秋子をここに連れてきたに違いなかった。

秋子はドアをドンドンと叩く。誰も気づいてくれないようだ。徐々にパニックに陥っていく秋子の脳裏に、佐川の声が聞こえた気がした。

『不測の事態が起こって、いざとなった時には、司のことをどうかよろしく願います。本人には自力で何とかするようにと言ってはありますが、恐らく司にも僕にも、できることは無いに等しい』
――不測の事態に私が居合わせないように、仕組まれたってことなの？

秋子は気がふれたようにドアを叩いて、叫び続けた。

「開けて！ ここから出して！ 司さんっ、崇さんっ、誰かあ、誰か来てええ」

――どうしよう、どうしたらいいの？

ドアに耳を当てても廊下の様子がちつとも伝わって来ない。秋子は、部屋の中をぐるりと見回す。ピアノの向こう側に小さな窓があった。秋子はピアノの椅子を動かすと窓下にくつつけた。窓には、転落防止の柵も手すりもなかった。下を見下ろすと、階下の軒先が少しばかり張り出してはいるが、下手をすれば二階から転落することとは間違いなさそうだった。

――何か、何かロープのようなものはないかしら……

しかし、部屋にあるのは電気コードくらいだ。手にしたコードは自分の体重を任せるには、少し頼りなく見える。無いよりはましだと電気コードを腕に巻き付けて、秋子は窓から身を乗り出した。実際に窓の外に踏み出すと、想像していたよりも足場は狭く不安定で高さがある。目がくらむ。足がすくむ。秋子は雨どい沿いに降りようと、用心深く横ばいに歩いた。

——怖い……

秋子は必死に雨どいに手を伸ばす。しかし、掴んだと思った瞬間、強い風が吹いて、秋子が履いていたフレアスカートが巻きあげられた。「あつ」と、とつさにスカートを押えた瞬間、足元がぐらつく。

——きやああああ

真つ逆さまに落下しながら、秋子は司の声を聞いた気がした。

『あなたが、この家で無事にいられるのは、あなたが、素質のない、単なる役立たずだからですよ。出ない杭ならば、打たれない』

——駄目！ 私は、まだやらなきゃならないことが！ いやああ、誰かつつ！

第十五話 汝にいずれのものは汝に返る(3)

秋子は落下していた。

見開いた瞳に中空で輝く太陽が焼きつく。

光が炭酸水のように泡立って、秋子の視界を真っ白にかき消して行く。

——何も……見えない……

両手が空しく宙を搔く。

薄れていく意識の中で、秋子は幽かな声を聞いた。

——ナンジニイマシメラルルナワサズケム

声が続いて、白い紐のようなものが光の中から飛び出してきて、それはまるで蛇のように秋子の左腕に巻きついた。真っ白な光輝く蛇——なんて綺麗……

誰かの声が聞こえた。低い、男の人の声だ。

「あ、気がつきましたよ。大丈夫そうだ。なんて運がいい人なんだ」
それに応えるように、もう一人の、もっと年老いた男の声も聞こえる。

「運だめしにも程があるう。なんという無茶なことをする娘なのだ」

秋子は、ぼんやりと目を開いて辺りを見回す。

秋子は植え込みの上に落下したようで、なぎ倒されてひしゃげた木の無残な様子が目に映った。秋子を植え込みから引っぱり出してくれたのは若い男の方らしい。年寄りの男の方は、何か布にくるんだものを大事そうに抱えていた。

秋子は、ぼんやりしたまま左腕に目をやる。先ほど、窓から脱出した時に持ちだした白い延長コードが巻きつけられたままだ。

「……夢……だったのね」

秋子は小さく呟く。延長コードを蛇だと勘違いした夢を見たらしい。苦笑する。しかし、すぐに大事なことを思い出した。

——そうだ！ 司さん。急がなきゃ！

秋子にはわかに跳ね起きると、大丈夫なのかと驚いて問う二人の男に軽く礼を告げて走り出した。秋子の後を、何故か二人の男もついて走る。

「君っ、君はこの家から逃げ出したんじゃないんですか？」

裏口から入ろうとしている秋子に、若い方の男が声を掛ける。

「あのっ、志木家にご用の方ですか？ 今、私すぐ取り込んでるので、申し訳ありませんが、ご自分で玄関の方に回っていただけますか？ 階下には家人がおりますので、声を掛けて頂ければ……」

秋子は階段を駆け上がりながら、早口で二人に説明する。

「我々も急いでいるんです。こちらに、吉田青洲がお邪魔していると思います、どちらにおりますかねっ」

若い男の方が、やはり階段を駆け上がりながら秋子に問いかける。

秋子は驚いて足を止めた。

「吉田さんの関係者の方ですか？」

「僕は吉田白舟、青洲の弟です。こちらは父の龍生です。一刻も早く兄の無事を確認したいのですがっ」

男が説明した途端、息を切らしながら後を追っていた老人の腕の中の荷物が、声を上げた。

「ふわああー、あうあ」

——赤ちゃん？

秋子は目を見開く。

「二階なのじゃな？」

老人は、布に包まれた赤ん坊に問いかけると、一人頷いて、軽く呆然としている秋子を追い越すと二階へあがって行った。それを白舟が追いかけて、秋子もそれに続いた。

佐川は、先ほどから抜い詞を延々と繰り返していた。何度も何度も封印の印を結び直す。印を結ぶ度に、屋敷のあちこちで軋む音はするのだが、際立った変化が起こらない。野いちこの結界の劣

化は進み、徐々に顔色が悪くなっていく司の小さなため息ばかりが頻繁になる。

「司、大丈夫ですか？」

佐川が振り返る。

「……正直言うと、実に不快な気分だ。真綿で首を絞められているような気がする」

司は眉間にしわを寄せてそう言うと、喉に手を当てた。

「やはり、僕では駄目なのかもしれませんね。いずみさんも吉田さんも戻ってくる気配がないし……石守がいれば……」

どんな汚い手を使っても、石守夏紀を連れてくれば良かったのかもしれない。佐川は唇をかむ。

その時、突然大気が激しく振動した。

甲高い、それでいて重厚な泣き声が朗々と響きわたって、それが音叉を叩いた時のように、大気を震わせているのだと、佐川はすぐに気づいた。正確に規則正しく大気を打ち震わせる声に合わせるように、底流に低く静かに穏やかに被い詞が詠じられる。二つの音が共鳴し合って、大気を震わせ、空間を揺るがし、疾風を生じさせていた。

——一体何が……

佐川は驚愕して振り返る。

そこには、布に包まれた赤ん坊を抱えた老人と、携帯を印籠のように掲げた男がゆっくり歩いて来ているのだった。甲高い声は赤ん坊から、被い詞は携帯から発せられているようだ。少し遅れて、果然とした様子の秋子が、その二人の後をついて来ていた。

秋子は司の無事な姿を見つけると、ほっとしたように駆け寄る。

呆然と老人と男を見つめる佐川に、老人が一喝する。

「続けられよっ」

慌てたように頷いて、佐川は再び印を結び始める。

——違う……さっきまでと、印の力が格段に違う……

一つ印を結ぶ度に、激しくスパークする音が鳴り響く。屋敷中が

地震にでも遭っているかのようにガタガタと振動した。

「司さん？ 大丈夫ですか？」

真っ青になって苦しそうにしている司は、それでも小さく肯いた。離れていると、秋子を押す。

すべての印を結び終わり、いよいよ秋子が作った土偶の依り代に魂魄を封じ込めようとしたまさにその時、後ろで甲高い声が響き渡った。

「これなのねっ、やっと見つけたわ。この忌々しい絵っ」

華陽だった。

華陽は廊下に置かれていたはずみのスケッチブックを拾い上げると、自分の顔が克明に描かれているページを破りとった。止める間もなく、華陽はそれをビリビリに破く。

華陽が絵を破いた瞬間と、佐川が土偶の依り代に魂魄を封じ込めた瞬間がピタリと重なる。次いで、驚いた様子の秋子の左腕から真っ白なひも状の光が飛び出し、土偶の依り代に蛇がとぐろを巻くように絡みついた。白い光に絡みつかれて、土偶が明滅する。

土偶の明滅に合わせるように、突然、司と華陽が苦悶し始めた。

「司さんっ」

秋子とはつさに司に駆け寄る。司の顔は蒼白で、苦しいのか胸に拳を当てたまま昏倒してしまったようだ。

「司さんっっ」

倒れこんだ司を抱き起した秋子の脳裏に、初めて聞く少女の音が響いた。

少女の声は、冷たく暗く重く……哀しい。

『ワタサヌ オマエなどに ツカサを渡して ナルモノか』

それでも秋子は必死に司に縋りついた。

『お願いやめて！ 連れて行かないで』

懇願して聞いてくれる相手ではないと、直感的に分かる。でも、懇願せずにはられない。

——約束したもの。最後まで諦めない、守るって……約束したもの。

『ハナセ、デキソコないのナワのくせに、ドコデそんな力ヲ手に入
れタ？』

ヒルコの纏う空気が、どんどん強い邪気を帯びていく。

『……シュウ、もっいいんだ。離してくれないか。俺はヒルコと一
緒に行こう。後を頼む』

気を失っているはずの司の声が脳内に響く。

『嫌です！ 私は諦めないって、最後まで諦めないって約束しまし
たよ？ 司さんも諦めないでください。司さんがいなければ、私一
人で志木家をどうしたらいいんです？ 後を頼むなんて、そんな簡
単に言わないでください。私一人残されたら、生きていけませんよ。
どうやって生きてけばいいかわかりませんよっ、司さんはいつも勝
手です。勝手すぎますっ』

泣きじゃくる秋子に司は苦しげに手を伸ばした。

『シュウ……』

その時突然、冷たい空気が凝った。冷たい空気は、手を伸ばして
いる司の中に滑りこむ。司の表情が豹変した。

『フカンゼンな神器のクセニ、ナマイキナ。オマエも道連れにシテ
クレル！』

いつもより格段に低く抑揚のない声で、司はそう呟くと、伸ばし
た手を秋子の首にかけた。そのままぐつと力を込める。

『うつっ』

苦しげにもがく秋子を、司は冷酷に楽しげに見下ろした。

第十五話 汝にいずれものは汝に返る（4）

昏倒する司、それを抱き起しただけなのに息も絶え絶えな様子の秋子に、佐川と白舟が駆けよる。

「秋子さん？ きちゃんと深く呼吸をしなさい。秋子さんっ」

白舟の呼びかけに返事はなかった。秋子は蒼白な上に唇が紫色に変色していて、医師である白舟には、秋子が十分に呼吸できていないように見える。原因は何も見当たらないのにだ。

——何が起こっている？

「どうしたんですか？ 秋子さん、何が起こっているんです？」

佐川が秋子を強く揺すぶって呼びかけるが、目を見開いたまま急速に蒼白になっていく秋子からは、何の返事もない。

——まさか、二人ともヒルコに引きずられているのか？

佐川はすぐに退魔の印を結び始めるが、益々苦しげな表情になる秋子に気づいて、手を止める。

その時、白舟が手に持っていた携帯から声が聞こえた。

『白舟？ もう抜い詞は詠じなくてもよかとか？』

鳴春の声だ。龍生は携帯を白舟から取り上げると鳴春に呼びかけた。

「鳴春、悪いが、もう少し詠じていてくれるか」

『そ、その声は宗主ね？ 分かりましたっ』

鳴春は慌てて、再び抜い詞を詠じ始める。

「四聖獣とは、所詮、神器を束ねる為の存在にすぎないのだろう。力を持っているのは、むしろ三種の神器の方だ。そうは思わんかね？」

もの問いたげな佐川に、龍生はそう言うと、携帯を秋子の耳にしっかりと押しあてた。

「しっかりせい、神器のおまえにしか、それを救えぬ」

鳴春の抜い詞に呼応するかのように、秋子の左腕が幽かに明滅した。その光を受けて胸元のタリスマンが光りを乱反射する。司はふと我に返った。

——駄目だ、これは攻撃できない……

急に力を弱める司の脳裏に、ヒルコの声が響く。

『コロセ クビリコロセ！』

『駄目だ、できない。ヒルコやめてくれ。シュウだけは…… シュウだけは殺さないでくれ！』

殺そうとする意志と生かそうとする意志が拮抗して、秋子の首にかかった司の手がブルブルと震える。

その時、どこからか涼やかな鈴の音が鳴り響いた。

りん ちりん

りん ちりん

三つの光が野いちごの結界の中から現れた。

『ヒルコ、もうやめよう』

『逝きましよう。時が満ちているわ』

『一人じゃないぜ。俺たちも一緒だからなっ』

涼やかな声が響き渡る。

——鈴守か？

司は瞠目する。

三つの光は、ふわふわ漂いながら司に近寄ると、背中に張り付いて、『せーのっ』と掛け声をかけるとヒルコを引っっぱり出した。ずりりと引き出された黒く凝った影のヒルコは、未だに司の魂を掴んでいるらしく、白い霞みのようなものがつられて一緒に出てくる。時を同じくして、司にしがみついている秋子の左腕が白く強い光を放った。影と光に引っ張られる司の顔が苦悶に歪む。

『さあ、その手を離して』

『それじゃ、向こう側に行けないぜ？』

『ムコウ……がわ……？』

ヒルコは小さく首を傾げる。

『もう、一人じゃないから。一人で怖い思いをしなくていいの。私たちが一緒だから』

穏やかに、涼やかに、柔らかに三つの光はヒルコに話しかける。

徐々にヒルコから発散されていた強烈な邪気が鎮まっていく。

『ヒトリじゃない……ひとりじゃナイ……』

何度も繰り返して呟くヒルコの昏い瞳から、透明な粒子が飛散した。
『サビシかった……ダレ一人……オヤでさえ、ワタシをカエリミテ

は……クレナかった。ツライ、苦シイ、淋シイ……。ナマエを呼んでホシかった……つけてサエもらえなかった、ワタシの名前ヲ……』

秋子の光の腕とヒルコの闇の手に掴まれて、苦悶に顔を歪めたまま、司は涙を流した。

『ヒルコ、すまなかった。魂魄であるおまえを利用するだけ利用して、俺は何もしてやれなかった……おまえの孤独を知りながら、俺にはどうしてやることもできなかった……すまない……すまなかった……』

司の言葉を聞いた途端、ヒルコから邪気が完全に消失した。

『ヒルコ、ヒルコという名にしよう。おまえと同じように生まれてすぐに捨てられた子だ。だけど、真正正銘、神の子なんだ』

まだ高校生だった司は、そう言った。

『神の……コ？……カミの子……ヒルコ』

依り代を移ったその日に、ヒルコという名をもらった。それを思い出す。

『……司はワタシにナマエをくれた……イッショニ逝ってもイイと言ってクレタ……わたしのタメに泣いてクレタ……もう、イイ。もう、それでジユウブン……』

ヒルコは、はらりと司の魂を掴む手を離れた。

途端に、光の粒子を纏ってヒルコも輝き始める。やがて三つ連な

った光がヒルコと融合した。輪になった四つの光は、クルクル回転しつつ上昇し始めた。そして、それに従うように何処からともなく無数の小さな光の粒が集まってきて、これらもやはり回転しながら上昇し始める。光の渦は窓を透過し、やがて戸外に溢れている光の中に溶け込んで行った。

それを待っていたかのように、一際激しい疾風が吹き始めた。激しく泣きわめく赤子の声と、朗々と詠いあげられる抜い詞。それまで緩く明滅していた土偶から、爆発したのかと思うほどの閃光が放たれ、辺り一面を真っ白に包み込んだ。その場の誰もが、あまりの眩しさに目を瞑る。

屋敷中の窓ガラスと言う窓ガラスがガタガタと振動し、同時に野いちごの結界が木っ端みじんに飛び散った。飛散した粒子は、すべて秋子が作った土偶に吸い込まれた。すべてを吸収した土偶は急速に光を失い、やがて赤みを帯びた金色に輝く土偶となったのだった。

静寂が訪れた。

放心したように黙り込む大人たちの中で、小さなしゃくり声が響く。甘えているような泣き声だ。

「……マメ太？ マメ太なの？」

突然聞こえた涼やかな声に、その場の誰もが振り返る。

唐突にその場に現れて、赤ん坊に駆け寄り、いずみに、みんなが驚愕の目を向けた。

「いずみさん？ どこから出て来たんです？」

素っ頓狂な声を出す佐川に、

「どうやら、うまく封印できたらしいな」と青洲が満面の笑顔で声を掛けた。

「吉田さんっ、あなたもどこから……ああ、もうそんなこと、どうでもいいですよ。二人とも無事で良かった」

佐川は緊張が一気に緩んだようで、その場にへたり込んだ。

龍生からマメ太を受け取って、ぎこちなく抱くいずみに、マメ太は、

「ああ、あーあー」と満足げな声を上げた。

マメ太の稚い声が、場の空気を緩ませる。青洲は、いずみに抱かれていたマメ太のふくりした頬をちよんちよんとつついた。鳶色の瞳がくるくる動いて、ぐーに握られた両手がぐるんぐるん振りまわされる。

「君にそっくりだろ？」

そう言って笑う青洲に、いずみもほほ笑んだ。

二人の笑顔を合図にしたように、沈黙していた大人たちが口々にしゃべり始める。それぞれに声を掛け合って無事を喜び合った。

「おい、白舟。ちょっと来い」

和やかな雰囲気の中、龍生が緊張した声を上げる。

「なんですか？ お父さん」

龍生の指した方を見ると、華陽が蒼白な顔色で倒れていた。

「華陽……」

青洲が瞠目する。

かつて妻だった華陽だ。しかし、わだかまりは解消するどころかひどくなる一方だ。青洲は庇うようにいずみの肩をそっと抱き寄せた。

「志木……華陽……？」

白舟も目を見張る。

「診てやれ」

龍生の言葉に少し当惑したように頷くと、白舟は近寄って脈をとる。

「状態が良くないようだ。すぐに出せる車はありますか？ 救急車を待つよりもその方が早いかもしれない。うちの病院で診ることもできますが、どうしますか？」

白舟の問いかけに、司が返答する。

「階下が病室になっているので運ばせます。医療器具は一式揃っているはずなので、応急処置をお願いしますか？　すぐにかかりつけの医師を呼びますので……」

白舟は頷いた。

華陽は志木家の家人によってバタバタと運び出された。それに司と白舟が続く。

「こんなことをしなければ、無事で済んだんだろうに……」

佐川は、ビリビリに破られたスケッチブックの、華陽の顔が描かれているページを拾い集めた。ジグソーパズルのように繋ぎ合わせる。

「これは……名和家の封印じゃな？」

龍生がそれを手伝う。

「……ごめんなさい、私が……私が華陽さんを恨んで、そんなものを描いたばかりに……」

おろおろと呟くいずみに、佐川は弱く笑んで首を振った。

「いずみさんが罪悪感をもつ必要はありませんよ。彼女は、恨まれて当然なことをしたのだし、それに、むしろこの封印があつたからこそ、彼女は今この世にかりうじて繋ぎとめられているんだと思います。縄によつて繋ぎとめられていた封印を破つて、自らの命を危険にさらしてしまったのは、自業自得なんですよ」

「テープで止めてみてはどうか？」

龍生の提案に、そうですねと言いながら佐川が立ち上がる。その時、マメ太が悲しそうに泣きだした。

「あぎゃあ、んぎゃあ」

先ほどまでの、重く大気を震わせた声とは全く違う、普通の赤ん坊の泣き声だ。

「どうしたの？　譬。お腹がすいたの？　おっぱいが欲しいの？」
軽くあやししながら、いずみは何気なくブラウスのボタンを外し始める。

「い、いずみちゃんっ」

その場で胸を肌蹴ようとしているいずみに、青洲が慌てて駆け寄る。

ふと気づいて顔を上げると、佐川と龍生の、少しばかりぎよつとした、少しばかり期待の籠った視線が、自分に集まっていることに気がついた。いずみは「あっ」と小さく叫んで真っ赤になる。二人が慌てて目をそらした。

軽く吹きだした秋子がいずみに声を掛ける。

「良かったら、私の部屋へ。ご案内しますわ」

「馨ちゃんって言うの？ 女の子？ 男の子？」

「男の子です」

秋子のこじんまりした部屋は、心地よい光に溢れていて、草原のようないい匂いがした。居心地が良いのか、馨もすっかり安心したようにおっぱいを飲む。佐藤看護師長に母乳の飲ませ方を特訓してもらっておいで良かったと、いずみは思う。抱くのも初めてなら、母乳を飲ませるのも初めてだ。だけど、数週間のブランクなど感じさせないかのように、馨はいずみの手にすんなりと馴染んだ。

「凄く小さいのね」

お腹がいっぱいになってスヤスヤと眠る馨の手を、秋子はしげしげと見つめて小さく笑う。

「羨ましいわ。優しそうな旦那様に、可愛らしい赤ちゃん……」

秋子の言葉にいずみは軽く当惑する。

——青洲さんは旦那様ではないんだけど……

でも、否定するのも肯定するのも違うような気がして、いずみは小さく笑って問いかけた。

「秋子さんにも、素敵な旦那様がいらっしゃるじゃないですか。赤ちゃんはまだですか？」

「旦那……様？」

秋子は複雑な表情で問い返す。

——旦那様…… 旦那様の事かしら……

「さつきだって、秋子さんに無事で良かったって、何度もおっしゃっていたじゃないですか」

ヒルコから解放されて、意識がこちら側に戻ってきた秋子は、司に抱きしめられていた。何度も何度も、無事で良かったと言ってくれたのは司だ。

彼は旦那様ではないと言いかけて、秋子は口をつぐんだ。関係は、ひどくややこしく、こんがらがっているのだ。それを、いずみに正しく説明できる自信が、秋子には無い。

—— 崇さんが言ったことも、まだ確認できていない……

秋子は以前聞いた崇の言葉を思い出す。

『…… 司はあなたのことが本当に欲しかったんですね。 司は、そうとは言い出せないでしょうから、あなたは司の気持ちが分からなくて苦労したんじゃないですか？』

—— あれは、崇の勘違いだったんだろうか。それとも何か別の事実があるの？

秋子は小さくため息をつく。

—— そもそも、私は司さんの気持ちを分かったことなど、一度だってない。

理解しようとする意志が希薄だったのだ。 今になってようやく気付く。 自分の不幸にばかりに目が行って、周りを見る余裕がなかった。 志木家の事も、自分の結婚の事も、そして司の事も。 自分のことなのに、何一つ正しく説明できないことに、秋子は苦笑する。

その時、激しくドアをノックする音がした。 開けると、司が蒼白な様子で立っている。

「シュウ！ 君は大丈夫なのか？」

司は秋子の腕を掴んだ。

「は？ 何が、ですか？」

きょとんとする秋子に、司が顔を顰める。

「二階の窓から落ちたそうじゃないか！」

「ああゝ、気づいてしまいましたか。あの……すぐに謝ろうとは思っていたんですよ？ でも、私、慌てていて……もしかして、かなり酷いことになってました？」

秋子は顔を強ばらせた。

「君は……何の事を言っているんだ？」

司は怪訝そうに首を傾げる。

「私が下敷きにしてしまった木ですよ。根元から折れていたようだったので、ちよつとまずいかも……とは思ったんですが……」

秋子が脱出した窓の下に広がっている裏庭は、幾何学的な形に刈り込まれた樹木で構成されたトピアリーの庭になっている。庭師が丹精込めて作った庭なのだと一目で分かるものだ。秋子が下敷きにしてしまったトピアリーは、志木家の家紋を模して、イチイの木を刈り込んで造ったものだった。お陰で秋子のかすり傷程度で済んだ訳なのだが。

「木の事など、誰も訊いていないだろう？ 君の事だ！」

「私は、かすり傷程度だったので……」

司は小さく舌打ちすると、秋子の手首を掴むと歩き出した。

「あ、あの、どこへ？」

「病院だ。頭でも打っていたら大変だ」

「あの、でも、まだいずみさんが、部屋に……」

秋子が当惑して振り返ると、いずみが髻を抱いて廊下に出て来た。「私はもう大丈夫です。秋子さんがそんな目に遭っていたなんて知らなくて、ごめんなさい、すっかりご迷惑をかけてしまいました。早く病院へいらしてください」

廊下には青洲が待つていて、いずみの姿を見つけるとホツとした様子でほほ笑んだ。いずみもほほ笑み返す。

「じゃあ、俺たちは帰ろうか」

青洲の言葉に、いずみは笑顔で頷いた。

第十六話 災い転じて福となす（1）

秋子は、一人部屋のベッドの上でため息をついていた。

今現在、この病院には志木家の人間が四人も入院している。まずは、大旦那様、志木聖は、いずみの来訪時、昏倒した直後、既に病院に運ばれていた。その時からずっと意識は無いままで、危篤状態だ。そして華陽、彼女もかなり重篤らしい。未だに意識が戻らないと言っていた。それから、野上メイド長、彼女は除霊後すぐに意識を取り戻した。本人は平気だと言い張ったらしいが、司の指示で検査入院をしているのだそう。これらの情報はすべて、佐川崇から聞いた。司は聖の部屋につきっきりだ。

——どうしよう……誰かに相談したい。でも……誰に？

秋子は、再度大きなため息をつく。

受けられる検査はすべて終わって、結果も問題なしだった。

——否、まったく問題がないわけではなかったのだけれど……。

秋子は更に深いため息をついた。

夜更けに、司がやってきた。

「シュウ、父が亡くなった」

「……」

秋子は痛々しい思いで司を見上げる。

志木聖はもう永くない。それは司も分かっていたことだったので、その表情には悲しみだけでなく、既に諦めの色も混ざり込んでいた。「俺は色々準備があるから、今から一旦家に戻る。君はここでゆっくりしているといい。まだ顔色が悪いようだ」

いつになく優しさのこもった司の表情に励まされるように、秋子は声を掛けた。

「司さん……一つ聞いていいですか？」

「一つなのか？　すべてが終わったら全部聞くと言っていたようだ

が……」

司が苦笑する。

「とりあえず、今は一つです。今回の事で、封印と三種の神器と四聖獣の伝承の片はついたことになるんですか？」

秋子の問いに軽く顔を顰めてから、司は力なく笑った。

「……志木家から出て行きたいと言う訳だ」

「だって、私は志木家とはもうなんの関係もない人間でしょ？ いつまでも厄介になっっている訳にはいきませんよね。でも今の私には行く当てがなくなっ……それでも、私一人なら何とかできるだろうとは思っているんです。だけど……」

「もし君が、一人でやっていくつもりなら、それなりの支援はする。佐藤の家への支援が必要なら、それもする。難しいかもしれないけど、もし君が元婚約者との和解を計りたいなら……」

秋子は司の言葉を遮った。

「司さん、教えてください。私が婚約破棄までさせられて志木家に入ったのは、何の為だったんですか？ やっぱ私が名和の人間だったからですか？ 名和の力が必要だったから……」

切羽詰まった様子の秋子を、今度は司が遮る。

「シュウ……一度しか言わないよ。それは……俺が君に一目ぼれしたからだ。俺は君が……欲しかった」

司の言葉に、秋子は瞠目する。

「……でも、だったらどうして……」

ならば何故、秋子が結婚した相手は、司ではなく聖だったのか。

「俺には、その時配偶者がいた。結婚してから数度しか顔を合わせたことのない人だ。彼女は父が決めた相手だった。そして、君には婚約者がいた。結婚までもう時間がないと知った。だから……君が名和家の血筋であることを理由に、親父を焚きつけたんだ……監視するべきだと……」

「そんな……そんなことって……」

秋子は絶句した。

司は言いづらそうに、しかし、ぽつりぽつりと呟くように言葉を続けた。

「許されないのは分かっている。言い訳をさせてもらえるなら……君に関しては、自分の感情をコントロールすることができなかった。だから、君の事を手に入れたいと……口にしてしまったんだ」

一旦口にしてしまえば、後は司を依り代にしていた魂魄たちが、勝手に事を起こしてしまう。

「まさか、そのせいで佐藤の父と母は……」

秋子のはつと顔を上げた。佐藤の養父母は、突然人が変わってしまったのだ。説明がつかなくらい、突然。

「だから、どんな償いもすると言っている。魂魄が被われてしまえば、君の養父母も元通りになることだろう」

「なんてことなの……」

秋子は、この二年間に、自分の周りで起こった諸々の事を思い出していた。あれらの悪夢のようだった出来事は、すべて運が悪かったのだと思っていた。自分がその原因だったなど、夢にも思わなかった。

秋子の元婚約者は、既に別の人と結婚している。その時にも色々あったのだし、元の鞘に戻ろうなどとはこれっぽっちも考えていない。霊の仕業だったのだとしたら、養父母は、いずれ元通りになるのだろう。問題は、秋子自身にあった。

「……随分辛い思いをしたんですよ？」

ようやくの思いで紡いだ言葉は、ひどく震えていた。

「幾重にも謝罪する。償いもする」

「謝罪も償いも欲しくありません」

真摯な司の言葉が、逆に秋子をイラつかせる。

「……では、どうしたらいい？」

「私は……私は、ただ……教えてほしいんですよ……」

秋子は泣きながら、消え入りそうな声で言葉を繋ぐ。

「……私のお腹にいる子どもをどうしたらいいのか……教えてほし

いんです」

「……」

司は目を見張った。

ずっと生理が来ていなかった。しかし元々不順だった秋子は、あまり気にしていなかったのだ。ここ数日、軽く吐き気がしていた。窓から落ちた時の状況や体調を病院で色々聞かれた時に、そう説明したら、すぐに検査に回されて、妊娠が発覚した。元夫の息子の子ども……秋子の頭の中で、複雑で悲しい境遇の子どものイメージが渦巻いた。

「……それって、俺の子？」

呆然とした様子の司を、秋子はきつと睨みつける。

「私はっ、あなた以外の方とそのようなことをしたことは、一度もありませんっつ。どうしたらいいんですか？ 私は元夫だった人の息子の子を……なんてややこしいの……」

秋子はさめざめと泣いた。

しばらく放心した後、司は一枚の紙を懷から取り出した。

「これを……」

取り出した紙を一瞥して、秋子は弾かれたように司を見上げた。
「責任をとって私と結婚するってことですか？ そんなこと、できる訳がないじゃないですか。私たち親子だったんですよ？」

秋子は傷ついた瞳で問う。

「良く見なさい。これは離婚届だ」

確かに、その紙の上部には、離婚届と書いてある。名前の欄には司の名前が書かれていた。

「……これって……どういう……」

秋子は困惑した瞳で離婚届を見つめた。

司の説明を聞いて、秋子は泣きたくなった。実際泣いた。

秋子は、志木聖と結婚などしていなかったのだ。

志木聖と結婚する際、秋子は結婚届けに二回署名をしていた。書き損じたので、再度署名して欲しいと言われたのだ。しかし、当然

のことながら、二通のうち一通は提出されなかった。当然でなかったのは、志木聖と秋子の署名がある方が提出されなかったということだ。二度目の婚姻届に秋子が署名した時には、確かまだ誰の署名も書かれていなかった。秋子の署名だけがされた婚姻届。それが後日、司の手によって署名され届け出されたと言う訳だ。秋子は司の説明に眩暈を覚えた。

志木聖との離婚届を署名した際に、秋子は、他のどの書類にも言われるまま署名をした。実は、あれは逆に、志木家の財産を相続する為の諸々の手続きの書類だったのだ。もし、秋子がきちんと確認さえしていれば、司の企みは、あの時点で露見していたはずだったのだ。

「じゃあ、今、私は司さんの……」

「法律上、配偶者ということになっている。もし君が、どうしても俺の子どもなど産みたくない、志木家から出ていきたいと思うのなら、その書類に署名をして出すといい」

司は、紙を丁寧に広げるとサイドテーブルに置いた。

「……司さんは、それでいいんですか？」

「シュウ……その質問には意味がない。俺の気持ちはもう話した。問題なのは君の気持だろう？」

秋子はしゃくりあげながら、懸命に言葉を紡ぐ。

「意味ならありますよ、大ありです。私は、ずっと……ずっと、司さんの気持ちを知りたくて……ジタバタしていたんですよ？ この先、あなたの傍に、居られる可能性が一つでもないかって、ずっとずっと考えていたんです。さっき、どうしたらいいかって訊いたのは司さんじゃないですか。私は司さんの気持ちが知りたいんです。私は、私がここに居てもいい人間なのかを知りたいんです。だからちゃんと教えてください。私が納得できるまで、何度でも、司さんの本当の気持ちを……聞かせてください」

司は、涙でびしょぬれの秋子の頬に手を這わせた。

「……すまなかったシュウ。君に傍にいてほしい。俺と一緒に生き

てほしい。俺には君が……必要だ」

二人は、初めて告白した恋人同士のようにぎこちなく抱き合つて、飽きることなく何度も口づけを交わした。

第十六話 災い転じて福となす（2）

野いちごの結界を封印したその日、いずみは初めて吉田本家へ連れて行かれた。もう病人は誰もいなかったので病院には用がなかったし、前に住んでいたアパートは既に引き払っていたからだ。

吉田家は、いずみが想像していたよりも、ずっと格式が高かった。車を付ける出入り口だけで三か所もあるし、回廊で繋がれた和風建築は広大で一体何部屋あるのか見当もつかない。いずみは南側の通用品から入ると、長い回廊を通って一番東にある青洲の部屋へと通された。

通用品では、赤秀とその妻の冴子が出迎えてくれた。その時、赤秀夫妻に馨を連れて行かれていたので、青洲の部屋で、いずみは一人ぼっちで長い時間を過ごすことになった。柔らかに灯りがともる部屋から、闇に沈む和庭を眺めながら、いずみは何度も小さくため息をつく。

既に退院して、数日を赤秀夫妻とともに過ごした馨は、すっかり夫妻に懐いていた。三歳になる赤秀夫妻の一人娘の晴香が馨をとても気に入っているということらしいのだが、更に、馨がいると晴香が夜泣きをしなくて助かるのだそうで、是非預からせてほしいと夫妻に懇願された。とても断れる状況ではなかった。青洲が、久しぶりの親子水入らずなんだからと止めてくれたが、久しぶりの夫婦水入らずだろうと軽くいなされて、馨は連れ去られてしまった。

なんと言っても、少しぐずり気味だった馨が、赤秀の腕に抱かれた途端、ピタリと泣きやんだのだ。その時の、赤秀の勝ち誇った顔を思い出して、いずみはがっくりと頂垂れる。いつの間にか、馨は吉田家にすんなりと馴染んでいた。

「青洲さん、遅いなあ……」

いずみは一人、心細げに呟く。青洲は用事があるとかで、いずみは一人で青洲の部屋に取り残されてしまっていた。

青洲の部屋からは、南側に面した庭が見える。趣のある人工滝が流れ込む池、不自然なくらい自然に置かれた庭石、趣ある樹形に仕つらえられた樹木、時折、池の水面に閃く優美なヒレが、いずみを居心地悪くさせる。

何もかもが立派過ぎるのだ。いずみは視線を室内に戻した。書棚には、難しそうな経営関係の本や、経済の本がずらりと並んでいて、いずみが読んで暇を潰せそうな軽い読み物はなさそうだ。

考えてみれば、いずみが読みそうな本など、この部屋にはちっとも似つかわしくない。

——似つかわしくない……これは私にこそぴったりの言葉だ。

いずみはそう考えて身を縮めた。心がどんどん委縮する。いたたまれなくなつて、書棚からも目をそらした。

——逃げ出してしまいたい……

以前、島で感じた「身分違い」という言葉が、更なる圧力をもつていずみにのしかかっていた。中卒という学歴、身寄りのない天涯孤独な身の上、しかも、子持ちだ。これ以上ないというくらい、自分分は青洲に相応しくない。

——髻を置いて逃げてしまおうか……いつそ私などいない方が、髻にとつては幸せなんじゃないだろうか……。

思った以上に長引いてしまった話し合いに、青洲は顔を顰めながら、回廊を足早に歩く。こんなことなら、やはりいずみから髻を離さなければ良かった。さぞかし、心細い思いで待っていることだろう。

——髻が一緒だったら安心だったのに……。

生まれて間もないはずの髻は、しかし誰もが頼りにしてしまうほど不思議な力を持った赤ん坊だった。実によく空気を読むのだ。笑

うべきところで笑い、泣くべきところで泣く。あの赤秀をあつという間に味方につけてしまったのだから、その実力は折り紙つきだ。

青洲はノックとともに自室のドアを開けた。

「いずみちゃん、遅くなつてごめん」

青洲はドアを開けて、部屋中に視線をさまよわせる。ソファを見、自分のデスクを見、奥の寝室を覗き、洗面所も覗く。青洲の部屋には、こじんまりはしていたが、奥にバスもトイレも付いていた。しかし、いずみはどこにも居ない。

「いずみちゃん？ いずみちゃん！」

——いない？

青洲が慌てて探しに出ようとドアノブを回したところで、自分を呼ぶ小さな声を聞いた。青洲は振り返つて、デスクまで歩み寄り、しゃがみこむ。

「いずみちゃん、何してるんだ？……かくれんぼ？」

いずみはデスクの椅子の脇で、膝を抱えて蹲っていた。青洲は小さく笑んで、その細い肩に手を掛けた途端息を呑む。いずみは小刻みに震えていた。こもった熱と湿気が掌に伝わってくる。

「いずみちゃん？ 具合が悪いのか？」

青洲の問いに、いずみは黙つたまま首を振る。

「いずみちゃん？」

いずみは少し上気した顔を上げて、無理やりのように笑んで見せた。泣いていたらしい。青洲は驚いて、いずみの湿った頬に手を這わせる。

「どうした？」

「青洲さんちつて、すっごい立派なお屋敷なんだね。びっくりしちやつて……」

青洲は苦笑する。

「もう何十年も前から建て増し建て増しで棟も増えたから、回廊でつないであるんだ。大抵の人はびっくりするけど、要は古いだけだよ」

しかし、青洲の説明を聞いているのかいないのか、いずみは余裕のない表情で言葉をつなく。

「……私、住むところを見つけないやだね。できれば、譬は青洲さんで面倒を見てもらえたらいいなと思うんだけど、初めて会った時に面倒を見てくれるって言ったよね？」

いずみは青洲を見ずに俯いたまま捲し立てる。いずみの何かを思いつめたような、少し頑なな言いように、青洲は小さくため息をついた。

「……いずみちゃん、俺、そのうち落ち着いてから、君にきちんと言っておかなきゃならないと思っていたんだけど、今言うことにするよ。俺は約束を守らない人間は嫌いだ」

いずみは小さく息を呑んで青洲を見上げた。

「俺、君に何度も言ったよね。絶対に一人で行動しない、それだけは約束して欲しいって……」

病院に居た頃、青洲は何度もいずみにそう言った。忘れていた訳ではなかったが、事情が事情だっただけに、いずみは一人で病室を飛び出した。結果として、いずみは青洲との約束を破ってしまったことになる。いずみは項垂れた。

「……ごめんなさい」

「君が病院からいなくなってから、俺がどれだけ君の事を心配して探しまわったか分かるかい？」

それを恐れていた。だからこそ、青洲が心配したくなくなるような、もうあんなやつどうでもいいやと思えるような態度をとって、いずみは病院を出たつもりだった。でも、それでも尚、青洲は自分を心配し、探してくれたのだという事実、いずみは、更に更に項垂れていく。

「それに、すごくショックだった。どうして華陽が君にした話を話してくれなかったのかって……そりゃ、俺も悪かったと思ってるよ。君に華陽の事を話せていなかったからね。だけど、もう少し俺の事を信頼してくれても良かったんじゃないかって、悲しかった」

「だって、私、華陽さんに復讐したいと思っちゃったから。だけど、もうこれ以上青洲さんや、吉田家の人に迷惑を掛けられないと思っただから……だから……」

「俺との約束なんてその程度だったんだ。復讐する為なら、俺との約束なんてどうでも良かった？」

「違う……そうじゃなくて、私、どうしても華陽さんが許せなかったから……だけど、それは私だけの問題で……だから青洲さんを、そんなのに巻きこんじゃいけないって……」

懸命に説明するいずみの頬に涙がつたう。

「俺が、君や馨を傷つけた華陽を許すとも思っただのか？ どうして自分だけの問題だなんて思っただよ！」

「それは……」

「いずみちゃん、悪いけど、俺、今回の君の行動には物凄く怒ってる。君はどんな理由があろうと、一人で行動しちやいけなかったんだ。俺を信頼してくれなかった君にも、信頼してもらえなかった俺自身にも、酷く落胆している」

「青洲さん、それは違う。私は青洲さんを信頼していなかった訳じゃない！」

「いや、君は俺を信頼してなかったんだよ。一人で行動したのがその証拠じゃないか。俺では君の無念を晴らせないと、君はそう判断したんだろう？」

いずみは力なく何度も首を振る。青洲は大きなため息をついた。

「……だから、俺を信頼しなかった罰として、君には吉田家から出て行ってもらおう」

「馨は……」

怯えたように、いずみは青洲を泣きぬれた瞳で見つめた。

「馨ももちろん一緒だ」

「……青洲さん、馨だけは、どうか馨だけは……」

「そして……俺も一緒だ」

青洲はそう言つと、苦笑していずみの頭をくしゃっと撫でた。

「……青洲さん？」

「俺は吉田を出て、トーワの社員として働こうと思っている。トーワは諸々の理由で、今経営状態が悪化しているんだ。元の経営者が服役を終えて戻ってくるまでに、建て直しておきたいと思ってる。多くのトーワの社員は、経営悪化の端緒が俺にあると思ってる。だから建て直すと一口に言っても、簡単ではないはずだ。マイナスからの出発になるだろう。信頼させられなかった俺も罰を受けなきゃフェアじゃないからね。できれば、君には、その手助けをしてもらいたいと思っている」

「……青洲さん」

「当然、このような設備の整った家には住めないかもしれない。俺に悪感情を持っているトーワの社員は君にまで冷たく当たるかもしれない。だけど、俺は君と馨と三人で、挑戦してみたいと思っている。どうかな？」

青洲と一緒にいられる。安堵のあまり安心して、それでも懸命に、いずみは言葉を紡いだ。

「……私でできることなら、何でもお手伝いします」

「それから、もう一つ。俺、君に、もう何か月も我慢していることがあるんだけど……」

青洲は顔を顰めた。

「なんですか？ 何でも言うてください……できることなら直します。だから……」

「今夜、俺、君を眠らせてあげられないかもしれない」

言われたことの意味を図りかねて、一瞬ばかりとした様子のいずみに、青洲は軽く口づけてから抱き上げると、そのまま寝室へと運んだ。

* * *

クレーン船がギリギリとワイヤーを巻きあげる。島の西側の海底

から、巨大な石の鳥居が浮上する。それを海岸から双眼鏡で覗きながら、赤秀は歓声を上げた。

「おおー、本当に鳥居があっただなー」

「失礼ですね、僕が嘘を言ったと思っていたんですか？」

隣で佐川が口をとがらせた。

「本当に良かったんですか？ サルベージ代を出してもらって……」
佐川の隣で、司が赤秀に問いかける。

「吉田でもつのはサルベージ代だけだ。まあ、言わば見舞い金のよ
うなものかな？ まあ、日出る処の神社より日没する処の神社への
恩賜ってことで……」

ニヤリと笑う赤秀に、司は涼しげな目元を更に涼しくして返答す
る。

「それは光栄ですね。しかし、歴史的、地理的に鑑みるに、日出る
処の某は、日没する処の某よりも随分矮小だったかと……どうかご
無理をなさいませんよう」

「なんだとう！」

「大人げないぞ、赤秀。そもそも、おまえが先に言い出したんだろ
う？」

青洲が苦笑する。

「秋子さんの具合はどうだ？」

「離れて少し休ませてもらったら、随分良いようです。お気づかい
痛み入ります」

青洲は、そうかと頷いて笑んだ。

「吉田さんは、本当にまた吉田を出るつもりなんですか？」

「ああ」

司の問いに青洲は頷いた。島から帰ったら引越しの準備だ。

「もし……華陽とのことで志木家に何か遠慮しているのなら、不要
なお気づかいだと申し上げますが……」

あれからしばらくして、華陽は意識を回復した。しかし、彼女は
左半身が麻痺し、しかも記憶の大半を失った状態になっていた。今

は実家がある島の近くの地方都市に戻ってリハビリを受けているらしい。

「いや、そうじゃないよ。吉田の事はもう赤秀に任せてあるし、俺は俺でやりたいことがあるから……」

「そうですか」

司は納得したように頷いた。

「なあ、佐川、俺ずっとおまえに聞きたいことがあるんだが……」

青洲が佐川に話しかける。なんですか？ と問う佐川に青洲は続けた。

「この前、ここで俺についた水子の霊なんだけど、どうして俺に憑いたのか理由が分かったっておまえ言ってただろ？ どうして俺に憑いたんだ？ なんか気になるから、聞いておきたいんだが……」

青洲は、少し気味悪げに背後を気にしながら問う。

「ああ、そのことです。まあ、僕の私見ですがね。何らかの理由で魂が成仏できずにこちら側に残ってしまったのが霊なのなら、やはりその性は人なんだと、そう思ったんです。人ならば、自分の望みを叶えてくれる可能性の高い立場の人間に憑くんだろうと……」

「俺が霊の望みを叶えられるか？」

「少なくとも、あの場では僕よりもいずみさんよりも金は持ってたでしょ？」

へらへら笑う佐川に、俺は金づるかよ、と青洲が顔を顰める。

「まあ、金だけ持っていても何もしてくれない人もいる訳だから、少なくとも、吉田さんはそんな人ではないと霊に認められた訳ですよ。良かったですね」

あしらうような佐川の言葉に、わざわざ聞いた俺が馬鹿だった、と青洲は一人ごちた。

鳥居を乗せたクレーン船が西海岸に接岸した頃、鳴春が運転する軽自動車がやってきた。鳴春の息子の夏生は、いずみと馨と佐川の被いで声が出せるようになった。

「青洲さーん」

馨を抱いたはずみが後部座席から降りて手を振る。反対側のドアからは、マタニティドレスを着た秋子が降りた。

「鈴、縄、石、最強トリオのお出ましですね」

手を振り返しながら佐川が破顔する。そう言えばそつだな、と司も笑う。西日を背後に受けて手を振るいずみを眩しげに見やりながら、青洲もほほ笑んで手を振った。

その昔、凶なるもの、西海より流れ着きし

悪しき心満ち溢れ、妬みあい、憎み合い、奪い合った

四聖獣のもとに集まりし三つの神器

すなわち、鈴、縄、石もて

そのものを鎮め、縛り、封印せし

封印を解かれし鬼、再び現世に蘇えりし

悪しき心満ち溢れ、妬みあい、憎み合い、奪い合った

四聖獣によって、束ねられし三つの神器

すなわち、鈴、縄、石もて

再度、そのものを鎮め、縛り、封印せし

赤き金色の封印、禁足地にて祀られん

二度と解かるることなきこと願ふ

(了)

番外編 薔薇園にて

島から戻ったいずみと青洲は、佐川家を訪れていた。佐川徳子に会う為だ。会いたい旨を佐川に伝えたら、この日を指定してきた。

蔓バラ、ナニワイバラ、オールドローズ、モッコウバラ……ちょうど薔薇の季節で、佐川家の庭は薔薇が花盛りだった。

「おばあさま、ご精が出ますね」

薔薇の手入れをしている佐川徳子に、佐川崇が背後から声を掛ける。佐川の後をついて来ていたいずみと青洲は、見事な薔薇園に目を見張る。声を掛けられた佐川徳子は、崇の声に振り向いて、目を見張った。

「崇さん……その方は……」

「こちらは、今僕がお世話になっている吉田グループの吉田青洲さんです」

にこやかに説明する崇に、徳子は心ここにあらずな表情で青洲に挨拶をすると、ちらちらといずみに視線を投げる。

「おばあさま、もうお分かりなんでしょう？　こちらは鈴森いずみさんです。あなたがずっと探していた」

「鈴森いずみ……さん、あなたが……」

白髪の柔らかな髪を夜会巻きにした徳子は、持っていた剪定ばさみを置いて、園芸用の手袋を優雅な手つきで外した。

「あの……初めまして、鈴森いずみです。あの……私、なんと言えば良いのか分からないのですが、祖母の鈴森青子がお世話になったようで、あの……」

いずみの祖母の鈴森青子は、佐川徳子の元夫、志木仁の愛人だったのだ。いずみには直接関係のないことではあるし、青子の記憶もちっとも無いのだが、自分の祖母がそのような立場だったと知れば、どうしても戸惑ってしまう。そのうえ、徳子が、元夫の愛人の娘や

孫を探していたと聞けば、戸惑いは深まるばかりだ。

「びつくりしたわ。鈴森青子さんが現れたのかと思ったのよ……とても良く似ているのね」

佐川徳子は驚きと戸惑いと、少しばかりの哀愁を漂わせてそう言った。

「今、お茶を用意させるわ」

三人は室内へ案内された。

「いずみさん……だったかしら、あなたは今何かお仕事をされているの？ それとも、まだ学生さんかしら？」

徳子はソファにゆつたりと腰かけながら、いずみに問いかける。

「いえ、今仕事はこれと言っては……少し前までメイドをしていたんですが、そこを追い出されてしまって……」

緊張した面持ちで、生真面目にいずみが答える。

「失礼だけど、あまり、良い生活をしていらっやらないようね」

齒に衣着せぬ徳子の言い方に、いずみは動揺しながら頷くと、俯いた。

「すみません、祖母は遠慮のない人で……」

崇が謝る。

「私はね、崇の祖父、ああ、あなたにとっても祖父だわね、志木仁とは、政略結婚だったの。当時私には好きな人がいて……。仁もそのことを知っていたわ。だから、私たちは表面を取り繕っただけの偽装夫婦だった。なのに私ったら、さっきあなたたち、崇とあなたが一緒に歩いて来ているところを見て動揺してしまったの。崇は仁にそっくりだから、二人が……。仁と青子さんが会いに来たみたいで……驚いてしまって……。私は業が深いわね」

「あの、ごめんなさい……。私、そんなこと知らなくて……」

「それで？ あなたは崇とお付き合っているの？」

いずみの言葉を遮って、徳子は何気なく問いかける。

「いえ、私は……」

いずみは俯いていた視線を慌てて上げる。

「おばあさま、また適当なもーそーを……」

佐川は紅茶を嚙りながら、呆れたように答えた。

いずみが動揺して、青洲に身を寄せると、

「あら、あなたは、そちらの方と親しくしてらっしゃるの？ そうなのね？」

徳子は少しほっとしたようにそう言うと、ため息をついた。

「私ね、仁が死んだ時、鈴森青子さんの存在を知りながら、一週間以上も仁の死を知らせなかったのよ。結局、僅かばかりの慰謝料を渡しに行つて、仁の死を知らせただけ……私ね、彼女に家の門をくぐることにすら許さなかったの……だから彼女は仁の位牌にさえ対面してないのよ」

「……それは仕方がないことだと思います。所詮、愛人は愛人でしかありませんから……」

いずみは真つ直ぐに徳子の目を見つめた。

「ああ、その目。青子さんも、そんな真つ直ぐな毅然とした目で同じことを言つたわ。お陰で、私は言った瞬間に後悔させられた。未だに後悔しているの。あの人に、線香の一本くらい上げさせておけば良かったって……。一時の感情に流されて、つい意地悪をしてしまったのね。馬鹿だつたわ」

「そんなことは……」

戸惑ういずみの横で、佐川が、

「自業自得なんですよ」としたり顔で頷いた。そんな佐川を軽くねめつけてから、徳子は続けた。

「それで、私はずっと青子さんのことを探していたの。彼女、その後引越してしまつて、どこにいるのか分からなくなつてしまつていたから。私は青子さんにお子さんがいるのを知っていたから、もし、生活が苦しいようなら援助すべきだろうって、仁の血を分けた子なのだからと……。そうすることで私の気も晴れるような気がしたのよ。でも、彼女は見つからなかった」

「……そんな……」

いずみは感極まって言葉を失った。祖母や母を通して、自分を探してくれていた人がいた。そのことは、天涯孤独な身の上だったいずみにとつては、言いようもなくありがたく、もったいない話だった。愛人の子ども、もしくは孫に過ぎない、私たち親子を探してくれていた人……。

「もう、その言葉だけで充分です。母も感謝していると思います」
いずみは涙ぐんで言葉を紡ぐ。

「おばあさまは、お金だけには恵まれてますからねえ」

などと軽口をたたきながら、出されたシフォンケーキをもぐもぐ頬張っている崇を、徳子はきつと睨みつける。

「私が恵まれているのは、お金だけではありませんよ。結果として愛する人の子どもにも、そして友情でつながっていた仁の子どもにも恵まれましたからね」

「じゃあしゃあとそんなことを言う徳子に、佐川が絶句し、青洲といずみはぼかんとする。

「ああ、こんなことまで話すつもりではなかったのに……」

徳子は顔を顰めながら、崇さんのせいですよと睨みつけた。

当時、徳子は政略結婚などする気がなかったのだ。彼女は、親の言いなりなどにならない勝気なお転婆娘だった。

「愛する人との間に子どもができてしまえば、政略結婚などしなくて済むと思っていたのよ。でも、話はそんなに簡単には済まなかった。親にまで墮胎しろと迫られて、いつそ駆け落ちをしようと考えていた所に、仁が提案を持ちかけた。彼は、生まれてくる命を殺してはいけないと言った。しばらく偽装結婚して、ほとぼりが冷めたら別れば良いのだと……そう、笑顔で言ったの」

何事に付け、大ざっぱで適当で、でも大らかで人懐こくて思いやりが深くて、妙に人を惹きつけてしまう人。それが志木仁だった。
「おっどろき。なのに、離婚もせず、更に子どもまで……」

佐川は目を見張る。

「まあ、そのへんは、色々事情があったのです」

徳子はゴホンとわざとらしく咳払いをした。

「さてよ、ってことは、伯母さんと僕の親父は異父姉弟ってことに……」

「そう言うことですよ。さあ、もうこの話はおしまい。あなたがたも今聞いたことは忘れてくださいね。終わったことですから……」

青洲といずみは神妙に頷いた。

「話を元に戻しますよ。私は青子さんのお子さん、もしくはその子どもに、支援をするつもりで探していたのです。いずみさん、もし、あなたが生活に困っているようなら……」

徳子の言葉をいずみが遮る。

「あの、仁お祖父様は、徳子さんの事をトッコさんって呼んでいましたよね？」

一瞬、瞠目してから徳子は頷いた。

「信じられないかもしれませんが、私、仁お祖父様にお会いしたのです」

「それって、結界の中でってことですか？」

佐川が驚愕した表情で問う。

「実は俺も会ったんだ」

青洲も相槌をうつ。首を傾げる徳子に、佐川が事件の概要を説明した。

「最後に、私、仁お祖父様に頼まれたんです。向うでトッコに会うことがあったら、俺の事など気にせずに、真島と幸せになればいいって伝えてほしいって。もしかして、真島さんって方が……」

いずみの言葉に崇が瞠目する。

「真島？ まさか、執事の真島ではないですよ？ おばあさま……」

「崇さん、あなたはどこまで私の秘密を暴露するつもりなのです……」

徳子はしかめっ面で祟をなじる。

真島は、今では佐川家になくてもならない有能で物静かな執事だ。肝心な時には、忠実な騎士のように必ず徳子の傍に控えている。

「真島とは、今では良い茶のみ友達です」

徳子は真面目くさって説明する。そして、すぐに悲しげな顔になって呟いた。

「そう、仁はずっと靈魂のままさまよっていたのですね……」

志木仁は、あのまま魂魄として封印されてしまったのだろうか。いずみは、それを思うと悲しくて胸が痛くなる。

——私の身代わりになって、お祖父様は……。

すっかり沈みこんでしまった三人に、青洲は、結界の中で出会った志木仁とのことを話した。

「そうだったんですか。お祖父様は、依り代として生きること拒否して、死んでしまったんですね」

青洲から志木仁のことを聞いた佐川は、しんみりとした顔でそう言った。

「僕はね、ずっと疑問に思っていたんですよ。どうしてお祖父様は依り代になれなかったんだろうかって。大伯父の志木聖にできたことが、どうしてお祖父様にはできなかったんだろうかって、ずっと考えていて……少し不満だったんです。でも、今やっと納得することができました」

『いや、契約をしなかったんだ。何か願い事を言えと言われて、無いと答えた。何度かそんなやり取りをしていたら……このざまだよ』
と言って笑ったと言う志木仁、佐川が考えていた理想の祖父像と、実際の祖父、志木仁がぴたりと重なる。

そんな佐川のしんみりした様子に、徳子が呆れた顔をして肩を竦めた。

「何が、そんなことを頼めばトツコは無事でいらなかったはずだよ。よかったら、もっと簡単な用事を頼めば良かったじゃないの。大好きな甘酒が飲みたいとか。それを頼んだら甘酒屋が無事でいられないとでもいうの？　ばっかみたい！　大体あの人は、昔から肝心なところで抜けているのよっ」

徳子は、何度も馬鹿だ馬鹿だと言いながら、終いには顔を両手で覆った。

「おばあさま、はい……」

崇が、ポケットからクシャクシャに丸まったハンカチを取り出して徳子に渡す。徳子は、こんな汚いハンカチしかないのかと、ケチをつけながらも、ハンカチで顔を押えたまましばらくの間噁り泣いた。

「いずみさん、今度は馨君を連れて遊びにいらっしやい」

徳子はそう言うてにつこりほほ笑んだ。

むせかえるような薔薇の甘い香りに見送られて、いずみは青洲と帰途につく。

「佐川徳子さん、とっても良い人でしたね。ここを実家だと思ってくれていいなんて……そんな優しい言葉をかけていただけるなんて思ってたませんでした」

いずみが感激して言うと、

「だからって、実家に帰らせていただきますとか言っつて、俺の所から出て行かないでくれよ」と青洲が顔を顰める。

クスクス笑いながら、いずみは青洲の腕に手を絡ませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5974g/>

野いちご

2011年6月29日21時18分発行